
学園物語『銀杏』

田辺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園物語『銀杏』

【Nコード】

N8119Q

【作者名】

田辺

【あらすじ】

天界の都合でいきなり性転換してしまった主人公。突然の男体化にも関わらず、割とのんびり受け止めて周りに馴染んでいきます。これは、彼（元・彼女）と、彼のまわりのひとびとの、ゆるい日常の物語。

登場人物メモ（前書き）

随時更新。作者用メモでもあるので、要らん情報も多いです。

登場人物メモ

戸塚 とつか 七緒 ななお （元・奈々子）

高1ー3。寮生。405号室。二段ベッド下。お茶部。

元・女の現・男。天界の都合で性転換。

両目とも0.1のメガネ君。どちらかというと小柄。本人いわく「男の子のショートカット」。奈々子のときより母似の顔立ちらしい。ちよっとつり目。漢検2級。

マイペース。運動は苦手。ちよっぱり弟思い。ブラコン子供好き。順応能力高し。涙腺緩し。寮では岡の仕事を手伝ってる。

通称…ナナ

十倫葉学園高等部十

中村 なかむら 栄人 えいと

高1ー3。お茶部。

切れ長の瞳。一見クール。

しっかり者。のようできて天然。でも基本まとめ役。

通称…ハチ

明石 あかし 圭介 けいすけ

高1ー3。サッカー部。

金髪ツンツン頭。長身。

騒がしい。世話焼き。栄人いわく「クラス一騒がしくて馬鹿な男」。

武本 たけもと 優子 ゆうこ

高1ー3。保健委員。調理部。

真っ黒なボブカット。一見暗そう。

控えめ。人見知り。極端な消極的。未だ友達と呼べるほど仲の良い女の子がいない。

野村 茜のむら あかね

高1ー3。漫画研究部。

ロングヘアのお嬢様結び。ちょっと垂れ目。

穏やかな見た目に反し、割と物怖じしない性格。腐ったオタク。

赤星 洸あかほし ほのか

高1ー3。学級委員。バスケット部。

茶髪を頭のでっぺんでお団子にしてる。つり目気味で、ちょっとキツイ印象を受ける。

文武両道の姐御肌。困ってる人がいれば助けるし、悪い奴がいたら猛然と立ち向かう。それを当然と思っているタイプ。おせっかい。
通称…ほの

月野 秋穂つきの あきは

高1ー3。陸上部。

肩甲骨までの黒髪。何事も平均。

マイペース。赤星が暴走したときのストッパー。自分は常識人だと思っっている天然ボケ。

藤崎 米子ふじさき まこ

高1ー3。調理部。

クラス一小柄。ぽっちゃり。タレ目。

のんびり屋。ぽやぽやした雰囲気で周りを和ませる。
通称…ヨネ

木下きのした

高2ー3。お茶部。

気配り上手。でも口下手。

通称..よっしー

北原きたはら 幸樹こうき

高2ー4。お茶部。

栗色の髪。背が高く割と大人っぽい見た目。
性格は子供っぽい。緊張すると饒舌になる。

野々宮ののみや 勇気ゆうき

高1。漫画研究部。

小柄。見た目小学生（圭介いわく「じゃりん子チエちゃん」）。前髪ちょんちより結び。

たまに理屈っぽい。好奇心旺盛。

中村なかむら 真理まり

高3。茶道部部长。

金髪。化粧濃い。見た目不良っぽいギャル。

羽島はねしま 裕一ゆういち

高2。元・寮生。

坊主頭の似合わない坊主頭。色白。小柄。
サボり癖アリ。校長の親戚。

岬みさき 千代子ちよこ

高1ー4。倫葉祭運営委員会会計。

腰まであるサラサラストレート。大和撫子風。一見、大人しそう。
猫被り。猪突猛进。口が悪い。

天草 立花 あまくさ りつか

高3ー3。漫画研究部部长。

おさげ髪に黒ぶち眼鏡。「女学生」ばい見た目。

通称…リツカ

柏木 都 かしわぎ みやこ

高3。茶道部。

黒髪ポニーテール。美人じゃないけど…なんかイイ！（圭介いわく）

通称…みー子

十銀杏寮十

岡 賢治 おか けんじ

寮の管理人。20代後半くらい。みんなのお母さん。長崎出身。

ひよろつとしたのっぽ。七緒いわく「爽やか系イケメン」。しかしファッションセンスがない。

おっちょこちょい。優しい。怒ると怖い。

通称…おっかさん

渡辺 直哉 わたなべ なおや

高1ー5。寮生。405号室。二段ベッド上。七緒のルームメイト。

陸上部。

黒髪短髪。日焼けしてるけど、元は白い肌らしい。

素直。おバカ。掃除が苦手。寂しがり。独占欲が強い。

通称…ナオ

坂枝 雪弥 さかえだ ゆきや

高2ー1。寮生。402号室。一人部屋。寮長。

栗色のまつすぐな髪。肩くらいの長さで、ちょこんと結んでる。見

た目チャラそうだが、中身もチャライ。

変態。バイ。手が早い。なんだかんだで割と常識人。いつもへらへらしてる。

通称…ゆーきゃん先輩（寮の後輩からのみ）

野村 葵 のむら あおい

高3ー4。寮生。103号室。一人部屋。元・寮長。お茶部。

ぽっちゃり。背も高い。ので、怒ったときの威圧感はずごいらしい。ちよつと垂れ目。

面倒見良い。みんなから頼られる。103号室は、別名・葵相談室。
通称…アオ

ラファエル・シュタイネル

高1ー6。寮生。404号室。二段ベッド下。

猫っ毛の明るい茶髪。緑色の瞳。白い肌。七緒より小柄。

見た目に反して口が悪い。毒舌。

戸野橋 由良 とのはし ゆら

高1ー5。寮生。404号室。陸上部。

事なかれ主義のちゃっかり者。辛いものが苦手。

通称…トノ

水城 虎哲 みずき こてつ

高1ー3。寮生。305号室。広島出身。

赤い髪の不良さん。目つきも悪けりゃ口も悪い。喧嘩は強い。

全体的に乱暴だけど、弱そうなひとに対してはあんまり強くでられない。負けず嫌い。

通称…テツ

岩平 いわひら

高1ー6。寮生。304号室。陸上部。

陸部1年繋がり、戸野橋と直哉と行動することが多い。

秋川 竜平あきかわ たつぺい

高1ー6。寮生。302号室。サッカー部。

銀杏寮1年のまとめ役。お人好し。

右代 博之うしろ ひろゆき

高1ー6。寮生。401号室。野球部。

通称…ミギ

赤城あかぎ

高3ー6。102号室。寮生。柔道部キャプテン。

190センチくらいの巨体。強面。

気は優しく力持ち。

藤枝ふじえだ

高3ー4。寮生。502号室。

マッシュルームカットのもやしっ子。

数学が得意。彼女持ちらしい。

通称…キノコ、キノ

矢木 晴登やぎ はると

高3ー6。寮生。202号室。テニス部副部長。

色黒のカピバラ顔ロウいわく。背が高くて筋肉質。

無口。めんどくさがりだけど、つまみ食い命をかけている。

通称…クロ

東條 健太とうじょう けんた

高2ー3。寮生。205号室。

低血圧なので朝に弱い。

福井 新一 ふくい しんいち

高2ー6。寮生。205号室。

同室の健太に振り回される苦労人。でも自分も短気なので周りに迷惑かけてる。

中春 光流 なかはる ひかる

高2ー2。寮生。303号室。

長身。金髪に染めてみたはいいが、染め直しが面倒でプリン状態（生え際が黒、毛先が金）。

繊細な熱血漢。単純。

宮崎 智 みやざき さとし

高2ー2。寮生。303号室。茶道部副部长。栃木出身。

色素薄め。

寝起き悪い。猫被り。同室の光流に対してのみ腹黒。協調性はある。多分。

若松 彰人 わかまつ あきと

高3。寮生。201号室。バスケ部。

根っからのバスケ少年。チャームポイントは笑顔です！と自己紹介で言える18歳男子（笑）

十職員十

羽島 昭仁 はねしま あきひと

校長先生。60代くらい。

白髪オールバック。七緒いわく「ダンディ」。

いつでもにこにこ。おちゃめ。料理好き。だがしかし下手。

緒方^{おがた}

理科教師。高1―3担任。中年。お茶部顧問。
ボサボサ頭に無精ひげ。大体いつも白衣。校内では古い健康サンダルを履いてる。

めんどくさがり。何事も大雑把。商店街では何故か名が知れてる。
通称…おがちゃん（主に2，3年）

大場^{おおば} 梢^{こずえ}

保険医。60代くらい。

白髪混じりのふくよかなおばあちゃん。白衣のポケットになんでも入ってる。

「あらあら」が口癖。

通称…おばあちゃん先生

小林^{こはやし}

体育教師。30代くらい。

丸刈りにちよつと太めのマツチヨ。目は細め。

通称…ケンドー

＋その他＋

ロウ

七緒の担当天使。

人間の姿をとる場合は、腰まである黒髪、赤い瞳。10歳くらいの見た目。

もしくは、黒ウサギのキーホルダーやぬいぐるみに変身してることが多い。

口が悪い。が、照れ屋。ガキ臭いセンス。

天界では先輩天使から「コロコロ」と呼ばれていた。

金髪ちゃん

天使。ロウより少し先輩らしい。

人間の姿をとる場合は、ふわふわな金色ショートカットに、青い瞳。同じく10歳くらいの見た目。

丁寧な口調。誰かがボケても総スルー。

戸塚 とつか 奈津子 なつこ

七緒の母。40代後半。

ゴーイングマイウェイな最強母さん。実は靈感が強い。

戸塚 とつか 孝太 こうた

七緒の父。40代後半。

現在熊本へ出張中。

戸塚 とつか 孝明 たかあき

七緒の弟。朝日ヶ丘第二中学の3年生。バスケット部長。

七緒とそっくりの顔。視力は良い。勉強も運動もあっさりこなすタイプ。

正義感が強く姉思い。シスコン 奈々子時代は仲良しだったが、性転換した今は仲が悪い。

通称…タカ

二宮 にのみや 由希 ゆき

戸塚姉弟の幼馴染み。朝日ヶ丘第二中学の3年生。バスケット副部長。孝明の悪友。家が割と近いので、戸塚家とは家族ぐるみの付き合いがある。奈々子を慕っていた。性転換後もあまり変わらない様子。

沖田 おきた 宗助 そうすけ

高校一年生。青に銀のメッシュ。

基本的に素直だけど、口の悪い不良さん。目が悪い。目つきの悪さで損をする男子パート2。ちなみに1はテツ。

柳井 やない あきのり 明徳

高校一年生。緑髪の長身。

飄々としているようで、超短気な不良さん。口より先に手がでる足がでる。負けず嫌いな勝負好き。

1、はじめり（前書き）

R15は保険ですが、BL要素はちよいちよい入る予定です。のんびり更新でやっていきます。

1、はじまり

わたしは、どこにでもいる文化系の冴えない高校一年生。

身長は155センチ。クラスでは、どちらかと言えば低い方。
体重は……まあ、高一女子の平均、くらい？　…すいません、平均よりちょっと重いです。

視力が悪いので、メガネをかけている。青い縁のシンプルなやつで、ただいま出張中の父から、13歳の誕生日にもらったものだ。

髪は真っ黒。うちの高校、髪を染めたりピアスあけたりは禁止だから。

癖っ毛なので、伸ばして後ろでひとつにしてる。

ちょっと引っ込み思案だけど、人見知りと言うほどではないし、親しい友達の前ならはっちゃけられる。

あ、あと、友達からは「マイペースだよ」って100パーセント言われる。

親友からは「とろいよ」と言われる。

運動は苦手。水泳は小学校の頃習っていたからなんとかなるけれど、球技全般は壊滅的。まず、ルールとかややこしいしね。

そんなだから、体育の成績はいつも3。欠席しないことで、ギリギリ「普通」を保ってる。

言っておくけれど、アヒルさんはない。それなりに頑張っではいますから。

オール3に近い成績だけれど、国語は5。英語は4。もう文化系一直線。

…ええと。これくらいだろうか。

ま、わかってもらえたと思う。わたしが極々平凡な女の子だということ。

そんなわたしに、降りかかった災難。

性転換しました。

男になりました。

……っというか、これからそうなるようです。

.....
ど
Φ
し
と
?

2、性転換宣告

その日は、普通に始まって、普通に終わろうとしていた。

戸塚^{とつか} 奈々子^{ななこ}は、いつものように学校へ行って、帰ってきて、夕飯を食べていた。

「おかわり！」

空になったお茶碗を差し出す娘に、母さんは顔をしかめた。

「もう三杯目よ？ 明日体調悪くなったりしない？」

奈々子は、普段少食だ。食べ過ぎると翌日に影響がでるタイプなので、セーブしている。

「大丈夫、明日っからゴールデンウィークだし。気分悪くなったら寝てればいいんだもん」

それに、今日はとりの唐揚げにほうれん草のバター炒め。彼女の大好物ばかりである。

母さんは苦笑しながらもご飯をつけてくれて、ほくほく顔でそれを受け取る。すると、横から思わぬ一撃が放たれた。

「奈々子、肉ばっか食ってるから太るんだよ」

ぐさり。

——…おい、弟よ。

——今のは刺さったぞ。

「たーかーあーきー…女の子にそういうこと言う？ フツー。ていうかほうれん草もちゃんと食べてるよ！」

「炭水化物に肉にバターという名の脂肪分…その中でどれほどほうれん草が自己主張できると思うかね」

「うるさいなあもう！ せっかく気兼ねなく食べられるんだからほつとしてよー」

奈々子の弟、孝明^{たかあき}は、ただいま生意気盛りの中学3年生だ。

孝明は、姉と違って体育会系である。バスケット部の部長で、視力も良いし、頭もどちらかと言えば良い。

精悍な顔立ちで、「かつこいいけど近づきにくい」というなんだかオイシイ印象を与える。

そのイメージを守るためか、学校では「寡黙」という猫を被っているようだが、その実態は、生意気で子供っぽい、普通の中学生だ。

一方、姉の奈々子は、大体なにをやっても平均の、ごくごく平凡な高校1年生だ。

父似の彼女は、母似の弟より穏やかな顔立ちである。

そのため、一見控えめな印象を受けるが、その性格は「控えめ」とは程遠く、どちらかといえばインドア派というだけで、割と行動的だ。

かといって、皆を引っ張っていくタイプではなく、おっとりとしつつ、やることはやる性格である。

二人は似ていない割に、いや、だからこそなのかもしれないけど、仲が良かった。

性別も、得意分野も異なっていて、お互いの足りない場所を支え合っていたのだ。

小学校までは、ご近所でも仲良し姉弟だと有名だったらしいが、孝明は中学に入ってから、なんとなく変わってしまった。

「おねえちゃん」と呼ぶのをやめ、「奈々子」と呼び捨てするようになった。

おおっぴらに仲良くしているのが恥ずかしくなったようで、学校ではほとんど話さなくなった。

家でも軽口を叩き合うくらい。前みたく、一緒に遊ぶことはなくなった。

奈々子は、それがちょっと寂しかったりする。

「ごちそうさまでしたー。あー久しぶりに食った食ったあ」

「オヤジか！ 奈々子、ほんとにそれで女子校でやってけるの？ おかわり」

「孝明こそ何杯目よ。ていうかあんたの受験のが心配だしねー」

「俺は朝高余裕だから」

「むかつく…」

朝高とは、都立朝日ヶ丘第一高等学校のことだ。

奈々子はそのを受けて見事に落ちている。

——やっぱり、ちっともさみしくありません。

「あー、本当久しぶりにたくさん食べたなあ…明日はまじで何も出
来ないかも」

ため息とあくびが混ざったような声を出して、奈々子は自分の部屋
に入った。

……が、

ばん。

開けた障子をそのまま閉める。

——あれ？　ここって…ここって、わたしの部屋だよ…ね？

——でも今、2人分の影がゴソゴソしていたような、気が。

部屋の前で呆然としていると、孝明が「何してんの」と怪訝な顔で
話しかけてきた。

「あ、孝明、今何か部屋に…」

そのとき。

障子がひとりでに——いや、内側から、すすすつと開けられた。

「おい、さっさと入れ」

覗いたのは、漆黒の髪に赤い瞳。

そして、驚く程白い腕が伸びてきて、奈々子の腕を掴む。ひんやり
とした、感触だった。

「え、何——」

「おい、ちょ——」

意外にも強い力に、奈々子はただ引っ張られるしかなかった。

反対の腕に、孝明がとっさにすがりついたのがわかったが、弟ごと部屋に引き込まれた。

2人が入った途端、今度こそひとりでに障子が閉まる。

「げ、男の方までついてきやがった」

「君の責任ですよ。あんな乱暴なことして……」

明るい廊下にいたものだから、まだ目がなれない。

最初の尖った声は、2人を引っ張り込んだ、黒髪の少年だ。

次の声は、いくらか柔らかくて、そして心配そうな様子だった。

「……何、泥棒……?」

孝明が、姉の手を強く握って、一歩前にでる。

「お前ら、誰?　なんでここにいの?」

姉弟が、叫んだりして助けを呼ばない理由は、目の前にいる2人が、まだ中学生くらいにしか見えないからだだった。少年の声も決して低くはなく、どちらの背丈も自分たちより低い。

なんにしても、暗いままじゃ話にならない。そう思った菜々子は、手探りで電気のスイッチを探り当てた。

手を伸ばして電気をつける前に、目を閉じておく。そうすれば、いきなり明るくなっても、眩しくないと思ったからだ。

「わっ」

孝明はいきなり明かりがついたことに驚いたらしく、小さく声をあげる。

奈々子は、目を開けた。

「はじめまして、戸塚奈々子さん」

「まぶしっ！ つけるなら一言言えっ」

奈々子の目に飛び込んできたのは、金髪青眼の少女と、黒髪赤目の少年だった。

金髪は、ふわふわとしたショートカット、黒髪はなんと、つやつやの腰まであるストレートだ。

どちらも孝明より年下に見え、それぞれに魅力のある見た目だった。

——どうしよう、よくわからない状況だけど、とにかくこの子ら、

「可愛い…！」

「ちよっと姉ちゃん！」

目えハートにしてる場合じゃねえし、と突っ込まれてハッとなる。

「そ、そうだった。えーと、迷子かな？」

「なんでっ！？　なんでそーなの！？　不法侵入だろ！　ってか姉ちゃんの名前知ってたし！　なんで

それで迷子という結論がでるんデスカ！」

「え？　名前？」

ああ駄目だ聞いてなかったんだこのひと、という冷たい視線を受け流す。

——仕方ないじゃんか、目の前にものすごい可愛いこちゃんといケメン君がいるんだから。

奈々子は、年下が好きだ。

こんなふうに行けば変に誤解されそうだが、つまりは母性本能をくすぐられるということらしい。恋愛とはちよつと違う。

赤ちゃんから孝明の年齢まで、年下ならなんでもいい。とにかく年下は可愛い、という嗜好の持ち主だったりした。

「おい…こいつ大丈夫かよ、本当に」

黒髪が、金髪に話しかけた。

そういう生意気な物言いも、年下ってだけで許せちゃうらしい奈々子は、しまりのない顔で2人に視線を合わせる。

「えと、で？ 君たちはどちら様？」

2人は顔を見合わせると、驚いたことに膝をついた。まるで、物語にでてくる騎士のように。

「申し遅れました。私たちは天界からやってまいりました。

戸塚奈々子さん、あなたの性別を変えに」

.....?!

3、記憶の改竄

「は？ 何？」

姉と弟は、二人同時にそう問い返した。

「聞いてなかったのか？ 戸塚奈々子、お前の、性別を、変えに、やってきたんだ」

——いや、そりゃ、誰だって「は？」って言いますよ。

ゆっくり言い直して欲しいわけじゃない、というと、金髪の少女はたしなめるように黒髪をにらんだ。

「すみません、きちんと説明させて下さい。

：話は十六年前に遡ります——」

とても簡単に要約すると。

天界の仕事の中に、これから生まれる魂たちの、振り分け先や性別などを決める部署があるらしい。

ある程度位の高い天使が、それぞれ区域を分担してやるそうなの。

16年前の12月10日。その日、この辺りの区域を担当していた天使が、こっそりと男女の魂を入れ替えたというのだ。

もちろんそれは大罪なのだが、つい最近まで露見しなかったらしい。

「何故？」

「誕生の部署もあれば、死亡の部署もあるわけで……。ひとの寿命は生まれたときから決まっております。が、ごく稀に、決められた寿命より長く生きるひとがいるのです。その逆も。」

しかし、ここ15年程、寿命の通りに命を落とさないひとが多く……そこでようやく、誕生の部署が履歴を調べたわけです。

すると、とある日のとある区域、そこで生まれた子供たちの性別が見事に逆になっていたことが判明したのです」

「女は強いからな。例えば、男として生まれ、死んでいたはずの者が、女として生まれてくれば、生き延びる確率は大幅に上がる。逆に、女として生まれるはずだった男も、何割かは死ぬ」

「……ええと、で、わたしは男に生まれるはずだった……てこと？」

毛色の違う天使たちが、同時に頷く。

奈々子は孝明と顔を見合わせた。

「どうする……？ 孝明、今更わたしのこと「兄さん」とか呼べないよねえ」

「……だから奈々子ズレてるって……」

「お前の姉貴頭大丈夫か」

「お前に言われたかねー……」

「……ひどい言われようだ。」

奈々子が「泣いてもいい？ わたし泣いてもいい？」と叫ぶ横で、しっかり者の孝明が、ぎろりと天使たちを睨みつける。

「でも、それって、今更変える……つか戻す必要があるわけ？ 16年

も経ってから変えたって…」

「死んだ奴は、生き返らせることはできない」

孝明の言葉を遮るように、黒髪が呟いた。

きよとん、と姉弟は、そろって怪訝な顔になる。

「言いましたよね、男児と女児の死亡率の違いについて」

「女の子の強いんでしょう？ 男で死んでたはずの子が、女の子で生き延びるって…」

「ええ。ですから、その逆もあるのです。女として生まれ、天寿を全う出来るはずの人が…男として生まれ、命を落とす。

そのひとたちはもう、還ってくることが出来ない」

孝明は、反論しようとしていた口を閉じた。

「輪廻、ってわかりますか。死んだ生き物の魂は輪廻の輪に戻り、また生まれ変わるのです。

もちろんその、天界の不備で死んでしまった魂たちには、すぐに生まれ変わることが出来るよう手配されました。

そのひと達がすぐに生まれかわるには、歪んでしまったバランスをもとに戻さなければならぬのです。

……ですが、それはあくまで「生まれかわる」です。死んだことに変わりはない。

記憶だって、その場合残すことはできないのです。」

「……きおく、そうだ、記憶！ なんで、このことを伝えにきたんだ？」

思い出したように孝明が問いかける。

「だってそうだろ、このまま奈々子が記憶持っても、障害にしかならないじゃん。女だったのが男になるわけだし。」

性転換なんて荒技ができるんなら、どうして「最初から男だった」っていう記憶に変えないんだよ」

「そうして欲しいか？」

黒髪が、孝明の後ろの奈々子に問いかけた。

「記憶の改竄だって、やろうと思えばできるんだ。周囲の奴の記憶は変えるわけだし。」

でも、「自分」についての記憶っていうのは、どうしたって残る。前世の記憶まで残っちゃうような人間がいるんだからな。

だから、断片的に思い出すかもしれない。それよりは、はっきりと残って、現状を把握できた方がいいだろう？

ま、そこは本人の意思に沿うことになってるんだ。戸塚奈々子、お前が記憶の改竄を望むなら、俺達はその希望を叶えるだけの準備がある」

静かに聞いていた奈々子は、うつむき加減の金髪の手をとって、しやがんだ。

小さい子好きの彼女は、目線を合わせるのが大事だということを、経験から知っていた。

ふわふわの髪を、ゆっくりと撫でる。

「そっか。性転換はしちゃうけど、そのまま生きていられて、記憶もなくさないわたしのほうが、もしかしたら幸せなのかもね」

「…なら、いいんだな」

「うん。わたし、忘れたい記憶より、残っていたい思い出のが、い

っぱいある」

「姉ちゃん…」

感動しかけた孝明だったが、赤面した金髪の天使に、「可愛いッ！」と抱きついた姉を見て、きらきらした気持ちは霧散した。

「もうっ、かわいいなあ！　ねえ、君たち天使なんだよね、羽とかないの！？」

「奈々子！！　おつまえなあ、緊張感持ってくれよ！」
「だってえ！」

姉弟漫才を始める二人をみて、黒髪が一步前にでる。
その紅い瞳には、少しの迷いが浮かんでいた。

「話が進まない。——戸塚孝明、お前はこの件に関しては部外者だ。出て行ってくれ」

「なっ……なんだと！？　ざけんな、奈々子の問題は俺の問題だ！
姉弟なんだから——」

孝明の言葉遮るように、黒髪が腕を振りあげる。
瞬間、孝明の瞳がかげり、その場に崩れ落ちた。

「たかあきっ！？　ちょっと、なにしたの！？」

揺さぶっても殴っても起きない弟を見て、奈々子は黒髪を睨みつける。

「話が進まないんだよ、こいつがいます。姉弟だけど、この話は対象者以外には伏せておかなきゃなんないん——…」

「たかあきに!!」

天使たちが飛び上がる程の音量で、奈々子が叫んだ。

「たかあきに、わたしの弟に、何をしたの!!?」

衝撃的な宣告をされたにも関わらず、一度も声を荒げなかった少女が――

「なにを、したのって!! きいているのよ!!」

驚くほどの速さで手を伸ばしてきたかと思うと、あっという間に、黒髪は少女に胸倉を掴まれていた。

「うあっ、おい、……!」

すっかりパニックに陥った奈々子と、困惑しきって言葉がでてこない相棒の天使との間に、金髪は慌てて割り込んだ。

「奈々子さん!!」

「黙ってて!」

先程までの「のんびりしててちょっとズレてる女の子」はどこへいったのか、と問いたくなるような豹変ぶりに、金髪も一瞬怯む。

「おっ、落ち着いて下さい、孝明くんは眠らせただけです! よく見てください、寝息たててるでしょう!?」

これでもかと大声で叫ぶと、ようやく奈々子は黒髪を解放した。

「……ねむらせ、た？」

きよとん、と擬音がしそうな表情をする少女をみて、天使たちは息をついた。

少し咳き込んでから黒髪が頭を下げる。

「すまねえ。ちゃんと予告してからやるべきだった。おまえの弟は眠らせた。それで、夕食後の、つまりオレらと会ってからの記憶も消した。このことは、本人以外に知らせちゃいけないことになっているんだ」

「そ、なの……」

一気に力が抜けたのか、奈々子は座り込んで、へによりと笑った。

「ごめんね、黒髪くん。痛かった？」

「痛かった。けど、オレの方が悪かった」

金髪は、珍しいな、と思った。黒髪は、いつもなら例え自分に非があろうとも、決して自分からは謝らないのだ。

やはり彼も、さっきの奈々子の様子には何か感じたのだろう。

「わたし、たまに言われるんだけどさ、ちょっとカホゴみたい。孝明のがしっかりしてるのにね」

そういつて、奈々子は弟の体を引きずり、自分のベッドに横たえた。

「重っ。くっ、孝明め、背ばかり伸びやがって」

「あ、いいですよ、奈々子さん。私が彼の部屋まで…」

「待って。お話してる間は、ここに置いといていい？ 寝てるんだ」

し」

彼女も心細いのだろうと思い、金髪は頷いた。

「ええと、今夜はこのお知らせのみなのです。明日、あなたが起きた時には、あなたは男になっていますから」

「びっくりしないようにってことね…どうしたってびっくりはするだろうけど」

「今後については明日、で良いだろう？ ……顔色、悪いぞ」

奈々子は思わず頬を両手で押さえた。

自他共に認めるマイペースな彼女も、さすがに混乱しているようだ。

「そうだね…。明日、朝、来るの？」

「時間はあなたの都合のよい時間で…。でも、朝のうちのが良いですよね」

「うん、むしろ朝じゃないと色々困りそう。多分転校の準備とかしなきゃいけないんでしょう？」

「ちょうどゴールデンウィークで良かったよ」

心からそう言っているらしい奈々子を、天使たちは不思議そうに眺めていた。

4、のん気な男体化

「……まじか…」

朝、起きると。

やっぱり奈々子は、男の子になっていた。

胸もぺったんこだし、足の間になにやら要らんモンがついているようだ。

「…あ、髪がない」

そしてさらに、背中の中ほどまでであった髪も、さっくり男の子ヘアになっている。

慌ててメガネをつけ、鏡を覗き込んだ。

「（ほ…スポーツ刈りにはされてないっぽい）」

オタクっぽくもキザっぽくもない程度に長くて、でも男の子仕様に耳はでている。癖っ毛なので、ぴよこぴよこ跳ねていてかっこよくはない。

せっかく伸ばしたのにな、と思っていたら、ふと、顔も変わっていることに気がついた。

「（たかあき…？ いや、わたしか！ うっそ、男のわたしって孝明そっくり！ てか母さんにそっくり！）」

うおお念願の二重まぶた！ なんて騒いでいると、どこからともな

く昨日の2人がでてきた。

「のん気な奴だな、性転換したってのに」

「奈々子さん、おはようございます」

「おはよう、いやー魔法ってすごいね。めちゃくちゃぐっすり眠ったよー」

声も幾分か低くなっているが、多分これなら弟の方が低いだろう。昨晚、興奮状態だった奈々子に、彼らは、安眠出来るという魔法をかけてくれた。

「（…魔法、とは違うんだっけ？ まあ、おまじないでもなんでも良いんだけど）」

ふと、鏡の横の時計を見ると、まだ早朝だということがわかった。窓からは日の光もはいつてこない。

「あれっ、まだ日の出前？ わたし目覚まし無しで起きられたの初めて」

「これからのことを説明する時間が欲しかったので、起こさせてもらいました」

説明、という言葉に、奈々子は心の中でため息をつく。

——相談、ではないのだなあ。

「まず、申し訳ありませんが、名前を変えて頂きます」

「奈々子さんて、バッチリ女の名前だからな。男でも通用するよう

なのを考えろ」

「か、考えろって君ねえ……」

——天界に抗議出来るものならしたいよ、本当。

にしても、名前まで変わってしまうのは、寂しい。

どこかに自分を残しておきたい、という気持ちもあって、奈々子は金髪にこう問いかけた。

「わたし、ナナってよく呼ばれてたから……ナナって入る男の子の名前ってある？」

「な…な…あ、ありましたよ。どれがいいですか？」

金髪は、小脇に抱えていた、辞書のように分厚い手帳から、すぐに調べだしてくれた。

名前の一覧を、奈々子は覗き込む。

——なな、ななお、ななき、ななせ、ななみ……うーん、どれが
良いだろう

「どれがいいと思う？」

天使たちの意見も聞いてみたい、と問いかけたが、金髪には困った顔をされ、黒髪には「自分で考えろ」と一蹴された。

「うーん、じゃ、この「ななお」ってやつで。母音が一緒だし。漢字はなんでも良いの？」

「ええ、名前に使えるものなら」

「「なな」はなんでもいいや。「お」は、男とか雄じゃなければなんでも」

「わかりました。

では…あなたは、今日このときから「戸塚 奈々子」ではなく、「戸塚 七緒」さんです」

戸塚、七緒…：口の中で何度か呟いてみて、頷いた。

「七緒って、良い字ね！ ありがとう」

すると、金髪は、まん丸い目を見開いた。どうやら、被害者である奈々子がお礼を言ったことに驚いたらしい。黒髪も、不思議そうな顔で奈々子を眺めた。

——お、落ち着かないぞ。美形2人に見つめられてるこの状況は…

「（ああでも目の保養だな…天使なら羽とか出してくんないかな…）」

「え、えーと、では次は…まわりの皆さんのことですね」

気を取り直した金髪が、また手帳をめくりだす。

「ご家族、ご友人の方々には、奈々子さ…あ、いえ、七緒さんはもとも男性だった、という記憶をもってもらいました。ですので、男性の七緒さんと付き合ってきたと思っているはずですよ」

「…じゃ、わたしが女だから起きたことって…例えば、お母さんに生理の相談をしたとか、そういう記憶は？」

金髪は、申し訳なさそうに首を振った。

「そういった記憶は、申し訳ありませんが、消させて頂きました。さらに、男性としておかしい付き合い方の記憶も、修正させて頂き

ました」

友達との記憶は、男友達として変じゃない程度に直されてるんだ。まあ確かに、付き合ってもいない男の子と2人でプリクラは撮らないだろうし、連れションなんてもってのほかだ。

そこで、ちらりと頭をよぎる、嫌な予感。

「男……って、わたし、高校は女子校だよ？　高浜さんとか瑠璃ちゃんとかとは、高校で出会ったんだよ？　その辺はどうするの？」

そう聞くと、今度は黒髪が偉そうに答えた。

「お前が、女子校に入ってから出来た友人の記憶は、完全に消した。男のお前があの高校に入れるはずないんだからな」

「そ、そうか……。せっかく、友達出来たのにな……あれ？　わたし、転校するんだよね？　4月から今までの間、どこにいたことになんの？」

考えれば考えるほど疑問がわいてくる。同時に、不安も。

「そこは難しかった。やっぱり俺たちが勝手に「4月からここにいた」なんて記憶を植え付けるのはよくないからな。そんなの、家族やら友達やらだけでこりごりだ。最初っからないもんを作るのも難しいし。転校って形が一番いい。

お前は、親父さんの出張について行っただけでことになってる。今度の親父さんの出張、確か三年の予定だったろ」

そう。なんの仕事をしているのか知らないが、彼女の父はちよくちよく出張する。

今回ほど長くて遠いのは初めてで、いっそ家族で引っ越そうかとい

う話もでていたくらいだ。

しかし、奈々子も推薦で女子校に入れそうだったし、来年度は孝明が受験生だということで、ひとりで行ってもらった。

「お前は、親父さんについて、高校三年間を熊本の高校で過ごすつもりだった。だがそこであまりに上手く行かなかったため、生まれ育ったこっちに戻ってきたというわけだ」

「ウワー、嫌な設定になってんな…逃げ出したってことじゃん、それ」

「まあ、こっちに戻ってきた理由はなんでもいい。とにかく、お前がこの1ヶ月ほどいたのは、熊本県立第一高校ってことになってるから」

「はいはい」

忘れそうだからメモしろメモ、と促されて、机の引き出しから手帳を引っ張り出す。

と、それは見慣れたお菓子のイラストではなく、戦隊モノの表紙に変わっていた。

「……………」

「ああ、そうそう。七緒さんの服や持ち物も、男性用に変えておきました。…ちなみに、その手帳を選んだのは私ではありませんよ」
黒髪天使に視線をうつすと、彼は、どや顔で奈々子の感想を待っていた。

「文具は全て、彼に選んで頂きました」

——金髪ちゃん、それってまさか！

奈々子は慌ててペンケースをひっくり返す。

「……………」

——オーマイガッ！　なんてこったい、全部戦隊モノのグッズじゃないか！

——しかも何、このペンケースについてるキーホルダー。竜が巻きたついた…剣？　…あ、これ、移動教室のときとかにお土産屋さんでみた奴だ！

——…ヤバいぞ、黒髪くんは小学生男子の趣味だ。

無言のまま、ダンスを開ける。

奈那子は男物の流行なんてわからないが、そこには、イケイケすぎなくてダサくない程度の、無難な服が揃えてあった。

「…そちらは、私が」

「ありがとう大好き！」

半泣きで金髪天使に抱きつくのと、彼女はちょっと赤くなった。

「全部金髪ちゃんが揃えてくれたら良かったのに…」

「おい！　それどういう意味だ！？」

黒髪天使が騒いでいるが、放っておいた。

「…えー次は、これから行く学校についてですね」

「朝日ヶ丘高校がいいです」

即答されて、天使たちはぎょつとなった。

朝日ヶ丘高校。通称朝高は、家から一番近い都立高校である。

奈々子はもともと、その朝高を受けていた。今までの女子校は、滑り止めのB推薦だ。

あっさり朝高には落ちてしまったけれど、男になって行けるという

なら、ぜひ行きたい、と奈々子は力説した。

「朝高ならチャリ通圈内だし、中学のときの仲良しもいるし……あれ？」

ひとりで盛り上がっていたら、天使たちが、顔を見合わせている光景が見えた。

「え、えーと…何？」

「あとう、本っ当に申し訳ないのですが、七緒さんにはこの中学校を選んで頂くことになります」

どき、と布団の上に積まれたパンフレットの山に、奈々子は飛びつく。

もうどこからだしたとかは一切考えない。多分天使は四次元ポケットとか持ってるのだ。

「……………ちょっと待って！ これ…男子校ばっかじゃん！」

悲鳴に近い声をあげる奈々子に、黒髪が怒鳴り返す。

「よく見ろよ！ 共学もあんだろ」

「圧倒的に男子校のが多いんですけど！ どういう基準で選んだらこうなるわけ！」

騒がしい2人の間に割り込むように、金髪が答えた。

「七緒さんには、寮に入って頂きます！ なので、東京都・千葉県・埼玉県の中から、男子寮のある学校をピックアップさせてもらいました！」

寮？ と奈々子は首を傾げる。

「記憶の修正・忘却っていうのは、完璧なものではないんです。修正した記憶が定着するまでに時間を要するのです。

だから、孝太さん、奈津美さんや孝明さん：つまりあなたのお父様、お母様、弟さんのような、あなたにとっても近しかった方には特に、記憶が定着するまでボロを出せない。修正した記憶が剥がれ落ち、もともとの記憶が戻ってしまいますからね。

ですから、これから三年間、出来る限り、家族・親しい友人とは、直接会わないでもらいたいのです」

自他共に認める、マイペースで能天気な奈々子も、さすがに怒りが湧いたらしい。

性転換され、転校を余儀なくされ、さらに家族とまでも引き離される。

拳を固く握り、天使らを睨みつけた。

「…あのさ。わたし、それってちょっとひどいと思うよ」

「オレたちだってそう思ってるさ。性転換しちまうのだって充分ひどい。お前にとっては理不尽以外の何物でもない」

そんなのはわかってるんだ、と黒髪は言った。

「でも、どうしようもないんだ。オレたちには、何も出来ない」

元・少女は黙り込む。彼らも、自分と同じように無力なのだ。ゆっくり息を吸って、吐く。

「…その代わりといったらアレですが、今後の生活については、私たち天使がそれぞれあなたについて、完全にサポートします」

遠慮勝ちに金髪が言っていると、奈々子は閉じていた目を開いた。

「え？　どういう意味？」

首を傾げた奈々子の表情からは、もう先ほどまでの怒りはない。心の中では、この理不尽に嘆き怒っているだろうに、自分たちに気を使わせないよう顔にはださないでいてくれるのだ、と思うと、金髪は奈々子に好感を持った。

「学費や生活用品、この性転換に関して生じた出費は、天界持ちですし…あなたが困ったことがあれば、担当の天使が飛んできます。むしろいつもそばにいます」

文字通り、「飛んで」くるのだろうかあのんきに考えて、奈々子はふっと笑う。

すっかり感覚が麻痺した。もともとマイペースではあるけれど、やっぱりこの状況はキャパオーバーらしい。

「…そう。わかった。学校なんだけど、ここにしている？　この中じゃ家から一番近いもの」
目に付いたパンフレットを手に取り、ぱらぱらとめくる。

「共学だし、わりとゆるい校風みたい。女子の制服可愛いなー。着れないケド」

「いいじゃんか、学ラン。男らしくて」

「や、ここ男子ブレザー」

「いいじゃんか、ブレザー。学ランは重いらしいぞ」

言い換えた！ 何その情報、どこから仕入れたの、なんて笑いながら、奈々子は読み進める。

「寮の写真でてないけど…わっ、綺麗な並木道。あ、最近校舎建て替えたみたい」

「七緒さんの学びたいものは学べますか？」

「あー…うん、わたしまだ特に進路決めてなくて…文系だともうけど。ここ偏差値もそんな高くないし、レベル的にも大丈夫みたい」
「あっさり決めてるけど、いいのか、そこで」

「うん」

本当にあっさり、彼女は決めた。

「なんて読むのかな、これ。…りん、——？」

「りんよう、ですね」

「私立だけど、いい？」

「いいよ。じゃ、決まりだ」

私立倫葉学園。

そこで、彼（元・彼女）はこれから三年間、過ごすことになった。

5、名前

学校が決まったことで、なんだか現実味がでてきた気がした奈々子は、気合いを入れるべく叫んだ。

「倫葉学園！ よし、イメトレしとく」
「何を!？」

黒髪が鋭くツツコむ横で、金髪は微笑を浮かべ、華麗にスルーする。つくづく、このふたりの天使はぴったりな組み合わせだな、と思った。

「（黒髪くんは熱いツツコミ担当、金髪ちゃんは冷静なボケって感じ）」

何もボケとツツコミに置き換えなくても、とも思ったが、お笑い好きなのでしょうがない。

金髪はパンフレットを受け取り、頷いた。

「わかりました、手配しておきます。では、私はこれで」

そう言って、窓を開け――

「って、ちょちょちょちょ！ え、え、どこ行くの、金髪ちゃん！」

慌てて奈々子が引き止めると、天使は二人して「あっ」という顔をした。

「ええと、言い忘れていました。あなたの担当天使は、こっちの彼です」

金髪が黒髪を指し、黒髪も自分を指した。

奈々子は、笑顔で固まる。

孝明に対しての唐突な行動や、命令口調、そして、文具の変わりようがブワツと頭の中を駆け抜けた。

「不満そうな顔してるな？」

黒髪がひきつった笑顔を向けてきたので、反射で首を横に振る。

「ソナコトナイヨ！ 金髪ちゃんのが趣味あうのになあとか全然思っていないヨ！」

「いきなりカタコトになってるけど！？ 挙動不審になってるけど！！！？」

「すみません：私にも同じように担当の人間がいるのです。彼は、一応私の後輩みたいなものなので、今まで付き添っていたのです」

天使にも先輩後輩はあるのだ：と、軽いカルチャーショックを受けている奈々子の横で、黒髪は「オレは頼んでねえだろ」とぶつぶつ言っていた。

「さて、部外者もいなくなったところで」

「部外者なんて言ったらかわいそうだよ、金髪ちゃんが」

「今それどーでもいい！とにかく、だ。オレがお前の担当だ、よろしくな」

手を差し出されて、一瞬躊躇してから、その白い手を握る。握手なんて、多分生まれて初めてした。そういえば、と奈々子は思った。

「それで…」

「わたし、金髪ちゃんの名前も、君の名前も聞いてない」

「…オレたち下っ端に名前なんてねえよ」

「ふーん……………えっ!!?」

うっかり聞き流しそうになるくらい軽い口調だったが、奈々子は音がするほどの勢いで、黒髪を見る。

「えっ、えっ。意味分かんない。名前ないって何？」

困惑した顔でそう問われ、黒髪も困惑した。

「えっ？ そのままの意味だが？」

「名前がない!？ えーっ、じゃあ普段どうしてるの？ 不便じゃない？」

「大天使ならともかく、普段名前を呼ばれるような生活じゃないんだ。文化の違いとでも思っておけよ」

「えーっ、えーっ。でもじゃあ、これからどうすんの？ わたし、

ずっと「黒髪くん」って呼ぶの？ 一生？」

「だからあ!」

ばん、と机を叩く。

きゅんと奈々子が声をあげたが、黒髪は気にせず詰め寄った。

「ちょっとお前先走るなよ！ あのな、今、それについて、話そうとしていたんだって!」

「はいっ」

慌てて敬礼する奈々子。黒髪は、噛みつくように言い放つ。

「オレの名前は、戸塚奈々子っ、お前に名づけて頂きます!」

「はいっ……………え?」

ああわかった、と思った。

——黒髪くんは、圧倒的に言葉が足りない子なんだ

「…あ、間違った、お前はもう七緒か」

「…え、え、それは別にいいんだけどさ。名前つけるってどゆこと?
意味がわからん」

お互い、リズムの掴みにくい相手だなあと思いつつ、布団の上に座って、落ち着いて向き合う。

「整理しよう。まず、オレには名前がない。でも、これからお前のサポートとしてそばにいるから、名前がなくて不便なのはお前だ。だから、お前に名前をつけてもらおう」

「……金髪ちゃんもそうなの?」

そう言われれば、二人は、先程も昨晚も、一度も相手を名前では呼ばなかった。

呼ばなかったのではなく、呼べなかったのだ。名前がないのだから。

「そうだ。あいつも、担当先の奴に名前をもらってる頃じゃないか」
「へええ……………えっと、名前って、なんでもいいの? 日本名?」

頭に浮かんだのは「クロ」だったが、さすがに安直すぎて言えなかった。

黒髪は、なんでもいいよと溜息をつく。

「なんだろうー、わたしペットとか飼ったことないから、なんか名前つけたことないんだよね」

「オレはペットと同列なのか」

「クーたん、アカメちゃん、天四朗……」

「待て待て待て待て待て待て！」

奈々子の口からでてきた名前の数々に、黒髪は身を固くした。

「クーたん！」と呼ばれて返事しなければならぬのは辛い。辛すぎる。

「オレには拒否権ないって決まりだから！ 出来るだけ変じゃない名前にしてくれ！」

「え、今のダメ？ 天四朗って結構良いセンいってるとおもうんだけども」

「……ッ…いや、あのみつつの中では、それが一番無難か…？」

「不満そうだね」

「不満だが天使側に拒否権はない」

「はつきり言い過ぎだよ！」

奈々子は布団に突っ伏し、次の瞬間起き上がった。

「じゃあ天四朗からとって、ロウとか。ちょっと外国っぽくない？」

「……四朗よりはマシ、かなあ」

「じゃあ、それに決定！」

黒髪は、むにむにと口を動かす。

「ん？」

「……………」

赤い目が、奈々子の上辺りを泳いでいる。

「どうかした？ ……ロウ？」

ぴくりと天使の肩が揺れて、奈々子は、ふと気がついた。

「…え、もしかして、照れてる？」

「照れるかッ！ なっ、名前っ、呼ばれたくらいでっ、照れるか！」

赤面して叫ぶ少年に——奈々子は抱きつく。

「ぎえええっ、くつつくな！」

「可愛い可愛い死んじゃうもういっぱい呼んじゃう！ ローウー！
ロウちゃん！」

「ちよっ、さ、触るな！ 撫でるな！ あうッ、ぐは、くっ、くす
ぐるなああっ！」

「悶える姿可愛い！ ぎゅーっ！」

「お前ドSだろ！ ……っ、つか、きつい！ 力、強い、って！」

苦しげな悲鳴をきいて、奈々子は黒髪を離した。途端に咳き込むの
をみて、おろおろする。

「えっ、ごめん。うそ、そんなに？ わたし、そんな力…」

「お前、今、男だろ！」

あ、と奈々子は叫んだ。すっかり忘れていたのだ。
声もそんなに低い訳でないし、体の違いを体感するほど、まだ動いてない。

「……そ、か。そうだったね、わたし、男の子になったんだ」
「それを忘れられるお前に驚くわ…」

呆れられて、項垂れる。

——その、残念なものをみるような目つき、やめてください

命名式をやろう、と黒髪は言った。

「オレは——お前も、新しい名前があるってこと、自覚しなきゃなんねえ。それに、担当天使として、きちんと契りを交わさないと」
「いいけど。命名式なんて、わたし、やったことないよ？」

「オレもだよ。簡単なもんだ。お前が、オレの名を呼ぶ。オレが答える。オレが、お前の名を呼ぶ。お前が答える。それで、終わりだ」

ただそれだけか、と安心した。もっと仰々しいものを想像していたのだ。

「…契りっていうのは、アレ？ 悪魔との契約的な？」

「よく天使のオレに対して悪魔の例えをするな、お前。契りっていうと、アレだな。夫婦間にあるような——」

「え！？ まさか、キスとか、そ、そういうコトしなきゃいけないの！？」

「最後まで聞け！ そんなん強要するか！ ——…だから、夫婦

間にあるようなものではなくて、お前の言う、何？ 悪魔との契約？
みたいな：主従契約的な意味合いに近いな」

ほっ とはしたものの、「主従」という言葉に顔をしかめた。

「しゅじゅう、なら、もっとわたしに優しくしてくれてもいいんじゃない？」

「近いつて言ったただけだろ。オレの主は生まれたときから決まっている。いいから、名を呼べ」

基本的に命令口調だよね。ぶつぶつ言う奈々子の足を蹴って、黒髪は手を差し出した。

「痛いし。：え、何、また握手？」

「触れてないとだめなんだ」

奈々子が、黒髪の手を優しく握る。そうして、彼の赤い瞳を見つめて、名を呼んだ。

「——ロウ。：君は、今日から、ロウだよ」

天使は、あからさまには照れなかったが、不貞腐れたような表情で答える。

「：ああ。その名をもらおう」

今度は、彼の番だった。

「——戸塚、七緒」

———そうだ、わたしは、

天使がうろたえたような気がして、ようやく奈々子は気がついた。
赤い瞳に映る自分は、どうやら泣いているようなのだ。

———わたしはもう、奈々子^{わたし}じゃない

「……はい。おれは、七緒。よろしくね、ロウ」

天使は、泣きながら笑う少年の手を、優しく、けれど強く、握り返した。

こうして、黒髪はロウに、奈々子は七緒に。
まだ慣れないものの、それぞれ、名前、そして他の何かを、静かに受け入れる。

ようやく窓から日が差し込んできて、向かい合うふたりを照らした。
新しい日が、始まる。

閑話

「…これで、お前は俺のことを正式にサポートとして認めたことになる」

素早く手を離して、黒髪の天使は言った。
名を与えるという行為には、色々とそれ以上の意味があったらしい。

「……すまん、七緒」

ロウのか細い声に、七緒は微笑を浮かべた。

「いいんだよ、ロウが謝ることじゃない。ていうかわたしこそ、ごめん。泣いたりして」

ごしごし目をこする少年を見て、ロウはなんだか妙な気持ちになった。

——これが、情が移るってやつなのか

ちらりと頭をよぎったのは、下界に降りてくる前に話した、先輩天使との会話だった。

「お前、あの事件の被害者補佐、任されたんだって？」
「ああ、まあな」

先輩、とは言っても、ロウはよっぽど尊敬している天使にしか、敬語は使わない。

その先輩は、変わりものだという評判で、けれど同時に「やり手」としても知られる天使だった。

しかし、普段の行動がやはり「変わりもの」なので、敬語で尊敬を表すには、ちょっと違うなあと思っていた。

だから決して、尊敬していないわけではないのだ。その天使の奇行に、呆れてもいたが。

「で、どうなの、お前の担当は」

「女。男になる」

「そーじゃねえよ、性格とかだよ。データあがってんだろ」

「守秘義務だ、わかってんだろ」

「真面目だねえ、コロコロは」

先輩天使は、青い目を細めて笑った。

ちなみにコロコロとは、その先輩天使につけられたあだ名である。

七緒には「よっぽど偉くなきゃ天使に名前はなし」とは言ったが、正確には違う。

親しければあだ名をつけたりするし、それが広まって、色んな天使からその名で呼ばれたりはする。

正式なものではないが、名前といえば名前だ。しかし、人間の七緒には特に関係のないこと。

それに、補佐として「絆」を結ぶには、名前をもらわなければならなかった。

「……オレは別に、真面目なんかじゃない。ノナミだけだ、そんな

こというの」

先輩天使は、ノナミと呼ばれている。そのあだ名は、ロウがつけたわけではなく、昔からそう呼ばれていたから、そう呼んでいるだけだ。

「面と向かって言ってるのは私だけかもしれないけど、他の奴だつて言ってるんだぜ」

「……ああ、言ってるんだろーな、裏では色々…」

「はっはっは、相変わらずお前は正確ひんまがつてるなあ！」

ノナミは、何を言っても大体笑って受け流す奴だった。その時も豪快に笑って、後輩の額を、少し強すぎるくらいに小突いた。

「ま、下界に降りたら変わるだろーな」

「は？」

意味がわからなくて、ロウは首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。人間と触れると、お前は変わるよ」

「……？」

「愛しくなるのさ、ひとは」

——愛しく、なる？

黒髪の天使は、金髪の天使を怪訝そうに見上げた。

「…情がわく、ということか？」

「んー、まあ近い。あとは自分で考えなよ、若造」

ノナミは苦笑した。その表情に、暗いものが混じっていることに、若い天使は気がつかなかった。

「（そうだ、情が移っちゃったんだ。：名前をもらった、だけなのになあ）」

「ロウ？」

黙り込んでしまったのが気になったのか、七緒は怪訝そうに声をかけてきた。

寝起きのボサボサ頭に、古くて青い眼鏡。一般的に、美しいものを愛でる傾向のある天使には見向きもされないだろうが――

「七緒、困ったことがあったら、オレに言えよ。サポート役、なんだから」

「えっ、なによっ、いきなり…」

――情が移ったんだから、しょうがない、

天使は、きょとんとする相棒を見て、豪快に笑うのだった。

「……じゃ、さっそく頼みごとなんだけど」

七緒は遠慮勝ちに口を開いた。

「なんだ？」

「……………レに……………」

「ん？」

聞こえない、はっきり言えよ、とせかすと、少年は真っ赤な顔で叫んだ。

「トイレ行きたい!!!!!!」

「……………いってこいよ!」

「やだやだやだあつ! だ、だって……………ついてるんでしょ!?!」

「たりめーだ! それが男のシンボルなんだろうっ!」

「どどどどど、どうやればいいの!?! 立つの? 座るの!?! ……」

…ふ、拭くのツ!?!」

「知るかあああああつ!! そそそそ、そういうことは自分で試行錯誤しろよ!」

「ロウはどうやってるの!?!」

「知らないのか、天使はうんこなんてしねえ」

「うっ……………せ、せめて伏字にしてよおおおお! それにわたしっ、今はそっちじゃなくて!」

「とにかくトイレ行けよ!」

「行ってどうするのよおおおお!」

……………こんなのに情が移っちゃったのか、と、天使はため息をついた。

6、新しい朝

「おはよー、母さん」

「おはよう、ナナちゃん。珍しく早起きねえ。朝ごはん、トーストにしましょうか」

わが母ながら、と、七緒は心の中で盛大に突っ込んだ。

——奈々子ときと全く態度変わらないってどゆこと!!

高1の息子に「ナナちゃん」て。いや、奈々子ときもそう呼ばれてましたけど。

「さすがお前の母親って感じだな。ゴーイングマイウェイ、って感じ」

頭に直接声が響くような感覚に、七緒は小声で問いかける。

「ロウ？ いるんだよね？」

「いるいる」

現在、彼の姿は、誰にも見えない。

朝食だ、居間に行こうとなったとき、ロウはするりと姿を消した。驚く七緒に、天使はこう説明した。

「戸塚奈津子、つまりお前の母親、あのひと靈感あるだろ」

「ええっ!? 　だろ、って言われても…初耳!」

「あるんだよ。ま、靈感っていうのは、お前がわかりやすいように言い換えた言葉だけど。」

何かの存在を、視たり聞いたり感じたりしやすい体質、ってことだ」
「うっそー、そうだったんだ…：わたしも孝明も全然そういうのではないけどなあ」

「遺伝するとは限らないからな。で、オレの姿が視られたら困るから。みえにくい姿で傍にいるよ」

声を聞かれたり、気配を気取られることはないのかと聞くと、「多分ある」とあっさり断言される。

「それでも、この姿だとハッキリとはわからないはずだ。お前の母さんの感じてるものの中にまぎれこむ」

「う、うーん、母さんは常に何かの気配を感じてるのね…」

驚きの新事実発覚に顔を引きつらせながら、七緒は居間へ出てきたのである。

「トースター出してくれる?」

「はい。わた…お、おれ、マーマレードがいい」

「そうそう、この前おばあちゃんから送られてきたリング、昨日ジヤムにしたんだけど」

「え、ほんと? 　じゃあそれも食べる!」

今までと変わりのない雰囲気、七緒は大きく息をつく。

「ロウ、わたし特に口調とか変えなくても大丈夫みたい」

「一人称だけは変えろよな」

「わかってるけどお」

けど。

声にはださず、少年は思った。

——記憶が残ってるんだから、捨てられない。
奈々子^{わたし}は捨てられない

「……できるだけ頑張って、慣れるよ」

不安そうに言う七緒に、ロウは何も言わなかった。

「…あれ？」

トーストを二枚たいらげてから、ふと七緒は声をあげた。

「まだ食べるの？」

「ううん…そうじゃなくて…」

いつもと同じに見えた朝の風景。けれど、何かが足りない。

「なんか違うかい？ 今日…」

「そうねえ、わたしもそう思ってたんだけど、何かしらねえ」

そういつて、奈津美はじっと息子を見つめる。

七緒は「なんだろう、久しぶりにパンだからかなあ」なんて首を傾げていたが、その傍らに潜むロウは、ドキリとした。

——この人間、思った以上に感覚が鋭いみたいだ…

思わず臨戦態勢に入ってしまったが、その後続く会話に、天使は
ずっこけた。

「：ナナちゃん、肩とか重くなったりしてなあい？」

「へ？ どうして？ してないよ？」

「そう。ならいいわ、無害な子なのねえ」

ロウのことを幽霊だとも思ったのだろうか――それだけでいい
のか？

――：無害な子なのねえって：いやいや、もっと突っ込めよ。蛙
の子は蛙、っていうものな：七緒のマイペースは、100%母親譲
りだ

天使がため息をついたとき、突然、七緒があっと叫んだ。

「わかったー、孝明がいないんだ！」

母さんも、思い出したように頷く。

「あ、そう言われれば。寝坊かしらあ、珍しいわね。今日は10時
から部活って言ってたのに」

七緒は時計を見る。9時過ぎだ。

家から孝明の通う中学まで、20分はかかる。

部長のくせに寝坊で遅刻なんて、姉としてさせるわけにいかない。

「わたし、じゃないっ。おれ、孝明起こしてくるー！」

「えっ？ ナナちゃん？」

背後で母さんが戸惑った声をあげたが、七緒は構わず弟の部屋へ向かった。

「……………なあ」

遠慮がちなロウの声が聞こえて、廊下を歩きながら思わず振り返る。が、そこに天使の姿はない。

「もういいんじゃない？　ロウ。姿見えないと、わたしやりにくいよお」

「むりむり。奈津子さんに絶対気付かれる」

「いつの間にか「さん」付けっ！？　えー何、母さんてばそんなに靈感強いのか？　ていうか今、どこにいるわけ？」

「変身してる」

「へっ、変身ッ！？」

ときめきワードが聞こえた、とはしゃぐ七緒は、小さい頃から魔法少女ものはもちろん、変身ヒーローもののアニメが大好きであった。

だからだろう、ロウの答えによるショックは大きかった。

「何に？　何に変身してるのっ」

「ノミ」

……………

……………

「……………は？」

NOMI、ですと？

「ばかばかばかつ！　どうりで頭の近くで声が聞こえると思った！
！　ノミって！　ノミって！！！！」

「うわわわわわっ、頭叩くな、自傷行為なんてやめろ！」

「違うわ！　フツ―頭にノミがいたら嫌でしょ！　でて！　早く出てって！」

「ぎゃっ」

ロウの声が遠くなった、と思った瞬間、床に小さなネズミが転がっていた。

ネズミの口が、器用に動く。

「あのなあ！　なにかに変身してないと…」

「ぎーーーーーえーーーーー！！！！」

絶叫する七緒は、今までののんびりした動作から考えられない程素早く、廊下の端まで逃げて行った。

「ネズミはだめ！　哺乳類全般好きだけど、ネズミだけはだめ！」

「わかった。他のになるから、スリッパを構えるのやめてくれ！」

戦闘態勢の七緒に怯えつつ、ロウはネコになってみせる。

「これでどうだ」

すると今度は、七緒の目がハートになった。

「おっけーです。むしろ抱きしめても良いですか肉球触っても良いですか」

「却下ーっ!」

結局ロウは、初めて会った時の少年の姿をとった。

「この格好で見られたらどう説明すんだよ」

「友達って言えばいいもん」

「そんな言い訳……通じそうだな、奈津子さんには」

ロウはため息をつく。

「とりあえず、なんかしら生き物の形をとってないと、奈津子さんに見破られやすいから」

器を用意しなければ、魂、として感知されてしまう。難しく説明しても通じなさそうなので、ロウは簡単にそう言った。

「いいけどさあ、もう少し可愛いものにしてよね…ノミとか最悪だから」

「ノミを馬鹿にすんなよ、あいつらすげえんだぞ」

「そういう話じゃないっつもの。もう、早く孝明起こさないといけないんだから、邪魔しないだよ」

「…その話なんだが…」

しかし、七緒は話を聞かず、つかつかと弟の部屋に入って行ってしまった。

ついて行くに行けないロウは、内心焦る。

——やばいな、オレ、昨日かけた眠りの魔法：解いたっけ？

昨晚、孝明を眠らせて、その後、その術を解くのをすっかり忘れていたのだ。

「（七緒に言ったら、また怒鳴られるかな）」

ブラコンの彼にそんなことを言ったら、100%怒られるだろう。大人しそうな奈々子に胸倉を掴まれて詰め寄られたのは、ちよつとしたトラウマである。

「たかあーきいー！ 起きてー」

うだうだ考えている間に、部屋の中から七緒の声が聞こえてきた。ロウは慌てて、障子の影から魔法を解く。

「（寝坊くらい誰だってするし、別にいいだろ）」

そう思った瞬間——

「なんだよ！！ 勝手に部屋入ってんじゃねーよ！」

孝明の怒鳴り声、そして、何かがどん、と倒れる音がした。

咄嗟に、もう一度ネズミに変身し、部屋に入り込む。

ベッドの横に立つ少年は肩をいからせ、その兄は尻もちをついた形で嘔然としていた。

「何、勝手に入ってきてんだよ。入るなっつっただろ」

こんなにも冷たい表情を弟に向けられたことのなかった七緒は、驚き過ぎて声がでない。

部屋の隅で縮こまる口ウも、同じく驚いてはいたが、冷静であった。

「（なんだ？ あのだ、昨日はあんなにシスコンっぷりを発揮して
いて——）」

はっとなる。

奈津子の場合が規格外すぎたのだ。相手の性別によって態度が変わるのが普通、である。

姉であった奈々子をあんなにも大事にしていた孝明は——

——兄である七緒が嫌いなようだった。

7、荷造り

「…つまりだな、お前が女であった場合は、弟と上手くいったんだろうが、男だった場合、あいつとは上手くいってないってことだ」
「なに、それ……」

出て行け、と怒鳴る孝明に、七緒はかろうじて「部活、遅れる…」と呟いた。

時計を振り返った孝明はぎょっとした顔をして、ものすごいスピードで着替え、スポーツバッグを担いで駆けて行った。

「さっさと出てけよ！ その辺触るなよ！ つーか話しかけるな！」

と、兄に噛みつくのも忘れずに。

そしてその兄は、未だ放心状態で座り込んでいた。

「言ったら、女だったときと態度違う奴もいるって」

「……だからって…なんであんな…」

ぐしゅ、と鼻をすすり始めた七緒に、ロウは戸惑う。

あれだけ苦手だと言っていたネズミの姿で近づいているにも関わらず、少年はそれさえ気付かないようだった。

「…姉だった奈々子とは上手くいったかもしれないけど、性別が同じだと色々あるんじゃないか？」

精一杯慰めようとしても、彼には届いていない。

「七緒：戻らないと、奈津子さんが心配してるんじゃないか」

「だよね…大声だしてたしね…：行く」

七緒が立ちあがるより前に、ロウは小さな黒いウサギのキーホルダーになった。

「えっ？ 君、ロウ？」

——「一応無機物にもなれるんだけど。それだと、お前の母さんあたりには「何か取り憑いてる」って見えちゃうんだけど…」

今度こそ、ロウの声は直接頭に響いてきた。

「ネズミとかノミは？」

——「生き物だろう？ その生命エネルギーだと思ってくれるんだ。虫とかネズミくらいしか、思いつかなくて…でもお前、その類無理だろ」

「うーん、わたしハムスターでさえ苦手だからね…：リスなら平気かもだけど。虫も、あんまり近いとなあ…キーホルダーのが運びやすいか」

というわけで、しばらくの間ロウはウサギのキーホルダーとして七緒のケータイにつけられることになった。

「ぶさかわいい」

——「ぶん殴るぞ！」

「ナナちゃん、また喧嘩しちゃった？」

居間に戻るなり、母さんにそう言われ、七緒は微妙な表情で頷いた。

——また、って言われるくらい、兄弟仲悪かったのかなあ……

「…母さん、おれと孝明ってさ、いつ頃からこんなになっちゃったんだっけ…？」

母さんは考え込むような顔をして、首を横に振る。

「いつからだったかしらねえ…ナナが小学校に上がるまでは、タカくんもお兄ちゃんにべったりだったんだけど」

「そう…」

小学校以降に起こったことが、ここまで態度に差をつけさせたのだ。しかし、心当たりがひとつもない。

「どう思う、ロウ」

小声で話しかける。ロウの声は直接七緒の頭の中に響くが、七緒の声はそうもいかないらしい。

——「わからないよ。基本的に、性別上問題なければ、過去起きたことは同じだ」

「そのくらいの頃あったことが、孝明にとって、奈々子相手には問題なかったけど、七緒だとだめだったってこと？　よくわかんない」

「ところでナナちゃん、荷造りは終わったの？」

「えっ？」

ぼそぼそと話していたところに突然そんなことを言われて、七緒は声が裏返った。

「にづくり？ 荷造りってなんの？」

「何言ってるのよ、明後日には入寮するって、自分から言ってたじゃない」

一瞬考えて、そうか、転校先の寮に入るんだった、と思い出す。

「忘れてた…なんもやってないや」

「寂しくなるわねー、七緒がいないと…」

しょぼん、と肩を落とす母さんをみて、七緒はちくりと胸が痛んだ。

「（わたしだって家を離れたくなんかないんだよー…）」

「制服だし、私服はそこまで多くなくていいよね。…教科書も寮の方に届くって言うし……はあ」

荷造りを手伝いながら、少年姿のロウは同情の目つきで七緒を見た。

「……16回目」

「え？ なに？」

「荷造り始めてからお前がついたため息の数」

「だって荷造りって嫌じゃない。出て行く準備ってことだし…」

「……そんなにショックだったか」

孝明のことか、と七緒は頷いた。

「ロウは兄弟いないの？」

「…オレ…は…」

眉間にしわを寄せる。

「いや、天使は全員兄弟みたいなもんだが…：…ていうか、決まった「親」がいないんだ、天使には」

「そうなの？ あっ、だから名前がないの？」

「まあそうかな。だから、お前がそんなに弟の態度に振り回される理由がわからない」

うーん、と七緒は考え込んだ。

一人っ子のようなロウに、兄弟がいる気持ちはわからないだろう。

「わたし…さ、ちょっとブラコン入ってんのかも」

「それは知ってる。昨日思い知らされた」

そんな力強く肯定されると、それはそれで微妙な気持ちだが。

「…で、さ、なんていうのかなあ。わたしより孝明のが出来が良いじゃない」

「ン…まあ、そういう事前資料はあったな」

そんなことまで資料になってんのかよと突っ込みたいところでもあるが、そう出来るほど七緒は元氣じゃなかった。

「勉強とかスポーツとか…全部孝明のが出来るのよ。割とモテたりしてるみたいだしさー、しっかり者で頼れるからまわりから頼りに

されてるみたいで」

「…うん、弟自慢にしか聞こえねえ」

お腹一杯ですと言いたげな表情でつつこまれ、そういえば、友達に孝明のことを話すと、必ずそういう顔をされたなあと思います。

「ちやかさないでよお。ほんとにそうなんだから。

……とにかくわたし、他人に比べられたとしても、あの子が大事な。大事なひとに冷たくされるのは辛いじゃない」

「そういうもんかね」

そう言って、あっさりと荷造りに戻る天使をみて、七緒は少し悲しさを覚えた。

彼は人間ではないのだ、と改めて思い知らされた気がする。

「（ロウは、悲しくならないのかな。好きな子に冷たくされたら、辛くて、悲しくて、わたしは泣きそうだよ。でもロウは、）」

「おい、手を動かせよ。もう昼だぞ」

——きっと天使は、そういう気持ちをよくわかっていない。

ふと、七緒はそう思った。

「（金髪ちゃんもそうだったけど…：ロウはもっとそうだ。あんまり…感情がない、っていうか。義務を基本に動いてるっていうか。氣遣ってはくれるけど、多分わかってない。わたしとどこかズレてる）」

そんなことはなかった。

少なくともすでにロウは七緒の相棒として彼を好いていて、義務以

上の感情を抱いている。

けれど七緒はそれを知る由もないし、ロウの感覚が人間である七緒と多少異なっているのは事実だった。

「……ロウ？」

「ん？ ……つか全然進んでねーじゃんか！ 服は自分でやれよ、オレ全然わからねえし」

「うん、やるけどさあ…。ロウはさ、わたしのこと好き？」

ぎよ、と音がしそうなくらい驚かれて、逆に驚く。

「そっ……それは、そういうのは、人間の恋人同士とする会話だと習ったんだが」

「いやいやいや違う違う違うそういうアレじゃなくてさあ！ 大体、わたし年下は好きだけど、恋愛対象じゃないもんよ！ これから一緒にやっていく相棒としてさ、好き？ ってこと」

ロウはまた、口をむにむにと動かす。それをみて、七緒は思わず笑った。

「ふふ、それ、ロウの癖なの？ 照れた時のさ」

「照れてねえよ！」

「そういうのってツンデレっていうらしいよ」

「ぶん殴るぞ！ すっ、好きとか、ないし、てゆか、天使って割と博愛主義だし」

「それ逃げ。天使じゃなくて、ロウの意見を聞いているのよー」

ずるくないか、そういう言い方、とロウは顔を隠す。

耳が赤いなあ、と言うと、見るな、と怒鳴られた。

「（照れ方は割と人間くさいのにねえ）」

「好きか嫌いなら、好きだっ、ケド…」

消え入りそうな声で言われて、七緒は天使の頭を撫でた。

「歯切れ悪っ。まあいいや、とにかくそういうことなのよ、わたしが孝明が大事なのって。伝わってる？」

「…：4分の1くらい」

「少ないなっ」

しかし、ロウは七緒の手を振り払わなかった。

少年は思う。

「（…孝明とロウは、違うけれど。代わりになんてしようとは思ってないけど）」

——もうひとり、弟ができたみたいだ

いつの間にか、少年はいつもの笑顔に戻っていた。

結局荷造りは、夜までかかったそうなの。

8、学校へ行こう

「ここが倫葉学園かあ…」

奈々子が通っていた女子高は、中等部と高等部が同じ校舎で、大学が何駅か先にある付属校だった。

同じく倫葉学園も大学の付属校なのだが。

「規模違うなあ…初等部からあるってすごいよなあ…」

そう、この倫葉学園は、同じ敷地内に初等部から高等部までが集まっているという、比較的大きな学園である。

ちなみに大学部は少し離れた場所にあるが、割とそことも交流が盛んならしい。

「ロウ。いるよね」

——「いるいる。大丈夫だから…」

だから早く校門をくぐれ、と急かされる。

先程から、校門近くの守衛さんに、怪訝な表情で見つめられているのには気付いていたが、どうにも気後れして踏み出せない七緒だった。

「ううう…行く、行きます」

結局、孝明とはほとんど何の会話もできないまま、入寮の日となった。

今朝の見送りも母さんだけで、七緒は正直悲しいを通り越してムカついてきた。

「あれだよね。どうせしばらく会っちゃいけないんだし、気にすることないよね」

そう憤っている時点で充分「気にして」いるんじゃないか、とロウは突っ込まなかった。

「休みには帰ってくるでしょう？」

「んー、どうかな。お盆辺りに顔みせるかもだけど…面倒だし」

「そんなこと言わないで、ちゃんと帰ってきてね。別に毎週とは言わないケド、週末くらいちょっと寄ったらいいわよ。近いんだし…」

泣きそうだ、とケータイを握りしめる。黒ウサギのキーホルダーが、じっと自分を見つめている気がした。

「……うん、でも、しばらくは…友達とかと遊んでみたいし…」

「……そうよね」

母さんが、笑う。息子も笑って、どちらも、お互いの無理な笑顔に関しては何も言わずに、別れた。

「そうか、戸塚くんだね？　大丈夫、連絡はきているよ。ずっと眺

めているだけだから、なんだろうとは思ってたんだけど」

そろそろ守衛さんの方も声をかけようと思っていたらしい、七緒が転校生だと知ると、笑って肩を叩いてきた。

「そうかあ、緊張してるのかあ。ここってあまり転校してくる子いないんだけどねえ、安心しなよ、君よりちょっと後にもうひとり来るらしいから。珍しいよねえ、こんな時期に二人もなんて……あ、道わかる？ 並木に沿って行けば高等部の昇降口につくから」

「はあい、ありがとうございます……」

「ま、そんなに固くならずね！」

40代くらいだろうか、髪に白いものが混じり始めたその守衛さんは、ほがらかに七緒を送り出した。

「良い人に会った」

——「良かったな。あれ、校庭の向こうにもうひとつ校舎が見えるけど」

「あっちは多分初等部だよ。同じ敷地内だけど校舎は別なんだって。にしても広いなあ」

校庭の横には、長い桜並木が続いている。

もうすっかり花は落ち、青々しい葉が残っているだけだが、見とれるには十分だった。

「桜の咲くころはもっと綺麗だろうね」

——「毛虫の時期は大変だぞ」

「……ロウ、あんた本当ドリームクラッシャーだね」

校庭を見ると、部活らしいかけ声とともに、少年たちが駆けまわっ

ている。声の高さから、あれは中等部の部活だな、と思った。

「元気だなあ…あつ、昇降口」

2年前に建て替えたというだけあって、校舎は外からみても中にはいってみても、綺麗だった。

「うわ、前までの木造校舎と比べるわ…女子高の割に、わたしが通ってたトコぼろくてさあ」

——「そろそろ黙らないと、独り言ばっか言ってると思われるぞ。校舎ん中には生徒もいるだろう」

「だよね、部活とかもあるみたいだし…私服の時点でちよっとおかしいかな…」

手提げから上履きを取り出して、履く。

脱いだ靴をどうしようかと迷っていたら、静かな廊下に誰かの足音が響いてきた。

下駄箱の影から顔をだしたのは、七緒より背の低い、坊主頭の少年。

「転校生？」

その口からでた声が思ったよりも低くて、七緒は咄嗟に頷くことしか出来なかった。

「だよねー良かった。校長室まで案内するよ」

ニツと人懐っこく笑うと、そのひとはさっさと歩き始めてしまい、七緒は靴を置きっぱなしにして、後を追う。

「えっ、と？」

あなたは、という前に、少年は自己紹介を始めた。

「俺、二年の羽島^{はねしま}。ちょうど校長室に行ったときにさ、守衛さんから君が着いたって電話があって、パシられちゃったの」

「そ……それは、ご足労、おかけしま、した」

先輩だったのか、と、前に行く坊主頭を眺める。七緒の偏見では「坊主Ⅱ野球部」という公式があるのだが、羽島は野球部と言うには肌が白かった。

「いーのいーの。生徒に親切にするのも俺の仕事みたいなもんだし…。あ、君、寮入るんだって？」

「あ、はい」

「俺、一年とき入ってたんだよ。今は一人暮らしだけど、なかなか良いトコだぜ、銀杏寮^{ぎんなん}」

「ぎんなんりょう？ 銀杏寮っていうんですか？」

「ああ、いや、「いちよう」って読むらしいんだけどね、正式には。でもちよつと語呂悪いじゃん。だからみんな、銀杏寮^{ぎんなん}って呼ぶの。ぴったりだと思うね。臭い一方、食ってみたら美味しいのさ。面白い奴らが集まるよ」

「…へえ」

よく喋るひとだなあ、と思っていたら、羽島は急に歩みを止めた。

「ここだよ。校長室。俺も入るから」

何か身だしなみに変なところはないか、七緒が確認するより前に、羽島は豪快に扉を開けた。

「校長ーっ、転校生連れて来ましたよ」

「はいはいはい、裕一くんありがとうございますね」

まず目に飛び込んできたのは、校長室らしい立派なソファ。壁際の棚には生け花、その上には歴代の校長の写真が、並んでいる。

しかし当の校長はというと、声は聞こえど姿は見えず、である。七緒はふと、辺りに漂う甘い匂いに気がついた。

——「甘い、どころじゃねえぞ。なんだこの甘ったるい匂い」

ずっと黙っていたロウが、思わず、といったふうに声をあげる。眉間にしわを寄せている表情が目に見えよう。

「校長っ」

羽島がうんざりした声をだし、つかつかと部屋に入っていく。

「もう、いい加減にしてくれよ、じいちゃん！」

——じいちゃん？

七緒が首を傾げた瞬間、羽島が部屋の奥にある分厚いカーテンを勢いよく開けた。

そこには——…

「だ、台所っ!？」

シンクにオーブン、さまざまな調理器具。小さな冷蔵庫まである。

そこはまさに、小さなキッチンであった。
その真ん中に立っていた白髪頭の人物が、くるりと振り返る。

「初めまして、戸塚七緒くん。僕がここの校長の、羽島 はねしま 昭仁 あきひと です」

初老の男性は、スーツの上にエプロンをつけたり、焼き立てクッキーの乗ったオーブンの天板を持っていなければ、明らかに「ダンディ」と表すにふさわしい見た目だった。

羽島がため息をつき、七緒にすまなそうな視線を向けてくる。

「——ごめん、じいちゃん、お菓子作りにハマってて…お客さんに手作りお菓子をださなきゃ気が済まないみたいで……」

「いやっ、そこじゃないです。いやいやそれもそうなんですけど。なんで校長室に台所があるかってこののが気になります」

「作ったんですよ。調理室は授業や部活で使いますからね、校長室にいて料理出来れば便利ですし」

「…まあ、そうですね」

「そうかなあ!? いやいや、俺としてはもうちょっと突っ込んで欲しかったんだけども!」

割とあっさり納得してしまった七緒に、羽島が突っ込む。

七緒からしてみれば、天使に「性転換しますよ」なんて宣告されたり、それが本当になったりすることよりも、校長室にキッチンがあることの方が現実として受け入れやすいだけだった。

——「麻痺してるな、お前…」

——うるせい!

声には出さず返事してから、校長と羽島を見比べる。

「あ、のー…ええと、羽島先輩と羽島校長は、もしかしてご親戚か何かですか？」

「姪の息子なんですよ、裕一くんは」

「お袋の叔父なんだよ、じいちゃんは」

同時に答えられて、「そうですか」と頷く。

「……驚かないんだね、戸塚くん」

意外そうに言われて、七緒は悟りを開いたような笑顔を見せた。

「驚きはしましたがこれくらいで動じてなんかいられませんよ」

——「麻痺したなあ、本当に」

——「自分でも、そう思っちゃうよ、ロウ

8、学校へ行こう（後書き）

正式名称「倫葉学園大学付属高等学校」なので、園長ではなく校長なのです。

閑話

「……なによ、孝明。起きてるんじゃない」

母さんの声に、孝明は顔をあげた。

昨日の練習試合のおかげで、まだ体が痛い。練習のときの運動量が多い気がするのだが、やはり試合は違う。

「どうしてお兄ちゃんのお見送りしないのよお。しばらく会えないのに」

責めるような口調に、無言で牛乳を飲み干す。

「ナナちゃん、タカくんのこと心配してたわよ」

「あいつに心配されるいわれなんてねえよ」

「孝明」

母さんは、とてもゴーイングマイウェイなお方だ。

兄の七緒は、割とその血を色濃く受け継いでいるが、弟の孝明の性格は、父でも母でもなく、祖母に似た。少なくとも本人はそう思っている。

常識的で、しっかり者で、漫才で言えばツツコミ——

「（いやいや、漫才で例えるなんておかしいか）」

話を戻すが、母さんは、ちょっと浮世離れしたひとなのだ。ほわほわしていて掴みどころがなく、とんでもない失敗も「あら、ごめんなさい」で済ませてしまう、この家の最強なのだ。

そう、最強なのだ。

「孝明。七緒のこと」「あいつ」なんて呼ぶのやめてちょうだい」

だから、怒ると、太刀打ちできない。

「……七緒、は、」

素直に謝るのもしゃくで、孝明は小声で兄の名を呼んだ。

「なんで、寮に入るとか、言いだしたの。倫葉って、こっから近いんだろ」

孝明の方も、七緒をそれなりに気にかけていたのだと知って、奈津子は小さく息をつく。

そういう年頃なのかとも思うが、息子たちが上手くいってない理由は、そんな一言では済まない気がしていたのだ。

「（男の子は、よくわからないわあ）」

そう思った瞬間——チリ、と頭の片隅で何かが疼いた。

「ねえ、知らないの、母さん」

不貞腐れた息子の声に、ふと焦点を戻す。

「社会勉強のため、とかなんとか言ってたけどねえ」

「……うそくさ」

「タカくん、ナナちゃんに後でメールしておいてくれる？」

あからさまに「えっ」という顔をした息子に、奈津子は微笑んだ。

「お休みになったら、気軽に帰ってきてねって——タカくんからそう言ってもらえれば、ナナちゃんも帰ってきやすいわ」

「母さんがしたらいいじゃない」

「わたし、ケータイ持ってないの、知ってるでしょう？」

浮世離れたマイペースな母さんは、文明の電子機器にめっぽう弱いのであった。

「……そろそろケータイくらい持てばいいのに」

「すぐに壊れるんだもの」

ユウレイ
いたずらっ子たちのおかげでね、と心の中で付け足す。

観念したように、孝明はため息をついた。兄のアドレスは、ケータイを買った時に強制的に登録させられたままである。

「……メールくらい、してやらないでもないけど」

「どっちよ。ねえタカくん、そういうのって最近は「つんでれ」とか言うらしいわよお」

「つつ……!?!? ふざっけんな! ごちそーさま!」

顔を真っ赤にして、孝明は食卓を離れる。奈津子はからからと笑った。

……ロウが見ていたら、「デジャヴだ」というような会話だった。

9、校長のクッキー

「すまないね、面接のときは会えなくて」

自分でお茶まで淹れたがった校長を押しとどめ、羽島が代わりにお茶を淹れてくれている。

つまり、作文と面接の編入試験だったが、校長の都合で面接はしていない、という設定のようだ。

「いいえ。えっと、素敵な並木道、ですよ」

「そうだろう、我が校の自慢なんだよ、あの道は。キャンパスの方もだけれど、ここも自然を多くとりいれていてね……」

変わったひとであるが、この校長も、全国の校長先生と同じように話が長いのだろうか、と思い、羽島からコップを受け取る。

「それで？ 校長、挨拶って言っても、こんなもんで終わりだろう？ このあとどうするんですか？」

敬語とタメ口の入り混じった口調で、校長の話を遮り、羽島は七緒の隣に座った。

話の腰を折られたにも関わらず、変わらないニコニコ顔で、校長は二人にお菓子を勧める。その手作りクッキーは、市販されているのかと思う程、見栄えが良かった。

「いやいや、もうひとつ謝らなくてはならなくてね。今日、本当ならば君の担任にもこの場にももらはずだったんだけど、彼は部活の合宿に付き添っていてね…そうそう、君は1年3組だから。」

あれ？ 全然手をつけてないじゃないか：ほら二人とも、遠慮しないで食べなさい」

が、羽島が一向にお菓子に手をつけないのを見て、七緒は嫌な予感がしていた。

「……先輩、お先にどうぞ？」

そう言うと、羽島はとても良い笑顔で後輩の肩に手を置く。

「いいや、今回は君がお客様だからね、戸塚くん。遠慮せず食べたまえ」

「（これはもう100%アレでしょ！ 美味しくない感じでしょ！）」

この場からどう逃げようか考える七緒を尻目に、校長は軽く話を締めくくった。

「まあ、これからこの学園で頑張ってね」

話が長いのか、と思ったら、このあっさり加減である。

多分このひとは、自分の話したいと思うことは長く、形式ばったことは短めにすませるタイプなのだろう。

「はい、では失礼します」

「いやいやまだお菓子食べていないだろう。そんなに急がなくてもいいじゃないか」

立ちあがりかけたところを、校長に素で止められて、七緒は中腰のまま固まる。

「……」

無言で羽島を見ると、生温かい目で見られた。

——ええいつ、わたしも男だッ

ひとつ手にとって、

「——い、ただきますっ！」

薬でも飲むかのように口に放り込む。

も　ゴリッ

——変な音したアアアア！　「もぐもぐ」っていくハズが「ゴリッ」っていったアアア！

——歯あ痛っ！　顎痛っ……！　美味しいとか不味いとかの次元じゃねえっ

心ゆくまで声を張りあげ突っ込みたいが、口いっぱいクッキーが詰まっているので叶わない。何故かそのクッキーは、普通の一口大よりかなり大きかった。

羽島は「やっぱりな」と呟いて、コップを差し出してきた。

「（やっぱりってどういうことですか、先輩…ッ！）」

思いつつ、受け取った紅茶を口に含み、石のようなクッキーを柔ら

かくすることに専念する。

「…じいちゃん、やっぱり無理だって。下手の横好きはよしてくれよ」

「おかしいなあ、分量を間違えたかなあ。大丈夫かい、戸塚くん。何分素人でね、許してくれ」

「大丈夫じゃないよ、顔真っ赤じゃなか。かわいそうに」

毒見させたくせに、と思ったが、未だにクッキーが口の中に残っている七緒は、睨むことしかできなかった。

「ははは、涙目で睨まれても怖くないよお。校長、俺、寮まで連れていきましょうか、この子」

「そうしてくれるかい？　じゃあ、戸塚くん、また登校日にね」

ばいばい、と手を振られて、七緒は無言で頭を下げる。まだクッキーが消化出来ないのだ。

——「あの校長、お前と気が合うんじゃないか。マイペース加減が」

——わたし、もっとお料理上手だもん…っ

「はーあっ、助かった！　俺、じいちゃんの部屋行きたんび、ああいう兵器を食わされてるんだぜ」

「兵器って…まあ否定はできませんけど」

校長室を出て、羽島が大きく息をついた。うらめしげに見つめると、申し訳なさに苦笑される。

「ごめんごめん。で、荷物とかは？」

話題をすり替えやがったな、と思いつつ、お世話になっている身なので、大人しく返事をした。

「寮に直接届いてるはずですよ。制服は明日か明後日あたりに」

「ふうん、随分急な編入だったんだな。ま、はやいトコ荷ほどきしたほうがいいよ」

昇降口まで来たところで、「羽島先輩！」という声が廊下に響いた。振り返ると、これまた小柄な少女が、猪のような勢いで駆けてくる場所だった。

「——あつ、悪い、すっかり忘れてた」

「忘れてたじゃないでしょー！ 馬鹿なんですか？ あなた馬鹿なんですか！？ ちょっと校長に許可もらいにいくだけって言ったじゃないですか！」

「あ、しかもその書類、校長室に忘れた」

「鶏か！ 三歩歩いたら忘れる鶏か！ いっぺん死んでその鳥頭どうにかしてください！ なんのためにゴールデンウィーク潰して集まってんすか！ 言いだしっぺはあなたでしょーがつ！

本当に自覚を——あれっ？」

羽島の顔に唾を飛ばす勢いでまくしたてた少女は、ようやく七緒の存在に気がついたようで、顔を赤らめ、胸倉を掴もうとしていたらしい手を下げた。

「あつ、のう、ええと、すいません、お見苦しいところを…」

「はははっ、千代子、お前イマサラ猫被ったって——っ…！！」

足を踏まれ、悶絶する羽島。千代子と呼ばれた少女は、七緒に可愛らしい笑顔を向けた。

「初めまして、倫葉祭運営委員会計の、岬みさき 千代子ちよこです」

礼儀正しく会釈され、七緒も慌てて応じる。

「初めまして、戸塚 七緒です。転校してきました」

羽島を先輩と呼ぶからには、七緒と同学年なのだろうが、その丁寧さにつられて敬語になった。

「あの、もしかして、委員のお仕事中：とかでしたか？」

恐る恐る尋ねると、千代子は頷いた。顔は七緒に向いているが、その右手は容赦なく羽島の耳を引っ張っている。

「痛い痛い痛い痛い！ 俺、別にサボってたわけじゃねーんだよね！ 仕事のうちなんだよ！」

必死で叫ぶ羽島、しかし、千代子は彼の言い分を華麗にスルーした。

「そうなんです、なかなか戻ってこなくて：ちょっと忘れっぽくてサボり癖のある大馬鹿なんです、このひと。」

ええと、戸塚：さんは、何組に入られるんですか？」

「あの、敬語いいですよ。わた：おれ、多分あなたと同学年。1年3組に入るよう言われました」

「あっ、1年生？ 良かった、先輩相手になんて姿見せちゃったのかと。文系クラスなのね。私は2組なの、理系クラス」

腰まで伸びたさらさらの黒髪は、一瞬、相棒の天使を思い出させる。

「（けど、ロウはこんなにお上品な笑い方しないよねえ）」

——「お前、今失礼なこと考えてるだろ」

ロウのドスのきいた声が響いた気もするが、七緒は、それどころでなかった。

「あの、羽島先輩、迷ってたおれの面倒を見てくれたんだ。だからあまり怒らないで」

「あらっ……そうなんですか、先輩？」

「さっきからそう言ってるじゃんか！ 転校生に寮までの道を教えるように、校長から言われたの！」

ようやく解放された先輩の耳は、肌の白さも手伝って、ひときわ赤くなっていた。

「それなら許します。ですけど羽島先輩、会長が大変憤ってらっしゃいましたよ」

羽島の顔が、さっと青くなる。

「……まじかよ」

「……あの、方向さえ教えてもらえれば、おれ、ひとりで行けますよ」

遠慮がちに言うと、羽島は申し訳なさそうな、けれど感謝の気持ち露わにした表情で、寮までの道を説明してくれた。

「ここ出て右に行くだろ。校庭に沿って…そうすると部室棟があって、さらに奥に行く。その辺にあるから」

「アバウトですね。そんなどこにあったんですか、寮って」

「大丈夫です、方向感覚は良い方なんで…じゃあ羽島先輩、ありがとうございました。岬さん、また会ったらお話ししましょうね！」

正反対の表情で、七緒を見送る二人。

「なんだか、丁寧なひとでしたね、男子にしては」

友達になれそうですー、と笑顔な千代子に対し、羽島は未だ蒼い顔である。

「そだねー。でも俺はちょっとそれどころじゃないから…千代子、会長に説明してくれるよな」

「ご自分でどうぞ。あ、書類も自分でとってきてくださいね」

「……戸塚くんみたいな素直な後輩が欲しかったぜ畜生」

素直かと言われたら素直だが、それ以上にペースを掴みにくい奴だぞ、と、彼らの会話が聞こえていたロウは思ったそうな。

「ロウ、道、わかる？」

——「お前ね、なにが「方向感覚は良い方なので…」だよ。あいつらが見えなくなった途端、オレ任せかよ」

「いやいや、良いんだよ、ほんとに。でもロウに聞いた方が明らか

に早いじゃん」

——「……こっちだ」

「さすがだね、相棒」

——「なっ、なにも出ないぞ！」

「いやっ、君のその反応を見るためだけにやっているのでお構いなく」

——「……覚えてろよ、絶対ぶん殴ってやるからな……！」

「照れないでよッ、ロウったら」

——「照れてねえよ！……チッ、そこを右だ、ばか！」

逆に、ロウの扱いに慣れてきた七緒であった。

10、入寮

「うわあ、校舎に比べて古いなあ」

思わずそう呟いてしまう七緒。

寮というのは、大きくてきれいなイメージがあつたが、ココは大きくない上、古びた木造建てだ。アパートみたいな感じである。

しかし、何故ここが「銀杏寮」なのかはわかった。

草木の多い学校ではあるなあと思つてはいたが、この寮のまわりは、がっちりと銀杏の木で囲まれているのだ。

「うーむ：マンガの読みすぎかしら。マンションのごとく豪華な寮が待ってるかと……まあいいや。住めば都にするしかないっしょ。紅葉が楽しみかも」

——「だからお前、独り言少年にしか見えないから、喋るな」
「うへーい」

気を取り直して、玄関に突き進む。切り替えの早い七緒は、新しい生活に向け気合い十分だ。

しかし、靴を脱いだところで、早くもどうしたらいいかわからなくなった。

靴箱があるにはあるが、それらにはネームプレートがついているのだ。

馬鹿みたいに突っ立っていると、「おーい」という声とともに、ドタバタ走る音が向かってきた。

「ごめんっ、君が新しく入る戸塚くんだね？」

奈々子は唾然とした。

割烹着にほっかむり。片手にはおたま。

どんなおばちゃんがやってきたのかと思いきや、花柄ほっかむりの下には、どこのホストさんですか、という整った顔が隠れていた。

ひよろりと高い身長だが、細身なので迫力はない。

ぱっとみ大学生くらいのその青年は、にっこり愛想良く笑う。

「はじめまして、この寮の管理人の岡^{おか}賢治^{けんじ}です」

「管理人…!？」

寮の管理人というのは、中年のおじちゃんかおばちゃんじゃないのだろうか。

びっくりしていると、岡さんは靴箱に七緒のネームプレートをつけてくれながら、朗らかに言った。

「ここの卒業生なんだよ、俺。そのツテでね。俺の代はよぼよぼのじいさんだったよ」

「そうなんですか…。びっくりしました、おばちゃんルックでイケメンさんが出てくるから」

そう言うと、岡さんはどっと笑った。

「おばちゃんルックかあ…。戸塚くん面白いこと言うねえ」

特にウケを狙ったわけではない七緒は、曖昧に苦笑した。

どうやら岡さん、笑い上戸らしい。

「ええと…ごほんっ。寮の説明とかしようと思ってたんだけど、君のルームメイトが早く帰ってくるって言うからさ。彼に案内しても

らって。届いた荷物はこっち…あ、運ぶの手伝おうか？」

管理人モードに戻ったらしい岡さんは、足元のダンボールを見て言った。

確かに、いくら男になったといっても、小柄な七緒に一気に三箱ものダンボールはきつい。

お言葉に甘えようと思ったそのとき、廊下の奥から派手な音が聞こえてきた。

「あつ、やかん！ ごめん、俺今料理中…」

「え！？ あ、あの、岡さん、おれ、ひとりで大丈夫ですから！」

だから早く火をとめて、と岡さんの背を押す。彼はすまなそうにちらりと振り返った。

「ごめんな、俺すぐ何してたか忘れ…あッ、戸塚くん、君の部屋は4階上がって右曲がった一番奥だから！」

焦げ臭い匂いまで漂ってきて、岡さんは来たときと同じようにドタバタと去って行った。

残された七緒は、5秒程放心してから、ダンボールを持ち上げた。手荷物を肩にかけて、三箱とも一気に。

「(だって、往復するの面倒だし…)」

往復するくらいなら、多少の重さは我慢だ。

「うぐっ…さすがに重い…しかも4階で…」

うんうん唸りながら、階段を上がる。

こういう横着を弟に見られたら怒られるだろうな、なんて考えて、少し寂しくなった。

——「お前、ばかだろ。落ちるぞ？」

代わりに、ロウが怒ってくれたが。

2階で一度休憩して、気合いをいれながら進む。

「ううう…！ 頑張れ、わたし！ 一回で終わらせろ！」

大きな独り言だが、連休中だからか、寮内は人の気配がない。
ルームメイトが早く帰ってくる、と言っていたけれど、それはこのためにわざわざ…なのだろうか。

「（だとしたらお礼言わなきゃ…。気が合うといいな…。……でも、男なんだよね…）」

3日前まで女だった七緒（しかも女子校）にとって、まわりが男子ばかりというのは、嫌でも緊張する。

共学だった中学でも、友達といえる男の子はほんの少数だった。

「（にしたって、ゲームの話とかばかりしてたからなあ、他の話なんて……部屋でテレビゲーム出来るのかな）」

そこから、あっさりと彼の思考は完全にゲームに移った。実はこの荷物の中にも、いくつかゲームが入っている。

ちなみに、目が悪い理由は言わずもがな、ゲームのしすぎと本の読みすぎだ。

だから、足元がお留守になっていたようで。

「——ッ、うわ、」

段があると思ってだした右足は、左足の横につく。いつの間にか、階段を上りきっていたのだ。

「あっ、やだっ、あっ、あ——っ」ととど！」

なんとか踏ん張ったものの、今度はバランスをとるために腕が揺れる。

「（——やばいつ、落ちる！）」

思わず身を固くして、でもいつまでたっても浮遊感も衝撃もこなかった。

「危ないなあ、そんなに一気に運ぼうとするなよ」

たしなめるような声に振り返るとそこには、よく日焼けした少年の、驚いたような顔があった。

七緒より3段ほど下で、彼の背中を支えているらしい。慌てて体勢を立て直した。

「みつつは無理だろ、あんたじゃあ」

「ありがとう、おれもちよつと後悔してたトコ」

へへ、と笑ってみせると、少年も表情を緩める。

「手伝うよ。オレ、あんたのルームメイトなんだ」

そういうと彼は、七緒が驚いている間に、上の二箱をとりあげた。

「あ、え、うそ、君が…ってか、あの、いいよ、ひとつ持ってくれば」

そういったのだが、少年は「任せとけ！」と先に進んでしまった。
ありがたいが、どうやら彼はあまり人の話を聞かないタイプらしい、
と七緒は思った。

「…ていうか、こういうときに助けてよ、ロウ！」

少年が先に行ったのをいいことに、七緒は小声でロウに話しかけた。

「……………ロウ？ 聞してる？」

が、返事がない。

片手で、ジーンズの尻ポケットに入れていたケータイを取り出して
みると、黒ウサギのキーホルダーが無くなっていた。

「えっ、うそ、ロウ…落として……は、ないよね、さっきまでいた
のに…」

「おーい、大丈夫ー？」

少年の声が聞こえて、慌てて七緒は彼を追った。

「（大丈夫かな…ずっと一緒にいるわけでもないもんね…まさかこの男の子が超靈感強いとかじゃないよなあ…どっか行くにしても、一言わたしに教えてからにして欲しいわ）」

少年は、405とプレートの掛かった部屋の前で止まり、「ドア開けて」と目で合図する。

七緒は小走りで彼に追いついて、ドアノブを回した。

がちやりと開けて——閉じる。

「……え？ あ、中入っていいんだよ？」

いや、入っていいとかそういうのじゃなくって。

一瞬だけ覗いたその部屋は、台風に直撃されたのかと問いたくなる程、散らかり放題だったのだ。

七緒の動きが止まった理由に気付いたのか、ルームメイトは慌てて言い訳をする。

「あ、いや、もう少し遅く来ると思ってたからさ、掃除とか…して…なくて…」

無言で振り返った七緒の笑顔を見て、少年は黙り込んだ。
七緒は、いう。

「——掃除、しょうか」

「くっせええー！ うっわコレいつのだよ！」

クシャクシャに丸まったTシャツらしき物をつまみ上げて、ルームメイトが叫ぶ。

あなたが置いたんでしようが、と突っ込もうとした時、拾い上げたものの正体に気づいて、思わず悲鳴をあげた。

「きゃあっ、パンツ！！ うっそおもう何コレエ！ 使用済みなわけ！？」

ルームメイトは赤い顔ですっ飛んでくると、七緒からパンツをひったくった。

「きゃあっ、あんたなあ……。ごめんって言ってんだろ、オレ、掃除とかスッゴい苦手なんだよ」

「岡さんは何も言わないの？ チェックとかないの？」

「いやあ、おっかさんには見逃してもらってんだ……。あ、おっかさんて岡さんのことな」

きょんとした七緒の表情に気づいて、少年は補足する。

「あのひとさー、なんかお母さんっぽいんだよ。食事も作ってくれるし。でも怒ると怖い。だからオレたち寮生は、親しみと畏敬をこめて、おっかさんと呼んでんの。」

……あれ？ っていうか、オレの自己紹介とかまだだったっけ？」

そういえば。

少年たちはぽかと顔を見合わせた。

大掃除を初めて約20分。あれだけ2人して騒いでいたくせに、お互い名前も知らないままだったのだ。

おかしくなって、同時に嘔き出した。

「本当だ！ 掃除に夢中：ってか、この部屋の惨状に気をとられて、そこまで頭まわらなかったよ！」

「ははっ、悪かったって！ つーか、お前もおっかさんに負けないくらい世話好きじゃね？」

けたけたと笑いあいながら、お互い内心でほっと息をつく。ルームメイトとは、上手くやっていけそうだ。

「わたし：じゃない、おれは戸塚 七緒。出来ればナナって呼んでね」
「オレは渡辺^{わたなべ} 直哉^{なおや}。ナオとか、ナオやって呼んで。陸上部な。ところさ、ナナは何組に入ることになってんの？」

ナナ、と呼ばれて、七緒はなんだかとても懐かしい気持ちになった。つい4日前までは、学校でそう呼ばれていたのに。

「3組に入るみたい。ナオ：ナオくんは何組なの？」

「ナオくんて！ ナオって呼べよ！ にしてもそっか、文系クラスかあ。オレは5組なんだ」

くん付けしないことに少し抵抗を感じたが、それ以上に七緒は彼とクラスがちがうことに落胆した。

「そうかあ：残念だなあ」

1人で、知り合いのいない教室に入っていかなくてはならない七緒の気持ちがあったのか、直哉は励ますように言った。

「明後日は一緒に校舎まで行こうぜ。職員室に案内するから」
「ありがとう。……ナオ」

ルームメイトに恵まれた、と、七緒は心の底から喜んだのだった。

11、新入り

「このくらいかなー。うわあかなりのゴミ」

ようやく、七緒が過ごせるスペースができ、全体的にも小奇麗になったところで、掃除は終わりにした。細かいところは明日以降やっていけばいい。

寮についた時は真上にあった太陽は、ほんのり空を赤く染めていた。

「ふいー。すっげえ、こんなに床が見えてんの初めて」

「おいおい」

直哉は首にかけていたタオルで汗を拭きながら、苦笑する七緒の横にぐてりと座り込んだ。

「あれ？　そういやナオ、おれが来るまでどこ行ってたの？」

「あー、ランニングしてた。それよりさ、ナナ、風呂行かない？」

この時間じゃまだお湯張ってないけどさ、シャワーなら出来るから。もうオレ汗だく！」

ぎくり、と七緒の体が強張る。

――キタよお風呂問題！

男になってから二日が経った七緒は、順応性を総動員して、もう自分の体には慣れている。

最初に風呂に入るときは、散々こねて口ウを困らせたのだが、一度

割り切ってしまうえば頑張れた。

「(孝明^{おとひろ}もいたし……でも、やっぱり他の男の子の裸なんてキャパオーバーだよ！ 荷が重いよ！)」

まだそこまで女を捨てていないのだ。
へら、と作り笑いを浮かべる。

「いや、おれは後でいいよ。まだ自分の荷物の整理してないから」
そう言うと、直哉は「じゃあオレも手伝うよ」と申し出た。

「え…悪いよ…：ほら、ナオはおれより汗かいたんだから、風邪ひいちゃう」

「だーいじょうぶだって。そんなにヤワじゃねーよ。それに、これから三年間同じ部屋で暮らすんだから、遠慮とかするなよ！」

七緒は思わず目頭を押さえた。

——どうしよう、涙が出る程いい奴だ

「どした？」

「いや…：ううん…：えーと」

仕方がない、と七緒は溜息をついた。出来ればこの手は使いたくなかった。

「実はさ…おれ、体に火傷の痕があるんだ」

唐突な告白に、直哉の目が見開かれる。

「普段はそこまで目立たないんだけどさ、体温があがると浮き上がってくるんだ。あんまり…気持ちいいもんじゃないからさ、見ててだから出来れば…」

嘘ではなかった。

奈々子であるときに負った火傷の痕は、七緒になった今でも、内太腿と背中に、しっかりと残っているのだ。

本人はあまり見られようと見られまいと気にしていないし、火傷の理由も単なる不注意なのだけれど。

ちらりと前髪の奥から直哉の様子を窺うと、予想以上に効果は抜群のようだった。

「そうなんだ…。悪い、無理に誘ったりなんかして…」

本当にすまなそうなルームメイトを見て、良心がぎすぎすと痛む。

「(…:ごめん、ナオ)」

直哉がシャワーからあがってくる頃には、すっかり荷物は片付けられていた。

「はやっ。オレ、15分も空けてねーのに」

「本と服だけだったから」

「あ、ナナの教科書は明日の昼頃に届くって、おっかさんが」

「わかった」

七緒はこっそり、案外自分は男の子の中でも普通に生活出来るんじ

やないかと思ひ始めていた。

「（ナオとは喋れてるし…着替えくらいなら平気だし…そんなに乙女な性格じゃないし）」

一方、直哉は、新しいルームメイトについて、

「（ナナって喋り方とか仕草とか、女の子っぽいよなー。きゃー、とか言うし。まさかおかまじゃないよな…。まあ普通に喋れる奴だからいいけど）」

なんて思っているのだが、七緒はそれを知る由もなかった。

「じゃ、食堂行こう。休日は夕飯早めなんだ」

食堂におりる、つまり、他の寮生とのご対面だ。

さっと緊張に染まった七緒の顔色に気付いたのか、直哉はルームメイトの背中を軽く叩く。

「だーいじょうぶだって。いい奴ばっかだもん」

少し表情はかたいままだが、その言葉に七緒は頷いた。

「きたな、新入り！」

食堂、といっても、長いテーブルにずらっと椅子が並んでいるわけではない。台所と繋がる広い部屋に、大きめのちゃぶ台がいくつか

置いてあるだけだった。

実家は和室ばかりだった七緒には、畳に座ることは苦ではない。が、
またも期待外れ感が彼を襲った。

そうして目を細めている七緒に声をかけてきたのは、岡を手伝って
皿運びをしている青年だった。

「1年3組だって？　なら、うちの寮ではテツって奴が一緒だから、
色々聞けばいいよ」

少しぼっちゃりめのその青年は、背も高く、しかしとても温和そうな
喋り方なので、女の子に一切の警戒心を持たせないだろうという
印象を受けた。七緒も、あっさり彼に対しての緊張を解く。

「えーっと、このひとは三年の野村のむら 葵先輩あおい。元・寮長。先輩、こ
っちは戸塚 七緒」

直哉が自分の分まで紹介してくれたので、七緒は慌ててぺこんとお
辞儀をした。

「ナナって呼んで下さい」

「うん、よろしく、ナナ。…あれえ、なんかナナとナオって似てる
なあ」

「そうっすか？　ナナー：ナオー：「ナ」しか合っていないすよ」

「ナナ：ナナ：うーん、七緒：ナナちゃん？」

どきりとする。奈々子だった頃、親友以外にはちゃん付けで呼ばれ
ていたのだ。

「よし、ナナちゃんと呼んで可愛がろう」

おどけたように笑う葵に、緊張がほぐれていく。

——優しい人だ、わたしを笑わせてくれた

「あ、ハイ。構いませんよ」

「えー、ナナってばいいのかよ。ただでさえ女っぽいのに」

ん？ と直哉を睨むと、彼は慌てて首を振った。

「あ、別に悪い意味じゃねーよ？ ナナっていう女いるじゃん」

「そんなこといったら、ナオっていう女の子もいるもん」

「まーまー。俺のことはアオイでいいからね」

「それは無理だよ、アオさん。みんなアオさんって呼ぶよ」

「じゃあ俺のことはユキヤって呼んで」

わいわいと話していたら、唐突に耳元でささやかれ、七緒は飛び上がった。

「きゃあっ」

「うがっ」

文字通り飛び上がった七緒に彼は、囁きの犯人にぶつかり、もろとも倒れこんでしまった。

「何してんすか、ゆーきゃん先輩…」

背中から倒れたため、七緒の下敷きになっている人物を、直哉は呆れたような目で見降ろす。

葵に助け起こされた七緒は、慌てて振りかえる。

そこには、整った顔を痛みに歪めた青年の姿があった。

明るい茶色に染められた髪が、後ろでちょっこりと結ばれている、チャラそうなひとだった。

「わ！ ご、ごめんなさい…！」

「いってー…頭打った」

うめく青年をみて、七緒はパニックになる。勢いよく彼を抱き起して、後頭部を見ようとした。

「後頭部ですか！？ どの辺ですか！？」

ちらりと青年が七緒を盗み見る。その瞳は、ちっとも痛みなんて感じていないようだった。

「あーもう痛すぎて動けない。色々面倒してもらわんといけないかもー」

青年がルームメイトにしなだれかかるのを見て、直哉はいい加減にして下さいよ、と横から噛みついた。腕が引っ張られた、と思った次の瞬間、七緒は直哉に立たされていた。そのまま、青年から遠ざけられる。

「このひとは他人をおちよくるのがダイスキなだけだから。気にすんなよ、ナナ」

葵も頷く。

「驚かしたのは雪弥だから自業自得だし、こいつはちっとも頭なんて打ってねえよ」

「うわーすごい言われよう…」

くすくす笑い颯爽と立ち上がったその青年は、直哉の後ろにいる七緒に、手を差し出した。

「俺は二年の坂枝^{さかえだ} 雪弥^{ゆきや}。寮長の命令は絶対だから、心しておけよ」

握手を求めたのであろう彼の手を、直哉が、押し戻す。

「またそーいう嘘教える！ ナナ、このひとはゆーきゃん先輩って呼べばいいから。つーか先輩、オレのルームメイトに気安く触らないで下さい」

「二人は仲が悪いんですか？」

妙にピリピリする直哉を見て、七緒は葵にこっそり問いかける。

「うーん。仲が悪いってわけじゃないんだけどね。ナオは、ナナちゃんを取られたくないんだよ」

「はい？」

「あいつさ、一人部屋なのすごい寂しがってて。でも一年は奇数人だったから、あいいうえお順で一番後ろのナオが、一人部屋になったんだ。ルームメイトが出来るって聞いてさ、弟でも出来た気でいるんだよ」

おとうと…と苦笑する七緒を見て、葵は少し迷ってから付け足した。

「あと、雪弥はバイなんだ」

「ばい？ って、なんですか？」

「女も、俺たち男も、恋愛対象ってこと。しかも手え早いから、ナオはそっちも心配してんの」

ハテナマークを浮かべる後輩に苦笑する。

「わからなくてもいいけど。軽蔑だけは、してくれるなよ」
「ケーベツすることなんですか？」

無邪気に聞いてくる後輩に一瞬戸惑って、それから首を横に振った。

「…いいや。でもそうする奴もいるってだけ」

「ナオは？」

「ナオは、普段は普通だよ。中学んときから顔見知りだったから、慣れてるんだ。……まあ、過保護になるのもわかる気がするけど」

「カホゴ？」

きよんとする後輩は、いかにも「そういうこと」に詳しくなさそうで。ルームメイトとしてナオがかばうのも、わかる気がした。思わず、ぐりぐりと七緒の頭を撫でる。

「とにかく今は、弟分を横取りされたくないってわけ」

そう言ってやると、七緒はくすぐったそうに笑った。

「ってオイ！　そこ二人！　俺を放って夕飯の準備たぁいい度胸だ
！」

「夕飯の準備放ってお喋りたぁいい度胸だな、雪弥、直哉」

「さーせん」

「ちょ、アオさん、ゆーきゃん先輩と一緒にしないでえ！」

とりあえず、この中で一番強いのは葵だ、と七緒は思った。

12、わたしのもの

それから、幾人かの寮生を紹介され、食事中にはみんなして色々な説明をしたがった。

「ここの定員は40人だけど、大体多くても30ちょいしか入らないな」

「二年以降は、一人暮らしする奴も増えるから、一年が一番多いんだぜ」

「あと、ここにくるのって大体スポーツ推薦の奴だよな」

「そうそう、ナナみたく文系理系からってのは少数派」

「そうなんですか：県外からとか？」

「そーそー、俺群馬」

「オレは秋田」

「秋田！？ 遠いですね。うちの母方のじいちゃんちは秋田ですー」

「へー。ってか、オレも一年だからタメでいいんだぞ、ナナ」

「なんだー！ もう、こんな一氣に人の顔やら名前やら学年なんて覚えらんない！」

「眼鏡してるくせになんだよ、それくらい覚えろよ」

「ちよっと！ 眼鏡してる奴の全部が全部頭良いと思わないでよ！ 言っとくけどおれ、成績は中の下だからね！」

「自慢げにいうことじゃねー！」

割とあっさりみんなに打ち解けている七緒を、意外に思いながら、葵は「どーもなあ」と考える。

「（なんか、ナナちゃんの喋り方って女の子くさいよな……だから庇護欲をそそのめるのか？）」

「なー、なんか天然ぽいっすよね」

ぐり、と横を向くと、雪弥がこちらの皿に箸を伸ばしているところだった。

「おい雪弥、俺の魚とるなよ！ ていうか人の心読むなし」

「可愛い後輩に一切れくらい分けてくれたっていいじゃないですか……そんな目え吊り上げなくたって」

ぎろり、葵の瞳が光る。

「俺からポテチの一枚でも奪ってみろ、灰にするぞ」

「そゆことばっか言ってるから太るんですよ！？ ねえほんと怖い！」

悲鳴をあげる後輩から魚を奪い返すと、ふん、と息をついた。

「…お前、あんまり構うなよ？ なよいからってイコール男が好きとはかぎらないし、変に懷かれてもお前だって困るだろ」

意味深に笑ってみせると、雪弥は盛り上がる一年たちに向かって声をかけた。

「ナナちゃん、後で寮長直々に寮内を案内してやろうか」

「ぶつぶー、残念でした。それはルームメイトの役目でーす」

「ナナちゃんは俺とナオどっちがいい？」

「10対0でナオです」

「ひでー！」

「寮長一蹴とかナナすげえ！」

げらげら笑う後輩たちをみて、葵は溜息をついた。

「んー、結局テツくんてひとには会えなかったな…同じクラスだっ
ていうから早く仲良くなりたいのに」

夕食も終え、たらふく食べた直哉と、控えめに食べた七緒は、並ん
で自分たちの部屋へ向かっていた。

「ああー、テツはあれだよ、ここでも一匹狼だから。クラスでもそ
んな感じっぽいし。」

食事ときに全員揃うなんて絶対ないんだ。部活の練習とか色々あ
るし。休みの日なんか特に」

「そっかー」

寮生たちとは上手くやっていけそうな感触で、七緒はほくほくして
いた。

「岩平くんも戸野橋くんも陸部なんだってねー。ていうかみんない
いひとー」

「上機嫌だな…っつかさ、くん付けしなくていんじゃない？ 同学
年だし」

「だってなんかいきなり呼び捨てって照れない？」

「照れねー！ 何？ ナナって結構恥ずかしがり？」

うるさいな、と口を尖らせながら、七緒は「そうか男の子同士はし
よっぱなから呼び捨てなのか」と心のメモに書き留める。

「（女子って最初は苗字にちゃん付けとかして、名前呼びになって…みたいな順序踏むからなあ）」

こういうところも慣れていかなければ、と思いつつ、やっぱり小心者の自分にはいきなり呼び捨ては出来ないなあとも思うのだった。

「ところでナオ。お風呂ってさ、何時くらいが一番空いてる？」

「え？ ああ、九時頃はわりかし人いねーよ。みんなドラマとか見てるから」

「ふーん。そっか、じゃああと一時間はあるな…」

そういうと、直哉は目を輝かせた。

「じゃあ質問タイム！」

「えー何よお」

彼のうきうきした声を聞くと、七緒は思わず笑顔になる。直哉の声には一切警戒も遠慮もなく、もう友達なのだと安心するのだ。

「お互いのことを知るためにさ、一個ずつ交互に質問し合おうぜ」

「何ソレお見合いみたい！ いいよー、じゃあナオからね」

そういうと、途端に直哉は照れ臭そうに首をひっこめる。

「え…いいよ、ナナから聞けよ」

「何!？ なんでいきなり照れてんの!？ いいけどね…じゃあ、誕生日は？」

「8月31日。ナナは？」

「12月10日。じゃあ出身中学は？」

「あ、オレここのエスカレーター組なのよ。付属出身。ナナは？」

「ええと、わかるかな。朝日ヶ丘第二中なんだけど」

「え！？　なんだよ、結構近いんじゃないか。なんで寮なんか入ったの？」

「だーめ。次はわたしじゃない、おれの番。んーと、ナオは彼女とかいるの？」

「いねーよ！　付属中は男子校だぞ！？　作る暇ねーもん。で？」

なんでわざわざ寮なの？」

「ん…んーとね、社会勉強のため、かなあ？」

「なんだそりゃ、疑問形で」

いいの、と七緒は言った。まさか、天界の都合で無理矢理…なんて言えない。

「そんなのいいから！　次いこっ！　次！　趣味はなんだい、ナオ！」

納得いかない顔の直哉だったが、それ以上突っ込んでほこなかった。

「趣味は…体動かすこと、とか、買い物とか好きだし…あとは、うん、ぐだぐだ喋ってんのも好き。ナナは？」

「…ねえちよっと…さっきからナオってばおれの質問のオウム返しばかりしてんじゃない…。趣味なんて読書と料理くらいだよ」

「ごめんごめん、次は自分で考える…って、え？　何、ナナ料理出来るの？」

「え、変、かな…かつこ悪い？」

「いやいやいや、男で料理出来るってかつこ良くね？　今度何か作ってよ」

ほっと息をつく。へらりと笑うと、頷いた。

「いいよ。野生の勘のみで作るけども」

「えー？ 上手いんじゃないの！？」

「趣味ってただだよ！ ちょっと挑戦しすぎて言われるけど」

「下手の横好きってこと？」

「そこまでじゃないよ！ 失礼な！」

もう既に、質問タイムは忘れ去られ、その後もぐだぐだと会話は続いたのだった。

がらりと引き戸を開けると、銭湯のような着替え場が広がっていた。

「おおぅ…案外広いな」

ボロいのは変わらないが、寮の風呂はなかなかの広さである。

直哉が言った通り、この時間帯は他に人はいないようだった。

「自分の体にはなれたけどさ……やっぱり見たくないっちゃ見たくないわ」

他の男子と裸の付き合いができる程、七緒は男になりきれていない。ぽいぽい服を脱いで、はじっこのカゴに突っ込む。腰にタオルを巻いたら、準備オーケーだ。

「いざ、風呂！」

戸をあけると、もわりと湯気が顔にぶち当たった。眼鏡が曇る。

「っふお！ え？ 誰か、いるの…？」

誰もいない場合、湯船の蓋は閉められるはずだ。湯気がこれほど充滿している、ということは。

「（誰かいる…！）」

白い霧の向こうに、ゆらりと人影が見えた。

「……！！」

明るい茶髪に、白い肌。驚いて見開かれた瞳は、緑色だった。夕食の席には、いなかった。一度でも会っていれば、忘れるなんて出来ないくらい、綺麗な少年。

——しかし。

「え、あの、えと、きみ……」

一瞬見つめあった後、少年は素早く七緒の横を通り抜けると、自分の服が入れてあったらしいカゴを引っ掴み、そのままものすごい勢いで出て行ってしまった。

「えー…何、今の子…」

「ナオー、今さ、お風呂場で…」

ドアを開けると、部屋は真っ暗だった。

「あいつなら、ランニング行っただけだぜ」

七緒は飛び上がった。

——この、生意気な声は。

「ロウ！ 何よおあんた、今までどこ行ってたの？ 呼びかけても返事しないし」

ぱちりと電気をつけると、黒髪の天使が二段ベッドの上段のふちに、腰かけていた。

「俺の姿は、こういうふうにかしらの姿をとらなければ、お前には見えない。でも、そうすると他の奴にも見える。」

かといって、魂？ ってゆーの？ だけの姿でいたら、お前には見えないし、感覚鋭い奴には「幽霊」として見つかる。迂闊に出ていくわけにいかねーの。

そういう感性？ が強い奴ってのはどこにでもいるんだ。奈津子さんみたく、特定出来る誰かなら加減できるけど、不特定多数のいる場所では、話しかけるのもちょっと危ないんだぜ」

「難しいなあ」

「まあ理解出来なくて良いよ。でも、お前が困ったときには助けにでるから。」

とりあえず、今日会った連中には、俺を感知できる奴はいないっぽかったから、银杏寮の中ではそばにいられるよ」

それを調べていたのか、と納得する七緒に、ロウは意地の悪い表情で言った。

「つーかお前さ、一日見てたけど…かなりまわりの奴から「女っぽい」とか「なよい」とか思われてんぞ」

うっそお、と叫ぶ。上手く喋れていると思っただけに、シヨツクだ。

「えー、もっと男らしくした方が良いかな？　「おるあ！　てめえら覚悟しいや！」とか？」

「それはやくざのイメージじゃないのか？」

ロウは呆れたように溜息をついた。

「とにかく、なにか困ったら俺を呼べ。お前と俺の間には一種の絆がある」

「きずな？」

「お前は、俺に名前をくれたろう？　天使ってのは、個であり個ではない。なんつーの、人間みたく、何か隠したがるわけでもないから、色んな、記憶とか感情とかも共有できて…：最初はみんな全く同じなんだ。そこから、もらう仕事とかによって、個性がでてくるっていうか…」

——個であり、個ではない

七緒は首を傾げた。難しい言い方だが、それはきっと「自分だけのもの」がひとつもない状態なのだ、と解釈する。

「…んー、まあ、感覚で判れ。そんなで、お前からもらった名前は、オレを縛るというか、自由をくれるというか、個である権利をくれるというか…」

要領を得ない説明に、七緒は目を細めた。

「…ロウって金髪ちゃんに比べて、説明下手だね。っていうか言葉足りないよね。同い年くらいにみえたけど」

ロウはムツとした顔をした。

「あいつがオレより早く仕事についてたのは確かだけど、年齢なんてねーぞ、天使には」

「はっ？ うそお、ロウ、10歳くらいでしょう？」

ロウの背丈は、七緒の胸辺りだ。手足も細いし、小学生程度にしか見えない。

「多分お前よりは早く生まれてるぜ」

「うっそだあ！ てゆか、多分ってなによ」

「自分の生まれた頃合いなんて、知らねえよ」

「頃合いって…年も？」

七緒がしつこく聞くと、ロウは少し困った顔になる。

「あのさ、天使と人間ってやっぱり違うんだよ。オレらはそういうものが足りないって思ってる。天使だからさ、そういう欲がないんだ。オレたちにとって、全てが大切であると同時に、大切じゃない」
「なにそれえ…」

七緒は茫然としてしまった。彼は、天使の考え方を受け入れるには、まだ幼かった。

囁くように問いかけた。

「…ねえ、ロウ。わたしがあげた名前、好き？」

個がない。

何も欲しない、要らない。

それは、なんだかとても寂しいことのように思えた。
いきなり静かな口調になった七緒に、ロウは何も言えなくなる。

「わたし、受け取ってもらえたんだよね、ロウって名前。君が欲しくなくても、わたしはあげたい。もらって欲しいの」

赤目が、見開かれる。七緒が妙に必死で、どう答えたらいいのかわからない。

うろうろと人間の頭の上あたりを彷徨って、それからようやく、彼の目線に合わせた。

「…好きとか、そういうのはよくわからんけど…。もともと必要なことだったにせよ…。お前に名前もらえて、良かったなとは思
う。」

「…初めて、で…。オレだけの何かを持ったのって…」

言葉は探すロウは、一生懸命だった。七緒が泣きそうに見えたのだ。

「人間とこうやって話すのも、お前が初めてなんだ。だから、色々間違ったこと言うけどさあ、お前がそういう顔すんの、ちょっと嫌だ。なんで泣きそうなのかわかんない時点でアレなのかもしれないけど…。お前のこと、割と大事だなんて思うよ。お前がくれるもの、嬉しい」

ぼそり、呟かれた言葉に、七緒はとびっきりの笑顔になった。

「ローウっ！ ああもう可愛いな、君は！ 案外くさいことも言うね！」

「うわっ、くつつくんじゃねえ！ くさいとか言うな、お前ちょっとは反省して男らしくやれよ！」

あまり激しくは抵抗しないロウの肩に、顔をうずめる。

「好きよ、ロウ。天使のせいで性転換なんて事態になっちゃったけど、あんたと会えたことだけは良かった」

だって寂しくない、と七緒は言った。

不器用ながらも傍にいてくれる天使が、可愛いと思う。

もっと人間らしいことを知って欲しいし、親しくなりたい。

——わたしは、ちょっと欲張りだ

でもそれでいい。ロウが何も欲しない分、食欲になってやろう。

「ね、ロウ。このまま寝ても良い？」

「なっ、ばっかじゃねーの、お前……」

直哉が戻ってきて、ルームメイトが小学生くらいの男（しかも長髪で赤目）なんて抱いて眠っているのを見たら、どうなると思うんだ。

言いかけて、やめる。

七緒の手は、まるですがりつくようだった。

「変身出来るんだよね？　ぬいぐるみにでもなってよ、もふもふの」
「…ぬいぐるみ抱いて寝てるのもどうかと思うがな…」

腕の中が軽くなった、と目を開けると、そこにはちよっぴり不細工なウサギのぬいぐるみが。

「ひゃっほう！　ぶさかわいい！　ロウ、これから毎晩この姿ねっ！」

「なんでだ！　ホームシックを許すのは今日だけ——って寝てる！　はや！」

くぴー、くぴー、と寝息をたてる七緒から、長い耳を使って眼鏡をとってやる。

とんだ人間の補佐係になってしまったもんだ、と思った。

「（頼ってもらうのが嬉しい、とか、なんだろう、これ）」

「ナナー、あのさ…あれ」

ランニングもシャワーも終え、先ほどのお喋りの続きを、と思っていた直哉は、部屋に入ってびっくりした。

「ね、てる…えーまだ九時半なのに…」

しかも、ウサギのぬいぐるみを抱いて。

「……………突っ込んだ方がいいのかな…」

苦しいほどに抱きしめられているウサギ、もといロウは、「お願い

だ、
つつこんでくれ」と心底思っていたそうなの。

12、わたしのもの（後書き）

天使、天界のうんぬんかんぬんは全部創作だと思って下さい。
神様とか天使とか言ってるけど、キリスト教とかではない、という
ことにしときましょう↑

閑話

「ええっとおー、戸野橋くん、岩平くん、秋川くん、飯島くん…に、加賀くん！」

「よし、よく覚えた！」

1年生たちが七緒に拍手を送る。

「今いない奴もいるけど、とりあえず同学年は覚えたなあ」

秋川が面白そうに言った。

彼は名前順が一番始めたため、入寮時から何かと1年代表にされる
ことが多く、そのままなんとなく1年生のまとめ役的な存在になっ
てしまった、お人好しな男である。

「ただーいまーっす」

そのとき、食堂に入ってきた少年は、スポーツバッグを背負ったま
ま、食堂に顔をだした。

「あ、知らない奴がいる」

「おーっ！ あっ、そうだ、ナナ、ナナ！」

直哉が叫んで立ちあがる。両隣に座る七緒と戸野橋が、ちよつと身
を引く程の大声だ。

「うるさいよ、お前」

「こいつ！ こいつさあ、名前なんていうかわかる？」

「いや、ナオくん？ この状況でわかったら、おれエスパーだよ？」

諭すようにつつこむ七緒に噴き出してから、秋川が説明した。

「右って書いて、年代の代って書くんだ、あいつの苗字」

「ちょちょちょ、お前さんら、おかえりも言わずにヒトの苗字ネタにするってどういう」

当の少年を置いてきぼりに、七緒は頭の中に漢字を思い浮かべる。

「う…う…うしろ？」

恐る恐るの答えに、どわっと1年生が盛り上がった。

「えー！ すげえ、ナナ」

「当たり前！ 右代^{うしろ} 博之^{ひろゆき}！ 俺、タメの奴に初対面できちんとよんでもらえたの初めてなんだけど！」

「オレなんか「うだい」って読んだぜ」

「とりあえず「みぎ！」とか言ったしね」

「えへへえ、おれねえ、漢字は強いんだよ！ 漢検2級だもん」

「すげー！」

テンションの高い後輩たちに、2年3年は口を出せずにしたのだが、もう我慢できない、とでもいう風に、雪弥が身を乗り出した。

「おいおい、先輩から覚えろよ」

「えっ、誰でしたっけ」

「アイアム雪弥！ 寮長！！」

「冗談ですよ」

くすくす笑う七緒を見て、秋川は「こいつ案外大物だな…」と思った。

「俺ら絶対ゆーきゃん先輩にあんな冗談言わんわなあ」

「てしゃべるか、右代、おめど荷物置いてこいよ」

「こっちは言われる側だかな。何、ナナはあのひと怖くないの」

「えー？ ふふふ」

「ていうかお前らアレだね、オレの前で、本人の前でそういうこと言ってる時点でナナと変わりはないからね。つーかなナちゃん、そこで「ふふふ」はおかしいですよ」

「だって、「ゆーきゃん」って単語聞くと、なんか笑っちゃって…」

「どういう意味かな、1年坊主！」

「きゃあつ、セクハラ！」

「若い奴らは元気だのう」

「じじいか！」

1年たちから一番遠い場所で、微笑ましげに彼らを眺めているのは3年生だ。

ちなみに、テーブルは入り口に近い方が年下、という暗黙の了解がある。

「にしても、変な時期に入ってきたもんだ」

そういうのは、食卓を囲む者の中で、抜きん出て背の高い赤城^{あかぎ}。

おっかさんも背は高いのだが、赤城は明らかにウエイトで勝っている感じだ。

それもそのはず、彼は柔道部のキャプテンであった。

「クラスに馴染めると思うか？」

怖そうな見かけに反し、心配性でのんびり屋。まさに「気は優しく

て力持ち」を地で行く人物である。

「あの調子なら大丈夫だろ」

杞憂だと一蹴したのは、藤枝。ふじえだ通称キノコ。

その名通り見事なマッシュルームカットで、更に「神童」とも称される青年である。理系クラスではちょっとした有名人だ。

「ナオ太郎と雪弥のテンションについていつてるんだぜ。1年のクラスなんか楽勝だろうよ。」

あつ、雪弥が得意のセクハラを始めた。やーめーろーよー、埃舞うっつの：あ、ナオ太郎が噛みつきにいく：秋川が割って入った。ひひっ、あいつも苦労するなあ」

しかし、天才といわれてきた人物が何かしら欠落していたように、彼もご多分に漏れず、どんくさい部分がある。

「おいおい、キノコ。ボロボロ飯こぼしてんぞ。実況してんじやないよ」

「え、まじで」

「あーあー、もったいねえな。拾え拾え」

そして1年に秋川がいるように、3年にも葵という「しっかり者」がいる。

「こうして世の中はバランスをとっているのだなあ」

「キノコ、おい、俺一人に拾わすなっ」

銀杏寮の賑やかな食卓は、いつまでも賑やかだったそうなの。

13、氣遣いと手伝い

「ん……」

なにやら扉の閉まった音がして、七緒は目を開けた。

「今何時い…」

「5時。朝の」

抱きしめていたぬいぐるみが口をきいたのに一瞬驚き、見慣れない部屋に戸惑い、ようやく、ここは銀杏寮だった、と思います。

「お前のルームメイトが今出て行った」

「なんでこんな時間に…トイレかなあ」

「ジャージに着替えていたから、ランニングだろ。お前を起こさないようにしてたみたいけど」

「ふあ…そっか。にしても、よく寝たあ。ねえロウ、寝る時はこの格好でさ、外出る時はキーホルダーに変身してよ。そしたらわたしも安心だし」

眼鏡をかけながらそう頼むと、ロウが溜息をつく。心なしか、赤いボタンで出来た瞳が吊りあがったようだ。

「…ひとつ、言わせろ。俺しかないからって、「わたし」とかいうな。これからは男としてやっていくんだから、少しは慣れてくれ」「えー。それくらい許してくれたっていいじゃない。わたしは、「奈々子」だった自分を忘れる気はないの。あなたといるときだけ、

わたしって言わせて」

そう言うのと、途端にロウが黙り込む。非は自分たちにあるのだから、これ以上は言えないのだ。

「この寮がペット可なら、猫とか犬とかになってもらったのになあ。よっこいせ」

しゃ、とカーテンを開けると、まだ外は薄暗い。窓から顔だけだすと、肌寒い風に鳥肌が立った。

「うわっ、今日は曇りだね。ひと雨くるかも」

「……七緒」

名前を呼ばれて振り返ると、ぬいぐるみから少年の姿へ戻ったロウが、七緒のベッドに座っていた。

「俺、考えたんだけど。俺もこの学校に通おうか？」

「えっ！？ そんなこと出来るの？ っていうかそれは年齢的に無理じゃ…」

そういうと、一見小学生な天使は、ムツとした顔でベッドからおりる。

「言ったら、オレ、多分お前より年上だって。それに、外見なんて変えられる。この姿は、人間に警戒心を持たせないためだ」

そして次の瞬間、少年のいた場所には、青年が立っていた。やっぱり黒い長髪で、赤い瞳なのだが。

七緒より頭ひとつ半は背が高く、見上げなければならぬ。

「16歳バージョン。ちなみにさっきまでは10歳な。この姿で学校に通い、寮にも入る。あいつと部屋を代わることになるが、その辺はちよつと記憶操作されてもらおう。そうすれば、一日中一緒でもおかしくないし、困ったときは助けてやれるよ。

何回も言ってるけど、キーホルダーとしてだと、感覚の鋭い奴に不審がられるんだ。寮内はともかく、学校は絶対にいるもん、そういう奴。したら、困るのはお前だろう？」

七緒は、心底ありがたい、と思った。

自分の事情を知っているひとが、クラスにも同じ部屋にも居てくれるというのは、きつと安心出来ることだろう。

しかし、頭をよぎる、葵の声。

——「あいつさ、一人部屋なのすっごい寂しがってて。でも一年は奇数人だったから、あいうえお順で一番後ろのナオが、一人部屋になったんだ。ルームメイトが出来るって聞いてさ、弟でも出来た気にいるんだよ」

直哉は、いい奴だ。

なにかと世話を焼いてくれるし、話も合う。

ロウの言う記憶操作をし、部屋が離れれば。

彼はまた、一人部屋なのだ。

「……ありがとう、でも大丈夫だよ、ロウ。わたし、ナオと仲良くなれて嬉しい。このままやっていきたいって、思ってる。ロウに助けてもらってばかりじゃ悪いし」

「…そうか」

ふ、と赤目が細まり、一瞬遅れて、ロウが笑ったのだと気がつく。

「えへへ。ロウって人付き合い苦手そうだしさ。それに10歳のロウのが可愛くて好きよ」

「お前なあ……」

不服そうな顔をしつつも、天使は少年に戻った。

「ああ可愛い！　ちいちゃい子ってどうしてこうも可愛いのかな」
「ひつつくな！　おい、ナオが戻ってくるみたいだぞ！」

そう言い残すと、いつのまにかロウはぬいぐるみに戻り、七緒の腕にちょこんとおさまる。

「あっ、え」

驚く間もなく、ドアが開く。

「……………」

「……………」

ジャージ姿の直哉と、パジャマの七緒がみつめあう。

たっぷり五秒後、直哉が意を決したように言った。

「…、昨日も思ったんだけどさ。ぬいぐるみ好きなんだ？」

「ち、ちがつ、これはあの、ぬいぐるみって言うより抱き枕っていうか」

慌てることでもないはずだが、なんとなく焦る。

赤面する七緒に、直哉は「わかってるよ」とでも言いたげな生温か

い視線を向けた。

「そっか。抱き枕か」

「信じてないでしょお、ナオお！」

「いやいや、抱き枕だよね、うん。わかってるぜ」

「ナオの意地悪！」

「いただきまーす」

「召し上がれ」

おっかさんがにつこりと笑う。七緒は、少しだけそれに見とれた。ほっかむりをとると、おっかさんはそれはそれは綺麗な黒髪なのだ。奈々子だった頃に、こんな髪質に憧れていた。

「（ていうか、今もだよ。おっかさん、伸ばしても似合うんだろうな…男の人のくせに）」

七緒が手を合わせている間に、直哉は既に納豆をかき混ぜ始めている。

「ねえ、おっかさん。食事ってどういう感じ？ ああ、時間とか…」

「ああ。何、ナオ、説明してなかったの？」

「むいむあんむあままっか」

「は？」

口の中のものを飲み込むと、直哉は拗ねたように言った。

「時間がなかったんだよ、そんな。ナナ、昨日9時半に寝ちゃったんだぜ」

「そう、疲れてたんだね」

おっかさんの笑顔は、癒しだ。

味噌汁を一口すすってから、おっかさんは説明を始めた。

「今、この寮には28人の生徒がいるのね。全員が食卓に揃うことなくて滅多にないし、今の人数だと場所が足りないから、揃ったとしても交代になっちゃうんだけど。」

で、まあ運動部が多いし、どの部も朝練は大体時間決まってるから、それに間に合うようには作ってるよ。5時半くらいから、登校ぎりぎりの7時45分くらいまでが朝食。

夕食は大体7時半くらいかな。休日は6時くらいには始めちゃってるよ」

甘い卵焼きを咀嚼しながら、七緒は一生懸命頷いた。

学校が始まれば、陸上部の直哉とは生活リズムが変わってくる。頼ってばかりもいられないのだ。

「朝、校内の売店とかで買って食べたい人、夜に外食する人は、その予定が決まった時点で、台所のホワイトボードに書く。」

最悪、俺の携帯にメールでもいいけど、早めに連絡くれるにこしたことはないからね。

ちなみに土曜日も半ドンだから、昼に俺の手料理が食べたい奴はホワイトボードに名前書いておく」

ここまではいい？ と確認されて、七緒は頷いた。

運動部に入るつもりはないし、文化部ならば慌ただしくなることも

ないだろう。ホワイトボードはあまり使わなさそうだ。

「日曜は夕食だけあるよ。朝昼は自分でって感じ。俺がいるときだったら作ってあげられるけど、日曜は俺もいないこと多いから。冷蔵庫に残りものはいれとくけど。」

あ、ちなみに、休日にかけてるときは、玄関の、ほら、カウンターみたくなつてるところあるでしょ。あそこの外出記録に書いておいてね。外泊届もそこにあるけど、その場合は三日前には提出してないといけないからね」

「学校がある日はいらないんですか？」

「うん、部活以外で遅くなる場合は一言言っといてくれるといいんだけど…友達といきなり遊ぶことになった、とかもあるでしょ。いちいち寮まで戻るのも面倒だろうし」

「案外厳しくないんですね」

「俺の頃はもっと厳しかったよ。ちょうど不良？ が流行った時期でさあ、外泊なんて絶対許されなかった。女の子の影がちらつても見えるやつは呼びだされてさ…」

「へ、へえ…」

「あの頃はまだ男子校だったからなあ。そうそう、俺のいっこ上に、寮に女連れ込んだとかで問題になった奴いたよ。女の子の姿は見られてないんだけどさ、管理人が部屋チェックしたときに、女物の服があったとか使用済みのゴムが落ちてたとかで」

そこまで言ってから、おっかさんは七緒の居心地悪そうな様子に気がついた。

うつむいた顔が、あからさまに赤い。

「……あ、ごめん。ナナちゃん、こういう話ダメだったりする？」
「……いやあ、そういうことあるんだなあって」

——なんていうか、おっかさんみたいなさわやか系イケメンも：こういう話普通にしちゃうんだなあ…。男の子って…。

全くもって「そういう」話に免疫のない七緒は、もごもごと言った。若干、というかなり引き気味の彼を見て、おっかさんと直哉は顔を見合わせた。

「……って、いうか、今、おっかさんナナちゃんって言いました？」

話題を変えたのだとアリアリと分かる七緒の態度に、おっかさんは苦笑しつつも答える。

「だめかな？ 葵がそう言ってたの聞いたから」

「良いですよ、別に。あ、あと、いつこ質問なんですけど」

「何？」

「わたし……じゃない、おれ、食事の支度とか手伝って良いですか？」

予想外の提案だったらしく、おっかさんは、そして直哉も、目を丸くした。

「いや……それは助かるけど……いいの？ ナナちゃんは」

七緒をあっさり首肯した。

家でも、食事の手伝いは割とやっていた方だった。一食分全て作るには技術不足だが、米とぎ・皿洗いなんかの雑用や、一品作るくらいなら出来るのだ。

「家でも手伝いとかしてたんで、お手伝いくらいなら出来ますよ。今のところ部活はやらないうもりだし、やったとしても楽な文化部だ

もん」

「えー、でも、朝とかしんどいよ？ 6時には寮出たがる子もいるから、遅くとも5時半くらいに起きることになるし」

「だってそれはほら、ナオ、5時くらいに走りに行くでしょ？ その時一緒に起きちゃえばいいかなって」

あ、という顔になって、直哉は申し訳なさそうに言った。

「もしかして俺、今日お前のこと起こしちゃった？ だから帰ってきたとき起きてたのな」

「おれ、割と物音とか敏感なんだよねー」

気にしないで、と笑って見せる。

おっかさんは少し考えてから、その提案を受け入れた。

「助かるよ、そんなこと言いだしたのナナちゃんが初めてだ」

「一人だったらやりたいかと思いませんよ。おっかさんがいるならお手伝いしたいってことです」

単なる「一人は嫌だけど二人ならいい」という意味で言ったのだが、おっかさんは照れたように頭をかいた。

「じゃあ、今日のお昼からやってみる？ 今日もう何人か昼飯頼んできてる子いるし」

「はいっ」

「えー、いいな、いいな。なんかずるい。けど俺料理は一切興味ねー！」

直哉はそういうと、勢いよく「ごちそうさま」と頭を下げた。

「えっ、もう食べたの」

「ゆっくりでいいよ、ナナ。今日練習ないから。終わったら何する？」

即答で「掃除の続き」と言われ、直哉はずっこけた。おっかさんはそれをみて笑う。

「ナオはねえ。とことん整理整頓が出来ない奴の典型って感じだろ」「ほんとですよ。初めて部屋に入ったとき、思わずドア閉めちゃいましたもん」

「拒絶反応でちゃったんだ」

ははは、と笑い合う二人に、「勘弁しろよお」と直哉は情けない声を出した。

14、おひるごはん

「てられってってって、てられってってってー」

おっかさんが鼻歌を歌い始めて、しかもそれが3分クッキングのテーマだったもんで、七緒は嘖き出した。

「やめてくださいよ、笑っちゃうじゃないですかあ！」

「えっ、せっかく料理中だしさ」

「ちよいちよい音程外してますしね」

「まじで？ うそー、どこが？」

きやいきやい騒ぎながら台所に立つルームメイトと寮の管理人の背中を眺め、直哉は呟く。

「アレだね、おっかさんとナナは波長が合うね」

隣で同じようにそれを眺める戸野橋の言葉に、頷いた。岩平もニヤニヤと笑う。

「2人ともアレだよね、ちょっとのんびりっていうか抜けてるっていうか…」

「銀杏寮のお母さんと妹、みたいな」

「いや、ナナは妹ってよりお姉ちゃんかも」

「どっちにしろ女とか」

「ふはっ」

陸部1年が笑っている間に、他の昼食希望者も降りてきた。

「ねむいしぬねむいしぬ」

半分寝ているらしい2年生の東條は、同室の福井に引きずられている。

「もーやだ！ 東條が起きてくんねー！ もう12時なのにさあ」
「福井も大変なー。おっかさーん、今日飯なに？」

同じく2年の中春も、この時間まで寝ていたらしい。あくびを連発しながら、台所に立つ管理人に問いかけた。

「3色スパゲッティ」

「トマトとクリームと？」

「バジル」

「またあ？ おっかささん、休みの日って麺類多くない？ 昨日の昼はうどんだったし：痛い痛い痛い東條くんソコ痛い」

文句を垂れた福井だが、言いきらないうちに、もたれかかるルームメイトが、首を絞めてきた。

「登り棒：」

「お前寝てるだろう？ まだ完全に寝てるだろう！？ どんな夢見てんだ！」

「登り棒を登る夢じゃねーのかい」

冷静に言ったのは藤枝で、入口付近で揉み合う後輩たちを、邪魔だ

とばかりに蹴飛ばす。

「痛っ、ちょっとキノ先輩！ 俺、とぼっちりなんですけど」

「中春、今キノコだめだよ、機嫌悪いから」

205号室ペアに巻き込まれ声をあげる中春に、最後に来た葵が忠告した。

「彼女からドタキャンされたんだってさ」

「えええーっ！！ キノ先輩、彼女いたんすか！」

「キノコなのに!？」

「おい、今言った奴誰だ！」

騒がしくなってきた食卓から、戸野橋はひょいっと抜け、とぼっちりが来る前に台所へ避難。

「おっかさーん、味見係りが来たよ」

「は？ ダメ。もう出来るから、あっちで待ってなって」

そう、おっかさんが言った瞬間、

「うわーっ、キノさんやめっ、やめてっ、いやはははははは！」

悲鳴ともとれる直哉の笑い声が聞こえてきた。

「童貞がナマ言ってるじゃねえ！ 俺のこの髪形はな、もうポリシーなんだよ！ …お？ なんだ岩平、お前もなんか文句あんの？」
「いやないっす、まじでないっすからちよっ、もうそこはっひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！ ギブですっ、キノさっ…ギブギブどこ握ってんすかまじで！！」

「…俺、巻きこまれたくねえよー」

「…じゃあ、皿だしてくれ」

こうして、ちゃっかり台所に迎え入れられた戸野橋。

七緒は首を傾げた。

直哉も岩平も、あっさりと藤枝にやられているようだが、陸上部の2人と、もやしっ子の代名詞な藤枝では、力の差は逆なんじゃないだろうか。

「無理無理、キノさんは細すぎて、俺らが抵抗したら折れちゃいそうだから。逆に」

七緒の疑問を察知したのか、戸野橋が苦笑いした。

「どんだけ細っこいのよ、キノコ先輩…」

「一回あのひとと風呂入ってみ？ 引くくらいガリガリだから。ほんとにいんのかな、彼女とか」

一緒にお風呂は無理です、と心の中で答える七緒。

「いるっていったらいるんじゃないの、彼女」

「いーやー、見栄張ってる可能性も」

「戸野橋くんて割とそういう話好きだね」

「好きだよ。だって男子高校生だぜ？ 恋バナ猥談に盛り上がらなくて、何に盛り上がるっての」

「ワイダン？」

別に知らなくていいよ、とおっかさんに言われ、なんとなく察する。

目線を逸らす七緒を見て、戸野橋は「えっ」と声をあげた。

「戸塚はそういうのダメな奴？」

「ダメっていうか：恋バナなら超好きだよ」

「まじかよ、お子様だなー」

「いいもん、ピーターパンと呼んでちょうだい。はい、あーん」

フォークに絡ませたスパゲッティを差し出され、戸野橋は思わず声が裏返った。

「へっ？」

「味見だよ味見。あーん」

——いや、だからって「あーん」はないです、戸塚クン！

戸惑い続ける戸野橋と、早く食べてよと言わんばかりの七緒を見て、横にいたおっかさんは小さく噴き出した。

「ふはっ…」

変に照れているのを悟られたくない戸野橋は、差し出された赤いスパゲッティにかぶりついた。

——が、

「ぐばっ!!」

「きゃーっ！ 何!? 何何何!?」

七緒の悲鳴に、食堂にいた直哉、と、便乗した岩平が、台所に駆け

付ける。

「うわっ、何、どうしたの」

そこには、むせかえる戸野橋と、右手に彼が吐き出したスパゲッティを、差し出していた右腕にぶっかけられ、茫然とする七緒の姿があった。

ちなみにおっかさんは、しゃがみこんで大笑いしている。

「……ちよっ……と、何してんのよ！ 吐き出すとかサイテー!!」

——おいっ、七緒っ

ロウの声が響いて、七緒はハッとした。
思いきり、女言葉だった気がする。

「げっほ、ごほ、ぐばっ、おへっ、げほげふお」

「むせすぎ！ トノ、大丈夫かトノ！」

しかし、友人たちはうっかり自然過ぎて気付いていなかったようで（それもどうかと思うが）、死にそうな戸野橋に注目していた。

「みぎゅっ、みずっ！」

「何？ あっ、水？」

岩平の淹れた水と受け取り、一気飲みする。
さらに自分で注いで、もう一杯飲んだ戸野橋は、ようやく大きく息をついた。

「辛えよっ！ なにこのスパゲッティは！」

「えっ。いや、さっき先輩が飽きたって言ってたから…まだトマト缶は開けてなくて、赤いのだけおれの創作なの」

直哉が、その問題のスパゲッティを覗き込む。すんすんと匂いを嗅いで、顔をしかめた。

「――キムチ？」

「いえす」

「いえすじゃねーよ戸塚っ！ きむっ、キムチて！」

「トノは辛いものからつきしだめなんだよ。…まあ、俺もこの真っ赤なのは食えないけど」

「実はタバスコも入れてみたんだ」

「入れてみたんだ、じゃねええ！ くっそ、ナナのばか！ 辛いよって教えてくれても――…何」

七緒が、笑いたいのを我慢するような表情なのに気がついて、戸野橋は目を細める。

「辛い、苦手なの可愛くなって…あと、初めてナナって呼ばれたから、なんか」

「！！」

戸野橋は赤面して、それから脱力した。

怒っていた気持ちだが、どっかに飛んで行ってしまったようだ。

「……もういいや。ナナ、これ、責任持って食えよ？」

「え？ おれも辛いのだめなんだけど」

「何を君は冷静に言ってるの！！」

「ナナお前ひでえな！」

「おっかささんそろそろ、落ち着いてくれ」

——結局、その激辛スパゲッティは、辛いものの好きの藤枝がたいらげた。

「偶然とはいえ、よくやった。ナナ。あいつの機嫌なおったぜ」
「キノコ先輩、割と単純なんですね…食べ物で機嫌なおるって」

以後、おっかさんの決めたメニューに、ケチをつける奴はいなくなっただけだ。

「おっかさん、ナナはさあ、結局料理は上手いの？」
「いや、手際は良かったよ。まさかキムチを入れるとは思ってなかったけど」

お手伝い第一回は、成功だか失敗だかよくわからない結果となった。

15、レッツ登校

さて、色々あったゴールデンウィークも終わり、ついに学校が始まる日となった。

七緒は、朝から緊張のあまり失敗しっぱなしである。

「ナナちゃん、今日はもういいよ」

おっかさんは怒るでも呆れるでもなく、七緒が割った皿を片づけて言った。

「ご、ごめんなさい…」

「いいんだよ、転校初日なんて緊張するに決まってるんだから」

心なしか青い顔の七緒の肩を、優しく叩く。

「意外だな、ナナちゃんは一昨日、全然緊張してるように見えなかったけど」

皿並べを手伝っている葵が、からかうように言った。

「もう吐きそうなくらい緊張してましたよ！ でも、最初に会ったおっかさんが…このお婆ちゃんルックで…しかもナオは部屋きつたないし…夕飯ときはゆーきちゃん先輩にちよつかいだされるしで…緊張をあらわす暇がなかったんです」

「よしよし、良い子良い子。座って待ってろよ」

ぐりぐりと頭を撫でられて、七緒はしぶしぶ言うことを聞いた。

雪弥が制服に着替えて降りていくと、既に朝食は出来あがっていた。葵とおっかさん、それに七緒と戸野橋が席についている。

「そう緊張すんなって、ナナちゃん。一年のまだ半分は学校に慣れてないんだから」

「うん：戸野橋くん、おれの卵焼きあげる」

「おいおい、大丈夫かよ、ナナ。職員室まで一緒に行こうか？」

「ナオがついてきてくれるって」

まあ過保護にされちゃって、と雪弥は思わず苦笑した。

「（わかるけどね、あの子色々弱そうだし：）」

「あつ、ゆーきゃん先輩」

戸野橋に気付かれたので、そのまま食卓につく。

「何、ナナちゃん緊張しちゃってんの？」

「アオさん！ ゆーきゃん先輩がいじめます！」

「まだいじめてないじゃん」

「笑顔全開で何を言うんですか！？ つーか「まだ」って！ いじめる気満々じゃないですか！」

青くなったり赤くなったり忙しい子だ、と思いながら、彼の皿の鮭をとってやる。

「食欲がないなら無理に食わなくていいんじゃない？ どうせ昼になつたらめいっぱい食えるようになってるよ」

七緒も、そして戸野橋も、ぽかんと口を開けた。おっかさんと葵は、それを見てにやにやと笑う。

「……なんだよ、一年」

「いや…ゆーきゃん先輩って優しいこと言えるんスね…微妙だったけど」

「ゆーきゃん先輩も人を気遣えるんですね…微妙だったけど」

「お前ら人をなんだと！」

「えー、何騒いでんのー？」

シャワーを浴びてきた直哉も加わり、結局いつも通り騒がしい朝食だったそう。

「失礼しまーす！」

「失礼します……」

職員室は、朝の会議が終わったばかりらしく、職員が集まっていた。

「1年3組に入るうちの寮生、連れてきましたー」

「ああ、戸塚くんね」

二人に声をかけたのは、初日に挨拶をした、人のよさそうな校長先生だった。

「渡辺くん、ありがとうねえ。えーっと、1年3組は……そうそう、緒方先生、緒方せんせい」

どの職員も、部屋からでようと七緒たちの方へ向ってきたため、誰が「緒方先生」なのかはすぐにわからない。

校長先生は七緒と大して変わらない背だったが、彼が背を向けると思わず後頭部を見てしまった。

真っ白な頭にしては、ちっとも禿げていない。真正面から見ても、髪が生え際が後退している様子はなかった。

「（おいくつなんだろう……って何考えてんの、わたし!）」

噴き出しそうになった七緒は、直哉に肘で小突かれた。

「何変な顔してんだよ、恥ずかしいな」

「いや、校長先生はおいくつなのかしらって。ナオの名前ちゃんと覚えてるのすごいなって」

「緊張してたんじゃないのかよ」

「してるよ! 緊張しすぎで思考回路がショート寸前!」

「ああいたいた、緒方先生」

小声でのやりとりをやめ、七緒は背筋を伸ばす。

校長先生の隣に立ったのは、中年の男性教師だった。

白衣を着ているからには、理科の担当なのだろうか。ぼさぼさの黒髪に、無精ひげ。揚句、足元は履き古した健康サンダルだった。

「（……かっこよい先生では、ない、な）」

「緒方先生、今日からあなたのクラスに入る、戸塚くんですよ」

ああ、という表情で、緒方先生は七緒を見やる。直哉が不思議そうに声をあげた。

「緒方先生、まだナナと会ってなかったの？ 初日に挨拶したんじゃないの？」

「初日って、昨日か一昨日だろ。その頃俺、バスケ部の合宿の引率でいなかったもん」

「…バスケ部の顧問じゃないのに？ 芦川先生でしょ、バスケ部」

「この前賭けで芦川に負けた。パシリとしてついてくことになった」

「……………」

「……………」

直哉も、もちろん七緒も、声が出ない。

いいのか。それを生徒に、しかも校長の目の前で言ってしまった、いいのか。

校長先生は、ふふふと笑った。

「緒方先生は七並べ弱いですからねえ」

——まさか校長先生も参加してたんじゃない、

二人ともそう思ったが、声にはださなかった。

「じゃあ緒方先生、戸塚くんを頼みますよ」

「らじゃ。ほれ、じゃあ戸塚、こっち来い」

校長先生が立ち去ると、緒方先生は自分の机まで七緒を通した。

七緒の後ろについてきた直哉を見て、しっしと手を振ってみせる。

「お前はいいよ、渡辺。ここまでつれてきてくれてサンキュ」

「すっげえ投げやり……ナナ、このおっさんに虐められたら言えよ？」

「虐めるかっつの。さっさと教室戻れ、HR始まっちゃうぞ」

不満げな表情をしつつ、直哉はルームメイトを安心させるように一瞬だけ手を握った。

「じゃあ、昼休み3組に行くから。たくましく生きろよ！」

どんな励ました、と緒方先生は去っていく直哉につっこんだ。

「えーっと、戸塚、七緒…ね」

「はい」

「この前はいなくて悪かったな、俺があんたの担任の緒方だ。担当は理科で…だからなんで俺が文系クラス頼まれたかわかんないんだけど」

ふ、と緒方先生は唇をゆがめた。七緒は一瞬後に、笑ったのだと気がついた。

「渡辺とルームメイト？」

「あ、はい」

「うるさいだろ、あいつ」

「はい…あっ、でもっ、すっごく親切にしてくれてっ。お昼も学校ん中案内してくれるって」

そうか、と言って渡されたのは、プリントだった。

「教室まで運ぶの手伝って」

そう言って、緒方先生は出席簿だけを持って立ちあがった。

「……はいっ」

この人なりに緊張をほぐそうとしてくれたのだとわかって、七緒はこのぼさぼさ頭の中年教師がいつべんに好きになった。

「つていうか、正直、男かよーっていうね」

「え？」

廊下を歩きながら、織田先生は笑った。

「ここ、8年前まで男子校だったから、女子より男子のが圧倒的に多いんだよ、今でも」

「そうなんですか」

「しかも、今年の1年は、ここ5年くらいの間で一番不作。女子生徒、めちやくちや少ない。

だって3組、うちのクラス23人中、女子はたったの5人だぜ。で、さらに男が増えんのかっていう」

七緒は、寮に置いてきたロウに向けて、強く強く、心の中で叫んだ。

———そんなの、聞いてな———いっ！

「へっくしゅ……」

銀杏寮405号室。誰もいないのをいいことに、少年の姿で寛いでいた天使は、くしゃみをひとつしたそう。

閑話

「ナナちゃん、ブレザー似合うな」

雪弥に褒められ、七緒は頭を掻いた。昨日の昼頃、教科書と一緒に制服も届いていたのだ。

朝食を終えた七緒らは、出る時間までのんびりと過ごしていた。朝練のあるテニス部やバスケット部の面々は既にいないので、食堂のテレビで朝の15分ドラマなんて見ていたりした。

「学ランは似合わないそうだけど」

「えーっ、学ラン似合わない人なんていませんよお」
そんな話をしつつ、七緒は赤いネクタイをポケットから取り出す。

「ナオー、ネクタイの結び方わかんないんだけど」

「あいつトイレいったよ」

「戸野橋くん」

「トノは日直らしくてもう出たよ」

「岩平くん…秋川くん…」

「あいつらはまだ部屋じゃね？」

「おっかさん」

「食器洗ってんぞ」

「アオさん」

「アオさん一回部屋戻ったみたいだけど」

「……じゃあ、ゆーきゃん先輩。結び方教えてもらいます?」

「えっらい遠回りしたね! オレ目の前にいるのにね! 消去法あからさますぎんだろ!」

思いきりつつこみながら、雪弥もネクタイを取り出した。

「あれ、先輩のネクタイ緑なんだ」

「2年は緑、3年は青なの。どの学年も、自分トコの色が一番ダサいって言ってる」

そう説明しながら、するするとネクタイを結んでみせる。慣れた手つきだ。

「オレ初等部からここだもん。ま、ネクタイは中等部からだけど」
「そうなんですかーっていうか、無理ですよ。そんなに素早く結ばないで下さい」

しかし、ゆっくりと結び直そうとした雪弥は、首を傾げた。

「れ? わからん」

「はあ?」

「リズムが大事なんだよな、こういうの。あのスピードが癖になってるから……めんどいわあ、もうオレが結んでやるよ。貸せ」

後輩のネクタイをひったくると、その首にかける。七緒は一瞬体を引いた。

「動くなよ」

「首、締めないで下さいね」

「……ナナちゃんはオレに対してちょっと酷くねえ？ はい、ちょっと上向いてー」

「ん」

くい、と上を向くと、がつつり目が合った。

なんとなく気恥ずかしい状態だと気がついて、慌てて目をそらす。

「え、なにその反応。このままキスぐらいしても許される雰囲気？」

「どんな！？ どんな雰囲気醸し出してますか、おれ！ もう、こちよばいのでさっさとして下さい」

いや上目遣いで睨まれても逆効果だわあ、なんて言いながら、七緒のネクタイをいじる。

…が。

「あ、これ無理だわ」

「はああ？」

「だって逆じゃんか、自分の結ぶのと」

「じゃ、後ろ向きます」

え、と雪弥が聞きかえすよりはやく、七緒は背をむけた。

「これなら同じ向きでしょう？」

「や、まあそうなんだけどね。……抱きしめる形になるんだがなあ」
「！！！」

そこまで思い至らなかったらしい七緒は、勢いよく振り向いた。

直哉とは割とスキンシップしてる気もするが、こうして改めて言われると、妙に意識してしまう。

赤面した後輩を見て、雪弥はにやりと笑った。

「やっぱりいいです！ 覚えるんで教えてください！」

「いやいやいや、そんな反応されるとやりたくなる」

雪弥はそう言って、体ごと振り向かれる前に肩を掴み、固定した。とことん天の邪鬼な性質である。

「いじめっこー！」

「そうだよ、知らなかった？」

「うわーん！」

「動くなよ、もやしっ子」

「セクハラーっ」

おっかさんが食堂に戻ると、耳を赤くした七緒と、肩を震わせる雪弥が、微妙な距離で座っていた。

「あ、ナナちゃん、さっき呼んだ？ ネクタイだっけ？」

「おっかさん遅いー！」

「え？　なんで俺怒られてんの？」

既にネクタイを結ばれた七緒の、子供っぽい怒鳴り声が響いたそう
な。

閑話（後書き）

寮を出発する10分くらい前の話。

16、イン・クラスルーム

「戸塚七緒です。よろしくお願いします」

クラスでの自己紹介も特に問題なく終わった。緊張して手やら声やらは震えたが。

しかし、本当に男子ばかりである。5人しかいない女の子とは、上手くやっていきたいものだ。

「じゃあ、戸塚はあそこの席な。手紙配るからなー。保護者にちゃんと渡せよー」

窓際一番後ろという好条件に喜ぶ七緒を、その前の席の少年が振り返った。

多分、直哉と同じくらいの背丈だろうが、彼は直哉より落ち着いた雰囲気だった。

目が合ったので、とりあえず笑ってみる。

「よろしくー。寝ちゃってたら先生から見えないようにガードしてねー」

ふ、と笑った表情が、とても柔らかくて。切れ長の瞳が、細められた。

彼は思ったよりも柔らかい声で、言った。

「初日から寝るつもり？」

「さすがに今日は頑張るよー。ゆくゆくはって話」

「ゆくゆく…」

笑い出したいのをこらえていたらしい彼は、ついに嘔き出した。

「え？ そんなに面白いこと言った？」

「ふはは、いやいや、良い性格してるよ、戸塚」

「どういう意味…」

「ちょっと中村」

唐突に、斜め前、つまり、笑っている彼の隣の女生徒が、彼を小突いた。プリントがまわってきていたらしい。

「手紙きてるよ」

「お、すまん、野村」

サラサラの茶髪をお嬢様結び（戸塚家でそう呼ばれていた、サイドを後ろでひとつにくくる髪型）のその少女は、いかにも「女の子」という感じで、七緒は見とれた。

——お友達になりたい！

「あの、なんて名前？」

ちょっと身を乗り出して聞くと、その子は驚きながらもきちんと自己紹介してくれる。

「えっ、私？ 私は、野村のむら 茜あかね」

「よろしくね。茜ちゃんって呼んでいい？」

「う、うん……」

若干引き気味の茜を不思議に思っていると、中村と呼ばれた男子生徒が、怪訝な表情で問いかけた。

「…戸塚って結構軟派なタイプ？」

「え？」

そこでようやく、普通の男の子は初対面の女の子に、「名前で呼んでいい？」なんて聞かないものだと思い当たる。

昨日から「積極的に友達を作る姿勢」をイメトレしまくっているので、男女の違いまで思い至らなかったのだ。

「え、えーと…いや、ごめん茜ちゃん、いやならいいんだよ？」

「ううん。いやではないけど、ちよつとびっくりした。戸塚のことは、なんて呼んだらいいの？」

「ナナって呼んで。えへへ、ごめんね。女の子にも馴れ馴れしいって、よく言われちゃうんだ」

そういうことにしておこう、と思ったのだが、妙に納得されてしまい、地味に傷ついた。

「で、君は？」

中村に向き直ると、彼は笑顔で答えた。大人っぽい外見の割に、気さくな性格らしい。

「中村 なかむら 栄人 えいと。ちなみに戸塚の右隣は、水城って奴な」

右隣は空っぽだった。休みらしい。

そこで予鈴が鳴り、ざわざわしていたHRはざわざわしたまま終わ

った。

「一時間目、何？」

他の女子の方へ行く茜の背中を眺めながら、七緒は栄人に問いかけた。

「現国だからこのまま。二限も社会だから教室移動はナシ。教科書は持ってんだろ？」

「うん、とりあえず辞書以外全部持ってきた」

そんななんでもない会話に、一人の男子生徒が割り込んできた。

金色に染めた短髪で、足取り軽く。空いていた右隣の机に座って、彼は「やっほー」と言った。

「あ、戸塚。こいつ明石^{あかし}圭介^{けいすけ}。クラス一騒がしい男」

「…それって誉めてる？」

「そんでもってクラス一馬鹿な男」

なんだよそれひでー！ と栄人に噛みつく圭介をみて、中学にもこういう奴がいたなあと目を細める。

「（馬鹿で、ムードメイカーで、世話好きな男の子。ナオも、どちらかといえばこういう感じだろうな）」

「もうハチなんか知らん！ 戸塚あ、こいつ本当意地悪だから無視でいいよ、無視で」

「ハチ？」

圭介が栄人をそう呼ぶのを聞いて、七緒は首を傾げた。

「エイトだから、英語でハチだろ」

「なにそれかわい。おれもハチって呼ぶ！」

「なんでだよ！ ハチなんて読んでの圭介だけだぞ！？」

犬っぽくてやだ、と叫ぶ栄人を、ちろりと上目遣いで見やる。

「だめ？ いやなら中村って呼ぶけど…」

「えっ、いや、だめではないけど」

しょんぼりと目を伏せる七緒に、なんとなく女子を泣かせてしまったような罪悪感を感じ、思わずそうなだめる。

と、七緒はにっこり笑って「じゃ、ハチ」と言った。

「なんかハチ、戸塚に甘くねえ？ 俺のときはものすごい怒ったじゃないよ」

「お前には怒っても無駄だとわかったがな」

「えっとじゃあ圭介？ なんか用だった？」

七緒が軌道修正すると、ようやく圭介は自分が何をしにきたか思い出したらしい。

「あーえっと、もし良ければ、昼休みに校内案内とかするけど？
ここ、迷路みたいじゃね？」

予想通りの世話好きさんだ、と思いつつ、謹んで辞退する。

「ありがとう、嬉しいんだけどさ、校内案内はルームメイトがして

くれるって」

「ルームメイト？ …え、てことはお前、寮生なんだ！」

「へえー」

「うん、だから一応転校してきたのは三日前なの」

圭介も栄都も驚いたようで、寮について色々聞いてきた。

二人とも高校からの受験組らしく、寮に興味があったらしい。

そうこうしている間に本鈴が鳴り、圭介は自分の席に戻ろうとした。

「あっ」

「え、何？」

唐突に七緒が声をあげたので、圭介は振り返り、栄人も声の主を見る。

七緒は興奮気味の口調で、言った。

「今気づいた。おれがナナで、中村がハチでしょ。78（ナナハチ）だ！」

大真面目な顔で新発見を語る転校生に、圭介と栄人は顔を見合わせた。

「……………ぶっ」

「……………ふっ」

ほとんど同時に嘔き出すと、圭介は豪快に、栄人は肩を震わせて笑い出す。

「えっ？ なに？ なにがおかしいの？」

「い、いや、なんでもない。ぶはっ、もう、戸塚…じゃない、ナナ、
すげえいい性格してる！」

「ボケだ！ こいつきつとボケだー！」

「えー！ ちょっと二人とも、なんなの！」

授業のため入ってきた教師が、「うるさい！」と怒鳴ったが、しばらく2人の笑いの発作は収まらなかった。

17、やきもち

「ナナーっ！」

お昼休みになると、早速直哉が飛んできた。

「ナオ！ 会いたかった！」

「ナナーっ……ってなんでやねん！」

がし、と抱き合ってから、直哉は思い切り突っ込む。

そうしてから、クラス中の注目を集めていることに気が付き、赤面して七緒から離れた。

そうだった、ここは寮ではないのだ。

「馬鹿ナナっ！ 変な芝居さすな！」

「えー、ナオも思いつ切りノリツツコミしたじゃない！」

理不尽な、と眉間に皺を寄せるルームメイトは無視し、直哉は辺りを見渡す。

「で、おい、ナナ。友達は出来たか。寂しくなかったか」

「保護者か！」

七緒につっこまれつつも、目ざとく、近くにいた圭介と栄人に目をとめた。二人して、七緒たちのハイテンションなやりとりを目を丸くしている。

彼らがそうか、と目線で問いかけてくる直哉に、七緒はふわりと笑ってみせる。

「うん。全然、寂しくなかったよ！」

そう言われるとこっちが寂しいけれど、友達が出来たのはいいことだ、と直哉も笑顔になった。

七緒が見かけによらず社交的なのを、出会った初日には気付いていた。

「（警戒しないというか、意外と大胆だし、かと思えばぼーっとしてるし。みんなとすぐ打ち解けてたな）」

けれど、と思う。

——ナナと一番仲良いの、俺だもんね

その、妙な自信が、直哉に余裕を持たせていた。

「えーと、ナナ。そいつがさっき言ってたルームメイト？」

栄人に比べて早く立ち直った圭介が、上手く話に入ってきた。

「うん。あのね、えっとね、この子はルームメイトのナオ！ ……」

あれ、苗字なんだっけ」

「おいこら！ 一緒に暮らして三日目だぞ！ しかもナオってあだ名だから！」

信じらんねえと言いたげな表情の直哉は、仕方なく自己紹介をした。

「俺は5組の渡辺 直哉」

「オレは明石 圭介。こっちは中村 栄人。ナナとお友達になりま

したー」

軽い調子で圭介が返すと、お互い似た雰囲気を感じたのか、きゅらきゅらと盛り上がり始めた。

栄人と七緒は、顔を見合わせる。

「…ナナ、もし、そのまま食堂で食べるのなら、俺もついて行っていく？」

「いいの？ ナオは今日中に校舎内全部回るって言ってたから、時間かかるけど」

「いいよ、食べるのはいいから。じゃあそうと決まれば行こうぜ」

「うん！ ハチ優しいー」

教室をでたところで、ようやく他の二人も追い付いてきた。

「勝手に行くなよ、ナナ！」

「ハチお前っ、なんで行くの！」

「は？ 食堂行くから一緒にいくんだよ。圭介、お前は同じ部活の奴らと、弁当だろう？」

きょとん、と素で返してくる栄人に、ぐっと詰まってから、圭介は踵を返した。

「すぐ弁当持って追い付くからな！ 顔を洗って待ってろ！」

「…首、だよねえ」

七緒が呆れた風に呟いたが、栄人は「言ってやるな」とその肩に手を置いたのだった。

「ここが視聴覚室。で、あっちが第3体育館。学年集会は大体この体育館を使うな」

「へえー。体育館たくさんあるんだね」

「ああ、うちは運動部が結構ハバきかせてるからな。装備も部室もすごいし…。」

あ、ここは第二音楽室。部活と選択でしか使わないけど、俺らの組の掃除担当区域だから憶えといた方がいいぞ」

「うん、わかった。迷路みたいだねえ」

「誰でも最初はそう思うさ。あっちを増築、こっちを増築の繰り返しだったらしいぜ。」

まあ心配なくとも、慣れるまでは俺についてきてればいいよ」

「そうする。助かるよ、ハチ」

「いいって。ナナハチのよしみさ」

なんて優しい子！ と七緒が栄人と腕を絡ませるのを見て、後ろにいた直哉は目を細めた。

「…なんか…あいつばかりが説明してる気がするう…」

「そうは言っても、ナオ君や。君よりハチの説明のが滑らかだから致し方あるまい」

フォローにならないフォローをする圭介に、唇を尖らせて見せる。ほんの数分前に初めて喋った割に、二人は打ち解けていた。そして同じくらい、七緒と栄人も打ち解けていたのだ。

「俺が！俺が案内するって約束してたのにさ！中村め、俺もハチって呼んでやる」

「男の嫉妬は見苦しいぜ、ナオ」

「別に、嫉妬じゃねーよ……だってあいつら、今日会ったんだろ。」

なのに、三日前に会った俺より仲良さげなんだもん。せつかく弟分ができたのに」

それを嫉妬というんだ、と圭介は苦笑した。

「：ナナがさ、お前のことなんて言ってたか教えてやろうか」

「え？ ああ、さっきなんか俺のこと言ってたって言ったよな。何？」

「可愛い弟ができたみたいだ、って、すごく、嬉しそうに」

圭介はもちろん、「お前のがナナと仲良いよ、おんなじこと思いつてんじゃない」的な意味で言ったのだが、直哉はそうはとらなかつたらしい。

こげ茶色の瞳が、まん丸に見開く。

七緒に弟分ととられたことが、なぜだか、妙にむかついた。

——だって、俺のが、しっかりしてるじゃんか！

「てめー、俺が兄貴に決まってんだろー！」

「わっ、何、いきなり」

背後から首を絞めるように抱きつかれ、七緒は赤面して抗う。

が、例え男になろうとも、三年間帰宅部だった七緒と、陸上部で鍛えていた直哉では、力も体力も段違いである。

「ううつ、ハチい、ナオがいじめる！」

七緒の悲鳴に、直哉は力を緩めた。

栄人に助けを求めたのが、なんだかすごく、面白くない。

「ほら、早く行こうぜ」

助けようとはしていたらしいが、七緒が解放されるのを見るや否や、栄人は背を向けて進み始めた。

跳ねるようにして栄人の隣まで走った七緒は、ちらりと直哉を振り向く。

「（なんだったんだろう、兄貴とかなんとか…）」

わかっていない七緒だった。

「……機嫌なおしなさいな、ナオくん」

校舎案内の間中、むっつりしていた直哉（結局説明は全て栄人に任せた）は、圭介の呆れた表情をみて、さらにむっつりした。

席取りを任せられた二人は騒がしい食堂の端っこで、大人しく座っている。

「弟？ 俺が？ ナナの方が子供っぽいじゃなかよ」

「いや、この数十分間は確かにナオのがガキ臭かった。そういうとこにこだわってんのも子供。」

それにオレ、そーゆー意味で言ったんじゃないのよ？ ナナ、お前
のこと頼りにしてると思うって意味で」

「……寮の勝手を教えてやったのも、荷物整理手伝ったのも、俺だ
もん。頼りにしてるんだったら、普通、兄ちゃんみたいだっと思う
だろ」

「それはルームメイトとして当たり前の親切じゃねえか？
家族ぐらい親しい、みたいな意味でさー、弟って言ったんじゃない

の？ ナオ、割と子供っぽいしー」

「うう……さてはお前俺のこと嫌いか！」

「何騒いでるの」

ぽこんと頭にお盆をあてられ、直哉はゆっくりと振り向いた。
七緒の笑顔には、なんの含みもない。

「はい、ナオの親子丼。あんまり騒いじゃだめだよ、他の人にも迷惑かかるからね」

「……………」

無言で昼食を受け取る。これじゃ、こっちが弟分だと思われても仕方ない。

圭介の、可哀そうなものをみるかのような視線が痛い。
隣に置かれたトレイを見ると、サンドイッチしか乗っていなかった。

「ナナ、それだけか？　だめだぞ、成長期なんだから、もつとがつり食わなきゃ」

ここぞとばかりに兄貴面してみせるが、あっさり

「うーん、おれ、朝ちゃんと食べるタイプだから、昼は多くなくてすむんだよね」

と返された。素でそんなふうに言われてしまうと、言い返せない。
言い訳じみた表情で圭介を見やるが、

「ほらよ、圭介。餌だ」

「ハチひでえ！　普通に渡せよ」

あっちはあっちで、なんだか可哀そうな会話だったので、大人しく「いただきます」と手を合わせた。

予鈴が鳴り、渡り廊下で直哉と別れる。

「ありがとね、ナオ」

うん、と頷いた彼の顔が、どこか寂しげだったので、七緒は首を傾げた。

「なんかナオ元気なかったな」

「そうなのか？ 充分明るい奴だと思うけど」

きよんとする栄人を見て、圭介は溜息をつく。

「ハチってさあ、しっかり者だけど人の気持ちに疎いっつーかさあ」

「はあ？ どの口がそんなことを言うんだ」

「ハチは優しいよー」

「…あれっ、いつのまにか俺アウェイなんだけど……」

18、保健室での出会い

一日が、終わった。

「（わあー、転校初日クリアーッ！ 友達できた！ いける！
これはいける！）」

七緒は、勢いよく保健室の扉に手をかけた。ここまで迷わずに来られたことも、彼に自信をつけている。

今日の学校での失敗と言えば、6限目の終わりに紙で指を切ったことくらいだった。その治療のために、彼は放課後にわざわざここまで来たのだ。

「（…ああ、懐かしい）」

扉を開けた途端思わずそう感じてしまう程、その匂いは中学と似通っていた。

「（先生…は、いないみたいだ）」

返事がないと見てとると、七緒は一番近い棚を覗き込む。

困ったことに絆創膏は空箱しかなく、このまま我慢するしかないという事になった。

「（気になるんだよねあ、地味に痛いし…あ、消毒だけでもしとこ）」

「あらっ」

消毒液に手を伸ばしたとき、背後から声をかけられた。
振り向くと、白衣を着た白髪頭の女性が立っている。

「あらあら、怪我しちゃった？ 見ない顔ねえ、何年生？」

「あ、おれ、転校してきたばっかで：一年の戸塚七緒です」

「そうなの。私は保健室の大場おおは梢しずえ。みんなからはおばあちゃん先生なんて呼ばれてるのよー」

大場先生は、のんびりした口調と反対に、ものすごい早さで七緒の手をとり、消毒をした。

「あ、絆創膏なくて：」

「あらー、切らしちゃってたのね。まってね、先生のポッケに入ってるから」

そう言って、白衣のポケットから絆創膏を取り出す。

そういえば、消毒の際に使ったクシャクシャのティッシュも、そのポケットから出てきた。

「こういう、ちいちゃい怪我って、何故だか気にしだすと止まらないのよねえ、わかるわー。あら、七緒くん、お荷物は？」

保健室は、一階にある。クラス教室は二階より上なので、もう放課後なのに、何故ついでに荷物を持って来なかったのかという意味だ。

「あ、おれ、一回我慢して寮に帰ったんです。絆創膏くらい誰か持ってると思ったんですけど、どうやら全滅で」

運動部が多い場所だから絆創膏くらい当然あると思っていたのだが、

逆に、そういうものは部活の救急箱で事足りてしまいうらしい。湿布は大量にあったが。
頼みの綱のおっかさんにも、困ったように「セロテープじゃだめ？」と苦笑いされたのだ。

「男所帯だからって、絆創膏のひとつもないのは問題ですよね」
「ふふっ、そうね。でもしっかり者の七緒くんが来てくれたから安心だわ。近いうちに寮用の救急箱作ってあげる」

「ありがとうございます！　じゃあ、おれ取りに来ますね！」
「保管も頼みたいわね。賢ちゃんはしっかりしてるけど、おっちゃんこちよいだから」

どうやら彼女は、おっかさんの学生時代も知っているらしい。まあ、たかが7、8年の差だから、当たり前かもしれない。

「じゃ、失礼します」

「あ、待って」

しばらく談笑した後、礼を言って出て行こうとすると、大場先生は慌てて七緒を止めた。

「いけない、忘れるところだった。」

七緒くん、寮生なのよね。今、寮の子が眠っているのだけど、一緒に連れ帰ってくれないかしら」

「え？」

言われてみれば、3つあるらしいベッドの内、ひとつがカーテンで仕切られている。

「起こしてくるわ」

「あ、わたし…じゃない、おれ、そのひとの荷物取ってきます。何

年の誰ですか？」

「一年生のシュタイネルくんよ。でも大丈夫、荷物ならクラスの子が届けてくれたから」

しゅたいねる？ と首を傾げた七緒は、カーテンが開けられた瞬間、あつと声をあげた。

そこで眠っていたのは、紛れもなく、一昨日風呂場で見かけた、あの男の子だった。

「シュタイネルくん。起きて、もう放課後よ」

縁があるのかなんなのか、と思いつつなかなか起きない少年の整った顔を見つめる。

「（長いことおばあちゃん先生と話してたのに。そんなに寝不足なのかな）」

「シュタイネルくん、」

ゆっくりと、長い睫が持ち上がった。

現れたのは、深い緑色。

見とれていたら、ばちっと目があった。途端に、驚いたように見開かれる。

「……先生。なんで、こいつが」

どうやら七緒を見て完全に覚醒したらしく、不機嫌な声で少年は言った。

彼に、「こいつ」呼ばわりされる覚えはない。一度しか会ったことがないし、それさえ一瞬だった。

——わたし、この子に嫌われてんの？　なんで？

「同じ寮の子でしょう？　あなたを連れ帰ってもらおうと思って、とっくに放課後よ」

「いないよっ、そんなの」

シュタイネルは噛みつくように言う。大場先生は、それにも全く動じない。

「だめ。3時間目からずっと寝てたあなたには、そんな我が儘は言わせないわ」

「3時間目からって…寝不足なの？」

呟いた七緒を睨んではみるが、すぐにそれは驚かれて当然だと気づいた。

「（4時間近く寝てたのか…：自分でも驚くけど、4時間放置してたお婆あちゃん先生って…）」

七緒もほぼ同じように考えていて、自然と視線が大場先生に集まる。大場先生はそれをもろともせず、上品に笑った。

「あんまりぐっすり寝てたからね、気がひけて。ほら、放課後だから起きなさいな」

「…はい」

頷いて、シュタイネルは立ち上がるが、ふらふらと足取りが危なっ

かしい。

「わ、危ない。貧血？」

柱にぶつかりそうになった彼の腕を七緒が支えると、睨まれた。

「おんぶしていいとか？」

「いらねえ、一人で帰れる」

わあ即答、と七緒がダメージを負う。

しかし、どうにも彼がふらふらふらし続けるので、大場先生が見かねて言った。

「シュタイネルくん、ナナちゃんに支えてもらいなさい」

「でも俺、」

「支えてもらいなさい」

大場先生は、強い。

いかにもしぶしぶ、といった風に、シュタイネルは七緒から差し出された手を取る。

彼の手は、細くて、冷たかった。

「じゃあおばあちゃん先生、さようなら」

「…ありがとうございます…」

「さようならー、ちゃあんとシュタイネルくんを見張っててねー」

シュタイネルは保健室を出ると、ずんずん先に歩き出した。

「あつ、ちょっと、だめだよ。もう少しゆっくり歩こう？」

「うるせーな。もういい、一人で行ける」

前に行くシュタイネルの腕を、七緒は強めに掴む。

ぎろりと睨まれたが、七緒は怯まずに言った。

「なあ。寮の部屋までは、絶対おれと一緒にいく。だからさ、どうせなら支えたっていいでしょ？」

貧血かなんか知らんけど、怖いんだよ。そういうのが大病のもとなんだよ」

真剣な顔でまくしたてる少年に根負けして、シュタイネルは腕の力を抜いた。

七緒はほっと息をつくと彼の腕を放す。

「えっとね、おれ、戸塚七緒っていうんだ。405に入ったの」

「……シュタイネル。404」

お互い、名前と部屋番号を言い合う。

一昨日の夕食時にわかったことだが、寮生同士の自己紹介では、部屋番号を言うのが礼儀らしい。

「404? じゃ、戸野橋くんと同じなんだ。てかお隣さんじゃなか。仲良くしてね」

笑いかけるも、無視。ものすごく冷めた目で睨まれる。

「……喋れない程、体調が悪いつて解釈していい?」

「ご勝手に……」

しょぼん、とした七緒に、ふらりとシュタイネルが寄りかかった。

「大丈夫？ やっぱりシュタイネルくん、貧血だよ。顔青い……」
「るさい……」

言い返すシュタイネルの声には、力がない。
見かねた七緒は、彼の前にしゃがむと、背中を向けた。

「……なんの真似だ」
「おんぶだよ、おんぶ。シュタイネルくん、寮の部屋まで、おれの背中ね」

シュタイネルは七緒よりもいくらか小柄だ。ゆっくり行けばなんとかなるだろう。
しかし、シュタイネルはおぶわれるつもりはさらさらないようだった。

「ふざけんな！ もうあっち行けよ、俺一人で帰る」
「心配なんだよ。おれがおぶった方が絶対いい」
「心配なんかしてないくせに！」

言ってから、シュタイネルははっとなった。

この言葉は、目の前の少年に言いたかった言葉ではない。

しかしひっこみもつかず、驚いた表情の七緒を睨みつけた。

「……」
「……わかった」

諦めたように七緒がそう言ったので、シュタイネルは、一瞬油断した。

「うわっ」

次の瞬間、さりげない手つきで足元を掬われて、シュタイネルは情けない悲鳴をあげる。

ぽすんと七緒の胸に収まった少年は啞然とつつも、今の状態は…と考えた。

俗に言う、お姫様抱っこである。

「よっし、これでオツケー」

「オツケーじゃねえ！」

自分が同級生にお姫様抱っこされている図は、さぞかし間抜けだろう。

ずんずん進み始めた七緒に、シュタイネルは慌てた。抵抗しようにも力が入らない。

今いる廊下は人がいないが、角を曲がれば昇降口に繋がる廊下にある。

「（こんな格好人に見られたら…!）」

戸塚！ おろせ！ おろしてくれ！」

半ば懇願するように叫ぶと、七緒は笑顔で問いかけてきた。

「おんぶと、これ。どっちが良い？」

18、保健室での出会い（後書き）

七緒がだんだん、黒いというか、男らしくなっていっている気がします…

19、食べない子

「しにたい」

「何言ってるの、おんぶくらいで」

404号室の前まで来て、ようやくシュタイネルをおろした七緒は、ケロッとした顔で言った。

一方シュタイネルは、体調とは別の意味で顔色が悪い。

寮までの道のりの間、どれだけの人間に自分の屈辱的な運送シーンを見られたのかと、がっくり肩を落としていた。

「いやあ、でも、シュタイネルくんがおんぶが良いって言うてくれて良かったよ。抱っこでここまで運ぶなんて出来ない自信がある」

「（この野郎…）」

答えのわかりきった二択で脅したくせに、と睨みつける。

「あっ、待って」

鍵を開け、部屋へ素早く滑り込むシュタイネルに、七緒は声をかけた。

「今日の夕飯、どうする？」

「は？」

「おっかさんが、今日はカレーだって言ってたの。でも、シュタイネルくんが体調悪いなら、みんなとは別に軽いもの作ろうかなって」

眉根を寄せるシュタイネルを見て、七緒は食事作りを手伝っているのだと説明した。

明らかに「物好きな」という目線をやられたが、もう一度、「どうする?」と答えを促した。

「……いい。つか、夕飯自体要らねー」
「えっ?」

一瞬きよとした七緒は、心配そうにシュタイネルの緑の瞳を覗き込む。

「そんなに、体調悪いの? 大丈夫?」
「…ああ。だから、放っておいてくれ」

鼻先でドアを閉められ、七緒は二・三度まばたきをした。

「おっかさあーん」
「どうしたの、ナナちゃん。眉間にシワ寄せて」

404号室の、というと、おっかさんは「ああ」という顔をした。

「シュタイネルだろ。会ったんだ?」
「保健室から連れて来たんですよ。ねえおっかさん、シュタイネルくんてなんかの病気?」

——この前風呂場で会って……すごく痩せてるように見えたんだけど」

3日前、風呂場で彼を見かけたとき、日本人離れた顔立ちと、彼

の態度に驚いた。

——が、彼の体の細さには、それ以上に驚かされのだ。

「（…だって、声をかけるのを一瞬躊躇っちゃったもの）」

普通言いくいであろうことを、さらりと問いかけてきた七緒に、おっかさんは苦笑してみせる。

「病気ではない——少なくとも、体のね」

「じゃあ…心？」

多分、とおっかさんは頷いた。

「俺も、詳しくあの子のことを知ってるわけじゃない。でも、あの子、今まで一度も、俺の出す料理を食べきったことがないんだ。いつも、半分以上残すか、今回みたく「いらない」と言うか」

「拒食症…とか？」

少年の口から出た病名に、おっかさんは驚いたように手をとめた。皮をむきかけの玉ねぎが、ころんとまな板に転がる。

「よく知ってるね、そんな病名」

「…結構、有名じゃないですか」

七緒は顔をしかめた。

奈々子だったころ。

ひとつ下の学年に、拒食症の女生徒がいたのだ。

更衣室で鉢合わせしたときにみた身体は、今でもはっきり思い出せ

る。

「（だから知ってただけ…）」

「…でも拒食症、とは違うかな」

おっかさんの声に、七緒は顔を上げた。

「少しなら食べるし、吐かないし。ただ、いつも「食欲がない」と言うんだよ。まだ他の寮生ともあまり喋ってないみたいだし」

心配そうに言うおっかさんを見て、七緒は胸が痛んだ。

作った料理を食べてもらえないことが悲しいと知っているだけに、妙におっかさん側に感情移入してしまう。

妙な使命感が芽生え、なにか決意したような口調で、七緒は言った。

「……とりあえずわたし、お粥作って持っていてみます」

「わたし？」

オウム返しされて、ようやく失言に気づく。

「あっ、いや、わ…渡しに行きますね！ いいですかいいですよね
じゃあそっちの皮むきお手伝いしますっ」

「う、うん」

危なかった、と胸を撫でおろす七緒だった。

「ただいまーっ、飯ーっ！」

陸上部員が帰ってきたのは、7時すぎだった。
なんとなく汗臭く泥臭い、陸部の5人を出迎える七緒。

「おかえりなさい」

「ナナ、聞いてよナオがさあ」

「今日カレー？ めっちゃ匂いする」

「辛口？ 辛口？」

「ナナ、オレ風呂先に入ってくる」

すっかりナナ呼びが定着した七緒は、それぞれに声をかけられて照れくさそうにしていた。

その外側で、彼に声をかけられずにいる少年が一人。

「（もうすっかり、みんなとも馴染んでるし…）」

寂しいのだ、と認めるには、直哉は幼すぎた。

「ナオ、おかえり」

七緒は直哉にも同じように声をかけてきた。

昼間の微妙な雰囲気、完全に忘れているらしい。

「（当然といえば当然か、俺がひとりで拗ねてただけだし）」

「ナオ、あのさ、お隣さんの…」

「ごめん、先に飯食わせて」

つい、と七緒の横を通り過ぎ、彼の視線を感じながら、階段をあがる。

ちよっと嫌な態度をとってしまったな、と後悔した。

直哉の様子が変だ。

カレーをよそいながら、七緒は思った。

「（ナオがよそよそしい……っていうか、今まで頼りっきりだったから……そう思うのかな）」

もうここへ来て3日だ。転校初日も問題なく終えられた。

「（……ナオにくっついてばかりじゃいけないよね）」

ナオは、弟の孝明に似ている。

どこかと問われれば困ってしまうけれど、なんとなく。

しいていえば、明るく振る舞ってくれる気遣い方が似ている。

だから、頼ってしまおうし、姉のような気分にもなってしまうのだ。

「ナナちゃん、おかわりいい？」

雪弥の声に、七緒は顔をあげた。

「はい」

「何考えてたか当ててみようか。ナオのことだろ」

にやにや顔で問いかけられて、頷く。

「よくわかりましたね、そうですよ。はい、このくらいで良いですか？」

カレーライスの盛られた自分の皿を受け取り、雪弥は唇を尖らせた。

「あつさり肯定するところが可愛くない…」

「は？　なんで？　だって、わた…おれ、さっきからずっとナオのこと考えてましたよ？」

「だから、それを言い当てられちゃって恥じらうとかさ…いや、いい。なんでもない」

どうして恥じらうの？　　と言いだしそうな後輩の表情に、雪弥は葵を振り返った。

「どうしようアオさん、ナナは意外にからかっても楽しくない」

「…黙って食えよ」

雪弥をたしなめはしたものの、なんのこっちゃ、と首を傾げる七緒を見て、葵も「確かにな」と思った。

「（ナナちゃんは正直ってか素直すぎるんだよな。例えばナオなら、からかわれれば嘔みついてくるけれど）」

ごちそうさまでした、と七緒が席を立ったのを感じ、葵は顔をあげた。

「え？　もう終わり？」

「はい。おれ、ちょっとシュタイネルくんとこいつてきます」

シュタイネルう？　と二人は同時に声をあげ、離れた場所に座っていた戸野橋も反応する。

「ナナ、あいつがなんかした？」

「ああそうか、戸野橋くんは同室だったっけ。今日保健室で会ってさ、食欲ないっていうから。お粥か、うどんでも持っていこうかな

って」

「とことん世話焼きな、お前」

雪弥の、呆れたような感心したような言葉に顔をしかめてから、七緒は台所へ消えた。

「……食うかなあ、あいつ。いつつも「食欲ない」って言うし。部活どうしてんのかな……。俺、まだあんまし仲良くないんすよね」

戸野橋は、同室者のシュタイネルと上手くいっていないわけではなかった。

お互い、相手のプライバシーには踏み込まない。そういう意味では、この一カ月、シュタイネルとの関係は良好であった。

2人ともあまりお喋りな方ではないし、騒がしいよりは静かな方を好むので、結果、会話も少ない。

「トノは事なかれ主義だからな。ま、後で様子見てみれば」

「はい、そーしまっす」

戸野橋は返事をする、カレーをかきこんだ。

20、ばばくさい男子高校生

ノックの音に、シュタイネルは体を起こした。ウォークマンを一度切って、ドアを開ける。

「やつほー、シュタイネルくん」

ルームメイトかと思ったが、そこにいたのは先ほどのおせっかい転入生だった。

反射的にドアを閉める。

「ちよっ!?! え? なんで閉めるの? 開けてよ。両手塞がってるんだよー」

捨てられた子犬のような声と、足でコンコンとノックを続けられ、シュタイネルはため息をついた。

「……なんだよ、戸塚」

渋々ドアを開けると、するりと彼は部屋へ侵入してくる。またドアを閉められちゃかなわない、とばかりの素早い動きに、諦めたシュタイネルは道をあけた。

「さっき言ったでしょう。ご飯持ってきた、お粥ね」

お盆にのせられた、湯気をあげる皿を見て、そういえばと思います。儀礼的なものだろうと思っていたのだ。

「いらないうって言っただろ」

「一口でもいいよ。ちよつとは食べないと、また倒れるよ」

そしてまたお姫様抱っこで運ばれるよ、と笑顔で脅され、仕方なく座り、れんげを手を取った。

「食えばいいんだろ、食えば」

「そうだよ。あ、味付けはしてないんだ、好みがわからなかったから。これ、お塩。好きなだけかけて。かけすぎはだめだよ。梅干しもあるからね」

とろそうに見えて、意外と手際の良い少年である。

シュタイネルは胡散臭げにお粥を見つめてから、塩を一振りかけ、れんげですくった。

ふうふうと息を吹きかけて冷ましていたのだが、あまりに向かいに座る少年の視線を感じるので、顔をあげる。

「……食べにくいよ、そんなに睨まれると」

「えっ、あ、睨んでるつもりはなかったの。その、お粥が口にあうかなって」

あたふたと七緒が慌てている間に、すっかり冷めた一口分を、口に入れた。

「どうお？ ゆるすぎ？ 水の量多かったかな？」

どうやら本当に食事の感想を聞きたいらしい彼は、身を乗り出した。答えようにも、シュタイネルは今までお粥を食べたことがなかったので、過去の記憶と比較するわけにもいかない。雑炊みたいなものだった。

それに、美味しいかと問われるのが、彼はとても苦手だった。

「……うーん、普通」

「良かった！ 前に作ったときは「固い！」って文句言われちゃって、今回は水多めにしてみたんだ」

普通、という評価に安心した七緒は、ようやく部屋を見渡す余裕ができた。

3日前の405号室（直哉の部屋）を鮮明に覚えていたせいか、夕食前にちらりと見たこの部屋は、かなり綺麗な方だと思っていた。が、落ち着いて見渡せば、脱いだものが脱ぎっぱなしだったり、充電器や本、文房具が、ぼろぼろと点在していた。

「（戸野橋くんもシュタイネルくんも、どっちかっていうと神経質に見えるけど…やっぱりあんま綺麗ではないなあ。ナオよりはだいぶマシだけど）」

直哉の場合、掃除嫌いのうえ整理整頓が出来ないから性質が悪い。この部屋の住人は、ある程度整理はしているが、ところどころ埃がたまっていることから、掃除自体はこまめにやる方ではないらしいことが見て取れた。

そういう七緒自身も、綺麗好きというわけではない。祖母がそういう部分に厳しかったから、目に付いてしまうのだ。

一方シュタイネルも、「普通」という評価に満足する七緒に驚いていた。

——こういう場合、「美味しい」って言わなきゃいけないんじゃないか…？

お粥をすすりながら、七緒を盗み見る。

本当に、あの評価に気分を害した様子もなく、ただ興味津津に部屋を眺めまわしている。

変な奴だ、と思って、それから、自分がお粥を食べ終わっていることに気がついた。

何も考えなければ、と思う。

「（こうして、他のこととか考えたり、何も考えないでいられれば、オレだって食べられるんだ）」

しかし、普段はそれが出来ない。

食事を作ってくれているおっかさんには、悪いとは思っている。

けれど、何か食べていると、色々嫌な思い出が浮かぶのだ。

気付いた時には、食事すること自体が、ストレスだと感じるようになってしまっていた。

七緒に聞こえないように、少年は、ため息をついた。

「おい、あんまりじろじろ見るなよ。失礼な奴」

「ああ、ごめん…って、もう食べ終わったの？」

ずっと目の前に差し出された皿が空なのに気付き、七緒は驚いて声をあげる。

食欲がないと言っていたのだから、残すだろうと思っていたのだ。

それをこんなにはやく、しかも完食だなんて。

「食欲ないって言ってたから、少なめにもしてたけど…食堂行く？
まだカレー残ってるはずだけど」

「いい。食ってみたら案外食えたけど、もういらない」

「ちゃあんと噛んだの？ 早食いは体に悪いんだよ？」

「…あんた、ばあさんみたいな奴だな…コレ、そんなに念入りに噛むものじゃないだろう」

仮にも15歳の乙女にばあさんって！ とつつこもうとして、今は「乙女」ではないことを思い出す。

——…いや、それにしたって、高1男子に「ばあさんみたい」ってどういうことだ。

七緒のひきつった顔には気付かず、シュタイネルはベッドに戻り寝転がった。

「もういいだろ、寝るから」

「食べてすぐ寝ると牛になるよ」

「……」

思わず、体を起こして七緒を見つめる。

——ばばくさい。こんなにはばくさい男子高校生、初めて見た。

シュタイネルの視線が良い意味ではないことに気付いたのか、七緒は目を細めた。

「…シュタイネルくんさあ、おれのことどう思ってる？ 年寄りくさいとかお節介とか思ってるでしょ」

「…超当たってる」

「やっぱりね！ 目が雄弁に語っているもの！！」

怒るどころか、笑いだした七緒に背を向け、一応の寝る体勢をとる。が、彼は部屋から出て行こうとはしなかった。

「そうそう、シュタイネル…って、苗字？ 名前？ ……あれ、寝るの？」

「寝るっつつってんじゃん…」

「歯磨きなよ。で、名前なの？」

しつこい奴だと思った。同時に、ここまでしつこいからこそその、お節介なのだろうなあと妙に納得してしまう。

「名字だよ」

「へえー。名前は？」

本当にしつこいな、と言いそうになるのを我慢する。名乗らずに無視しようかとも考えるが、いつのまにか七緒はベッドの横に座り、黙ったままのシュタイネルをじっと見つめていた。

「……ラファエル」

「え？ ラ…何？」

「何度も言わすなよ。ラ・ファ・エ・ル」

「……らーふぁーえーりゅ」

復唱する七緒の発音が、明らかにひらがなだったので、ラファエルは不覚にも噴き出しそうになった。しかも、言えてない。

「りゅ、ってなんだよ。発音しにくい名前じゃねーだろ」

「ごめん…ラファ、エル。聞いたことある気がする、その名前」

七緒がそう言った途端、ラファエルの表情が曇った。

「…天使だろう」

「ああ、そうそう、4大天使…だっけ。ラファエル、ガブリエル、ウリエル…なんだっけ」

「ミカエル。一番有名じゃないか？」

「そうそう、ミカエル。ふふふ、ラファエル…癒しの天使からとつたんだ」

「……………もう、帰れよ」

ふいと顔をそむけられ、七緒は笑った。

「ふふふ」

「っ、なんで笑う！」

起き上がりかけたラファエルを押しとどめ、七緒はお盆を持ち立ちあがる。

「ごめん、拗ね方が可愛かったの。じゃあおやすみ、ラファエルくん」

言いたいことだけ言うと、彼はさっさと出て行ってしまった。頼んでもいないのに、部屋の明かりをおとして。

「……………何あいつ…」

そう呟いた瞬間にドアが開いたので、七緒がまた戻ってきたのかと心臓が跳ねあがった。

「飯、全部食えたんだって？ 良かったな」

しかし、明かりをつけてそう言ったのは、同室の戸野橋だった。幾分かほっとして、眉間にしわを寄せてみせる。

「なんなの、あいつ。ばばくさい」

戸野橋は、帰ってきてそのままにしておいた荷物を片づけながら苦笑した。

「女々しいっていうか…男っぽくないっていうか、なんか色々思ってたんだけど…ばばくさいが一番ナナに似合うな。

あいつそこですれ違ったとき、めっちゃくちゃ笑ってたけど。なんか話してたん？」

「……何も話してねえ！」

ふいと背を向けたラファエルを見て、この気難しい同室者相手に、七緒はどんな話をしたのだろうなあと思う戸野橋だった。

閑話

「どうだったー」

食堂に戻ると、おっかさんの他にも、葵と雪弥がまだ残っていた。

「見て下さい、完食ですー」

綺麗になった茶碗を見せる七緒は、そのまま食卓についた。

「どう？ って聞いたら「普通」って言ってもらいました。あと、お粥初めて食べるーみたいなのもちょっと言っていました。あと、人が食ってる時に喋んなってのと、人の部屋じろじろ見るなーって」
嬉しそうに報告する七緒。なんだか周りに花が散って見えるなあ、と雪弥は苦笑した。

「ほんと？ 良かった、ナナちゃんとは割と喋れるのかな」

おっかさんがほっとしたように息をつく。その隣で、葵も微笑を浮かべた。

もう入寮から一カ月近く経つのに、全く馴染もうとしないラファエルを、彼も心配していたのだ。

「じゃあ食器洗ってくるよ」

「あ、手伝います」

「ううん、あとこれだけだからいいよ。座ってなさい」

立ち上がりかけた七緒を制し、おっかさんは台所へ入って行った。

「シュタイネルって苗字なのか名前なのかわかんなくてー、どっち、って聞いたら、そんなのもわかんねえのか的な顔されちゃいました」

そう七緒が言うと、おっかさんが顔だけ出入り口から出して、説明してくれた。

「ご両親がドイツの方なんだよ。まあ、生まれも育ちも日本らしいんだけど。可愛い子だろ」

「ですねー。おれより小柄でしたよう。美人だし」

葵は、お花畑組（葵の中で、この2人は頭がお花畑なのだ、という認識だったりする）のシュタイネルの評価に呆れて、忠告した。

「おっかさんもナナも、可愛いとか美人とか…あいつも男なんだからさあ、可愛いとか言うとは絶対怒るぜ？」

すでにおっかさんは顔を引っ込めているので、七緒に向き直る。

一見「かわいこちゃん」なシュタイネルは、けれど、怒らせるととても怖いのだと言い募ろうとした、とき。

「オレあいつ割とタイプなんだよねー、見た目…痛っ」

黙っていた雪弥が、いつもののにやにや顔で割り込んできた。

葵が無言で蹴飛ばすと、恨めしげに口を尖らせる。

「見た目はねって話だよ！ シュタイネルって毒舌じゃないすか、オレ、初日に結構酷いこと言われたんすよ。絶対零度の瞳で睨まれ

てえ」

「それはお前が初対面でナンパするからだろ！ あの時周りにいた1年、どん引きしてたかな」

第一印象がそんなだったので、1年生たちは割とあっさり「バイだけど、よろ！」なんて挨拶する雪弥を受け入れていたのだが。

「そういや、おれ、アオさんの言ってた「ばい」ってのが未だにわからないんですけど」

ぽつりと七緒がそんなことを言ったので、葵はぎょつとした。

「えっ？」

葵だけでなく雪弥も目を見開いて、驚いた顔になる。
驚かれて、逆に七緒も驚く。

「ええ？ なんですか？」

「いや……ナナちゃん、キミもう……」

「うーんと……」

脱力しきる葵と雪弥は、顔を見合わせて嘖き出した。

「天然コエー」

「まじコエー」

「えー？ なんですかったらあ！ なんで笑ってんですか？」
「ホモならわかる？」

「あれでしょ、理科で習う、ホモ接合体？　とかなんとか……だからなんで笑うんですか!？」

「別に知らなくても生きていけるよ」

「あ、クラスメイトとか、友達とかに無暗に聞くなよ？　「え、何コイツ」って思われるから」

「えーっ?」

気になるなあ、なんて文句を言う七緒は、密かに、部屋に戻ったら辞書で調べてみよう、と思った。

——結局、その後の出来事によって、辞書を開くのは忘れてしまったが。

21、喧嘩にもならない

「ナオ、寝てんの？」

部屋に戻ると、直哉はすでにベッドに入っていた。

七緒が声をかけると、二段ベッドの上段で体を起こす。

「うとうとしてた……ナナ、寝るの？」

「そうだねえ、ナオは寝ちゃうよね？ 明日もランニングするんでしょう？」

「んー……」

目をこすって、梯子をつたい床に降りる。

伸びをした直哉は、大きく息をついた。

「あのさ、昼間の話なんだけど」

「昼間？ ……あ、案内してくれたときの？ ナオ、圭介と仲良くなつてみたいじゃん」

「あーうん、それはまあそうなんだけど。圭介が言ってたんだけどさあ、お前、俺のこと「弟」だと思ってるわけ？」

七緒は顔をしかめた。何の話だかよくわからない。

「おとうと……？」

「圭介が言ってた」

目を細めて、圭介との会話を思い返す——ああ、あのときか。

七緒が寮生だと言った時に、栄人と圭介が「寮ってどんなところ？」と事細かに聞いてきたので、ルームメイトの直哉の話もしたのだった。

「あの話ねー。寮のこと色々聞かれて…」

「ばっか！ そんなんはどーでもいいーの！」

七緒の言葉を遮り、直哉は噛みつくように言った。

「俺が兄貴に決まってんだろっ！」

今にも「きょとーん」なんて擬音が出そうな表情の七緒を、睨みつける。背丈が似たり寄ったりなので、あまり迫力はないが。

「なんで俺が弟でお前が兄貴なんだよ！ 俺の方が兄貴分に決まってるんだろ。色々知ってるのも俺だし、教えたのも俺じゃん！」

それはただ単に、直哉が中部部からこの学校へ通っているに対して、七緒が転入生だからという知識の差でしかない。が、直哉はそこまで考えがまわっていないようだった。

「それをさっ！ 俺のいないところで、「弟みたい」とか言うの、なんか下に見られてるみたいで、むかつくんだけど」

困ったものだなあ、と七緒は思った。

ようやく、彼が昼間からおかしかった理由がわかった。

拍子抜けするような理由だが、直哉にとっては大事なことなのだろう。

「（男の子にとっちゃ、弟より兄のがいいのかな…。まあ、わたしも妹って言われるよりは、姉って言われた方がしつかり聞こえて好きだし…。）」

それに、自分のいないところで自分の話をされたというのも、嫌だったのかもしれない。

困り顔で、直哉に一步近づく。

「あのさ、それ、重要なこと？」

「は？ 重要！ 超重要っ」

当たり前だろっ、と叫ぶ直哉は、次の瞬間フリーズした。

「おれはナオが兄貴だっていいよ」

「えっ」と声を漏らし、今度は直哉が「ぼかーん」と口を開けた。

「ナオってさ、頼れるし優しくて、うちの弟に似てるんだ。だから圭介たちにはそう言ったけど、ナオが嫌だったならごめん」

「え……え、うん…」

さらりとそう言われ、直哉は拍子抜けしたようだった。

「ごめんね」

「いや…ううん、俺も…騒いじゃってごめんなさい…」

「じゃあどうしよっか、おれ、ナオのこと兄貴って呼んだ方がいい？」

そんなことを言いだしたルームメイトに、慌てて首を横に振ってみ

せる。

別に、兄と呼んで欲しいわけじゃなくて、気持ちの問題なのだ。ていうか、直哉自身、今までのもやもやした気持ちを説明しろと言われたら、出来ない。

自分でもよくわかってないことで意地を張っていたのが、いきなり恥ずかしくなってきた。

「いや、いい！　なんかそれはそれで…変だし……っ！　か、何この会話」

2人は、顔を見合わせた。そして同時に嘖き出す。

初めて会った日も、こんな風に笑ったなあなんて思っ、あの日からまだ3日しか経っていないことに気がついた。

——オレら、全然、これからじゃなか

「ほんとに何この会話！　あはははは！」

「兄貴って呼ぶ？　とか聞くなし！　何これ！　ほんと！」

七緒とけたけた笑い合う直哉は、ふと、視線を感じて振り返る。

「……………ほんと、どんな会話をしてるんですか君たち…」

「……………」

開いたドアの向こうには、あきれ顔の雪弥と戸野橋が立っていた。

「……まあ、そつとしいてやろうぜ」

「ちよっ、トノ、ゆーきゃん先輩！　ノックくらいして下さいよ！

ナナも笑うの止めて！」

直哉が真っ赤になって叫び、笑い続ける七緒につっこむ。

「だ、だ、だってっ、もう、ナオの顔ッ……げほっ、げほっ！」

「せき込むほど変顔した覚えはないんですが!？」

「とにかく、喧嘩じゃないならいいから……」

「待ってトノ！　そういうカオやめてくんない！　説明するから！」

「仲良きことは美しきかな……」

「ゆーきゃん先輩、なんすかその笑い。なんすかそのニヤニヤ笑い！　……っていうかい加減に、ナナ、笑うのやめようぜ!？」

ひいひい言っていた七緒が、涙を拭きながら顔を上げる。

「はあ、もう、ナオ面白いなあ！　あ、先輩、戸野橋くん、心配かけてごめんなさい。まあ喧嘩っぽい感じでもあったんだけど、ナオが兄貴ってことで……ぶくっ、解決しましたんで……!!」

兄貴い？　と二人が首を傾げるのを見て、七緒はまったくすすくと笑い始めた。

「ナオがね、おれがナオのこと「弟みたい」って言ったのが嫌だったらしくて……」

「ナナ！　それ言っちゃう!?　言わないよね普通！　ていうか別に、嫌だったわけじゃないし……」

「……状況よくわかんないけど、とりあえず良かったねって言うつく」

「トノ、お前なんか投げやりじゃね？」

夕食前から様子がおかしかった直哉の大声が響いてきたもんだから、

慌てて、ちょうど廊下にいた先輩を引っ張ってきたのだ。ほっとしたと同時にむかつきもするだろう。

戸野橋は溜息をついた。

「もー、まじびびったんだけど」

「戸野橋くん、ごめんて。ほら、ナオも謝ろ」

「ごめんなあ、トノ」

その様子を見て、二人は同時に思ったそうな。

——ナナは、兄とか弟っていうよりも……姉？

「…いいけどね、まあ」

戸野橋がそう言うのと、七緒はあっと声を上げた。

「ラファエルくんも起こしちゃったかな」

ラファエルう？ と目を見開いたのは、今度は七緒以外の4人。

「え、あの…お隣の…戸野橋くんとの…」

「それはわかるけど…、何、ナナちゃん、シュタイネルのこと名前で呼んでんの？」

その場にいる全員に見つめられ、七緒は居心地が悪そうに頷く。

「さっき名前を聞いたんですよ…え、何、みんなして」

「あいつ、そう呼ばれると怒るんだぜ」

雪弥がからかうように言うと、七緒はあっけらかんと言った。

「ああはい、だろうと思いました」

……

……はい？

微妙な雰囲気の中、雪弥が引きつった顔で問う。

「……知っててやってんの？」

「名前聞いたときに、「天使からとったんだね」って言ったら拗ねていたので、あんまり好きな名前じゃないんだろ？なあとはい。でも別に、呼ぶなどとは言われてないし」

「そこは空気読もうよ……」

「名前は呼ばれるためにあるんですー。ていうか、名前呼んだ時の不服そうなの……いかにも「この名前は不本意だ」って言いたげな顔がもう可愛くって。思わず笑っちゃいましたよ」

戸野橋は、だから先程404号室からでてきた時、笑っていたのかと合点がいった。

「ナナって……」

雪弥が呟く。戸野橋が無言で頷き、何故か直哉が恥ずかしそうに目を伏せた。

雪弥は、面白そうに笑って、続けた。

「ナナって、Sなんだね」

「ゆーきゃん先輩、その認識は間違ってる！ わた…っおれは、S
じゃないしMでもない！」

「惜しいな、オレもどっちかっというところSだから…」

「何が惜しいんですか。何が惜しいんですか!？」

隣室が騒がしいなあと思うラファエルだった。

———ちなみに。

黒ウサギのぬいぐるみは、七緒のベッドの端で、必死で笑いを堪えていたという。

閑話

「ナナって女っぽいよな」

「うん」

目の前で、遠慮なくなされた会話に、がーん、と頭を殴られた気がした。

マンガだったら、背景にベタフラが光っているだろう。

転校2日目にしてそんなことを言われるとは思ってもみなかった。

「お、お、お、おれのどこが女っぽいの！　ちゃんと「おれ」って言ってるじゃない！」

「ほらそれぞれ、語尾よ語尾。「じゃない！」ってお前」

圭介が笑う。栄人は同意はしなかったが、明らかに目が笑っている。

「ひどいー！　おれっ、男らしいつもりなんだけど」

「えっ、うそやろ」

「なんで関西弁よ！　ちょっ、もう、真面目に驚いた顔しないでよお！」

「ほらまた「しないでよお！」って」

真似しているつもりなのか、声が高い。それがまた似ていたものだから、ついに栄人もポーカーフェイスを崩した。

「ふははっ、圭介似てる」

「似・て・な・い！」

ぷう、と頬をふくらませる七緒。

「（うちの妹もよくああするよな…）」

小学生の妹を思い浮かべて、さらに笑ってしまう栄人だった。

「おーい、圭介」

わいわいと談笑してるなかで、圭介にお呼びがかかった。

「昼さあ、お前今日どーすんの？」

「うーん、今日もハチたちと食べるわ」

おっけい、と男子生徒は言うのと、さっさと自分たちのグループに戻って行く。

七緒の怪訝な表情に気がついたのか、圭介が説明する。

「オレ別に、いつもハチと食ってるわけじゃないんだ」

「そうなの？ 仲良さそうに見えたから、そうなんだとばかり」

昨日も一緒に食堂まで行ってくれたし、2人は当たり前のようについてきてくれたから、てっきりいつも共に行動しているのだと思っていた。

「こいつはアレだ、スナフキンみたいな…いや、それじゃかっこよすぎだな。どこにでも現れて誰とでも付き合える奴なんだよ」

「ハチさん、後半良いとして、前半…いいじゃないか、オレ、スナフキン」

「だめだよお、スナフキンはおれの初恋なんだから、圭介なんかじゃ…あつ」

英人と圭介のものすごい表情に、「しまった」と思う七緒。

「…問題発言だと思うよ俺それは」

「いやあのタンマ、懂れっていう意味だから気にしないで」

「ちなみにオレ、初恋はうさぎちゃんだよ」

「あつ、でもちよつとわかるわー！ うさぎちゃん可愛いよねえ！ おれはまこちゃんが好きでえー」

「ちよちよちよ待って、俺だけついていけないんですけども。何の話してんの？」

「わかんない？ 月に代わって！」

「おしおきよ！」

「わかったけどポーズとるな2人してポーズとるな！ あれ女の子が見るやつだろ！ ナナはともかく圭介まで何見てんだよ！」

「面白くてさあ」

「あれ最終回泣くよねえ」

「泣く泣くー。あの、なんだっけ、外部の…太陽系外部？ の3人が…」

「ああっ、そうそう！ はるかさんとみちるさんの最後とかね！」

「だよねえ！ あの2人まじ百合ー」

「百合？」

「あ、知らないならいいんだけど。オレもうなんだっけ、セイヤくん？ が可哀そうで可哀そうで…」

よく知らないアニメかマンガだかの話で、蚊帳の外になった栄人は、しらけた表情で言った。

「…どうでもいいけど圭介、お前ナナの喋り方うつってんぞ」
「まじかよ！」

「どっちの台詞かわからねえもん」
「え、何が不満？ おれの喋り方の何が不満！」

だいぶ仲良くなった3人だった。

22、お着替えタイム

「腹減ったー！」

「圭介、でもまだ二限が終わったばかりだよ」

「じゃあねえな、三限は早弁タイムだな」

「次は体育だよ」

「げっ、そうか！ しかも土曜だからケンドーじゃんか！」

「なんであの先生ってケンドーって呼ばれてんの？ 別に剣道教えないじゃん」

「名字が小林なんだよ。コバヤシ。だからケンドー。体格的にも」
「そうなんだあ」

圭介と、七緒の会話は、なんだか聞いていて疲れる。栄人はそう思いながら、ロッカーから体操服を出す。

「おら、二人とも、さっさと着替えねーと」

「そだね」

「なあなあ、どうしたらいいと思う？ この減りすぎて背中とくつついちゃいそうな腹、どうしたらいいと思う？」

「さっさと着替えろ」

「体育でさらに腹を空かせてみる。その後待ち受けるのは地獄の数
学だぜ？ オレ死んじゃう」

「じゃあ死ね」

「ひでえ！」

席戻って着替えろ！ と圭介を蹴り飛ばし、七緒を振り向くと、すでに彼は着替えを済ませていた。

「うわ、ナナ着替えんのはやっ」

「いやあ、ハチたちが遅いんだよ」

彼は困ったように笑う。

ついさっきまで、こっちが保護者だったのに、いつの間にか関係が逆転したような気がした。

七緒は、意外とあっさりしているというか、切り替えが早い。

「外？ 何やるの」

「ハンドボール。女子も一緒だからあんまり激しくはやんないけど」

「女子一緒なの！？ よかったあ！」

飛び上がって喜ぶ七緒を、じと目で見つめる。視線の意味に気がついて、七緒は慌てて栄人の背中に飛びついた。

「違うの！ 別に女の子が好きだから喜んでるんじゃないって！ おれ、運動音痴なの！ 球技とか一切出来ないしッ！ だからハチい、そんな目で見ないでえ…」

半分本当で、半分建前だ。

純粹に、男ばかりより女の子がいた方がいいじゃない、という気持ちもある。

必死で言い分をまくしたてる七緒の頭を撫でて、ズボンを脱ぐ。

「ぎゃっ、変態！」

すると、ものすごい速さで七緒が引いた。

「ちょっ…おれがくっついてるのにズボン脱ぐ!？」

「は!?!」

逆に驚かれて、七緒ははっとなった。また、変なことをやってしまったのかと。

着替えくらいなら、弟がいたわけだし、割と平気である。アウトゾーンさえ見えなければ、彼には意識すべき対象にはならない。しかし、こんなに至近距離で脱がれるのは――

――恥ずかしいですっ!

「え…だってもう予鈴鳴るし。別にいいじゃん、男同士なんだから至極まっとうなことを言ったにも関わらず、頬を染めた七緒に、腕を叩かれる栄人。」

「やだっ、ハチの変態! 露出魔あ!」

「えええ、じゃあ着替えてるひとに抱きつくのってどうなわけ」

「抱きついてないもん。くっついただけだし」

「同じじゃね?」

ぶい、とそっぽを向くと、着替え終えた圭介の方へ小走りで近寄る。

「圭介ーっ、ハチがセクハラしたよう」

「えっ、まーじでー? うっわー、転校生を襲うブルーパンツの中村栄人くん(15歳)!!」

「ブルーパンツ? きゃー、ほんとだ、ハチのパンツ青い!」

このように、距離をとればパンツぐらいどうってことないのだ。

「（まあね、それもどうかとは思うんだけどね）」

「てめーら…」

着替えを済ませた栄人が、机の合間を縫って、かなりの速さで駆けだした。

「お前らのパンツは何色じゃーっ！」

なんだかんだ言っても、彼も子供っぽいのである。
ガタガタと机を蹴散らして逃げる二人。

「こわいのがキタ！ 変態がキタ！」

「やだー！ きやはははは」

その様子を、まだ教室に残っていた男子連中が大笑いして見物する。

「きゃーっ、えっち！ ハチくんのえっちいいい！」

あっという間に捕まった七緒は、床に這いつくばったまま、ずりよんとズボンを下ろされる。

自分の体に関してはもう慣れたにしても、男の子にズボン脱がされて反応しないのもなあと思いつつ、七緒は笑いすぎて痛い腹を押さえた。

「あはは、中学の修学旅行のとき、部屋で夜、パジャマのズボンを脱がせる遊びがはやったなあ」

「え、まじか。俺んトコもそうだった」

「考えることは一緒だねえ」

男も女も、と心の中で付け足して、上半身を起こす。

「うわ、ナナが脱がされてる」

「やられちゃったよう、圭介」

「ヤラレタって、おま……なんてハレンチな」

圭介がなにやら妙な顔をしたが、意味がわからない七緒はきよんとした。栄人は微妙なニュアンスに気付き、軽蔑の眼で圭介をみやる。

「エロエロ大魔王：思考は全部そっちにいくのか」

「うるさいな。でもお前、その体勢である言葉は変なりアリティがあったぞ」

その体勢、と言われて、七緒を見下ろす。

まだ少し笑いをひきずってるらしい彼の上に、自分が馬乗りになって…。

確かに、と噴き出した。

「ハチくん、どいて。起きれないから…」

いい加減ズボン履きたい、という七緒の手を引っ張って起こしてやる。

そのときに、ふと、彼の内腿が目に入った。

右足の内腿の一部分だけ、妙に肌が白く、引き攣っているようにも見える。

七緒も圭介も、彼の視線をたどった。

「あ、肌白い。どしたの、そこ」

「ああ、火傷火傷。背中と内腿にさ、ちょっと火傷の痕があった。」

普段は白いけど、温まると赤く浮き上がるの」

「痛くねえの？」

「うん、結構前のやつだから…もうあんまり目立たないでしょう」

二人の会話を、栄人は静かに聞いていた。

思わず頭をよぎってしまったのは、「虐待」の二文字。

「（いやいや、単なる事故かもだし…でも、そういや、地元に実家あるのに寮入ってるし…）」

彼の家庭環境は複雑なのだ、と勘違いをした男が、またも誕生した。ちなみに、一人目は直哉である。

いきなりテンションが下がったように見える栄人を気にしつつ、七緒はやっとズボンをあげることができた。

「もう、ハチのエッチ」

「まだ言うか！」

「行こうぜ。……あれえ！？ みんなもういない！！」

ようやく教室を出るか、という雰囲気になり始めて、辺りを見渡すと、もう彼ら以外誰もいなかった。

「うわうわ本鈴鳴る鳴る」

「急いだ方がいいよね」

「もちろん」

ドアに一番近かった七緒が飛び出し――

「きゃっ」

「ひゃっ」

——外にいた誰かとぶつかった。

七緒はよろけただけだったが、ぶつかった相手の女生徒は、すてんと尻もちをついた。

「やだっ、ごめん！ 大丈夫!？」

慌てて手を取って引き上げる——と、強く引っ張りすぎたのか、七緒が尻もちをつき、そこに頭突きする形で女生徒が突っ込む惨事になった。

「ぐっ……」

「きゃっ!!? ご、ごめんなさ…!」

「おいおい」

何やってるんだと栄人が呆れ、圭介のほうはと言えば、「わ、ナナのエッチー」と騒ぐ始末である。
どちらも助ける気はないらしい。

「ご、ごめんね、強すぎた…」

「い、いいえ、私こそごめんなさい」

ボブカットの黒髪を揺らし、女の子は慌てて頭を下げた。

「えっ。どうして君が謝るの。飛び出したおれが悪いんだよ」

七緒は立ちあがり、彼女を今度こそ優しく引っ張り上げる。

「ほんとごめんなさい…ええと、武本さん、だよね」

上目遣いに（背は七緒のが高いのだが）彼女を見ると、驚いたような顔をされた。

友人たちも驚いたらしく、なんで名前を知ってるんだとでも言いたげな視線を向けられる。

「だってもうクラス入ってから3日だよ。とりあえず、同じクラスの女の子の名前は覚えた」

「女子だけかよっ」

圭介のツツコミに七緒は苦笑する。

元・女だから、女の子のが親しみやすいという理由もあるが、1年3組の女生徒はたった5人である。

七緒含め19人の男子の名前より、女子の方から覚えてしまうのも無理はない。

「おい、武本、時間大丈夫か？」

栄人の問いかけに、男子2人がハッとなった。

女子がたった5人なので、体育は男女合同であるはずだ。しかし、彼女は未だ制服である。

「…もしかして武本ちゃん、オレらがいたから入れなかった!？」

男子は教室、女子は更衣室で着替える。そのため、男子が着替えを始めてしまうと、女子はロッカーに入れてあるはずの体育着すら取りに入れない。

「（：でも、わたしも中学のときそういうことあったけど、中にいる男友達に服とってもらってたけどな：）」

実際、他の女生徒は「圭介ー！ 私のカバン取ってー！」などと叫んでいた。

「なんだよー、赤星みたく、外から頼んでくれたらよかったのに」

赤星とはその、叫んだ女子である。

圭介はそういうが、七緒は、ただじっと待っていた武本の気持ちもわかる気がした。

「（赤星さんは気後れしないタイプだけど、武本さんは引っ込み思案ぽいし。わたしだって、仲良い男子がいなきゃ出来なかったもんなあ）」

その時、本鈴が鳴った。

「げっ、やべえ」

「武本さん、教室で着替えちゃえぼ？」

「えっ」

七緒の提案に、武本が声をあげる。圭介も「えーっ」という顔をしたが、意外にも栄人が「そうしなよ」と言った。

「女子の更衣室って、上の階だろ？ 制服も授業終わったら俺らが渡すから」

半ば強引に彼女を教室にいれる。

赤面しつつも背に腹はかえられないのか「…そうする」と頷く武本に、七緒は頷いた。

「ここで待ってるから」

「ええっ！？　いいよ、そんな…」

「でも、おれらがずっとふざけてたせいでし、どうせもう遅刻だしさ。赤信号、みんなで渡ればってやつだよ」

「でも…」

ドアの向こうで渋る武本に、「まず着替えちゃえ」と栄人が言った。

「ハチ」

「俺らも待つよ。ここまで一緒にいたんだし」

「そだなー、ナナばっかに良いカッコさせるわけにはいかねえもんなあ」

「やー！　2人ともかっこいい！　おれ友情を感じた！」

きゃいきゃいと騒ぐ男子3人に、ありがたいとも余計なお世話とも思う武本だった。

23、2人組になりました

「ところで武本お、お前、保健委員だったよなあ？」

唐突に栄人が声をあげたからか、教室の中からドサドサッと色々落ちる音がした。

「へっ！？　そうですけど！」

武本の慌てた声に、七緒は顔をしかめる。

「着替えてる時に話しかけるなよ…」

ぼそりと言うと、圭介が「えっ」という顔をした。

当の栄人は聞こえなかったようで、ひとり、悪い笑みを浮かべる。

「俺、先に行くわ」

「え、ひでえハチ」

「最後まできけよ」

先に校庭へでて、小林先生に「3人が保健室へ行ったから遅れてる」と言っておくのだと説明した。

「ナナが腹痛かなんかで、武本が保健委員として付き添い、つていう設定にするわ。そしたら怒られねえだろ。伝言に走った俺もな」

「え、オレは？」

「圭介は…ナナを支えてたとかそんなんでいんじゃないね」

「オレに対して適当な気もするが、そういうことにしておくか」

圭介と七緒が頷くと、栄人は「じゃ」と言って駆けだした。時代劇なんかでよくある、「お主も悪よのう」「いえいえ、お代官様程では…」のシチュエーションだ。

「ハチって悪知恵あるねえ」

「オレもそう思うよ」

これからお代官様と呼ぼう、と、2人はしみじみと思ったのだった。

そして一分ほどすると、武本が「終わりましたっ」とドアを開けた。髪はボサボサで、Tシャツがきちんとズボンに入っていない。余程急いだのだろう。

「まあ、おれは一応病人ってことになってるから、フツーに歩いていこうか」

「武本ちゃん、さっきの聞こえてたよな？」

圭介の問いに、武本は頷く。「ありがとうございます」と言う彼女に、圭介は笑った。

「なんで敬語！ 武本ちゃん可愛いわー」

「そういうこというのやめろ、困るだろ」

いつになく男らしい七緒の冷たい言葉に、圭介は武本を覗き込んだ。彼女はどう返したらいいかわからず、眉を八の字にしていた。

「(……ナナって、女の子限定で男らしいんだな……)」

さっきから妙に武本ばかり庇ってるしなあ、と思いつつ、そこをからかうのも面白いかとばかりに声を高くした。

「きゃーごめん。別にナンパじゃないから安心して。オレ本気よ」
「だーからあ！」

そういうおふざけすんなつ、と小突かれ、圭介は舌を出す。

「ところで武本さん、下の名前で呼んでいい？」

思い出したようにそう言う七緒に、武本ばかりか、圭介も目を丸くした。

「うおいっ！！ おまつ：オレにナンパすんとか言っついて自分
は…！」

「ちがうもん。友達になりたいだけだもん」

そうこうしているうちに昇降口に辿り着き、武本はほっとしたように下駄箱に飛びついた。

「（こういう会話の間に入るって嫌だなあ：テンションついていけないもの）」

七緒は経験上、武本が何を考えているかわかって、ちょっと申し訳なくなる。

「（でも何も話さないのもおかしいしさー：正直女の子の友達欲しい）」

銀杏寮では、右を見ても左を見ても男の子ばかりだもんなあ、と、今更ながら思うのだった。

校庭に出ると、刈り上げ頭の教師が振り返り、大丈夫かと問いかけてきた。

七緒が転校して来たばかりなのもあってか、その声は優しくかった。

「腹痛だって？」

「はい、大丈夫ですケンドー先生……あっ」

座り込んでいたクラスメイトたちが、どっと笑い、先生のこめかみに青筋が走る。栄人が薄情にも一際大笑いしていた。

——それは生徒間でのあだ名だって、言ってたっけ……！

「大丈夫です、ナナくんはもう全部出し切りましたあ！」

先生が何か言う前に、圭介がそう叫び、2人とも引っ張って列の後ろにしゃがみこむ。

ナイスフォロー、と思った後に、「出し切りました」の意味に気がついた。

「（小学生の下ネタじゃない！）」

憤慨する七緒が顔を上げると、妙に良い笑顔な小林先生が、まだこちらを見ていることを知った。

「……誰が言ったのか知らんが、俺は小林だ。いいな、戸塚」

猫なで声を出す小林先生に、七緒は一生懸命頷いてみせたそうな。

「えー、じゃあ2人組作って準備運動とパス練しろー」

間隔空けて、突き指とかしないようになーなんて指示する小林先生を、武本は恨めしい目で見つめた。

「（2人組だって！ 勘弁して欲しいなあ）」

このクラスの女子は5人だ。つまり奇数であり、2人組となると当然1人余る。

その1人が、彼女なのだった。

「（みんな優しいから、入れてくれるけど……）」

3人組は何かとめんどくさい。会話についていけなくて居た堪れなくなるか、気遣われて逆に気まづくなるかである。

それに彼女は、自分の運動能力の低さをしっかり自覚していた。

「（足手まといになるの、嫌だなあ……）」

「じゃあ始めー」

小林先生のかけ声で、みんながざわざわと動き始める。

武本は縮こまって、女子2組のうちどちらかが声をかけてくれるのを待とうとした。

――が。

「ねえ武本さん、おれと組まない」

隣に座ったままだった転校生にそう問われ、目を丸くした。

「えっ」と子をあげたのは武本だけでなく、七緒を誘うつもりだった栄人、そして、武本を誘うつもりだった女子・赤星と月野のペアもだった。

「ナナ、武本と組むの？」

「組める？　って聞いているトコ」

暗に「女子と組むのかよ」と問う栄人、その真意に気付かない七緒。

「武本、戸塚と組むの？　嫌ならハッキリ言ってこっちおいで」

「えっ、えっ……」

七緒が妙な思惑で彼女を誘っているのかと訝しむ赤星、間に挟まれて戸惑う武本。

さらに、「えっ、ナナっちが武本ちゃん誘ったー！」と何故か嬉しそうに騒ぐ圭介や、「なににな」「どしたの、集まって」ともうひと組の女子ペア・茜と藤崎まで寄ってきて、団子状態になった。

「ちよっとお、戸塚。武本困ってるじゃん。男子は男子同士で組んでよね」

赤星に指を突き付けられ、七緒は目をぱちくりさせた。

きゅっとまとめた茶色のポニーテール、きりりとした顔立ち。背も七緒と同じくらいで、睨まれるとなんだか妙に迫力がある。

「（ああそうか、赤星さん、女子ん中のまとめ役なんだ）」

七緒の想像通り、彼女、赤星あかほし 洸ほのかは、1年3組女子の、リーダー的存在であった。

男子とも渡り合える（むしろ勝つ）その性格や、責任感のあるところが認められ、4月には満場一致で学級委員に推薦された。

さらに、所属するバスケット部では、スポーツ推薦でやってきた者にも負けず、かなり期待されているルーキーであり、入学テストでは学年（特進クラス除く）で3位という結果を叩きだした。

まさに文武両道のスーパーガールなのである。

奈々子時代の友達にもいたなあ、頼りつきりだったっけ、なんて懐かしくなり、同時に嬉しくなって、七緒はへらりと笑った。

「えーでもここ女子も男子も奇数でしょう」

「だったら双方の余りが組めば良いって？　ばかじゃないの！　大体、男女じゃ体力とか色々違うでしょっ」

——あ、グサツとくるグサツと。

こういうタイプに一貫して、「女子には優しく男子には厳しい」という共通点がある。

女の子だったときには頼もしかったお姉さんタイプは、厳しくされる男子側からしてみれば、ちよつと怖い存在なのだと思いついた。

「（美代ちゃんも男子には敬遠されてたなあ……ぐすん）」

昔の友人を思い出しながら、心がぼつきりと折られた七緒は、助けを求めるように栄人を振り返った、が。

「いやそれは俺も思うわ」

「四面楚歌……」

だってそりゃそうだろ、という栄人に、既に折られた心が粉々に砕

かれる。

「お、おれ、体力ないし…」

「だからってねえ」

そこに、「まあまあまあまあ」と割って入ったのは、クラス一小柄な藤崎 米子ふじやき まいこだった。

「とりあえず準備運動しないとさあ、ケンドーに睨まれるよ。ほのちゃんもさあ、そんなにピリピリしないでさあ。武本ちゃんの意見聞いてないわけだし」

彼女は、ちょっとぽっちゃりとしたタレ目の、のんびりした雰囲気の子で、たしか栄人のふたつ程前の席に座っている女の子だった。彼女の持つその雰囲気と、独特の語尾の伸ばし方に、場の空気が和らぐ。

ほのちゃん、と子供のように呼ばれた赤星も、毒気を抜かれたらしく、軽いため息をついた。

「……そうね。ヨネの言うとおりでわ。武本、あんたはどうしたい？」

話を振られた武本は、困ったような顔をする。
否定された気がして、七緒は一瞬傷ついた。

——まあ、そうか。わたし、今、男子だもんね。普通こうなるよねでも、と思う。

いくら男子になったからといって、七緒には譲れないことがあった。

「おれ、ボール怖いのー！ パスとか取れないし、相手まで届かないし！ 武本さん、お願い。助けると思ってー！」

かなり本気の声で叫んだ七緒に、辺りがぎよつとする。――そんな、そんなことを暴露されましても、という感じた。

「情けなっ！ 理由情けなっ！」

「パスが取れないのもどうかと思うけど、届かないって何よ！ どんだけ非力なの！」

「球技は特に苦手なんだもん……」

栄人と赤星に鋭く突っ込まれ、ふにゃー、と泣き声のような声をあげる七緒に、噴き出したのは藤崎と武本だった。

「ええー、戸塚くん面白いねえ！ 男の子と話してる感じしな〜い」

「ふふっ、ふにゃーって……」

くすくす笑う女子を見て、圭介がぽかんと口をあける。

「……な、ナナのキャラが女子に受けてる……オレもキャラチェンジした方が良いかな」

「お前のガタイでやられたらキモいっつーの」

「そーね、あれはナナくんだから許されるキャラよね」

圭介と栄人、ついでに茜がボソボソ言う横で、武本が顔をあげた。やっぱりまだ困ったような感じではあったが、その目は、きちんと七緒をとらえている。

「いいよ。戸塚くん、組みましょう」

「本当？　ありがとう、武本さん！」

いいの？　と目で問いかけてくる赤星に頷き、武本は続けた。

「私も、あまり運動神経良くないんだけど…」

「じゃあ、お互いさまってことだよ」

ふふ、と七緒が笑ってみせると、彼女も安心したように笑う。

「えーとこれは…一件落着？」

傍観していた赤星のペア、月野の苦笑しながらの言葉を皮切りに、同じく傍観していたクラスメイトたちが準備運動を始める。どうやらかなり注目を集めていたらしい。

「戸塚。武本の嫌がることしたら、どうなるかわかってるわね？」
「しないよー」

一応、威嚇的なことをしてみた赤星だが。

「いだだだだだごめん武本さっ…これ以上無理」

「いたたたたたっ、ごめん、そっちにひっぱらないで！」

「……あいつら何やってんの？」と栄人は目を細め、
「柔軟じゃねえの？　…多分だけど」と圭介も目を細め、
「固っ。2人とも身体固っ」と月野は声をあげ、藤崎も茜も苦笑する。

「……これは確かに、同レベルね…」

準備運動の時点で既に悲鳴をあげている2人を見て、お似合いだと思ふより他なかった。

24、ボケタラシ

「いくよー」

「はいっ」

「あっ、ごめんね！」

「大丈夫……いきまーす」

「はーい……おっとつと」

「ごめんなさい！」

「大丈夫だよー……いくよー」

「いつまでやってんのあんたたちはっ!!」

赤星の声に、七緒と武本は肩を震わせた。

「いくよー、はーい、いくよー、はーいってあんたら、パス全っ然とれてないじゃん！」

そうなのだ。ボールが、ダイレクトで彼らの手に収まることがないのだ。

投げられたボールはそのまま、地面に落ちて、拾われる。そしてまた投げられ、落ちるの繰り返しだ。

あまりに酷いキャッチボール（キャッチ出来てないけど）に、隣でパス練をしていた赤星が、我慢できずに声を張り上げたというわけだ。

「ボールが可哀そう！ ただ単に投げられてるだけじゃん！ キャッチしてもらえてないじゃん！」

「まあまあ、ほのか、落ち着いて」

全力でツツコミにかかる赤星を、ペアの月野が止める。

「ほ、ほのちゃん、なんかおれら悪いことしたかな…」

「悪いことっつーか…えっ、何!? 今私、名前で呼ばれた!?!」

「赤星、落ち着け」

みかねた栄人が割って入り、圭介も寄ってくる。

「見た? え、ちょっと中村見てた? 一度として! 一度として
ボールが相手まで辿り着いてないの!」

「見てたけど。気持ちわかるけど」

「あーそっか、赤星、バスケ部だもんな…許せないか…」

「えっ、許せないって何が?」

「…えっ、えっ…?」

きよんとする七緒と武本を見て、赤星は大きくため息をついた。

「お似合いかなとは思ったわよ、一瞬。でもダメだわ、同じレベル
同士が集まっちゃダメなんだわ。フォローできないから!」

「ほの、あんた本当ツツコミ気質だよねえ。プラス姐御肌とおせっ
かい」

「そっち!?! ねえ、秋穂、あんたが呆れるのはそっちなの!?!」

ついには月野にまでツツコミ始めた赤星を、「まあまあ」となだめ
たのはやはり藤崎だ。

そうするとそのパートナーの茜も寄ってきて、またも団子状態にな
る。

ついに、小林先生が「何してるんだ」と小走りに寄って来た。

「もう武本ちゃんとナナのペアが酷いんすよ」

「……いや、俺も見てたが、酷いな」

「えーっ！？」 せつ、先生！ 酷いってなんですか、酷いってねっ、武本さん？」

憤慨した七緒が、パートナーを振り向く。が、武本は普通の表情で首を横に振った。

「ううん、これは酷いなあって思ってたよ、私」

「自覚！？ えっ、気付いてなかったのおれだけなの？」

「先生、これ、私が口だしてもかまいませんか」

赤星バスケ部だもんなあと、先程の圭介と同じ表情をして納得する小林先生。

「でたあ、ほのちゃんの姐御肌とおせっかい！」

「ヨネ、それさつき秋穂が言ったから。同じこと2回言っちゃダメよ」

「え、何そのダメ出しは…」

茜がそう言うと、どこからかくすくす笑いが聞こえてくる。

肩を震わせて笑うのは、七緒だった。

「ふふふっ、ほのちゃんたち面白い」

まるで、女子校に通ってたときのような——そんな感覚で、七緒は笑っていた。

——ハチたちと話すのも楽しいけど、やっぱり、女の子がいると、

落ち着くなあ

「ふふふじゃないって！ あんた当事者だよ！？ ……ていうかさつきもちよつと言ったけど、いつの間にやら名前呼びじゃね！？」

「ダメかなあ？」

ねだるような声音に、うっと赤星が詰まる。七緒は、彼女のようなタイプが、こういうふうに言われると、決して撥ねつけることが出来ないを知っていた。

「（……ナナ、あなどれねー……）」

なんとなくそれを察した圭介は遠い目をした。彼自身も、計算でのボケや空気の読めないフリをすることが多々あるので、似たような雰囲気はわかる。

「赤星^{あかほし} 洗^{ほのか}ちゃんでしょう。ほのちゃんって呼んでもいい？ もう呼んじやったけど」

「べ、つに、悪いことはないけど…」

ついでだ、と言わんばかりに、七緒は他の女の子にも顔を向けた。

「月野さんは、秋穂ちゃんて呼んでもいい？」

まさか自分にまで言われるとは思ってなかったらしく、月野は少し身を引いたが、頷いた。

「藤崎さんは米子^{まいこ}ちゃん…でいい？」

「私は、ヨネって呼ばれる方がいいかなあ。戸塚くんはあ、ナナって呼べばいいのね？」

「うん。よろしくねえ」

「よろしくう」

マイペース同士気が合うのか、そこだけ花が散っているような空気である。

いきなり目の前で始まった挨拶（？）に、ぽかんとしていた小林先生だが、月野に「せんせ、起きてる？」とつつかれて、ようやくハッとなった。

「おいこら戸塚、先生の前でナンパしない！」

「えっ？ ナンパじゃないですよ？」

「いいや、ナンパだ！ 充分ナンパだ！ よし決めた、戸塚は俺と組め！」

えーっ、と、鳩が豆鉄砲食らったような顔で叫ぶ七緒を、小林先生は引きずって歩きだす。

いつの間にか周りを囲っていた野次馬たちが、モーセの十戒かのよう道を開けた。

「いいかあ、男女は7歳にしてうんぬんかんぬん……」

「えっ、えっ、うそお、ほんとに！？ 武本さんっ、おれっ、あなたのパートナーだよね！？」

「……ごめんね、戸塚くん……私……助けられない……」

「やだやだ、怖いよー！ 助けて、ハチー！」

「……ごめん、助けらんねえ」

「そんなあーっ！」

七緒の悲鳴の後、一瞬静まり返った校庭が――ワツと沸いた。

半泣きで啞然とする七緒は、いきなり沸き起こった笑いが何かかわからずに、きよろきよろと辺りを見回す。

遠巻きに眺めていたらしいクラスメイト、栄人や赤星たちも、ゲラゲラと笑っている。武本だけ、困ったような、けれどおかしくてたまらないような、そんな笑顔だった。

「戸塚アホだわー！」

「助けてやれよ中村あー」

野次なんだか歓声なんだかわからないノリの声に、七緒が挙動不審になる。

その姿にまた笑いが起きて、妙な連鎖が起きる。

「え、えー、何、この雰囲気」

「戸塚、お前人気者だなあ」

えっと声をあげて、首根っこを掴まれたまま、小林先生を見上げる。

「今のどこにその要素が？」

「……うーん、そういうアホっぽいところだろうけど」

七緒を解放すると、小林先生は「散れ！ ほれ、パス練しろ！」と、ごちゃごちゃになった生徒たちを整理し始めた。残された七緒は、栄人たちの元へ戻る。

「解放された！ これはいいの？ 先生にしごかれなくていいの？」

「いんじゃない？」

飄々とそう言う栄人の横で、赤星が腕を組んでじと目になっているのに気付いて、藤崎がごろりと笑った。

「代わりにほのちゃんがしごいてくれるってよー」

「うわあ、でも、先生よりは、ほのちゃんの方が!」

早速あだ名呼びかよ、とみんな笑い、七緒も照れ笑いする。

ふと、その円から外れている武本の姿に気が付いて、彼女の前に歩み寄った。

切りそろえられた前髪の間こうから、黒い瞳が見上げてくる。

昔から小柄な方だったので、なかなか見上げられる構図にはなれておらず、妙に気恥ずかしい気分になった。

「――あのさ、さっき言えなくってさ……武本さんのことも、名前……優子ちゃんと呼んでいい?」

名前を、知っていたのかと。そう驚く武本を置いてきぼりに、周囲が変な盛り上がりを見せる。

「出ました、ナナっちの口説き文句ー! いやーん!」

「圭介きめえ」

「ああもう、こういう男子初めて見る! おかしいこの子!」

「あっ、てゆうか、私も武本ちゃんのこと名前で呼びたいなくっ
て思ってるんだけど、ダメえ?」

「あ、私も。タイミングなくてー」

「オレも!」

「てめーは便乗すんな」

わいわいと騒ぐ声にうろたえる武本。

こういう囃したてるような雰囲気は、苦手だ。

小林先生に「元の位置に戻れ」と言われたはずのクラスメイトたちの視線が、またもこちらに集まっている。

思わず涙目になってしまって、俯く。

するとあろうことか、七緒はしゃがんで顔を覗き込んできた。おま

けに手まで握られている。

「別に、変な意味じゃないんだ。ただ、友達が欲しくて――」

彼が何やら言っているようだが、聞こえない。周りが驚いたようにざわめくのも、武本には聞こえなかった。

七緒としては、小さい子と話すときの感覚でしゃがんでしまっただけなのだが、すっかり彼女の体の横にあった手をとってしまった。構図としては、子供に何か言い聞かせる時の親のような感じで。

しかし傍から見れば、高校生男女。離れたてていたクラスメイトたちがちよつと引くくらいに、恋人、もしくは交際を申し出る男子と、恥ずかしくて受け入れられない女子にしか見えなかった。

武本は、こんな状況(?)に陥るのは初めてなので、ぶわりと赤面する。

早く手を離して欲しくて、というかこの場から逃げ出したくて、ぶんぶんと首を縦に振った。

「わあい、ホントお？　じゃあ、おれのことナナって……………あれ？」

顔を綻ばせて立ち上がった七緒は、ようやく、辺りの妙な空気に気がつく。

「えっ、何？　なんでみんなこっち見てるのー？」

「…ナナ、お前……」

栄人が呆れたように呟き、その肩に圭介が手を置く。彼らの表情は、「知ってたよ、知ってたけど」と言っていた。

——ナナの天然は知ってたよ
——ああ、知ってたけども

目で会話出来ちゃった2人は、同時にため息をついた。

「え、なんなの？　なんか変なコトした？　何!？」

生温かい視線の集中砲火に、少年はただ戸惑うしかなかったそうなの（しかし一番戸惑っていたのは、このやり取りの間も手を握られ続けた武本である）。

転校3日目にして、クラスメイト全員に、「天然ボケ・天然タラシ」という評価で受け入れられた七緒だった。

25、教室と保健室

「茜、ナナくんのこと好みでしょう」

4時間目が始まる前、真横から聞こえた会話に、栄人は思わず声の主を見た。

少し呆れた声でそういったのは、いつも茜とつるんでいる月野 秋穂だ。

体育でペアを組む場合、どうやら女子たちは、同程度の体力、運動神経の相手と組むようにしているらしい。

運動部同士、秋穂は洗と組み、文化部同士で茜は米子と組んでいる。優子は、大体世話好きの洗がいるグループに誘われていた。

割とそれも潔いスタンスで良いなあと思っている。

「（中学んときみたいな、女子同士のドロドロ劇…このメンバーなら、見なくて済みそうだな）」

何せ、さばさばした秋穂や茜、控えめで引っ込み思案な武本、姉さんタイプの洗に、不思議ツ子な米子である。

なかなか溶け込もうとしない武本を、無理に引っ張り込むのでもなく、特に仲間外れにすることもなく、ゆったり受け止めている雰囲気も、嫌いではなかった。

大人しそうな武本でさえ、適当にみんなに合わせる形になるよりは、一人の方がマシかなあと思っっているらしい印象を受ける。

人間観察が趣味の栄人は、「このクラスの女は潔い」という結論をだしていた。

しかし、そのバランスを崩すのは、恋愛である。
色恋沙汰のせいで、クラスの雰囲気すら危うくなることを、彼は知っていた。

しかも出された名前が、親しくなり始めた友人のものだ。

「……え、まじで？」

ぎよつとした勢いのままに、思わず口を挟んでしまった。
いきなり横から問い詰められて、茜はもちろん、秋穂も目を丸くする。しかし、2人ともすぐに笑ってみせた。

「ちがうわよ、中村。恋愛の意味じゃないの」

「そうそう、この子、3次元に興味ないもん」

きよんとする栄人に、茜は、少し照れたような表情で説明する。

「私、ちょっとオタクなもんで」

「ああ……それで3次元には興味がない、ね」

たった一言でなんとなく察してしまう自分が憎い。

しかし彼は、姉がオタクと言われる人種なので、ある程度慣れている。

妹も姉の影響を受けそうで、ちょっと心配な今日この頃だ。

「なんていうの、ナナくんのキャラが好きなんだよねー。リアルであんまああいう子いないじゃない」

「まあ、それは俺も思うけど」

「だって最近、茜、ナナくんたちの話ばかりしてるもんね」

秋穂の言葉に、茜は固まり、栄人は首を傾げた。

「たち？」

「中村とか明石の話もしてるよ。よくつるんでるでしょ？」

茜があわあわと何か言いたげに動いているが、秋穂は気付いていない。

「ああ、話してる時とか、たまに横でお前笑ってるもんな」

「気付いてた！？ わー、恥ずかしい！ だって、男の子の会話って可愛いんだもの！」

ぎゃおーと叫んで机に突っ伏す友人を見て、秋穂はけらけらと笑った。

「……月野も、ナナミみたいなトコあるよなあ」

「えー、何、どういう意味」

「そゆところそゆところ。秋穂も割と周りとの動きがあってないっていうか、違う方向見てる感じのときあるよ？」

「うそお、それをいうならヨネちゃんでしょ？」

クラスきつてのマイペース女子、米子の名を挙げる秋穂に、栄人と茜は同時に首を横に振ってみせる。

「ヨネちゃんのあれはね、割とけじめがついてるボケなのよ」

「そうそう、藤崎って、ぽやぽやしてる割に、しめるところはキツチリしめてる感じ」

「で、秋穂とかナナくんの場合は…」

「なあ……」

変なぼかし方をする2人に、生温かい視線を向けられて、秋穂は「何このアウェイ感」と呟いた。

「私、天然ボケとか天然タラシとか言われたことありませんから」

「あー、もうナナはそういう認識なんだなあ。あいつ、俺とか圭介よりも、女子に対してのが楽そうなんだよな」

「心配しないで、ナナくんをとったりしないから」

栄人は「は？」と眉をひそめる。茜は「しまった」という表情で、口を押さえた。

「何、心配しないでって…」

「ごめん、超ごめん。今の忘れて！　口が滑ったあああ！」

またも机に突っ伏す茜に、栄人と秋穂は顔を見合わせる。

「野村も案外不思議ちゃんだよな」

「茜の言ってること、たまにわかんない時あるよ？」

わからなくていい、綺麗なままの秋穂でいて！　と叫ぶ茜。

栄人は、オタクって、こういう自己完結的なトコあるよなあとしみじみ思うのだった。

ちなみに、噂の七緒本人は、ただいま保健室にいたりする。

「大丈夫かあー？」

半笑いの、けれど心配そうな圭介に覗きこまれて、七緒は顔を背け

た。

「けーすけ、はずかしいからあんまりみらいれ……」

既に血で染まったティッシュを取って、鼻の下にそっと手をやる。

「優子ちゃん、もうらいじょーぶから？」

「うん、大丈夫みたい」

「おいおいおい、なんでオレには恥ずかしいつつって顔見せないのに、武本ちゃんには見せるんだよ」

普通逆じゃね？　と言う圭介に、優子も小さく頷いた。

——いや、精神的にはまだ女なんで、男子の圭介にスプラッタな顔を見られるのはキツイんです：

そうとも言えず、曖昧に笑う七緒。

「にしても、期待を裏切らないというかなんというか」

「あんなに大量の鼻血だすひと、私、初めて見たかも……」

関心したかのような優子の口調に、七緒は彼女を恨めしげに見つめた。

「優子ちゃん、言わらいれ。恥ずかしくて死にそう……」

「ご、ごめんね……」

授業の最後にやった、ハンドボールの試合。

わらわらと人が動く方向に適当に動いていた七緒は、圭介からの突然のパスを、顔面でキャッチしてしまった。

結果、圭介に支えられ、保健委員の優子に付き添われて、鼻血を流しながら保健室までやってきたというわけだ。
皮肉なことに、授業前の栄人の筋書きが、こんなところで現実になっってしまった。

「あらあらあら」と声がしたので振り向くと、開けっ放しのドアの向こうに、おばあちゃん先生が立っていた。

「どうしたの、鼻血だしちゃったの」

「こいつ超器用で、顔面でボールキャッチしたんすよ。大ウケしました」

「ウケねらったわけじゃらいんらけろ！」

マンガのように鼻血を噴く七緒に、クラスメイトたちは心配するより先に、思わず爆笑してしまったのだ。

くすくすと笑いつつも、おばあちゃん先生は七緒の顔を優しく濡れタオルで拭い、血が止まっていることを確認した。

「冷やした方がいいわねえ。腫れちゃうかもしれないわ、ボールが当たったなら。ちょっと待って、氷あげるから」

おばあちゃん先生が冷蔵庫を開けて作業するのを眺めながら、優子は七緒に眼鏡を差し出した。

「はい、これ：ちょっとフレームが曲がってたけど」

礼を言って眼鏡をかける七緒を見て、圭介が言った。

「ナナって眼鏡とると、ちょっと雰囲気変わるよな」

「え、それは良い意味、悪い意味？」

「どっちでもなくてさ。意外につり目だったんだなって、そんだけ。ていうかさ、体育のときは眼鏡外せば？ 邪魔だろ」

うーんと七緒はうなる。遠慮勝ちに、優子が自らを指した。

「私は、体育のある日だけコンタクトだけ…」

「あ、そーだよ、優子ちゃんいつも眼鏡だもんね…でもなあ、昔試したんだけど、どうもコンタクトが合わない体質なんだよね…」

まず目に入れる時点で怖いし、入れた後も異物感が気になって仕方がないという七緒。

「外したら目え真っ赤でさ…一応目薬とか色々試したんだけど、弟に「そんななるくらいなら眼鏡でいーじゃん」って言われて、まあいいかって」

「えっ、ナナ、弟いたの？ ほんと？」

「そこ食いつく？ いるよ、うそついてどうすんのよ」

えー だって、と口ごもる。

優子はなんとなく、理由がわかった。

「弟とかじゃなく、お姉さんと妹に囲まれて育った、女系家族の末っ子みたい」

思わず、といった体で呟かれた言葉に、男子2人は目を丸くした。

「そう！ まさにそういう感じだよ、ナナは！

「やけに設定細かいね！ しかも末っ子って…、2人兄弟の長女…じゃない、長男ですよ、おれは」

「えー。全然しっかりしてないじゃん」

「そんなことないもんっ」

寮で家事をする七緒を知っていればまた違う結論が出るのだろうが、クラスでは今日で完全に、天然なマスコットの存在として位置づけられている。

「戸塚くんって甘いもの好きそうだね」

ぶうぶうと言いかう2人を見て、唐突に優子が言った。これもまた、言う気はなかったのにウツカリ、という感じの呟きだった。

圭介が「確かにー！」と笑う横で、七緒は目を細めた。

「好きだけど……優子ちゃん、」

「……何？」

「（名前で、ていうかなナって呼んで欲しい、けど。それは、わがままかしら。でも、戸塚くんなんて言われてもなあ……）」

——ああ、考えてることが手にとるようだ

優子よりも多少なり付き合いの長い圭介は、微笑ましげに彼らを眺める。

頭の中で妥協案が出たのか、七緒が口を開いた。

「あの、ね。おれ、みんなからナナって呼ばれてるんだけど……」

バレない程度に嘖き出す。

だって、どうしてここにきて遠慮するのかわからない。

「（あんだけ武本ちゃん困らせといて、今更ー！ 面白いなあ、こいつ）」

暗にそう呼んで欲しいと言われていることに気がついたらしい優子は、しかし気付かないフリをした。
明後日の方向を見て、そっけなく言う。

「…へえ、そうなの」

「――ぶふー！ 武本ちゃんも、そこはもう呼んでやれよ！ おつかしいわー、この2人！」

早く教室に戻ってこのやり取りを栄人に教えてやりたい。きっと笑う。いや絶対笑う。
1人でにやにやする圭介は放っておいて、七緒はがっくりと肩を落とした。

「（通じてない…今はこっちからの名前呼びが限界かな…でも、戸塚くんって呼ばれるのヘン！ しっくりこないわー！）」

優子は優子で、彼の思考が半分くらい読みとれてしまい、もじもじと座り直す。

「（通じてない…とか思ってるんだろな…ごめんなさい、わかってます。でも男子をあだ名呼びしたことなんてないんで、絶対無理。ごめん許せ！）」

圭介はそれを見て一層にやにやする。

「（通じてない…と思われてるのがわかって申し訳ない気持ちもあるけど、男子をあだ名呼びなんて出来るか！ とか思ってるんだろーな。ここはオレが一肌脱ぐかなー、でもこのままでも面白いなー）」

「」
ガラガラと氷を入れながら、おばあちゃん先生は笑った。

「若い子は可愛いわねえ。はい、七緒くん。氷」

冷たい氷を鼻にあてがおうとして、眼鏡がずれた。あずかろうかという圭介の申し出を、「むーん」といううめき声で断る。

「両目0・1なのでー、眼鏡外すと授業受けられないし、色んなものに蹴躓くの」

「思った以上に悪いんだな、目。オレ、1・5だからなー、目が悪い奴の気持ちとか全くわからん」

「羨ましいよう…」

「いいね、目が良いって…」

眼鏡組から恨めしげな表情で見られ、圭介は「いいだろー！」と笑って立ち上がった。

「おばあちゃん先生、ありがとうございましたー」

「あざっしたー」

「ありがとうございます。訪問記録書いておきました」

三者三様の挨拶をして、生徒達は授業に戻っていく。

その背中を、おばあちゃん先生は、やっぱりここにこ見つめていたのだった。

閑話

「もう我慢出来ません！ あいつにはうんざりです！」

「落ち着けて」

「205コンビもめんどくせーし！ なにより智ちの間抜けがあああ」

朝ご飯の片づけを終えた七緒は、通りがかった部屋から悲鳴に近い声が聞こえてきて、思わず立ち止った。

103号室、ということは、葵の部屋だ。

「（叫んでるのは……光流先輩？）」

なかはる 中春 ひかる 光流は、303号室の2年生だ。口が悪いが、誰かがボケだと突っ込まずにはられない性質で、同学年と先輩からは、いじられキャラで通っている。

「どうしたのかな」

「サトのことじゃね？」

独り言に返事が返ってきて、しかもそれが耳元で囁かれたものだから、七緒は飛び上がった。

「きゃっ！ あーもうびっくりしたあー、またですか！」

振り返ると、やはりというかなんというか、にやにや顔で立っていたのは、雪弥だ。

「ゆーきゃん先輩、いつか死ぬほど驚かせてやりますからね」

「いやいや、そこまで恨まれることしてないだろ？」

「これから2年間、こういう小さなびっくりが続くとすると、多分1回で返そうとしたらそのぐらいの驚きになるはずですよん」

「お前真顔で何言ってるの!？」

何故だかこの2人は、顔を合わせる度に、ミニ漫才のようなやり取りをしてしまう癖ができていた。

性格も趣味も似ているとは言えないのだが、お互い相手に「彼ならツッコむ(ボケる)」だろう」という、妙なイメージを持っているらしい。

一呼吸おいて、「ところで」と雪弥は言った。

「今日、朝飯あったの？」

「ええ、おれが作りました。ハムエッグと海苔ですけどね」

「：そう：片付ける前に呼んで欲しかったけど」

「アオさんが、ゆーきゃん先輩はきつと寝てるって言ったので。早起きした人たちだけで食べようっていうことに……あ、海苔とご飯ならありますから、どうぞ」

「そういう「ご自分でドウゾ」的なのが嫌なのー! オレは用意されたものを食べたいわけ! 自分で海苔だして食うのは嫌なわけ!

ってゆーか何故アオさんの何の証拠もない言葉を信じたし!」

「王様ですか! 用意されないと食べないって…」

「じゃあいいよ! 何もしなくてもいいから食堂にいてよ!」

「ただの寂しがり屋じゃないですか!」

大体、それがまかりとおるなら、今まで一体どうしていたんだと聞きたい。日曜の朝は各々でどうにかするルールである。

そう問うと、何故か雪弥は胸を張って答えた。

「もちろんアオさんとかが食べる時を狙って」

「便乗してたんですね」

「そうだ！」

「力強いな！　だったら今日も早く起きれば良かったじゃないですか」

「そ、それはだね、大人の事情というのがあるんだよ、ナナくん」

一瞬、口籠もったのを見逃さず、七緒はにやりと勝ち誇った笑みを見せた。

「知ってますよ、昨日、門限破っておっかさんに怒られてましたね」
「昨日、てゆうか、むしろ今日、だな」

雪弥は苦笑いで、外泊届を出したつもりが、部屋に置きっぱなしになっていたことに気付いて、慌てて帰って来たのだと説明した。へらへらしているようで、案外細かいところできっちりしているらしい。

しかし、慌てて、とは言っても、寮に着いたのは日付が変わる頃だったので、おっかさんにこっぴどく怒られてしまったのだ。

「お母さん」と苗字をかけたあだ名を持つ彼に敵うものは、銀杏寮にいない。

「怖かったわあ、おっかさん。静かに怒るからさあ…方言がでるしね、あのひと」

おっかさんは長崎出身だ。東京に出てきて長いようで、普段はあまり方言らしい方言を使わないが、怒るとでてしまうらしい。めったに怒らないが。

「怖いんだよね、おっかさん、静かに怒るし…九州の、あの勢いの良い感じのなまりで、静か々に叱られんの超怖い」

「先輩が悪いんですもん、しょうがないです。おっかさんは例え九州のお人でなくとも、絶対怒ったら怖いと思いますし。」

それに、怒ってくれるうちが花だって言うじゃないですか。心配してたんですよ」

「え、なあに、ナナちゃんも心配した？」

「いええ、おれでなく、赤城先輩や加賀くんやおっかさんが」

「……………」

「むしろ3人以外はノータッチでしたね」

「……グレてやろうか……」

雪弥が目を細め、肩を落としたその時――

「お前らなあ、ひとの部屋の前で掛け合いすんなっつの！」

103号室のドアが、勢い良く開けられた。

呆れたような怒ったような（多分これはポーズで、実際には怒っていない）顔の葵が、仁王立ちしている。

「雪弥、お前ねえ、入ってくるなら入ってこい！ 七緒を巻き込んで嫌がらせすんな」

「えっ、これ、嫌がらせになっちゃってたんですか！？」

「つかナナ、無自覚だったの？ オレはてっきり分かってやってるもんだと……じゃなきゃ人の部屋の前で、あんなに喋らねえよ」

「ナナちゃんはそのことしないよな。悪いのは雪弥だ」

「ひっでえええ！ ヒイキっすよ、それ完全ヒイキっすよ！」

文句を言いつつも、雪弥は葵を避けて、彼の部屋に入っていく。

葵の部屋は、せっかくの一人部屋なのに、何故だかいつも彼以外の誰かが居座っている。

それは、光流のように何かを相談してきた人だったり、雪弥のように寛ぎにきた人だったりする。

「雪弥、お前だって一人部屋のくせに、なんでわざわざ俺の部屋で寛ぐかね」

七緒も招き入れ、葵が諦めたような声音で言った頃には、雪弥はすでに二段ベッド上段に転がっていた。彼の定位置のようだ。

「アオさん、ゆーきゃん先輩はウサギさんなんです」

七緒の突飛な言葉に、葵も雪弥も、床に座る光流も、きょとんとした。

「つまり、寂しがり屋なんですよ。ウサギだと思えば、可愛いものでしょう？」

「…なんか、ちょっと棘を感じるのはオレだけかい、ナナちゃん」

「え？ 何がです？」

本当に悪気のなさげな七緒を見て、光流は感心したように唸る。

「雪弥を可愛いと表現する奴がいるとは……ナナ、お前、案外大物だなあ」

葵も頷いた。その言葉で表すには、雪弥はアクが強すぎる。

「ところで、光流。今の話だが」

非常に不本意だ、という表情の雪弥は放っておいて、葵は光流に向き直った。

「部屋変えに関しては、俺じゃなくておっかさんに許可もらわないといけないし、第一、サトが反対するだろう？」

顔をしかめる光流の横で、七緒が声をあげる。

「えっ、光流先輩、サトさんと喧嘩でもしたんですかぁ？」

光流のルームメイトは、確か宮崎 みやざき 智 さとし だ。

口数は、光流や雪弥に比べて少なく（この2人がお喋りなだけかもしれないが）、春風のようにまったりした印象の青年である。

「どうしてですか。お2人、仲悪いんですか？」

「仲悪いってわけでもないんだけどさあ…同じクラスで同じ部屋で、いっつもあいつの顔見てんのが疲れるんだよ。今日だってさ…」

「おい、智。ナナが朝飯作ってくれるっていうから、起きようぜ」
「……………」

「さーとーし！ 起きろ！」

「…うるせー」

「じゃあオレ、食いに行くからな？ あとで「目玉焼き作って」とか言うのナシな？」

「…それとこれとは話が別だべ」

「なんでだよ！ オレはお前のオカンか！？」

「気持ち悪いこと言うな。死ね」

「朝起こしてやったのに「うるせー死ね」だぜ！？ しかもオレに飯作れとか！ 料理出来る癖にめんどいとか！」

1人芝居を終えた光流は、息を切らしながら訴えかけた。
普段の印象と違うなあ、と首を傾げる七緒に、葵が説明する。

「智は寝起きが最悪なんだ。健太と同じくらい」

「東條はまだ良いです！ 低血圧だからスロースターターなだけで！ 智は一旦起きればテキパキしてるくせに、寝起きが超悪いから性質が悪い！ てゆうかあいつ、後輩に対して猫被り過ぎ。ナナ、あいつは腹黒いんだぞ。笑顔で脅してくるんだぞ」
「え、ええ〜？」

反応に困る七緒は、ドアが小さくノックされるのを聞いて、「おれが出ます」と慌てて立ち上がった。

ドアを開けて立っていた人物に、小さく驚いた声をあげる。

噂をすればなんとやら、客人は智だった。
色素の薄い彼は、いつもの笑顔で人差し指を立て、「静かに」のジェスチャーをした。

さほど背の変わらない七緒の背中に縮こまって隠れ、そのまま部屋に入る。

そして、本人がきたとも知らず、ルームメイトの悪口を言い続ける光流を、足で小突いた。

「ぎゃっ！ さ、智、てめー…」

「ヒカあ…いつまでもぶすくれてんじゃねーよお？」

「あー、お前そういう態度に出るの？ オレがしつこいみたいなの？
こんなにやろう」

立ちあがって猛抗議する光流を見て、七緒は慌てて葵のそばに寄る。

「部屋替えだど？ 理屈言うな。オレにかつけるんでねえ」

「お前のせいだっつーの！ 自分勝手なのはそっちだろうが！」

「いいだろ、別に。朝は苦手だべけど、それ以外で迷惑かけてねえじゃねえか」

「飯作れとか言うし、ちょいちょいオレに面倒押し付けるだろ！」

大体、朝が苦手とか言っつて、オレ以外には寝起きでも割とソフトな対応だろ」

「そんなくらいでいじやけんでねえよ」

ローテンションの智とハイテンションの光流が言いあうのを眺めながら、七緒は葵に「止めなくていいんですか？」と視線で問いかける。

「いいんだよ、いつものことだ。それに、すぐ終わるから」

「え？」

七緒が聞きかえしたその時、

「ほおか、そんなら別にいいけど、替えたつても。んだけどヒカ、オレはおめえと相部屋がいいんだがなー」

智の言葉に、光流の肩が揺れる。

あれ？ と七緒が思うより前に、光流が挙動不審になりだした。

「それは、さー。むかつきはするけどさあ。別に…お前が替えたくないっていうなら…別にだけど」

「いいんけ？ オレは別におめえの意見をおさまえてまで、このままにいる気はねえけど」

「そんな…オレだって別に…そこまでお前が嫌いなわけじゃないし…」

「話はまとまったかー」

葵の声に、智は笑顔で振り向き、光流はおろおろと視線を彷徨わせた。

「光流がこのままでもいいって言うてくれてっから、この話はなかったことにして下さい」

「光流？ いいのな？」

「はい、……結局、智はオレがついてないとダメなんですよ！」

え、いつの間にそんな話に？ と七緒が首を傾げてる間に、303号室の2人は、それぞれ葵に礼を言っ出て行ってしまった。

「……え、アオさん、今の話の展開がよくわからないんですけど。何だったんですか？」

「つまりさ、この前のお前とナオみたいな感じだよ」

我関せずで雑誌を斜め読みしていた雪弥が口を挟む。

「ナオも光流もさ、相手が喧嘩腰なら向かっていくんだけど、かわされたり相手にその気がなかったりすると、一気にテンションが下がるわけ。」

ま、ナナちゃんと違って、サトのかわし方は、光流の性格を計算してだろうけどな」

「ちなみに、俺は今まで光流に8回、部屋替えを相談されてる」
「8回！？」

「うち2回が205号室の健太・新一らの喧嘩に巻き込まれて、っ

ていうので、残り6回が智について。

それで、毎回こんな感じで丸く収まるわけ。光流は割とストレス多いから、ここでぶちまけてんじゃないかな。

新一たちも喧嘩が多くて、2人ともよく愚痴を言いに来るよ」

「それは……」

——「傍迷惑な奴らだな」

「変なコンビだね、どっちも」

七緒が遠慮して口に出さなかった言葉を、あっさりロウと雪弥は呟いた。

——わたし的には、ゆーきゃん先輩も充分傍迷惑なひとだと思うけど

「…お疲れ様です、アオさん」

キングオブ苦労人・葵に、手を合わせた。雪弥も笑って七緒に倣う。

「お前ら…合掌はやめろ……」

103号室。またの名を、葵相談室。もしくは駆け込み寺。

銀杏寮は、彼のおかげで今日も平和なのである。

閑話（後書き）

九州の言葉は勢がいいⅡ雪弥の独断と偏見です。
智は栃木出身。

26、部活見学をしませう

「さて、ナナくんや」

「なんだい、ハチくんや」

七緒は、つつがなく午前中の授業を終え、食堂にて、栄人と共にカレーうどんをすすっていた。

既に箸をおき、どんぶりに残ったカレー汁を飲んでいた栄人が、唐突にこう言った。

「君が転校してきて初めての月曜日だが、どうかね、学校には慣れたかね」

「ふふふ、何、急に。慣れたよー。クラスのみんな、優しいからねえ」

土曜日の体育の時間、彼がペアに武本おんなのこを誘った事件（そう、小さな事件なのだ、あれは）から、彼はすっかりクラスに溶け込んでいた。「意外と積極的」「ドジすぎて笑える」「割と天然」などの意見が、彼をちよつとした人気者に行っているのだ。

さらに、甘いもの好きという発覚後、餌付けの要領で、彼に色々と餌を与える者まで出てきた。

「あ、そだ、さっき青木くんから飴もらったー。ハチにもわけてあげましょう」

なんて、ニコニコ笑って言うものだから、テーブル越しに頭を撫で

てやる。

人気者、というよりは、マスコットとして可愛がられていると言った方が近い。

「もらうけど……いや、話を戻そう。」

つまり俺が言いたいのはね、そろそろ部活見学をしてみないかということなんだよ」

「ブカツ？ あーそっか、そろそろね。おれ、運動部はだめだな」

「いや、それはこの前のでわかってる」

パスをとれないのも才能だよ、という友人を睨みつけてから、音をたてて汗を吸う。

「文化部でも、あんまり忙しいのはヤダなあ」

「吹奏楽なんて、体育会系文化部と呼ばれるもんなあ。ま、そこは女子ばっかみたいだから俺だってヤダ」

そういえば、と七緒は首を傾げた。

「ハチって何部だっけ」

「帰宅部」

「……………よくもひとの部活のことが言えたもんだね」

栄人は乾いた笑いを返す。

彼が言うには、ぼーっとしてたら、いつの間にやら部活の体験入部期間を逃し、入部届け提出ラッシュも逃したらしい。

「いやー、俺は割とクラスに馴染むのに一生懸命で。だから、ナナに便乗して部活見学しよっかになって」

七緒にしてみれば、ありがたいことだった。ひとりで部活見学なんて、ちょっとハードルが高い。

「文化部って何があるの？」

「んーと、まず家庭科部だろ、華道部だろ、茶道部に…この辺は女子が多いな。あと、放送部とか新聞部とか、漫研、文芸部、PC部、軽音…ま、今パツと思いつくのはその辺りだな」

「たくさんあるんだね。放課後回るとしたら、今日から？」
「だな」

というわけで、部活見学に回ることになったナナハチコンビだが。

「おっふたっりさん！ つれないじゃねーのよ、このオレを誘わないなんて！」

6限が終わった途端、圭介が駆け寄ってきて、2人の背中をバシバシと叩いた。

「お前ソレどこ情報だよ！ 言っていないのに！」

「ひと呼んで情報屋・圭介！」

「誰も呼んでねーわ。大体、お前はサッカー部だろうが」

「いーじゃんいーじゃん、兼部しちゃいけないわけでもないし、今日はサッカー部ないし。ナナー、一緒に遊ん…回っていいだろう？」

「お前遊ぶつもりか」

「いいよー」

「さすがナナちゃん話がわかるっ。それに比べて…」

「おい、こっち見んな！ ナナも了承すんなよお」

「いいんじゃない？ 多い方が楽しいもの」

「さてはハチ、ナナと2人で回ってたかったのかっ」

「いや、お前と回りたくないだけだ、騒がしいから」

一気に5人くらいひとが増えたような賑やかさに、七緒は苦笑する。栄人もなんだかんだ言いながら、圭介のテンポで話すのが嫌ではないらしい。

席順のせいかなナナハチでつるむことが多いが、2人は割とのん気なので、圭介がいるとき程盛り上がりはしない。

「（ハチはツツコミだなあ…でも、圭介もどっちゃかっていうとツツコミだなあ…ハチがツツコミと見せかけとボケか！ ……ん？）」

いつものように、漫才変換していた七緒は、ふと、視線を感じて辺りを見回す。

ななめ前の席の茜が、こちらをじっと見ていた。

「茜ちゃんは、何部なの？」

聞いているのだと思って声をかけたのだが、茜は驚いて肩を震わせた。

「えっ？ なに！？」

「あ、いや…茜ちゃん、今の話聞いてたんじゃないんだ？」

明らかに動揺した様子の茜に、話しかけた七緒がびっくりだ。

「あっ、ううん、聞いてた聞いてた！ 部活でしょう？ 私は漫研なの」

慌てて取り繕うように笑う茜。

「野村ちゃん漫研なんだ。へー」

圭介は意外そうな顔をしたが、栄人は曖昧に笑った。

「ね、じゃあさ、最初は漫研に見学行かない？」

えっ、と声をあげたのは、栄人と圭介だけではなかった。

「漫研に？ うそ、やめといたほうがいいよっていうかやめて」

「拒否っ！？ え、なんで？」

髪を振り乱すほどに首を振る茜に、七緒は首を傾げてみせた。

「なんでって…だってナナくん、別にオタクじゃないでしょう。100パーついてこれないよ」

「オタクかはわかんないけど、マンガとかアニメとか好きだよ？」

「「好き」じゃダメなのよ…「愛してる」くらい言えないと！」

「そ、そうなんだ……」

この時点で、七緒と圭介は若干引いていたのだが、栄人は全く気にしてないようだった。

「ちなみに男女比どんくらい？」

「めげないわね……男オタクは、大体PC部に行くみたい。14人中2人だけ。ま、私に拒否権があるわけでもないし、来るだけ来てみる？」

こうして、漫研に見学に行くことになった。

「部長！、見学の子がいるんですけど」

「えっ、まじで」

部室棟に入っすぐ右に、漫画研究部部室はある。

扉の外に3人を待たせておいて、茜は部室に飛び込んだ。

後輩の少し切羽詰まった雰囲気、漫研部部长・天草あまくさ 立花りつかは背筋を伸ばした。

おさげ髪に黒ぶち眼鏡の立花が姿勢を正すと、まさに一昔前の「女学生」である。

「1年でしょ？」

「同じクラスの男子です」

「男子かっ！ え、腐っては…？」

「ないです」

「総員！ 危険物を隠蔽せよー！」

すでに部員達はこちらに注目していたので、さっと立ち上がり「ヤバそうな」ものを片づけにかかる。

薄い本は机の中にしまい、そっち系の原稿はカバンの中に隠す。素早い部員たちの動きを眺めながら、立花は目を細めた。

「トラウマになりかねんからな、ノーマル男子には…」

「ですよね。うちの兄もうっかり私の原稿見て、顔面蒼白になってました」

「でも、なんだってこんな時期に見学なの？」

立花の当然の疑問に、茜は、見学者のうちの1人が転入生なのだと説明した。

「見学者のうち、って…何人いるの？」

「3人です。リッカ先輩、対応出来ます？」

立花は勢いよく首を横に振る。彼女は、二次元の男の子ならバッチコイだが、現実リアルの男子が大の苦手なのだ。漫研所属の男子2名に対してのみ、苦手意識を持たず接することが出来る。

茜はため息をついた。部長ができてくれないなら、彼らを連れてきた自分が相手をすることになる。

「（…：なんか、変なコト言ったらどうしょ。部室ホームだから、つい油断しそう）」

「あちゃー、男子組、まだ来てないんだよね…ノムちゃん、頑張っ
て」

「いえっさー、ボス…」

「入って良いよー」

5分も何をやってたのだろうと思いつつ、入室許可が出た3人は、扉を開けた。

紙の匂いと、インクの匂いを吸いこんで、七緒は自然と頬が緩む。

「（図書館の匂いに、近いかなあ…）」

それもそのはず、壁際の本棚には、マンガがびっちり詰め込まれていた。下段には「マンガの描き方」系の資料もある。

「こんにちはーっ、見学させてもらってもいいですかー？」

圭介が元気にそういうと、部員の女の子たちは、どの子も「うわっ」という顔をした。

茜はため息をつく。

――運動部十チャラ男のノリで話すんじゃないか！

引き気味の空気を読み取ったのか、圭介は七緒の後ろに大人しく下がる。

一応、自分のために部活見学をしてるので、七緒は出来る限り好印象の笑顔で、会釈をした。

「1年3組の、戸塚 七緒です。見学させてもらってもいいですか？」

「あ、中村です。こっちは明石。邪魔にならないようにするんで…」

思い出したように、茜が部員を見渡して言う。

「ナナくん…戸塚くんは、転校生なんです。これからいくつか部活を回るみたいなので、ちょっとだけ皆でお喋りしません？」

ちょっとだけ、を強調して、茜は3人を空いている席に着かせた。あんまり周りを見るな、という牽制も込めて。

「（なんか歓迎されてない感じ？）」

「（テリトリーに入られた的な…？ とりあえずお前はあんまりチャラい感じの言動をするな）」

「（オレのせいなの？ そうでもなくね？）」

「（この空気は7割お前のせいだろ！ てめー今すぐ黒髪に戻せ）」

圭介と栄人が目で通じあってる横で、七緒は勧められたお菓子をつまんでいた。

「あ、このクッキー美味しい」

27、漫研にて

「えーっ、中村って案外マンガ詳しいんだあ」

「姉貴がマンガ好きだから、うちにたくさんあるんだ」

「ナナくんも割と知ってるねー」

「おれは、弟がジャンプ買ってたんで…あ、銀杏寮でも回し読みしてるんだ」

「寮！？ 君、寮生なの！？」

「え、はい。そうですけど…」

「こら、ナナ。おびえるなおびえるな」

「茜ちゃん、寮だって寮！ どどど、どんな感じなのか聞いても良
いかな…！」

「ショウちゃん、食いつき方が怖いです。確かにオイシイけど」

「え？」

「なんでもない！ あっ、ナナくん、こっちのお菓子食べる？」

「わーい、いただきますーす」

「ナナ、お前それでいいのか…」

午後4時15分。漫研部部室には、割と楽しそうに喋る栄人たちと漫研の1年生たちと、それを眺める、哀愁漂う圭介の姿があった。ちなみに、部長の立花含め上級生たちは、ちょっと彼らを気にしつつ、各々の作業やお喋りに戻っている。

「（寂しい。超寂しい。誰かオレとも話してちょーだいよ…）」

1年生全員が、彼の無言の訴えに気がついてはいるが、漫研所属のオタクっ娘たちは圭介のようなタイプが苦手であったし、味方のはず

の栄人と七緒も、雰囲気壊したくなって放って置いている状態なのだ。

「(ちくしょう、薄情者たちめっ…)」

所在無さ気にうろついていたら、ふと、話の輪に加わっていない1年生を見つけた。

「(赤いリボン、だから、1年だよなあ)」

じりじりと近寄ってみる、が、彼女は一生懸命に何か描いているらしく、話しかけたそうな圭介に気付かない。

先程の「うわっ」な空気が軽くトラウマになっている圭介は、もじもじと3mの距離を保つ。

これ以上近づいたら、彼女の描いてるものが見えてしまうし、多分それはマナー違反なのだ。

圭介は小さくため息をつく。

「(ナナハチの馬鹿野郎…！ 普段社交性あるのはオレの方なのによう)」

栄人が言ったように、彼は「誰とでも話せる」男である。

七緒は一見積極的に見える行動をしているが、多分「転校生だから」と気を張っているのではないかと圭介は思う。

「(普通ならもっと受け身型な奴な気がする、ナナは)」

それは栄人にも言えることで、七緒が転校してくるまでは、特に仲の良い友達がいなかったことからわかる。

「（案外あいつ内弁慶だからなあ…）」

無難な言葉で逃げる癖がある栄人は、きっと一度も本気で人とぶつかったことはない。

——なのに！　なのに！

「誰とでも話せる男」と称される自分が、何故こんなに弾かれてるのかわからない！

基本的に輪の中心になることが多い彼は、極端に言うと、他人といて寂しい思いをしたことがなかった。

同じクラスの友人もいて、ひと部屋に10人以上が集まっている状態で、なのにどうしてオレは一人ぼちなのだよ！　と心の中で叫ぶ。これが男相手ならなんとかして輪に入っていくのだが、女の子だと敷居が高い。それも、普段はあまり交流のないタイプだ。

喋るより前に弾かれては、手も足も出ない圭介だった。

しょんぼりしつつ、ふと目に入った本棚にかかっている布を、持ちあげようとした——その時。

「ちょっと。そこは開けないで」

作業に没頭していた少女が、小声で、しかし鋭く注意してきた。

「あ、すみマセン…」

ハンズアップで謝る圭介を一瞥すると、また彼女は手元に視線を戻す。

話しかけられたことでちよっぴり勇気を得た圭介は、距離はそのまま、彼女にきちんと向き直ってみた。

「何描いてんの？」

少女がまた、顔をあげる。

ぴよこんと結んだ前髪が印象的な、そう、なんていうか、

「（じゃりん子チエちゃん……）」

「……漫研だからね、マンガくらい描くよ」

そっけなくそう言った声は、口調に反して可愛らしいものだった。

「へー、どういう系？ ファンタジー？ スポ根？」

「何故その2択……」

「はは、好きだから。見てもいい？」

「……どうぞ」

口調に同情が混じっていたので、彼女もこの空気に気付いていたのだろう。

居た堪れない気持ちになりながら、圭介は彼女の隣に座った。

「ルーズリーフに描いどん？」

「これはネーム……下書きより前の段階だから、汚いよ」

確かに、ざかざかとシャーペンで描かれたそれは、見やすいとは言えないものだった。

「この丸いのが人でしょ？ ここが顔の真ん中でさ……」

「そう。……あんまりじっくり見ないでくれる？」

「あ、スイマセン。へーっ、バトルものなんだ。あ、何、このドラゴンかけー」

「……………」

少女はいきなり無言になった。見れば、無表情である。

——えっ、何、マズイこと言った!?

「ごめんなさい謝るから許して気まずくならないで!」

「は!?! 何? 怖い!」

いきなり頭を下げた圭介に、少女はぎょつとして声をあげた。

「えええええ! こ、怖いって何だよ、オレのどこが!」

「えっ……」

初めての形容詞に驚く圭介、に驚く少女。

じいっと見つめられて、圭介はうろたえた。

「な、何だよ」

「……そうだよ、自覚はないよね、フツ……」

なにやらブツブツ呟いてから、少女はキリリとした表情で圭介を見上げる。

圭介の座高が高いわけではなく、彼女が極端に小さいのだ。

「(小学生みたいだなあ)」

「あなたは、私たちから見るとちよつと怖いよ」

多分150センチもいってないんだろうなあ、なんて考えていた圭介は、まともにパンチを食らったボクサーのような表情をした。

「……なんで? オレそんなこと言われたの初めてだぞ」

「金髪だし、いかにも運動部だし」

「…だからって怖いかなぁ？ 別にそんなに不良みたいな感じじゃないし」

「そういうわけではないのよ」

もちろん不良ルックは怖いがな、と彼女は言った。

「タイプが違うでしょう。傾向として、うちの漫研にいる女子及び男子は、あなたのような、集団の中心にいるような人を苦手としている。もちろん不良やギャルのようなタイプも。理由として、私たちオタクはそういうタイプから下に見られることが多く、同時にこちらにも全く違うタイプの人間として初対面から受け入れることを拒む傾向にあることが挙げられる。」

だから、私も、多分みんなも、ちょっとあなたが怖いと感じている」
ぽかんとした。

「怖い」理由をこんなにきっちり説明されるとは思っていなかったし、それを、一見小学生（圭介に言わせれば、じゃりん子チエちゃん）の同級生に、淡々とした口調でされたのだ。

「……ごめん、オレ、今どんなアクションとるべきよ」

「……知りません」

「ていうか君はそんなにズケズケ言っちゃって、オレのこと怖いと思っただけだね？」

少女はきよとんとした。

「いや…第一印象が、という話だよ。話してみたらあまり怖い人じゃないように思った。でもまだよくわからない」

「ああ……そう」

またも淡々と言われ、反応に困る圭介。なんともリズムの掴みにくい子である。

とりあえず、手元に目線を落として、「ねーむ」と言われた描きかけのマンガを眺めた。

「なあ、これ、1ページ目どこ？」

「何、本格的に読む気になってんの？」

「面白そうなんだもん」

「……………」

再度、無表情で押し黙った少女に、ふと、圭介はあることに思い当たった。

——え、照れてんの？

そうか、さっきも確か、ドラゴンがかっこいいとかなんとか、褒めた気がする。

さっきの淡々とした説明口調より、それはよっぽど人間味のある行動ではあるけれど。

「（無言無表情でいられると怖いよ！）」

そうは言えない、世渡り上手な圭介だった。

「あ、圭介がなんか話してる」
「ほんとだ」

ああ、と茜もそちらを向く。割と仲の良い部員が、圭介の相手をしているのが見えた。

「明石…さびしかったんだね…」

「悪いことした気分だね…」

圭介が見た目が派手なだけで（性格も割と派手好きだが）、良い子なのを知っている3組の3人は、良心がちくちく痛んだ。

「あ、このお菓子、あのひとにあげていいよ」

「いいの？ ショウちゃん。ごめんね、明石、話せば良い奴なんだよ」

「あはは、ごめんはこっちだよ。多分あのひと、空気読んであんな端っこにいるんだから」

部員たちにもその自覚はあったのか、それぞれに苦笑を浮かべる。ショウちゃん、と呼ばれたショートカットの少女は、ころころ口の中で飴を転がしながら言った。

「でも、ああいう人種は苦手なので、あとであげてね」

「ハッキリ言うね…」

「私、明るいひと苦手なの」

「……それは、オレらが暗いということですか」

遠い目をする栄人を見て、彼女は慌てて「違う違う」と手を振った。

「君たちはホラ、人畜無害な感じするのよ。見た目だけで判断するのは悪いってわかってるけど、ああいう眩しいひとは近寄りにくい」

一理あるなあ、と栄人は思った。見た目だけで、「ああ、このひとは苦手だ」って思ってしまうことはたまにある。そして、自分と七緒が「人畜無害」と表された理由も、なんとなくわかる気がする。

「（ナナも俺も普通に地味だからなあ）」

「ハチ、これ美味しいよ。ほら！」

「お前本当マイペースだな！ さっきから食ってばっかりだぞ、何しに来てんだ」

笑顔でクッキーを勧めて来る七緒に呆れつつ、甘いものが嫌いなわけでもないので、そのクッキーの箱に手を伸ばした――が、

「^{カラ}空じゃん！」

「あ、これが最後の一個だ」

「うおい。：野村、すまん。ナナが全部食い尽くしそうなので、こいつの手の届かないところに」

「ちよちよちよ、食べてたのおれだけじゃないよ？ ねえ？」

同意を求められた女子たちが、ハツとしたような表情になる。

――しまった、この子のペースにつられて、バクバク食ってた……！
七緒

七緒と言えば、どうやら奈々子のときよりも太りにくい体質になったらしく、何も気にせずに好きなだけ食べている。男体化して良かったなと思えることのひとつだ。

「ごめんって。これはハチにあげますよ。はい、あーん」

持っていたクッキーを名残惜しげに、けれど栄人の顔の前に差し出

す。

「あーんって、お前」と軽く突っ込んで、特に何も考えず、クツキーをくわえる栄人。

「美味しいでしょう？」

「んー」

咀嚼しながら頷いて、漫研部員たちを振り返った。

そろそろ、ちゃんと部活動について聞いておかないと、思ったのだ。

「あのさ、漫研ってどんな……なんだ、どうした？」

1年生どころか、散っていた上級生までもが、微妙な表情でこちらを見ていることに気付き、栄人は困惑した――何、この空気。がん、という音に驚いて見やると、ショウちゃんと呼ばれていた少女が、イスごと倒れていた。

「ええっ！ 池上さん、大丈夫？」

またお前はいつのまに名前を、と思いながら、茜とともに池上を助け起こす七緒を眺める栄人。

起き上がった彼女は、何故か涙目だった。絞り出すような声で、茜に声をかける。

「あ、茜ちゃん……なんてこった」

「だめだよ、ショウちゃん。彼らに他意はないんだから…！」

「え、え、何？」

きよんとする七緒に振り向かれ、栄人は「俺もよくわからん」と

首を振った。

「鼻血がでそうです私」

「右に同じだ畜生」

「無自覚怖い」

「なんという不意打ち」

まわりの声にちょっと恐怖を感じながら、2人は立ちあがった。

「――そろそろ帰ろうか」

「――うん、他の部活も回るし…」

なんか変な空気になってるし、と七緒が囁いたので、「俺の勘違いじゃないんだな」と栄人も小声で返す。

「あ、そう？ そーね、もう40分くらいいるもんね。何のお構いもできませんで！」

「…茜ちゃん、なんで目え合わせてくれないの…」

「気のせいっす。明石ー、もう出るってよー！」

テンション高めで圭介を呼ぶ茜をみて、七緒と栄人は顔を見合わせた。

――なんだろう、この、言い様のない不安…

茜に名前を呼ばれた圭介は、ぱっと顔をあげた。

「あ。なんかもう帰るぽい。行くわ」

立ち上がる圭介に少女は小さく手を振る。

「じゃあね」

「またな、チエちゃん」

完成したら読ませてくれよ、と出来る限り人当たりのいい感じの笑顔で、圭介は言った。

「勇気、ありがとね」

見学組が去った後、茜は野々宮ののみや 勇気ゆうきに声をかけた。

「明石の相手してくれてさ。なんか変な雰囲気になっちゃって」
「うん、それは感じてた」

苦笑気味の勇気は、ペンを置いたついでに、机に手をついて猫のように伸びをする。

「だよねー。漫研にリア充男子が！　って感じ」

「あはは、そうそう。でも、あのひとに彼女はいないと見たな。女の匂いがしなかった」

「女の匂いて。勇気姉さん、何を見てそう思った」

「えー、女の勘？」

「テキトー！」

ケラケラと笑いあって、息をつく。

「まあ、どこかと言えば、やっぱり立ち振る舞いかな。私との距離を測りかねているような感じだったし。あとさ、彼女とかいたら、こういう女だらけの場所でもう少し余裕があるんだと思うんだよね」

出ました勇気理論、と茜は笑う。

勇気には妙に理屈っぽいところがあり、外見とのギャップに戸惑うが、慣れてしまえば笑ってお終いである。

「あ、ところでさ、茜ちゃん。あの…あかし？ 私と話してたひとにさ、私のことなんか言った？」

「へ？ 何も言わないけど…何故に？」

「そうよねえ…なんか知らん、あの子去り際に私のこと「チエちゃん」って言ってきた…」

茜は目を細めた。もし圭介が勇気の名前を知っていたとしても、「チエちゃん」は「ののみやゆうき」に掠りもしない。

「……だ、誰……」

「謎……」

3人は、大きな興奮と小さな謎を残していった。

28、新聞部にて

「お前ら馬鹿野郎！ オレがどんだけ寂しかったか！」

「ごめんね、圭介。泣いて良いよ」

「泣かねーよ！？ そんなに打たれ弱くないよ！ でもさっきのは大ダメージだったよ！」

「いいじゃん、女子と話してたんだし。あの子も同情してたんだろ
うなー」

「ハチ、オレは今：謝罪が欲しいだけなんだ……追い打ちされたいわけじゃないんだああああ！」

寝転がってじたばたし始めた圭介に、栄人はぎょつとした。

漫研を出た3人は、次はどうしようかと、部室棟昇降口にある掲示板の前で、相談しようとしていた。

が、駄々をこね始めた圭介により、相談は停滞している。というか、始まってすらいない。

「馬鹿っ、こんなところでそんなことすんな！ ガキか！」

「いいよーっ、オレまだ15歳のガキだもーん！！」

すでに16歳に栄人は、ぐっと詰まった。そのやり取りを見て、七緒がしゃがみ込む。

「圭ちゃん、ごめんね。ほら、ちゃんとおつきしよ？」

頭を撫でながらそんなことを言われ、圭介は赤面し、ものすごい勢いで立ちあがった。

「だあーっ！　おつきて！　赤ちゃん言葉で！　——圭ちゃんで！」

手を振り払われるわ、勢い良く突っ込まれるわで、七緒はきよとんとした。

「だって、自分で子供^{ガキ}だって言ったじゃない」

「言ったけども！　だからってそんな、そこまで子供扱いされると困りますよ！？」

「妙に堂に入^いってたしな…」

栄人は何故だか感心した表情である。七緒の口調と仕草が、あんまり似合いすぎていたからだ。

「ナナは子供好きなんだ？」

「うん。てゆうかね、年下が好き！」

しん、と静まり返る2人。

「……そんな、イイ笑顔で君は何を…」

「今のは引く、今のは引く」

「なんでっ！？　あ、いや、恋愛とかじゃなくってー、ただ単に、可愛いじゃない。圭介って何月生まれ？」

「？　1月15日生まれだが、プレゼントでもくれるのかい」

「あ、もうこれ圭介は年下よ？　おれ12月だから。可愛いよ。弟のように可愛がるよ」

「どえええええ！？　あっ…この前ナオが怒ってた理由がわかった、ナナに年下扱いされんのってムカつく！」

「それこそなんですよ！？　いいじゃん、おねっ…お兄ちゃんとして慕ってよ！」

「無理だよ、ナナは可愛がられる側だろ？ 撫でくり撫でくり」
「やつ、もう！ 髪ぐちゃぐちゃにしないでよっ！」

きゃいきゃいと騒ぐ2匹は放っておいて、栄人は掲示板に張り出された部活のポスターを眺めた。

4月の新入生歓迎会あたりまで使われていたものが、そのままこちらにきているらしい。

「なあ、軽音とかどうよ」

「いいけど、ハチって楽器出来るんだ？」

目的を思い出したのか、2人も掲示板を覗き込む。

「ごめんウソ出来ない」

「ボーカルか。セクター狙いとは、さすがハチだな」

「なんでそうなる。……あ、じゃあ書道部とかどう？」

「えー、地味じゃね？」

「圭介のじゃなくて、おれとハチの部活だから、地味でいいの」

「ていうか何、お前ら、同じ部活入るのは決定なん？」

思い出したように、そう問われ、七緒と栄人は顔を見合わせた。

申し合わせたわけでもないが、なんとなくそうなるかなー、という雰囲気だ。

「そう…だねえ。おれは、出来ればハチと一緒にいいかな」

「まあなあ。俺も、ナナと一緒にのが心強いわ」

「はいはいはいはい。振っというてアレですけど、イチヤイチヤすんのやめてもらえます？」

ていうか、書道部、活動日水金だってよ。今日やってない」

「まじか。あー、おれ、華道部とか茶道部とか見てみたいかも…」

「俺はゆるいとこならどこでもいいなあ」

「君たち、基本的にやる気がないね」

「……ちよつとごめんなさい、掲示板使いたいんだけど」

わらわらと掲示板に群がっていた3人は、突然そう声をかけられて、慌てて脇に避けた。

振り向いた七緒は、あつと声をあげる。迷惑そうに立っていたのは、

「――岬さん？」

転入した日に出会った、岬 千代子だった。

千代子は一瞬の沈黙の後に、さつと笑顔を作る。

「戸塚くん！ ああ、学校始まって初めて会うね」

「そうだね、全然見ないなあと思ってた」

「4組と3組は階が違うから、こんなものよ」

いきなり、見知らぬ同学年の女生徒と話しだした七緒を見て、栄人はそわそわと後ろに引っ込んだ。

逆に、前に出て七緒を小突いたのは圭介だ。

「あ、ええと、クラスメイトの圭：明石くんと中村くん。2人とも、こっちは岬さん。入寮した日に、お世話になったの」

厳密にいえば、彼女の先輩の羽島に、だが、その辺は端折る。

営業スマイルで「どうもー」と愛想よく挨拶する千代子に、圭介は嬉しそうに笑い返した。

「ところで、3人はこんなとこで何してるの？」

部室棟に来る生徒は、大概が真っ直ぐ自らの部室へ向かう。昇降口でうろうろする者は少ないのだ。

かくかくしかじか、部活見学中だと説明すると、何故だか彼女はションションを上げて、営業用ではない笑顔を見せた。

「じゃあ、うちの部に来てみない？　今、ちょっと部員少なくて」

七緒が「え、何部？」と聞くより前に、何故か圭介が即答。

「行きます！」

「ちょ！」

「待て！」

「いやいやもう行きます。行かせて下さい！」

七緒と栄人のツッコミをもちともせず、興奮気味の圭介は話を推し進める。

「ほんとー？　あ、じゃあこれ取ってから一緒に行きましょう！」

なんかや言う前に決まってしまい、ぽかんとするナナハチ。

千代子が背を向けて掲示作業を始めたのをいいことに、栄人は乱暴に圭介の首に腕をまわし、それより幾分か優しく七緒の肩を抱き、廊下の反対側に引っ張って行った。

「てんめえええ！　何してくれてんだ！　入部することになるのは俺たちなんだぞ！」

小声で怒鳴るといいう、見事な技を披露する栄人に、圭介は半笑いし
てみせる。

「いいじゃん、単なる見学だよ」

「何部かも知らないで！」

「ばか、見てみろよ。岬さん、今何をしてる？」

「はあ？」

ちらりと振り向くと、彼女は「倫葉新聞」と書かれたプリントの、画鋏を取っているところだった。

「――新聞部、か。古い記事の撤去か」

「そーよ、新聞部よ。ってか、ナナはともかくハチ。お前は、岬さんの名前を聞いたことがあるだろう？」

訝しげな表情をする栄人を見て、ため息をつく圭介。

「お前って、本当 女……ていうか人間に興味ないよな。」

この前！ 青木たちと、うちの学年の女子について話してたとき！

岬さんの名前が出ただろうが」

ああ、と、思いだしたんだか思いだしてないんだか曖昧な相槌を打たれ、圭介は唇を尖らせ、力説する。

「美人で！ なんてゆーの、大和撫子な感じで、社交的で、スタイル良くて！ 80点超えだよなって！ 彼女にしたいトップ3に入るよなって話！ したじゃん！ しただろ？」

「あゝ…したかしんねえ」

「したんだよ！ おまつ、あん時 割とノリノリで話聞いてたじゃんかよ」

「すまん、適当に合わせたかも」

「~~~~~っ、つまり！ そんな憧れの岬さんと、お近づきにな

れるチャンスなわけよ！ お分かり？」

それであんなに乗り気になっていたのか、と納得する栄人。

圭介とは高校からの付き合いである栄人だが、彼がミーハーだということは、すぐに知った。

モーニング娘。からAKB48まで、女性アイドルはもちろんのこと、嵐やらSMAPやら、男性アイドルも好きらしい。妙に古い人も知っている。

かと思えば、歌手に詳しくかったり俳優に詳しくかったり、とにかく、芸能人の情報を手広く網羅しているのだ。

さらに、芸能人に留まらず、何故だか学校内のさまざまな情報にも精通しているようである。

ふざけるように「情報屋・圭介」なんて言っていたが、あながち間違いでもないのだ。

「とにかくだね！ オレの顔を立てると思って」

「お前に立てる顔なんてあったのかと言いたいところだが、行くと行った以上仕方ない」

圭介は、しぶしぶ了承する栄人に勝ち誇った笑顔になる。

首を絞めている彼の腕を押し退けて、七緒にも「な！ いいよな！」と声をかけ——彼が、とても冷ややかな目で見つめてきていることに気がついた。

「……え、ナナさん、なんですか、その氷点下の眼差し……」

「別に？ 女子に点数つける男子って本当にいるんだって、感心してただけだよ」

ぎしり。圭介も栄人も、メデューサに睨まれたかのごとく固まる。

石になった2人はそのままに、七緒は立ちあがって千代子を手伝いに戻った。

扉を開けたら、そこには異世界が広がっていた。

「ちょっと!! 校長のインタビュー上がったって言ってたじゃないよ!」

「すいません、そこ担当の井島の奴が寝込んでて…クッキー怖いとかんとか言って原稿書かないんです」

「知るか! 書かせろ! 校長から「僕のインタビューっていつ載るんですか」とかやんわり催促されてんだよ!」

「ジェット君! 良い子だから、紙詰まりしないで頂戴、おおよしよし」

「すいません先輩、ジェット君のインクが残り少ないようです! マゼンダの買い置きがないっす」

「なんかネタはねえかー! 久しぶりに号外作りてえ」

「馬鹿野郎! こんな記事が載せられると思ってんのか! 齒あ喰いしばれ!」

「殴ったね? 父さんにも殴られたことないのに!!」

カオスな光景に、ぽかんと口を開けることしか出来ない。

新聞部部室は、狭いながらも駆けまわる部員、舞う原稿、そして今にも壊れそうな音で鳴くコピー機で、ぎゅうぎゅうだった。

「ちょっと騒がしくてごめんなさいね。あと散らかっててごめん」

どうぞ、と極上の笑顔を見せる千代子に、両脇から小突かれた圭介は、「すいません、無理です」と、土下座の勢いで謝った。

「え、何が？」

「いやもう、オレらが探してるのは文化部なんす、まじすいません」
「やだ、新聞部^{うち}だって文化部よ？」

「言い直します、オレらが探してるのは、ゆるくてまったりした文化部なんす」

「……ちっ、根性無しが」

「今なんか小さく舌打ちと罵倒が聞こえた気がするんですが、気のせいですね。岬さんは大和撫子ですもんね！」

「圭介：現実を見る」

何やら言っている2人は放っておいて、七緒もぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい、岬さん。おれ、寮でちょっと手伝いしてて、あまり忙しそうな部は無理なんだ」

「そうなの、残念だわ。確かに、この部は吹奏楽部に次いで、体育会系文化部って言われるくらいだから、キツイかもね。気にしないで」

「岬さんって、なんか忙しそうな委員会もやってたよね。すごいなあ」

「そんなことないわよ、やってみればなんとかなるものだし」

「新聞、楽しみにしてるね」

「大体、月に2回は発行してるわ。よろしくね」

新聞部をでて、昇降口まで戻った3人は、同時にため息をついた。とりあえず、波風立てずに千代子に謝罪した七緒に、拍手を送る圭

介と栄人。

「ナナって、女子の扱い心得てるっていうか…」

「あはは、典型的な日本人ってだけだよー。間違っても人に点数と
かつけたりしないね」

まだそれ引きずってたのか、と、2人は青ざめる。七緒の笑顔が、
冷たい。

——ハチさん。ナナは、どうやら潔癖なようです

——らしいと言えぶらしいが、これから言動には気をつけないと
ダメだなあ

何か学んだ気がした、新聞部見学(?)だった。

29、茶道部にて

「さっきナナが言ってたさあ、茶道部あたり行かね？」

静かなところがいいな、という栄人に、七緒は頷いた。性格的に、あまり賑やか過ぎる部活は遠慮したい。

「茶道部茶道部……あつた、右手の奥から3番目。月木が活動日だつてさ」

「うん。圭介、行こう」

振り返ると、圭介はまだ体育座りをしていた。

「気のせいな…気もするんだけど…オレ、岬さんに舌打ちされた気がする気がする…」

「まだ言ってるの？ ほら、行くぞ」

はああ、と大きなため息をついて、握っていた携帯をポケットにしまふ。

「気のせいだよな！ とりあえずメアドゲットしたし、いいか。じゃー行こうぜえ」

すたすた歩き出す圭介の背中を見ながら、ナナハチは顔を見合わせた。

「メアドって…岬さんの？」

「いつの間に……」

「すいませーん」

茶道部のプレートがかかる戸をあけて、栄人が奥に声をかける。圭介は、漫研で学習したのか、七緒の背中にぴったりくっついていた。部室は、3歩ほど入ったところから、一段高くなり、畳が敷き詰められている。

畳の匂いに3人が怖気づいていると、障子が開いた。

「何か用？」

顔を出した女生徒は、金髪で化粧が濃く、穏やかな校風の倫葉学園にしては不良っぽい、と有名な3年生だった。栄人は一瞬引いてから、すぐに笑顔を作る。

——確か、このひとでも中村っていったっけ

「部活、見学させてもらっても構いませんか？ こいつ、転校してきたばかりで」

自分と同じ名字を持つ上級生は、「ふうん」と相槌を打つと、そっけなく言った。

「ドーズ。靴は脱いで。ブレザーもそこのハンガーにかけて」
「はい」

「こええ！　なんか、あのひと怖くない？　金髪だぜ！？」

先輩が背を向けた途端、小声でそんなことを言う圭介を、七緒は足を踏みつけてやめさせる。
ていうか、そう言う圭介だって金髪だろうに。

障子の向こうには、他にも女子が3人、そして、

「あれ？ サトさん？」

「えっ、ナナか？」

寮生の宮崎 智が座っていた。

両者、こんなところで会うとは思っておらず、目を丸くする。

「何、宮崎。知り合いなの？」

金髪の先輩に問われ、智が頷いた。

「銀杏寮の後輩なんですよ」

「へえ」

胡散臭げだった彼女の表情が、いくらか和らいだようだった。

「つか、サトさんって何よ」

金髪の先輩の追求に、智は赤面する。

寮で定着したあだ名と、学校での呼ばれ方は、意外に異なることが多いのだ。

「…寮でのあだ名ですよ：オレ、智っていうんです」

「サト！　ぷはーっ、いいじゃん、これから——ここ（茶道部）では

サトちゃんって呼ぼう！」

「ちょ、勘弁してください、中村先輩！」

あわあわと中村に向かっていく智を、七緒は「光流先輩には強いになあ」と微笑ましい思いで眺めていた。

中村、と呼ばれた先輩は、先ほどより優しい表情で、彼らを振り返る。

「じゃ、とりあえず自己紹介。アタシは部長の中村なかむら 真理まり。よろしく」

——このひとが部長かよ！

圭介も栄人もそう思ったが、軽い口調とは反対に、畳に手をついた彼女の礼は、とても美しい。

思わず見とれてしまった2人は、七緒に小突かれ、慌てて見様見真似の礼を返した。

「えー、んじゃ、奥から、山田、野田、柏木先輩ね」

見知った七緒寮生がいるからか、宮崎はリラックスした様子で、女生徒たちを紹介していく。

奥にいた彼女らは、呼ばれた順にお辞儀していくので、3人はそのたび礼を返すことになった。

「で、オレは副部長の宮崎。よろしく」

締めくくりにそう言って微笑むと、智も礼をした。

次は見学側が挨拶すべきなのだが、両端にいる栄人と圭介が、どうも茶室の雰囲気のにまれているようなので、仕方なく真ん中に座る

七緒が口火をきる。

「1年の戸塚 七緒です。よろしくお願いします」

ようやくこちらにも挨拶しなければならぬことを思い出し、2人も礼をした。

「中村 栄人です」

「明石 圭介です。：お願いしまーす」

「へー、あんたも中村っての」

じっと見つめられて、栄人は居心地悪そうにもぞもぞした。圭介がもぞもぞしているのは、すでに正座がキツくなってきたかららしい。

「ふん、よし。えーと、じゃあどうしようか。さっきまで薄茶やってたんだけど」

「薄茶？」

「ひとりひとりにお茶をたてていく奴だよ。回し飲みするのが濃茶だったと思う」

小声で呟いた圭介に、大まかな説明する七緒を見て、智は「へえ」と感心した声をあげる。

「ナナ、意外に知ってんだな」

そういうと、何故か七緒は焦ったように言った。

「お茶をやってる親戚がいて、ちょっとだけ見様見真似でやらせてもらったことがあるんです」

「そうなんだ。他の2人は、全くの初心者？」

もちろん、と2人は怯えたように頷く。

「ふーん、そう」

真理は少し考えた後、「じゃあみんなでもっかい薄茶やりましょう。
宮崎、正客しょうきやくやってくれる？」と智に言った。

「で、野田と山田ときて…そのあと見学3人並んで。あ、戸塚だっ
け、あんたが3人のうちで上座に着いてやんな。みー子は末客やっ
てくれる？」

わらわらと動き出した部員たちに3人も従う。

「これ、どうぞ。懐紙よ、持っておいて」

柏木と紹介された先輩が、それぞれに懐紙を渡して回った。

ひとつにまとめた艶のある黒髪が、金髪の真理と正反対であるが、
どうや2人は仲がよさそうである。

「これ、どうすりゃいいんですか？」

「大丈夫。前の子たちのを見てればいいからね。あ、私が一番最後
なのはね、末席は末席で仕事があるからなのよ」

安心させるように言う柏木に、初心者2人はあからさまにほっとし
た。

隣室に行っていた真理が、お盆を持って戻って来たのをみて、自然
と皆 背筋を伸ばす。

「じゃあね、ちょっと説明するわね」

口火を切ったのは、圭介の隣に座った柏木だった。

「真理が、もてなす側っていうのはわかるよね。彼女はお菓子を配って、お茶を点^たてます。そういうひとを、亭主と言います。

でね、宮崎くんの座った位置は、一番床の間に近いでしょう。そちらが上座なの。真理が「正客」って言ってたわね。そこは茶席の主賓が座る場所なの。茶道の知識があるひとが座るわ。

で、沙耶ちゃん…野田さんの座る場所は、次客と言います。正客ほどではないけれど、茶道を知ってるひとが着く席ね。

山ちゃんの座る三客以降は、とにかく前の人の真似をしてればいいわ。初心者でも大丈夫なところ。

そして、私が座るのは末客と言います。一番下座ですけど、だからって下っ端ってことではないのよ。お盆だとかを亭主に戻さなくてはならないから、ここは初心者は座れないわね。亭主さんと正客さんの双方を良く知る人が着きます」

ここまでおっけい？ と首を傾げられ、ぶんぶん頷く見学組。

「（ちよ、栄人サン……この先輩なんかすげーイイ）」

なんだろうね、特に美人ってわけでもないのに、すげくドキがムネムネする！ と、目で叫ぶ圭介。

一方、栄人と七緒も、珍しく彼に賛同した。

「（さっき岬サンの本性を垣間見たからかもしれないが…なんかすげーイイ！ こう…首の角度が…表情が…）」

「（おれもおれもー！ なんかすごく和むー！）」

——いや、ナナ。お前ちょっとズレてる

圭介も栄人もそう思ったが、憧れの眼差しで柏木を見つめる七緒を見て、押し黙った。

唯一部員の中でその心の会話が聞こえていた智は、こっそり「同感——ナナがズレてるのにも、みー子先輩が魅力的なもの」と頷いたそうなの。

「じゃあ、お菓子の取り方を説明するね。真理と宮崎くんに注目して下さい」

見学組は（智も）、揃って小さく飛び上がり、慌ててお菓子を持っている真理に注目した。

「まずね、亭主が菓子器を持ってきましたね。ここで、亭主さんが礼します。正客はそれを受けて礼を返しますが、他のお客さんは礼しなくていいからね」

菓子器を置き、真理が礼をしたあと、智も礼を返す。つられて礼を返そうとしていた栄人は、柏木の説明に慌ててつきかけた手を膝に戻した。

真理が、お茶を点てる準備が終わるのを待って、智は次客に礼をし、懐紙を取り出した。

「今日は薄茶ということで、干菓子ひがしと呼ばれるお菓子を頂きます。これは何種類か乗っていることが多いので、1種類ずつ取ります。手が汚れたら、懐紙の端っこでぬぐってね」

2種類の干菓子を取った智は、野田と自分の間に菓子器をおく。そうして順繰りに干菓子は回されて行った。

黄緑色の葉っぱを模したものと、菊のような花の形の菓子を、七緒はうっとりとして、栄人と圭介は物珍しげに眺める。

「キレイなお菓子ですねー」

「そうね、食べるのがもったいないわよねえ、干菓子って。生菓子なら見た目的に「早く食べないと」とか思うんだけどね」

「オレ、こういうお菓子、テレビでしか見たことねえ。こういうのっていくらぐらいなんすか？」

七緒が褒めたから、自分も何か言わなければならないとも思ったらしい。

的外れな圭介の発言に、栄人と七緒は赤面し、茶道部の面々は苦笑した、

「お前……この空間でそういう世俗的なこと言うかね、フツー……」

「えっ、えっ、ダメ！？　うわー、考えてみれば失礼なこと聞いた気がする！　ってゆか、こんなにベラベラ喋ったらダメな感じ……ですか？」

くすくす笑う柏木は、顔を真っ赤にする見学組を見て、さらにくすくすと笑った。

「大丈夫、別にいいのよ。ちなみにね、お菓子はスーパーで売ってる、安めのやつなの。ごめんねえ」

「いえ！　全然！　いいんです、別に、えっと、えっと、キレイなお菓子ですね！」

「それおれが言ったのとモロ被りだけど、いいの？」

「あーっ、そっか、じゃあ美味しいです！」

「まだ食ってねえだろ。ていうか「じゃあ」って何だよ「じゃあ」って」

「いいよもういいよ、オレ黙ります……沈黙します……。先輩、言える立場じゃないけど笑い過ぎっすよ」

ツボに入ってしまったらしい柏木を見て、仕方なく智が仕切る。

「あー、もう先輩は放つといて。回ったから食べていいよ。ちっけーから一口でな」

いただきまーす、と、小学生のように声をそろえる見学組に、柏木の笑いがヒートアップする。

つられて、野田も、山田も、さらには智も、くつくつと笑い始めてしまった。

2人と照れ笑いをした七緒は、ふと、亭主の方に目をやった。

——わあ、

真理は。周りの様子はもろともせず、流れるような手つきで茶を点てていた。

かき混ぜるというよりは、縦に切るような手つき。

「（かっこいい、なあ）」

茶碗を手に取り、正面を合わせ——ふと、視線が落ちあつた。

あんまり不躰に見ていたことに気がついた七緒も、誰も見てないだろうと思っていた真理も、一瞬目を見開く。

そして、いたずらっぽく笑い合った。

「はあーあ、長かったー！ 足痺れたー！」

部室棟を出る頃には、6時近くなっていた。すっかり空も茜色だ。一応おっかさんには遅くなる旨をメールしておいたので問題はないが、七緒としては少し不安である。

「大人数でやったからねえ。1人1人にかかる時間が多いから、待ってる間はちよつと退屈かもしれないね、圭介には」

「なーんだよ、その「圭介には」って。偉そうにさー」

「でも、ナナ、お前凄かったな。完璧だったじゃん」

栄人が感心しきった声で言う。七緒は、頭を掻いて苦笑した。

茶道部員たちにも感心されたが、内心、忘れてはいないかドキドキしていたのだ。

「でも、お手本がなかったら、忘れてた動作とかあったよ」

「習ってたの？」

「うーん、ていうかね、おばあちゃんがおっしょさんなんだ、茶道の」

えええ、と2人は驚く。

そうなのだ。七緒の父方の祖母は、自宅で茶道を教えるお師匠さんなのだ。

とても厳しいひとで、七緒が家事全般をある程度こなすのも、幼少期はその祖母と暮らしていたおかげである。

「まじで？「おっしょさん」て、「お師匠さん」、だよなあ」

「なんだよー、だったら完璧に決まってんじゃない！」

「きちんと習ったことはないんだよ。もう2年も会ってないし、お

稽古を見せてもらってたのだって、小学校低学年くらいまでだった。間違えないかドキドキしたよ」

ついでに言えば、祖母は文武両道を地で行くひとなので、茶道・華道・書道はもちろん、剣道や柔道など「道」のつくものは大体身につけていた。

運動音痴な奈々子は茶道を、投げ技に憧れた孝明は柔道を、それぞれほんの少し教えてもらっていた。

「超パワフルなばあちゃんだな」

「会ってみたいようなみたくないような…」

「ふふふ、厳しいけど優しいんだよー」

「ってかさ、寮の先輩にも、やっぱりナナって呼ばれてるんだなー」

「なー。あの人が特別フレンドリーなの？　ていうか、みやざき…だっけ、あの先輩でどこの出身？」

なんだか訛っているようだけど、と問われて、七緒は目を細めた。

「確かねー、サトさんは栃木…だったかな？　あとね、銀杏寮のひとからは大体ナナって呼ばれてるよ」

ああ、寮でもきつと、末っ子扱いされているのだろうなあ、と栄人と圭介は和む。

実際は、末っ子であり長女でもある、みたいな位置づけだ。皆、可愛がると同時に、テキパキと家事をする七緒に敬意も持っている…らしい。

「あ、おれ、こっちだわ」

部室棟を出てほんの少ししか歩かないうちに、そう言って立ち止っ

た七緒を見て、2人はきよんとする。

「銀杏寮、こっち」

「ああー、そっか！ えーと、どうする？ 明日も部活見学するか？」

七緒が茶道部に心惹かれているのに気付いてか、栄人は「まだ続けるか」と問いかけた。

彼は彼で、ゆったりした雰囲気、茶道部が気になっているのだ。

「…どうしようかあ」

「ま、もうすこしどこか見学してからでもいいけど。部活は逃げないし」

「そうだね。おれ、今日先輩たちに色々聞いてみるわ」

そうか、寮って便利だなあ、なんて話すナナハチの間に、圭介が割り込む。

「えーっ、明日はオレ部活なんだけど！」

「……いや、お前は自分の部活行けよ」

「おれたち2人で行くから、気にしなくて大丈夫だよ？」

「お前ら、オレがいなくて寂しかったりとかはねーのか！」

「ねーよ。じゃあナナ、また明日ー」

「ばいばーい」

「疎外感！ あ、ちょっと待てよハチ！ じゃーなっ！」

さっさと歩いて行く栄人と、それに追い付こうとする圭介。

その後ろ姿を見送ってから、七緒も銀杏寮に向かって歩き出した。

29、茶道部にて（後書き）

茶道については全くの初心者なので、文中に書いてあることは鵜呑みにしませんよう。また、間違いがあれば指摘して下さいと嬉しいです（ソフトにね！）

30、勧誘…？

「部活ねえ…：俺のいた頃とは違う部活もあるみたいだね」

「おっかさんは何部だったんです？」

「何部に見える？」

配膳しながら、いつものごとくおばちゃんルックな銀杏寮管理人は、いたずらっぽく笑った。

少し逡巡した後、七緒は真面目な顔で言う。

「ホスト部？」

「——あるかあっ！」

ずっと2人の会話を聞いていた葵は、とうとう突っ込んだ。

銀杏寮の夕飯は、大体7時半くらいからだ。

部活のない者がどんどん食べ始め、8時を回った頃に、部活のある者がわらわらと帰ってくる。

食べ終えた者と席を交代して食べ、その勢いが一段落するのは9時前だ。

大会前や行事前なんかになると、10時くらいまで帰ってこない者が多くなるが、まだその季節ではない。

「運動部ではないんだろ？ もちろん」

草っぽい何かの天ぷらに塩をかけながら、葵が七緒に問いかけた。

「：そうですけど「もちろん」って当然のように言われんのもアレですね」

人数分のご飯をつけながら、七緒は微妙な顔をした。
ちなみに、この炊飯器は一気に10合炊ける、どでかい物である。
同じ物がもう1台と、普通の家庭サイズの物を併用して、ようやく
食べざかりの子供たちの食欲を満たすことが出来るのだ。

「あ、茶道部でサトさんがいたのはびっくりしましたよ。しかも
副部長」

それぞれに茶碗を渡す七緒は、智に向かって言った。

「いやあ、オレもナナが入って来たときはたまげたべ。銀杏の奴と
学校で会うと、どきっとするんはなんでかな」

「あー、あるある」

茶碗を受け取りながら同意したのは、2年生の深見ふかみ 誠司せいじである。
横で、3年の矢木やぎ 晴登はるとも無言で頷いた。

「同学年でもクラス違うと、どきっとするよな」

一昨日、七緒と廊下で行きあった秋川 竜平たつぺいも同意する。双方の友
人もいたりして、気まずいような気恥ずかしいような。

思えばその感情は、家族を見られたくない、みたいなものに近い気
がする。

「だよねえ。あ、たっペーくん、皆呼んでくれる？」
「うーい」

食堂に揃っているのは、3年の葵と晴登、2年の誠司、智。そして下っ端1年の竜平と七緒だけだ。

やはり年功序列なので、竜平は立ち上がって階段まで歩いて行く。この役は、割と面倒なのだ。

銀杏寮は5階建だ。めんどくさがりな者がこの役を任せられると、1階階段下で大声を張り上げて済ませる。が、竜平のような真面目な者は、それぞれの階で「夕飯ですよー！」と叫ぶことになる。

「夕飯ですよー！ 寝てる人知りませんからねー！ 先に食べますよー！ ……吉木^{よしぎ}さん！ 寝てるんすか？ 開けますよー！」

「たっペーも世話焼きな奴だなあ、ほっときゃいいのに」
「たっペーくんは真面目ですからねえ。ナオも見習ってくれればいいのに」

ナオに言いつけてやる、とからかう誠司に、七緒が慌てて「ウソですウソです」と返す。

そのとき、晴登が、並べられた料理に手を伸ばすのが視界の端に映り、素早く阻止。

「もうっ、クロさん！ つまみ食いはダメって言ってるじゃないですか。アオさんだって我慢してるんですよ、たっペーくんたちが降りて来るまで待って下さい！」

「…ちよっとナナちゃん、そこで何故俺の名前が出るのか…」

目を細める葵を尻目に、つまみ食いを阻止された晴登は、不服そうな顔で七緒を見上げる。

「…そんな目で見てもダメですからね」

「……………」

「ダメですからね…そ、そんな捨てられた子犬みたいな顔したって！」

ああ、陥落しそうだと、葵と誠司が顔を見合わせた。

無口な晴登は、言葉でなく目線で物を訴えることが多い。寝ぐせなんだかセツトなんだかよくわからない髪形の下から、つぶらな瞳にじっと見つめられると、大概の人は落ちる。

「（うわー、しかもクロさんの顔、実は好みなんだよなあ！ やめてええ、見つめないでええええ！）」

赤面しまいと顔を背ける七緒。頭の中で、ロウが驚いたような声をあげた。

「——「なんだよ、好みって！ えっ、お前にも好みのタイプなんてあんのかな」

「——ちょおっとー！ 人をなんだと思ってるの！？ 女子高生だったんだよ？ 好みのタイプくらいあるもん！」

全力で反論する。見くびってもらっちゃ困る、一応15年と5カ月、女の子をやってきたのだ。

普段なら一方通行のロウとの通信だが、今回は七緒の意志が強かったのか、天使に届く。

「——「だって、えー？ カピバラみたいな顔じゃねえか？」

「——あんたー！ せめて人間に例えてちょうだいよ！ ていうか、良いじゃん！ カピバラ可愛いじゃんっ！」

初の脳内会話成功がこんな話題かよ、と思わないでもないが、とにかくツツコミに夢中だった七緒は、つまみ食い阻止のために掴んだ晴登の腕を、そのまま掴み続けていることに気付かなかった。

「……ナナ、腕、そんな力込めなくても…」

「えっ？ あ、ごめんなさい」

天使と言いついて合いました、とは言えず、慌てて先輩の腕を離れた——その手を、逆に掴まれる。

声をあげる間もなく、強引に引っ張られ、七緒は、晴登のあぐらの上に尻もちをつくことになった。

小柄な七緒は、すっぽりと背の高い先輩の胸に収まる。

「ぎゃうっ！ ちょっとお、クロさ……っあー！」

七緒が悲鳴をあげた隙に、晴登が素早く天ぷらをつまみ、口に放り込んだ。

さらに誠司と智も便乗しようと手を伸ばす様をみて、七緒は立ち上がろうともがく。が、テニス部副部長の晴登の腕力は、伊達ではなかった。

「うまー。これ、何の天ぷら？」

「うめえけど、ちよっくら苦いなあ」

「ちよっ、そんなパクパク……！ ていうかクロさん、離して下さいよう！」

「……ナナと加賀だったらどっちが小さいかな」

「何の話ですか！？ ちなみに身長は加賀くんのが0.8センチ小さいですけど！」

「この状況で答えるの！？」

葵が突っ込んできたので、ついでに目線で助けを求めるが、頼りになる元・寮長は、写メを撮って笑っていた。

「アオさん……！ 信じてたのに！」

「先輩ってそういうもんだよ、ナナちゃん。君も来年、1年をからかって遊んでみるがいいさ」

「そんなバカな！ うわーん、アオさんがゆーきゃん先輩みたいなイジワル言ってるー！」

「クロ先輩、もうちょつとナナ押さえといて下さい！ これうめえ」

「誠司先輩、1人当たり食べて良い数決まってるんですからね！」

何個食べたか覚えといて下さいよっ！？」

「えっ、ウソ！ 飯との割合が……うん、俺まだ2個しか食ってねえ」

「うそー！ 4個は食べてた！ 1人6個ですからね！ おつかさんにチクってやる！」

「……クロ先輩、その生意気な1年坊、煮るなり焼くなり好きにしして下さい！」

「ナナ：骨は拾ってやつからな」

「代わりに天ぷらも食べといてやるよ」

「サトさん、アオさんまでえ！ てゆーかアオさんが一番酷いッ！」

1年生って損だ、反撃が出来ない！ と喚く七緒を、にやにやと眺める上級生たち。

良く言えば可愛がられる、悪く言えばいじられる七緒だった。

夕飯の片付けは、当番制だ。

2人ずつ、2週間で一巡する計算なので、終わった者はカレンダーに名前を書いていく。順番は適当に、その日暇だった者から。

「（キノコ先輩は本当に不器用だよなあ…）」

今日は藤枝と晴登が名乗りをあげ、使い終えた食器を下げていたのだが、案の定、藤枝が皿を割った。
その後片付けを手伝っていたら、すっかり遅くなってしまった。

「お風呂っ、お風呂…」

「あ、ナナ」

階段を駆け下りる七緒を呼び止めたのは、葵だった。

「今ちようどナナんところこうとしてた。つーか俺まだケータイ聞いてないよな？」

「あ、ハイ。1年とおっかさんとかしか交換してないです。後で持ってくるね。何か用でしたか？」

「用っていうか…」

口ごもった葵は、きよろきよると辺りを見回した、かと思うと、七緒を引っ張って部屋に連れ込む。

「寮内での勧誘は禁止なんだけどさ…部活の話していい？ 夕飯前話すつもりだったんだけど、なんか騒いでたから」

「アオさんも騒いでる側だったと思いますけど！」

勧誘なんですか？ それは別に良いんですけど…アオさんって部活入ってたんですか？」

大体いつ見ても銀杏寮にいたので、てっきり彼は帰宅部だと思っていたのだ。

「いや、まあ超ゆるい部だから、活動らしい活動はしてないんだけど……っていうか、一般の生徒には知られてないんだ、うちの部」
「え……」

胡散臭そうな気配を感じた七緒は、後ずさってクッションを抱きしめて座り込む。

「ちよいちよい、引くな引くな。超マイナーってことだから」
「わかってますけどお。何部ですか？」

「お茶部」

「へ？ ……おちゃぶ？」

七緒は思わず聞き返した。聞き間違いではないらしい、葵はこっくりと頷く。

「そ。お茶部。一応俺が現部長」

「え、え、え……えーっと、茶道部の親戚か何かでしょうか」

「全然違うんだな、これが」

お茶部部长・葵の説明によると。

「お茶部」は、基本的にただのんびりとお茶を飲みながらお喋りする、なんの目的もない部活らしい。

「そ、それは……部活として良いんですか？」

「だから超マイナーだって。部室ももらえてないから、理科準備室使ってるの。」

確かね、一番最初は漫研だったんだ」

きよとんとする七緒。漫研って、あの漫研？

「漫研っていつでも、漫才研究の略で漫研よ？」

「えええええ！　なんですかソレ、そんな部活あったんですかっていうか、そこから何故「お茶部」…！？」

もつともな疑問に、葵は苦笑する。

「漫才から、お茶の間、お茶……っていう連想らしい」

「超ぐだぐだな部だってことはわかりました…。今は漫研の跡かたもないんですか？」

「いや、M-1とかの漫才大会的なのは、みんなが集まって見るよ」「じゃあ漫研でいいじゃないですか！」

「うん、だからボケもツツコミもこなす七緒くんを勧誘してるというわけよ」

「なんか納得がいかない！」

同時刻、中村家では。

「あー！　お兄ちゃん、それ、あたしのプリン！」

「うそつけ！　3個入ってたぞ！？」

「だから3個ともあたしの！」

「そんなバカな！」

長男・栄人が、愛する妹と談笑していた。

テーブルにおいたケータイが、派手な音とともに振動する。聞き覚えのないメロディが、何故自分のケータイから聞こえるのか。

「あつ、おい、俺のケータイいじっただろ!? こんな設定してねーよ?」

「「もってけ! セーラー服」だよ、お兄ちゃん」

「知りませんけども!?!」

乱暴に音を切って、受信メールを確認する。

「誰から?」

「お前に言う必要はない」

仲睦まじい兄妹は、にっこりと笑顔で睨みあった。

自室に戻った栄人は、友人からのメールをようやくきちんと読む。

「(珍しいな、ナナからだ)」

新しくできた友人は、意外にメールをしない子だった。一度電話がかかってきたきりだ。しかもその内容が「明日の時間割なんだっけ」である。

小学生かよ! と思わないでもないが、そこが七緒の良いところなのだろうとも思っている。

しかし、初めてもらったメールは、意味のわからないものだった。

5/10月21..16

送信者..戸塚ナナ

件名..明日

本文..よくわからない部活に誘われた。行ってみない?

———すみません、意味がわかりません

結局、電話したという。

30、勧誘…？（後書き）

国語が好きだけど文章力のない七緒さん。

31、お茶部にて（上）

「お茶部、ねえ…」

「うん、で、ここが部室代わりらしいよ」

放課後、七緒と栄人は、第1理科室の前に立ち尽くしていた。

理科準備室は、第1理科室内にあるドアから入る。しかし、その第1理科室の鍵がかかったままなのだ。

「…活動日、今日なんだよな？」

「そう聞いたよ。あと木曜日…」

「お前ら、何してんの？」

突然真後ろから声をかけられて、何か悪いことをしたわけでもないのに、2人は飛び上がった。

「ぎゃーごめんなさい！」

「うおわっ、ごめんなさい！」

「なんで謝られてるのかわからん」

呆れた顔で立っていたのは、1年3組の担任・緒方先生だった。ほっとして笑いだす2人。

「あー、びっくりした！ 緒方先生、いきなり後ろに立たないで下さいよ」

「ほんとだよ！ こんなとこで何してんの？ 先生」

「戸塚はともかく、中村は俺に対して敬語を使う気がねえよなあ…」

遠い目をした先生は、自らの纏う白衣を指差した。

「お前さんらは忘れてるのか知らんが、俺は理科の教師だから。で、お前たちはなんでこんなとこにいの」

七緒と栄人は顔を見合わせる。超マイナーな部活、と何度も言われたので、彼が「お茶部」を知っているかわからなかったのだ。相手の出方を見ようと、栄人が遠慮がちに言った。

「部活の…見学っすよ。ナナも俺もまだ未所属だから」

「ふーん、何部」

「…おれの寮の先輩が部長らしいんですけど…先生、お茶部って知ってます？」

「あー、それ俺が顧問」

「ですよね、超マイナーって………へ？」

言われた意味が理解できずに、ぱちぱちと瞬きを繰り返す。緒方先生は、いつもの気だるい口調で、もう一度言った。

「俺が顧問」

「びっくり第2弾だよねえ、ハチ。緒方先生が顧問だなんて」

「ああ…多分あの先生が顧問になったから、漫才研究をほっぽって、お茶部なんてもんになったんだろうな」

「ハチ助、お前本当に俺が好きだな」

「いやいやいやい！ そんなことない！ つーかハチ助ってなんすか。なんかちよつとたこ焼き屋ぽい！」

「肯定されても困るが、全力で否定されても悲しいな…」

緒方先生は、目を細めながらも、戸棚からカップを3つと、インスタントコーヒーを取り出す。何故そんなところにそんなものが、というツツコミは、栄人がきっちり入れたのでお構いなく。

顧問登場のおかげで、無事、第1理科室の中に入ることが出来た2人は、理科準備室に一番乗りし、のんびりと寛いでいた。

理科準備室は、一言でいえば「乱雑」な部屋である。実験器具は理科室の方にあるが、資料うんぬんがそこら辺に置いてあったり、何故か小学生くらいのサイズの人体模型があったりする。

部屋の真ん中に置いてある大きな机の上にも、どっさり資料（らしきもの）が置かれている。普段その机を囲んでいるのか、資料は真ん中にうず高く押しやられていた。

「あ、せんせ、おれがやりますよ。場所だけ教えてもらえれば」

いつものくせで立ち上がった七緒は、驚いた栄人に止められる。

「やめとけよ！ 粉こぼしてカップ割って、あげく火事を起こすぞ！」

「ハチくん、ハチくん、君はおれのことどう思ってたの…!?!」

友人の自分に対する評価に不安を感じながら、七緒は緒方先生からカップを受け取る。

「あー、さんきゅ。えーと、コンロかアルコールランプか、どっちがいい？」

やかんを持ちあげる先生の指す先を見ると、古ぼけた持ち運びコン

口と、アルコールランプが置いてあった。

「…あの、3人分ですし…コンロでお願いします」

「ほいほい。あ、左側壊れてるから、右使って」

「はい」

カップとやかんをさっと流し、やかんを火にかける。その間にカップ（よく見たら計量カップだった）にコーヒー粉を入れ、七緒は顔をあげた。

「砂糖とかミルクって…」

「俺、砂糖なしミルク入りでよろしく。そっちの小さい戸棚にあるから」

もはや完全に七緒に作業を任せた先生は、イスの背もたれを鳴らして、完全にリラックスモードになっている。

「ハチは？」

「はえ？」

妙に手際の良い七緒の動きに見とれていたため、栄人は情けない声をだした。

「砂糖とミルク」

「あ、はい…はい、どっちもお願いします。砂糖は一杯で」

「なんで敬語？ ……あれっ……せんせ、まさかこれ、実験用の砂糖なんですか？」

「大丈夫、食える奴だから」

「ていうか、学校の備品なんじゃ…」

言いつつも、七緒の手は滑らかに動く。スプーンの突っ込まれた砂糖の容器を開けると、2つのカップに砂糖を、白いミルク粉「クリ〇プ」は全てのカップに、ぱっぱと入れた。その慣れた手つきを、栄人は感心したように眺める。

「ナナって割と器用？」

「え、コーヒー入れてるだけで 器用？ とか言われても…インスタントだし」

「いや、絶対こぼしそうだなって思ってたから」

「そんなにドジっ子に見えますか…」

七緒が目を細めた瞬間、やかんがしゅんしゅんと音をたてはじめた。火を止めて、沸いたお湯をカップに注ぐ。

「はい、先生。熱いので気をつけてくださいね」

「おう、さんきゅう。戸塚はあれだな、良いOLになりそうだな」

「…せんせ、それ、褒めてるの？ はい、ハチもドウゾ」

礼を言ってカップを受け取り、まじまじとそれを見つめる。

「先生、質問。これ、この注ぎ口？ のところから飲むの？」

「好きなように飲めば良いけど、そこから飲むと多分こぼすぞ」

「だよなあ」

ぞぞぞ、と同時にコーヒーを啜って、更に、息をつくのまで同時だった栄人と緒方先生は、苦笑した。

その光景に和んだ七緒が、カップに傾け——熱くて慌てて唇から離す。

「あひっ！！ けほけほっ、けほっ」

叫んで咳き込んだ七緒を、栄人がぎょっと振り向いた。

「あーあー、もう、何してんだよ。熱いから気をつけろって言ったの、ナナだろう？ 充分ドジっ子じゃないか」

「ふええー、こえ、ひえったいひたやへろひはあ」

「大丈夫か、戸塚。今ので日本語を忘れたか？」

心配しているのかいないのか、先生も自分のカップを机に置き、七緒を見た。

「これ、絶対 舌 火傷したあ！ って言ってるんですよ」

「なんで今のでわかるのか不思議だな…。戸塚あ、こっち来て口開けろー」

「あうう」

涙目で席を立て、緒方先生の前まで行くと、七緒は口を小さく開ける。

「舌べえーしろ」

「れえー」

「…小児科医と患者が目の前にいる…電気つけようか？」

「あー、頼むー」

目を細めた先生は、何故か立ち上がって、じっと七緒の舌を見つめた。

「あはいれふは？」

「何？」

「赤いですか？ だって」

「だからなんで中村はわかんのか？ ……角度的に良く見えない…」

そう言うと、緒方先生は白衣のポケットにつっこんでいた右手をだして、七緒の顎を掴み、くいっと上を向かせる。

おいおい、とつつこみそうになった栄人だが、本人たちは全くもって気にせず「あーちよつと赤いな。まあ舐めときゃ治るだろ」「ふえー」なんて言ってるので、喉まででかかった声を飲み込んだ。

「（まあ、おっさんと男子高校生だからなあ、色気なんて全くないわ）」

と、そのとき、がらりと理科準備室のドアが開いた。

「こん……っ!??」

ドアの向こうにいた2年生（ネクタイが緑だった）は、目の前の光景に身体を強張らせた。

「あ……」

この場で唯一、状況を把握していた栄人は、思わず彼に同情した。タイミング悪すぎだろう！

「ん？ おー、木下あー。こいつら見学の1年な」

訪問者に気がついた緒方先生が、七緒を離し、イスに座りながら言った。

七緒は七緒で、「うー、今日の夕ご飯、餃子なのになあ、醤油しみるう」なんて呟きながら、自分の座っていたイスに戻る。

「……………」
「……………」

状況が見えたらしい、ようやく敷居をまたぐことが出来た先輩は、同じく呆れた顔の栄人と顔を見合わせた。

全くもって面識がない者同士なのに、こんなにも以心伝心できるんだなあと感心する。

「…えーと、中村です」

目を合わせたついでに、ぺこりとお辞儀した。栄人に続いて、七緒も会釈する。

「戸塚です。あの、アオさんに：野村先輩に誘われて」

「あー、葵さんね。新しく寮に来た子誘うかもって、先週から言ってた」

先週から、ということとは、ここに来てすぐだということだ。寮内での勧誘は禁止なはずなのに、そんな早いうちから誘うつもりでいたとは。

考え込む七緒をよそに、2年生は、主に栄人に向けて自己紹介した。

「ええと、オレは木下。一応、ここの会計って立場」

木下は、特に背が高いわけでも低いわけでもなく、中肉中背、と表すのがちょうど良い青年だった。

スポーツ刈りではあるが、それほど筋肉がついてるようにも見えないので、根っからの文化部タイプだろう。

「よろしくお願いします。えーと…」

「……………」

特に社交的でもないらしい彼は、それきり黙ってしまった。1年生2人は、顔を見合わせる。

「（おいおい、なんか喋らないとまずいんじゃない、これ）」

「（えっ、喋るってたって、何を…）」

戸惑いながらも、七緒は勢い良く立ち上がった。

「木下先輩も、コーヒー飲みますよね？ おれ、淹れます」

「え？ いいよ、別に…」

礼儀として一度は遠慮する木下だが、「後輩だから」と押し切られ、大人しくいつも自分の座っているイスに座る。

——ずっりいいいい！！

表情には出さないが、栄人は心の中で絶叫した。

七緒にはお茶くみという役割が出来た。思いのほか近くに座った初対面の先輩と、ただ黙ってそれを待つことは出来ない。なにかしら喋らなければならぬというわけだ。

「（ナナめ…確信犯だろ、お前！ ……くっ）」

沈黙が更に重くなる前に、口を開く。栄人たちの担任は、我関せずとコーヒーを飲み続けていた。

「え、っと……ここの部ってどんなことしてるんですか？ いつも」

「え？ えーとね…大体、集まったら飲み物飲んで…それから、ド

ンジャラとか人生ゲームとか、あとトランプとか…で、遊んでる」

予想以上のカオスっぷりに、栄人は顔を引き攣らせた。

「あ、去年はゴールデンウィークに合宿したよ」

「合宿!？」

「学校に泊まって、天体観測みたいなことした」

「なんでもアリなんすね…」

呆れたような感心したような栄人に、木下は薄く笑う。

「その場のノリと勢いだけでやってるから…普段あまりにも皆テールゲームばかりやってるから、ゲーム部に改名しようかなって話もでたんだけど」

「……………すればいいじゃないですか。」

そっちのが、部の活動がわかる名前だと思うけどなあ、とは、思っても言えない栄人だった。

「戸塚あ、ついでに俺もおかわり」

「あ、はい」

「……で、なんであんただけそんなに寛いでるんだよ!」

31、お茶部にて(上) (後書き)

スポーツ刈りって言います？ 言いますよね？

32、お茶部にて(中)

「こんにちはー。あ、ナナ、もう来てたのか」

葵が現れたのは、それから5分後だった。

「わあっ、アオさーん！ 来ましたよう」

葵の姿にほっとしたのか、七緒のテンションが微妙に上がる。友達も一緒に見学に行く、とは言って置いたので、七緒は立ち上がって栄人を紹介した。

「アオさん、一緒に部活見学してる、クラスメイトの中村栄人くんです。」

ハチ、銀杏寮でお世話になってる、野村葵先輩です。このひとが、お茶部に誘ってくれました」

妙に丁寧な七緒につられ、慌てて栄人は立ち上がり、葵は背筋を伸ばす。

「あっ、えーと、ナナ：七緒くんいつも仲良くさせてもらってます、中村です」

「あー、いや、うん、うちの七緒がお世話になってるようで……」

「いやいやいや、娘の彼氏に挨拶された父親じゃないんすから」

木下の控えめなツツコミに、2人とも照れ笑いした。七緒もくすくすと笑う。

「ふふふ、アオさんがお父さんで、ハチが彼氏って、楽しそうー」
「あいう、ナナさん。色々ズレてます……」
「…ああ、学校でもこうなのか……」

「子供が産まりましたあ！ みんなっ、5千円ずつおれに下さいいっ！」

「野球選手！ オレ絶対野球選手！」

「スカラベ？ あの虫みたいな奴とってくれー」

「あっ、木下先輩今1マス多く進めませんでした？」

4人揃った、ということで、人生ゲームを始めたのだが。

「へっへっへ、葵さん、中村、すまないね！ 4千円ずつ頂きまーす」

「ああ、俺、株の才能ないのかな…」

「ナナ、それ俺の車！」

「おれ、アオさんと同じマンションに住みますー！」

人生ゲームは、偉大である。たった1時間で、ほぼ初対面の人間をここまで打ち解けさせるとは。

そんなことを考えながら、緒方先生は伸びをした。そろそろ5時である。

「おう、お前ら。俺、職員会議あるから。葵、鍵頼んだぞ」

「あっ、おがちゃん、いたんすか。わかりましたー」

「お前……」

顧問が出て行ったのを機に、4人はそれぞれ背中を伸ばす。

「うっ、ごきごきって言った…」

「ここまで聞こえましたよ、先輩…」

以外にも、木下と栄人はすぐに親しくなった。

初めのうちは人見知りの発動で、どうなることやらな状態だったが、タイプが似ているのだろう。

「みんな、おかわり要ります？ おれ、今淹れるんで」

伸びついでに、とうに空になったカップを持ちあげる七緒。もちろん、全員お願いした。

「悪いな、ナナ。学校でもそんなんばっかやらせちゃって」

「いーんですよー。好きでやってるのでー」

葵と七緒のやり取りに、寮生ではない2人は首を傾げたが、が、言及する前に、がらりとドアが開いた。

「こんにちはー！ あっれ、知らない奴がいる！ そうだ、よっしー、数？のワーク見して。あ、君、コーヒー淹れんならオレにもちよーだい！」

「あ、はーい」

入って来るや否や、その2年生はまくしたてるように言った。

普通に返事をした七緒に、栄人は「えー！？」という顔を向ける。

「あ、いや、反射的に…ツツコミどころ多っ、と思わないでもない

ですが、とりあえずコーヒー淹れますねー」

「物分かりの良い子だなーっ。葵さん、こっちが銀杏の子？ 教育のタマモノだねっ」

ケラケラと笑う後輩に、葵はため息をついてみせる。

「俺がやらせてるみたいに言うのヤメロ、北原」

「へいへーい。よっしー、ワーク見してー」

「オレ、数？とってないよ」

「文系いー！ えーうそだろまじかよ頼りにしてたのに！」

「勝手にだろ？」

「勝手にだけどお！」

木下は慣れたもので、ひょうひょうと対応する。

「はい、どーぞ」

「おーさんきゅう。あつ、オレ、北原きたはら 幸樹こうき。お前らは？」

七緒がそれぞれにコーヒーを配り終えてから、青年は思いだしたように自己紹介した。

「…中村です。こっちは戸塚」

「どーもです」

若干引き気味の2人は、ちょこんと会釈する。北原はにこにこ笑顔で、喋り始めた。

「やー、今ココ1年いないからいいね！ 後輩いるって良いなあ、コーヒー淹れてもらえるもんなあ。入部すんの？ あ、まだ未定？ そっかー、まあね、入ってくれたらオレらとしても嬉しいけどね

！　つーか何々、人生ゲームやってたの？　オレもやりてーなあ、でももう進んじやってんでしょ？　てかオレ宿題しないとやばいんだっけ、忘れてたー！　葵さーん、教えて下さーい」

――わあマシンガントーク。

息もつかせぬ北原の喋りに、1年2人はどうしていいのかわからないが、上級生たちはいつものことばかりに、特に変わった様子も見せない。

そのうち、葵が畏縮する七緒たちに気付いたのか、ぽこぽこんと北原をはたいた。

入念にセツトされた栗色の髪を押さえて、慌てて振り向く北原。

「痛いっ！　葵さんの愛のムチが痛い！　2回も叩く必要がありますかね！？」

「北原、ちょいちょい」

「えっ……あ」

北原も気付いたらしい。「またやっちゃった」という顔をして、しよげかえった。

「もー…オレ、大人しくしてる……つーか宿題やる…」

そのしょんぼり具合が気の毒になったのか、木下が呟くようにフオーする。

「ごめん、北原さあ、いつもはあんなにテンション高くないんだ。人見知り過ぎてパニックってるだけで」

「えっ」

「人見知り？」

北原を表したとは思えない言葉に、七緒と栄人は本人を振り向いた。背の高い、割と大人っぽい彼が、目を見開いて赤面している。

「なあぁー！ よっしー、それを言うかッ！？ やめてくんないさういうのまじやめてくんない！ もー、別に人見知りとかじゃなくてさぁ…ッ、ううー」

必死に弁解しつつも、みるみるうちに耳まで真っ赤に染まり、ついには机に突っ伏した。

彼は人見知りであるが、黙って控えめになるタイプではなく、ごまかすために喋り倒してしまうタイプらしい。人見知りがばれないように、ばれて相手に気を遣わせないように。そういう気持ちは栄人も覚えがあるので、小さく笑みをこぼした。

「（なんだかそう知ると、親しみが湧くなぁ）」

七緒もそうだろうと、隣を見やると――

「か、可愛い……」

眼鏡の奥の瞳が、ハート型になっていた。

「え、ナナさん…?」

「ハチ、見たかい!? 顔真っ赤顔真っ赤!」

「いやいや見たけどナナさんそれ先輩相手に失礼!」

栄人が止めるにも関わらず、七緒の暴走は止まらない。

「あんだだけ喋っという人見知りとか! それはいんですよ。別にい

いんですよ。そのあとの反応ですよ！ 殺す気ですか…！ 「ううゝ」って！ 「ううゝ」ってええ…！」

北原含む上級生たちも、哑然としている。一体、何が彼のツボに入ったのか。

「や、ちょお、ナナ？ どした、大丈夫か？」

「アオさん！ 聞いて下さい今の…今の北原先輩の反応が…！」

涙目の後輩に抱きつかれ、葵はぎよっとする。彼だけでなく、七緒以外の全員が、ハテナマークを出して固まっている。

「近所に住んでた幼稚園生にそっくりなんです……！」

ただ上がり状態だったテンションが一段落した七緒は、先程の北原と同じく、机に突っ伏していた。

「ギャップ萌えって奴なんすかね？」

「いやあ、北原を見て可愛いっていうひと、初めて見た」

「ナナちゃんの「可愛い」の基準がわからねえ」

今の騒ぎで散らばってしまった、人生ゲームのお札やらカードを拾い集めながら、栄人、木下、葵の3人は、思い出し笑いで顔をにやけさせている。

「3人とも、オレまで一緒に恥ずかしいのもうやめて下さい」

北原は北原で限界らしく、ノートで顔を隠していた。

「ごめんなさい…可愛い子見ちゃうと、どうしてもテンション上がっちゃって…！」

「戸塚クン、可愛い言うのヤメテ。全然可愛くないからね、オレ！あと「子」って。オレの方が先輩なんだかんね！？」

頭ひとつ分も背の低い後輩に、「可愛い」なんて言われて嬉しいわけがない。冗談半分に怒って見せるが、その様子にも七緒は赤面する。

「（なんてこった！ わたしったら、北原先輩がもう年下にしか見えない！）」

「年下」可愛がるべき存在」という公式が成立する七緒の頭の中で、「年下」というのは、必ずしも実年齢に左右されるものではない。母性をくすぐられた瞬間、もうだめなのだ。

「（なんてこった！ オレ、もしかして後輩に舐められてるんだろうか！）」

「舐めてないです！ だって可愛く見えちゃうんですもん」

「心読むな！ 可愛いって何！ 男子高校生に言う言葉じゃないよ！？」

「違うんです！ ですから、おれには北原先輩が、幼稚園生に見えるんです、怒らないで下さい！」

「よー！ー！！？ 幼稚園で！ ということ！？ 全然わかんないんだが！」

「ごめんなさい、謝るから泣かないで下さい。ね？」

「子供扱いー！ーっ！」

「あと1時間、何しましうかねー」

「UNOはないんですか？」

「あるある。じゃあUNOやろうか。おい北原、UNOやるぞー」

「ぎゃーん葵さん！ あんたンとこの後輩なんとかして下さいよ！」

「北原先輩に嫌われた……うう」

「あっ、北原が泣かせたー」

「あーあー」

「ナナ、こっちおいで」

「なんでオレが悪いみたくなってるのっ!!」

——まだまだ続くよ、お茶部見学。

33、お茶部にて（下）

「赤のスキップ！ 木下先輩どーぞ」

「あっ、ハチ酷い！ またおれのこと飛ばしたあ」

「そういうゲームなのだよ」

「赤の4。北原あ」

その後、北原は黄色の4、葵は黄色の6、栄人は赤の6を出した。ここで、七緒が勝負に出る。

「黄色ドロー2！ 木下先輩」

「赤のドロー2！ 北原」

「ふっふっふ、青のドロー2！ 葵さん」

「舐めるな、ドロー4！ ほい、中村」

「さらなるドロー4乗せ！ しかもUNO！ ナナ」

「嘘でしょおー！？」

不満げな表情で、七緒は山札から14枚のカードを引く。自分から仕掛けた勝負が、一周して、さらに7倍になって帰って来たのだ。彼以外の4人は、げらげらと笑った。

UNOも5回戦を過ぎたころ、6時を告げる鐘が鳴った。文化部は基本的に6時終了である。

「あ：終わりだ。ちょうど俺、上がり」

葵の上がり宣言に、北原が戦績メモを覗き込んだ。今回の点数も手

早く加算すると、一番点の多い者は、七緒だった。UNOは、点数の多い者が敗者なのである。

「戸塚 弱あ！ オレの倍以上じゃねえか」

1位である北原が、勝ち誇った顔で言った。子供扱いを相当根に持っているらしい。人見知りの段階は超えたらしい彼は、すっかり七緒のボケにも栄人のツツコミにも慣れていた。

「じゃ、片づけは戸塚な」

「はーい。ハチ、待っててね」

「待ってる待ってる」

「中村っ、戸塚を甘やかすんじゃないッ」

「いや、北原先輩はナナの何っすか…」

七緒が片づけをしている間に、栄人は気になっていたことを切り出した。

「ところで、部員って…？」

「あと2人いる。3年2年1人ずつ」

木下の答えに、栄人は眉をしかめる。

「（―――ということは、ギリギリなのか…）」

部活として認められるには、最低5人の部員が必要だ。部室棟に部屋をもらっていないとはいえ、多少なりとも部費は配られる。

「（来年、新入生が入らなければ潰れちゃうのか……やだな）」

栄人は、お茶部のアットホームな雰囲気が入り始めていた。男子ばかりで遠慮がいらぬ、という点も。

なにより、同学年が他にいないというのは魅力的である。彼は、上級生よりも、同級生とのコミュニケーションが苦手なのだ。

「(タメって、なんか緊張する。2・3年は、学年の壁がある程度在るから良いけど、クラスの奴とかにはそれが無い。ずかずか踏み込まれんのが、一番嫌だ)」

例えば圭介は、色んな人と等しく親しい。だからなのか、相手の望む距離をとることが得意である。

「(ああ見えてあいつ、色々考えてるし。「友達」であることを強要しないトコが好き)」

例外は、七緒だ。すっかり、教室移動から何から、行動を共にするようになっているが、それでうつとうしいというわけでもなく、何故だか落ち着ける。一緒にいると、ほっとするのだ。多分、波長が合うのだろうなあと思っている。

「(だから、同じ部に入りたい、けどなあ。ナナは茶道部なのかなあ)」

彼が茶道部に惹かれているのは、昨日から知っていた。栄人も、昨日の3つの内では断トツで茶道部が良い。

茶道経験のある七緒が入れば、茶道部のひとたちも喜ぶだろう。

「どうした?。」

いつの間にかため息をついていたらしい。隣で壁にもたれてケータイをいじっていた木下に声をかけられた。

「あ、いえ……ナナは、お茶部入るのかなって…」

「ふうん。中村はどうなの？」

直球で問われ、栄人は咄嗟に本音を漏らす。

「…俺は…割と…このぐだぐだ感とか……遠慮しなくて良い感じ…好きですけど」

言うてから「しまった」と思ったが、木下が、嬉しそうに「そうかい」と言ったので、ここは素直に照れておく。

「でも…ナナがどう思ってるかわかんないんす。あいつ、どの部の見学するときも、大体楽しそうにしてたし…」

「ああ、戸塚は割とどこでも生きていけそうな感じするなあ」

今日初めて会った木下にここまで言われるとは、七緒も大したものだ。

「クラスでも…部活でも……きつと寮でも…ナナは、ナナのまんまだけど、俺は、」

その先が言葉に出来ず、栄人は困惑して俯く。何より、会ったばかりの先輩に、甘えそうになっている自分が嫌だった。

木下は特に追求せず、けれど、優しい声で言う。

「戸塚と一緒にでもさ、中村だけでもさ、オレたちは歓迎するよ。誰も来なくたって、のんびりやっていける。そーゆー部なの、ここ

は。

：それに、中村はさあ、1年なんだから、部の事情とか考えなくて良いの。自分の入りたい部に入れって」

人数を聞いた時点で、栄人が何を思ったのかわかったらしい。苦笑気味に付け足された言葉に、栄人は赤面した。

「…すみません」

「謝ることじゃないよ。少人数でいいの。人がたくさん入っちゃったら、オレはめんどうだと思いうから」

話し過ぎたと思ったのか、木下はふと壁を離れた。

「片づけ終わったなら、鍵かけるぞー」

「あっ、終わったんですけど、これはどこに…」

「ああ、それはそっちの…」

ドアの影から、紙類の崩れるような音と、慌てた声が聞こえてくる。

「きゃっ!?!」

「うわっ! …あらら」

「あーあ! 葵さーん、戸塚が山崩した!」

「「きゃっ」て…ナナちゃん…」

「うわーん、ハチー!」

ふっと笑う。

彼は、自分の名を呼んだ。

「はいはい、今行く」

栄人は、壁から背中を離し、騒いでいる4人の中へ入っていった。

「雨だあ」

「雨だなあ」

昇降口で、栄人と七緒は立ち尽くした。

葵と木下は職員室に、北原は自分の教室に、それぞれ用があるように、理科室を出たところで別れた。

「ざざ降りだあ…」

「騒いでたから気付かなかったんだな」

途方にくれる七緒の横で、栄人はカバンから折り畳み傘を取り出す。

「えっ、ハチ、傘持ってたんの？」

朝チェックした天気予報は、1日中晴れマークだったはずだ。
驚く七緒に、なんでもないとのように栄人は言った。

「や、俺、面倒だから朝テレビ見ない。ずっと折り畳み持ち歩いてる」

「横着なんだかマメなんだか…」

呆れた顔の七緒を軽く小突いて、靴を履き替える。

「ナナ、傘は？」

「ないけど、寮近いから」

「送るよ」

返事がないことに顔を上げると、七緒は上履きを手に持ったまま、なんとも言えない表情でこちらを見ていた。

「どした？」

「……ハチってさ、女たらしって言われない？」

「言われないけど!？」

なに言ってるのオマエ、という目で見られて、七緒は慌てて靴を履きかえる。

「(そうかい、わたし男だから、別に照れることではないんだよね……。にしても「送るよ」とか)」

弟の存在や、男友達のおかげで、男子が苦手ということは無い。あまりに粗野で無分別な男子は苦手だけれど。

しかし、つい最近まで女子校にいた七緒は、そっち方面の免疫が、全くと言って良いほどなかった。中学時代、友人たちが色恋沙汰で騒いでいる間も、恋バナにちよっぴり参加するくらいだったのだ。自分が男の子とどう、という意識はなかった。

——超イマサラだけど、ハチって男の子なんだっけ……

だからこそ今一緒にいてくれるのだろうか。

圭介や直哉はともかく、栄人はあまり「男の子」という感じがしないのだ。

俯いて赤面する七緒には気付かず、栄人は昇降口をでていく。振り返って、きょんとした。

「おい、入るだろ？」

「ああ、うん、入れて…」

——これだってよく考えたら相合傘じゃんよおおお！ 意識することないんだけどね！ 男同士だもん！

——でも、でも、わたし、まだ全部男の子じゃないし！ ……だって、涙が出ちゃう。女の子だもん！

隣で七緒が葛藤して（多少混乱もして）いるとは知らずに、栄人は小さく呟く。

「あのさ……ナナはさ、何部に入りたい？」

「へ？」

ごめん聞いてなかった、と慌てる七緒に、栄人はがくりと肩を落とした。

「…明日も部活見学続ける？ って聞いた」

「うーん、どうする？ 栄人が続けたいなら…」

「ナナは？」

やけに強い口調で問われて、七緒は歩みを止める。一瞬遅れて栄人も止まり、じっと見つめあった。

「ナナの意見が聞きたい。だってさ、俺がなんか言っちゃうと…ナナはそれに続けちゃうだろう？」

今まで考えていたことが考えていたことだけに、七緒は慌てて目を逸らす。真剣な表情で真っ直ぐ見つめられるのは、心臓に悪い。

「ううう、そうなんだけど……でも、続けても続けなくても、おれ

「はいんだ」

「それじゃダメだよ。じゃ、俺だって、どっちでもいい」
「そんな…」

唐突な栄人の態度に、七緒は困惑する。

「ナナ、顔上げて。ちゃんと目え見て話せ。

……俺、ナナのこと、流してない？ 俺が部活見学しようって言わなきゃ、ナナはやらなかっただろ？ 無理してない？」

「——してないッ！」

どうして、栄人がいきなりこんなことを言い出したのかはわからないが、それだけはきっぱりと否定した。
噛みつくような七緒の返事に、栄人はうろたえる。

「おれ、流されるタイプだし、部活もやんない気でいたけど、絶対無理なんかしてないよ。

流されてんのは、おれが優柔不断なだけだし、ハチが誘ってくんなきゃ、部活見学なんて思いつきもしなかった。楽しいよ、見学！」

だばだばと、雨が傘を打つ。その音に負けないように、七緒は大声で言った。日が短い季節ではないのに、辺りは真っ暗だ。

双方、肩と背中を濡らしながら、しばらく睨みあい——目を逸らしたのは、ほとんど同時だった。

「ご、めん。いや、無理に付き合わせてたら悪いなって…部活決めるのも、俺に合わせたら悪いなって…」

「ううん…。…あのさ、言っても、怒らない？」

八の字に眉を下げ、七緒が首を傾げる。栄人が怒らないからと促す

と、彼は恥ずかしそうに言った。

「昨日も、言った気がするんだけど……わたし、じゃない、おれは、ハチと一緒にいいなって、思ってたの。…出来れば、って言ったけど、それウソ。そんなに控えめじゃない。

…ずるいんだけど、ハチが入るって言った部に、一緒に入りたいて思ってたの。だから、おれから意見言いたくなかったの。ハチと違ったら、嫌だなって。元々、部活やる予定なかったし、ハチがいなきゃ…。

…だって、部活でもハチと一緒にいてくれたら、すごい、楽しいだろうなって…。

——うざいよね、甘ったれでごめんなさいっ！」

勢い良く頭を下げた七緒。……沈黙が、落ちる。

栄人の顔が見られなくて、七緒は顔を上げられない。

「（…小学校のときも、友達にべたべたしすぎて、「うざい」って言われたことがあった。あれから気をつけてたのに……きつとハチも、それが嫌だったんだ——嫌われた）」

そう思うと、鼻の奥がつうんとした。

一方、栄人は、七緒の言った意味がわからなくて、頭を下げたままの友人を、啞然と見つめていた。

「（うざいって……何、誰が？ ナナが？ ……なんで？）」

確かに、七緒とは学校にいる間、ほぼずっと一緒にいるが、別にそれを「うざい」と思ったことはない。むしろ居心地良いと思ってるくらいだ。

「（それに……）」

彼は、自分と同じ部に入りたいのだと言った。一緒にいたいのだと言った。

自分がいるから、やるつもりがなかった部活動を、やる気になったのだと。――それは決して無理しているわけじゃないと。

――それは、なんか、とても、嬉しい。

けれど、なんと言ったらいいかわからず黙っているうちに、七緒が鼻を睨り出した。

「ずっ……うう、ひっ……」

「……ナナ？ え？ ちょっと、ナナ！？ 何、なんで泣くの！？」

震える肩を抱いて、慌てて顔を上げさせる。七緒は、ぼろぼろと涙を流していた。泣き顔を見られたくないのか、すぐに彼はしゃがみ込んだ。

何が理由で泣いてるのか、確かなのは、自分が泣かせたらしい、ということだ。

「おい、濡れるぞ？ なあ、ちゃんと傘入れ？」

「ごめん……男、なのに。泣くの、ずるいよね。……依存しちゃいけないって、わかってる。でも、」

「ナナ、立ってくれ」

語気を荒げると、七緒は素直に立ち上がった。しかし、その表情は、明らかに何かに怯えている。

「……なんで泣いてんのかわかんないんだけど。俺、そんなに問い詰めたか？」

どうしたらいいのかわからずに、自然と無愛想な口調になってしまふ。一瞬後、それがマズイのだと、七緒の表情を見て気がついた。

「違う、今のナシ！俺、怒ってないから。落ち着いて欲しいだけ」

2人同時に深呼吸をして、七緒は涙を拭いた。なにかを決意したような瞳に、栄人は見とれる。

七緒は、掠れた声を絞り出した。

「――嫌わないで」

「は？」

「嫌われたくないの、あなたに」

何を言われたかわからない、という表情の栄人に、さらにまくしたてる。

「わた：おれ、友達作るのが下手で、ようやく出来た友達には、必要以上にべたべたしちゃうみたいで……それで一回、友達失くしたことがあるから、気をつけてたんだけど。」

：本当にごめん、ハチが嫌なら、おれ、おんなじ部に入ろうとなんてしないよ。だから、お願い、」

「（友達作るのが下手だって？ウソつき、たくさん友達いるじゃないか。俺よりもよっぽど）」

茫然としたまま、鈍く音をたてて、頭が回る。

「（――違うのか。寮の先輩とか、見学先の先輩は、友達ではないんだ。その場で上手くやりすごせるだけで、知り合い、の域からでてないんだ。」

女子とも男子とも話せて、それは、友達でもあるけど、それ以前にクラスメイトなんだ……友好的なのは、ナナの性格か」

馴染み過ぎて忘れていたけれど、彼は転校生だ。周りに馴染もうとして、普段以上に友好的なのだと、栄人はふと気がついた。

そして、その中でも、自分は今、もっとも親しい「友達」だと思われることに、気がついた。

――嫌わないで、なんて、言うなよ

もうすこし自惚れてもいいのに、と思う。

そうして、それは自分にも当てはまるのだと思い当った。

遠慮して、不安になって、当たり前じゃないか。だってまだ、友達になったばかりなんだ。

「……ならないよ、嫌いになんてならない」

七緒の頬に残った涙の後を、セーターの袖でぐりぐりと拭いてやる。少々乱暴なその手を、けれど彼は、ほっとしたように受け入れた。

気付けば、さっきまであんなに強かった雨は、すっかりやんでいる。晴天、というには雲ばかりの空模様だが、その隙間から、控えめな一番星が輝いていた。

34、知らぬが仏

「お茶部：でしょう？」

「：当たり前。なんでわかったんだ？」

七緒は微笑んだ。

「だって、あそこにいたときのハチ、一番楽しそうだったもの」

栄人も、照れたように、けれど優しく笑む。

「そんなに顔にだしてたかあ？ ポーカーフェイスは得意なんだけど」

「ナナハチコンビですからね！ 相方の表情の違いくらい、簡単に読めるですよ」

「ふは、そっか。じゃあ、後で入部届け出しに行こうな」

「うん！」

「あまーーーーーい！！！！」

圭介は、廊下に顔を突き出して叫んだ。教室へ向かう生徒たちが、怪訝な表情でこちらを見たが、何事もなかったかのように、窓際へ戻る。

そこには、未だに、先程と同じ、甘い空気が漂っていた。

「……あれはなんなの」

ちょうど登校してきた茜に問いかけられて、圭介は肩をすくめてみせる。

「知らねえ。今日オレが学校来たときには、すでにあの状態だった。オレ今、砂吐けるよ。」

……昨日、オレ抜きで部活見学してたときに、なんかあったんじゃない？」

ちよっぴり寂しさも感じつつ、良かったなあと苦笑する圭介。

栄人は、クラスで浮いていた、とまでいけないものの、その寸前だったように圭介は思う。

いつでも、どこか上の空でいる癖のある彼は、なかなか特定の親しい友達が出来ずにいた。

だからこそ、3組のムードメイカーを自称する圭介は、彼を放っておけなかった。思い立ったように彼に話しかけ、時々昼食を共にとる。露骨に栄人を心配していると思われたくなくて、色々なグループに顔をだしていた。

しかし、急激に親しくなっていく栄人と七緒を見て、ようやくお役御免かな、と息をついた。

「ま、仲良きことは美しきかな……って、野村ちゃん、どしたの」

茜は、俯いて肩を震わせていた。

泣いているのかと驚いて覗き込むと、その頬は抑えきれない興奮に、真っ赤に染まっている。

「~~~~っ、だめだわ！　もう我慢出来ない!!」

腕を掴まれた、と圭介が認識するより前に、廊下に引っ張りだされ

た。

そのまま、ずんずんと階段を上っていく。

「ちよちよちよ、どこ行くの野村ちゃん」

「まじごめんトラウマになったらごめんだけど、もう我慢出来ない」

人気のない、屋上前の階段まで連れて来られて、圭介は困惑した。
どうしたの、と問うと、彼女はものすごい勢いで喋り出す。

「だあああ、もうっ、なんなのよあの2人は！ リアルBL過ぎて泣きそう！ これは私の腐フィルターのせい？ いいえ、違うわよね！ 明石の目から見てもあの2人はラブラブバカッポーなのね！？」

「え？ ええ？ びーえる？ ていうか、バカップルとまでは言っていない！」

「無自覚バカッポーなのよ。無自覚！ ここ重要ね！ で、先に自覚するのはやっぱり攻めなのよ。中村は、女子と：そうね、ここは席順的に私かしら、あと優子ちゃんとか。その辺りと仲良く話すナくんを見て、なんだかイライラするの。相手が女子だけじゃなくて、明石とかでもイライラするのよ。最初のうちは「友達をとられた気分になるからなのかな」とか思ってるんだけど、だんだん、それも違うなって思うようになるの。そう：例えば、前にうちのクラスに来た：ナくんのルームメイトの子！ そうよ、ナくんは寮生なんだっけ。だったらその設定を生かさないわけにはいかないわよね。自分の知らないところで、同年代の男に囲まれて暮らしてる：そう思うだけで、なんだかモヤモヤするの。もしかしたら：って思い始めるんだけど、まさか自分が同性に恋をするなんて思わなくて気付かないふりをするわけ。ナくんはナくんで、のんびり屋の中村がたまに不機嫌になるのを、不思議に思ってるんだけど、でも

鈍いから、なんでかなあで終わらせちゃう。きっかけ……きっかけは何かしら、中村が思わずキスぐらいしちゃうのよ。そこまで行かなくてもいいわ、あの2人の魅力って、双方のんびりなところだし。触っちゃうとかほっぺちゅうとかぐらいで。それで、気まずい空気になるのよ。ナナくんの方は、なんだったんだろうくらいにしか思っただけで、中村は完全に自覚しちゃう。だから、これ以上のことをしちゃうのが怖くって、妙にナナくんのことを避けちゃう。ナナくんは嫌われたのかと思って焦るの。で、なんだかんだで、中村が気持ちを言わざる得なくなると、ナナくんは茫然とするわけ。「どうして……？ 男同士なのに……」「ナナが望むなら、友達のままでいる」とかね！ とにかく中村はナナちゃんと離れたくないの。でも、やっぱり友情ではないわけだから、間違いを起こさないように、少し距離を置くのよ。ナナくんを想っての行動なんだけど、それが裏目裏目にでちゃう。それでぎくしゃくしてるときに、ナナくんを好きっていう寮生が現れる……あのルームメイトの子かな。もしくは、中村を好きって子。そっちは女の子でもアリかな。で、ついにナナくんが自分の気持ちに気付く……！」

息もつかせぬ勢いでまくしたてていた茜は、ふと、圭介と視線が落ちあった。

ぽかんとしている彼の様子に、血の気がいっぺんに引く。

「……………え？ 今の、て、ハチとナナの話？」

「ぎゃあああああああ」

オワタ！ 両手をあげた顔文字が、彼女の頭の中を踊り狂ったという。

「……落ち着きましたか、野村さん」

「……落ち着きました」

散々取り乱した茜は、肩を落として座り込んでいた。

「……つまりはですね、この世には、男の子同士の恋愛で妄想するのが大好きな女の子がいるのです」

ごまかしてもしようがない、というかごまかせないなと思った茜は、そう言った。

「はあ……」

「………すいませんでした、我慢出来なくなって明石に語ってしまいました…」

そのあまりの落ちように、圭介は遠慮がちに呟く。

「…まあ、ひとの嗜好ってそれぞれだしさ……野村さんが…そういうの好きでも…別にいいと思うけど……」

「（ああああ明石どん引いてるよ！ いつもワンコな明石が歯切れ悪いもん！ 野村ちゃん呼びが野村さんになっちゃったしね！！

あああ泣きたいまじ泣きたい！！）」

「…野村、大丈夫？ 死にかけてね？ 真っ赤だぞ？」

かなり気を使ってくれているらしい、しかし茜にはそれがまた痛い。

「死にたい……」

「死ぬなー！ 気にしてないから、大丈夫大丈夫！ ……まあでも

…あの2人で…クラスメイトで…色々言うのは…どうかとも…思うけど」

「ですよねそこは自分でも思う！ でもね…そう見えちゃうんだ…
…腐りきってんのよ…引くよね…」

正直、どん引きな圭介だが、茜の落ち具合があんまりにもあんまり
だったので、思わず笑って頷く。

「引いたけど、まあ、別にいんじゃない？」

もともと細かいところに頓着しない性格でもあるので、大丈夫だとい
うふうに、手を振って見せた。

一瞬、告白的なことで引っ張って来られたのかなあ、なんて、期待
した自分がアホらしい。

「あ、でも本人たちに言うなよ？」

ほっとしたのか、茜も弱弱しく笑う。

「それはもちろんよ。自然な2人が好きなんだもん」

「…ちよつとズレてる気がしないでもないが、まあいいや。ところ
で、もう教室に戻ってもいいか？」

立ちあがりながら腕時計を覗いて——ぎょつとした。

とつくに、ホームルームが始まっている時間だったのだ。

「え！？ うそお」

「あー、野村ちゃんが喋りまくってるときに鐘なつてたよ」

どっだけ夢中で語ってたんだ、と自分にツツコミつつも、それを今
まで言わずにいた圭介も圭介だ、と茜は思った。

「さっき何してたの？ 2人して遅れて」

不思議そうに問いかけて来る栄人に、茜と圭介は顔を見合わせる。
ホームルーム中に、注目を集めながら戻って来た2人は、緒方先生にそれぞれ出席簿で軽く叩かれていた。

「…ああ、別に……大したことでもないんだけど」

口ごもる茜を制して、圭介がからからと笑う。

「そう。宿題を見せる見せないでちょっと揉めてたの。な？ 茜ちゃん」

「っ、そう！ あか…けっ、圭介が、数学の宿題…見せてって」

ふうん、と、栄人はあっさり納得した。2人は胸を撫でおろす。

「っーか、2人そんな仲良かったっけ？ 名前呼びだし」

「だってオレだぜ？ ナナに負けてられんよ」

「アホか」

お役御免、とは言っても、ナナハチコンビとはこれからもつるんでいく気満々でいた圭介は、栄人のクールなツツコミに、嬉しそうに笑った。

一方茜は、ちょっとばかり罪悪感にさいなまれつつも、そういえばナナくんは、と辺りを見回す。

七緒は、少し前の席あたりで、米子と優子に、とびっきりの笑顔をを見せていた。

「わー、本当にいいの？ ヨネちゃん」

「いいのいいの。いっぱい作ったからさあ。優子ちゃんと一緒の班で作ったのよ。ねー」

「うん。良かったらこっちのクッキーももらってくれる…？ うち

は男ばかりだから、甘いもの持って帰っても、不人気なの」

「ほんとー？ すっごく嬉しい、ありがとうお」

「…モテる男子ってよりは、餌付けされてるって感じに見えるの、私だけ？」

「大丈夫だ、俺もそう見える」

「えーっ、ヨネちゃん、武本ちゃん、オレにはないのー！？」

馬鹿が便乗した、なんて声が後ろから聞こえてくるが、構わず圭介は3人の元へ駆け寄る。

「ええっ、明石くんの分なんて用意してない」

「ふ、藤崎さん…笑顔でなんて酷なことを…！ ナナにあってオレにないってどういうことお」

調理部である米子と優子から、カップケーキとクッキーをもらった七緒は、ほくほく顔で圭介を振り返った。

「ひと口あげるよ、圭介」

袋から、クッキーを取り出すと、圭介に渡すかと思いきや、ぱくりと自分の口に運ぶ。

「ええー！？」

「優子ちゃん、これすっごく美味しい！ すごいなあ、レシピ教えてくれない？」

「えっ…いいけど…戸塚くん料理するんだ？」

「お菓子はあんまりしないけどねー」

「ちょちょちょちょ」

すっかり話しこみそうな勢いだったので、慌てて七緒の肩を掴み、こちらを向かせる圭介。

「先に下さい。その美味しいお菓子をぼくに下さい！」

「ああ、ごめんごめん。はい、あーん」

「あー……………ん？」

差し出されたクッキーを咥え——視線を感じて、振り返る。

……………茜と、目があった。

「……………え？　ちょっと、茜さん？　茜さん？　まさかとは思うけど、まさかとは思うけど」

クッキーを口から外し、俯いた茜に駆け寄った。

「……………あ、私のことは気にしないで！」

「気にするわっ！　あんなことの後で……………つか、ねえ、まさかとは思うけど、も、妄想、してないよね！？　視線が、視線が凄かったんですが！！」

「おい、圭介何言ってるんだよ。野村にあんまり絡むなって」

茜に詰め寄る圭介を、栄人は止める。それを見た茜が、また俯いた。その耳が赤い。

「え！？　ねえっ！　ちょっ、まじで！？　やめてよ！？　今のど

ここで妄想する余地があんの!？」

「…ごめん、圭介。過去話まで出来てしまった…聞く?」

「聞かねーよ! やだよ! 過去話なんて末梢しろよ茜ええ!」

——岬さんといい、こいつといい、オレって女運悪い気がする

「…いつのまにか、あの2人仲良いねえ」

「なんの話かさっぱりわからんけどな」

よくわからない話題で盛り上がる（ように見える）彼らを、微笑ましく見守るナナハチだった。

閑話

「……なんでそんな機嫌良いんだよ」

「ふふふつ、分かる？」

「分かるよ。いつにもましてうぜえ」

ラファエルの毒舌にも、七緒は笑みを崩さない。

今日も今日とて、彼は夕食を持って、404号室を訪れた。

毎日食事を運んでくれるお隣さんは、もうそれを当たり前だと思い始めているらしい。

——俺も、か。

鼻歌を歌いながら勝手に雑誌をめくる七緒を、こっそり眺める。

「（嬉しそうな、顔をするよなあ）」

一週間前に銀杏寮こしにきた戸塚七緒は、あまり少年らしくない少年だった。

穏やかで、細かいことを考えない性質たちらしく、あっさりと寮に溶け込んだ。

「（それでもって、物好きなおせっかい…）」

管理人がうるさくないのをいいことに、ラファエルは入寮からひと月が経った今でも、数えるほどしか食堂で食事をとっていない。

一度、「栄養とらないとだめだよ」と諭されたが、「サプリメント飲んでるから」と答えた。

悲しそうな顔をされたが、おっかさんはそれ以上何も言わなかった。

「(きっと呆れられた、のに。こいつは、いくら煙たがっても、懲りやしない)」

飽きずに、うどんやお粥なんかを持ってきては、ラファエルが食べ終えただろう頃に、もう一度部屋を訪れる。

完食出来ることもあれば、残すこともあった。同室者の戸野橋が居る時は、残りを食べてもらったりもした。

戸野橋は、あまり他人に頓着しないタイプの人間だった。ラファエルが周りに馴染もうとしなくとも、それに関してとやかく言うことはない。

けれど、冷たいというわけでもなく、のろのろと食べているラファエルに、「食えないんだったら残り食うよ」と申し出たりする。ありがたく食べてもらった。

熱くもなく、冷たくもなく、そんな関係が割と心地よかったりする。

——少なくとも、隣みたいな関係は面倒だ

目の前にいる七緒と、1年生の中でも一番騒がしい直哉の405号室は、寮内でも仲がいいコンビである。兄弟のように(どっちが兄か弟かは、その時々だ)仲が良く、部屋以外でも一緒にいるところをよく見かける。

ラファエルは、同室者と仲が良すぎると色々面倒だろうなあと考えていた。喧嘩したら、お互い行き場がなさそうだ。

「むふっふふふ、むーふふー…かき集めー…テレッテー探し物おさーがしーにー行くのおさあー」

「……歌うな！」

七緒の鼻歌が熱唱に変わり始めた頃、ラファエルはどうとう声をあげた。

「えっ、歌ってた？」

「歌ってたよ。ていうか、なんで今日はここで待ってるんだ？」

「理由はないけど…迷惑なら出てくよ？」

「……歌われると迷惑」

「じゃあ歌わない」

にっこり笑いかけられ、ラファエルは身を引く。いくら彼がおっとりしているからって、今日はなんだかおかしい。

「……なんか良いことでもあったのか？」

しぶしぶ問いかけると、眼鏡の奥の瞳が、きらりと光った気がした。七緒は、素早い動きでケータイを取り出す。

「あのねっ、今日ねっ、部活るときにね！ 弟からメールが来たの！」

掬ったチャーハンを口にいれると、ラファエルはれんげを置いた。

「ふーん、それで？」

輝かしい笑顔のまま、七緒が首を傾げる。

「え？」

「……いや、こっちが え？ だよ。それで？ ……え、まさかそれだけか？」

「それだけってなに！ 大事件なんだもの、おれにとっては！」

驚くような内容なのかと思いきや、つきつけられたケータイの液晶画面には、こんな文があった。

5/13木17..46

送信者..タカ

件名..母さんから伝言

本文..たまには帰ってこい。風邪とかひくな。

「.....超普通の文だけど？ 若干そっけない」

「それが孝明から来たんだよっ！ 初めてのメールだもん、嬉しいよー」

初めてえ？ と顔をしかめる。

「.....初めてがアレって..なに、嫌われてんの？」

「そうなんだよね、なんでだか嫌われてる」

笑顔のまま、あっさり肯定するものだから、ラファエルはどきりとした。

「.....何故」

「さあ、わかんないんだけどね。だからもう、おれを気遣うようなメールがきたの、嬉しくて仕方ないんだ！」

気遣う、って言っても、それは母からの伝言だと書いてあるのに。あまりに七緒が嬉しそうなので、そこはつつこまず、肩をすくめて

チャーハンを掬った。

「……お前が、嬉しいなら、良かったな」

「うん、ありがとう」

笑う七緒に――何故か、胸がしめつけられる。

これは妬^{ねた}みだ、と思った。

家族を愛することができる彼を、ずるいと思っている。

「……うざい」

思わずそう呟くと、七緒は自分に向けられた言葉と思ったのか、思
い出したように立ち上がった。

「ああ、そうだっけ。ラファエルくん、食事中にいられるの、嫌な
んだっただけ」

それは、そうだけど。緑色が細められる。

言った覚えはないが、確かに、食べているときに他人が近くにいる
のが嫌いだった。

「（……ああ、だから、いつも飯置いたらどっか行ってたのか…）」

幾重にも、気遣われている。――それが酷く、いらだたしい。

「……もういい。もう、食いきれない。……ごちそうさま」

「お粗末さまでした。ね、ラファエルくん」

特に嫌な顔をするわけでもなく、皿を持ちあげると、七緒は言った。

「ケータイ持ってる？　したら、アドレス交換しようよ」

「持ってるけどやだよ」

「即答っ！？　……ううう、悲しい……」

とぼとぼとドアへ向かう七緒の背中を見て、ラファエルはさすがに可哀そうな言い方だったかな、と思った。
口を開きかけた、瞬間。

「おう、ナナ」

「あ、戸野橋くん。お邪魔してまーす」

戸野橋がタイミングよくドアを開けた。
がくりと肩すかしをくらうラファエルを、戸野橋は不思議そうに見つめる。

「……あ、なに、シュタイネル、残したの？　俺、食ってもいい？」

「いいけど、さっきもめちゃうくちや食べてたじゃん。……あ、そう
だ、由良くん！　見てみて、これが弟からのメールー！」

皿を戸野橋に押し付け、先程と同じように、ケータイを突き出す七緒。戸野橋はそれを一瞥し、もう一度読み返した。

「……はあ？　え、こんだけ？」

やっぱりそういう反応であってるんじゃないか、とラファエルはため息をつく。

……それにしても、七緒はみんなに「弟からメールが！」と言いまわってるのだろうか。

ちなみに、七緒が部屋に戻った後、直哉にもそれをみせたのか、壁の向こうからこんな会話が聞こえてきた。

「幸せレベル低っ！　なんだよ、めっちゃくちや騒ぐからどんな可愛いメールがきたのかと思ってたのに！」

「いいんだよー！　嬉しいんだよーん！　ああっ、タカくんに会いたいな。でも、いざ帰ったら、孝明、無視するんだろうなあ！」

「……聞いてて切ないわあ」

「……ブラコン」

「だなあ」

独り言のつもりで吐いた呟きに、同じく呟くように戸野橋が答えた。

閑話

すば、という音が気持ち良い。

二宮^{にのみや} 由希^{ゆき}は、リングやボードに一切触れさせないシュートが好きだった。

ネットをくぐる音だけが、どんなに周りが騒がしくとも、耳に残る。夕暮れに染まる裏庭は、校庭で練習しているのであろうテニス部の声が響いていた。

「ひゃほーっ、3本連続スリーポイント！ なっ、見た？ 最後のノータッチ……」

ガッツポーズをして振り向く――が。友人は、あらぬ方向を向いている。

「……孝明、オレ、独り言みたいだからさ、こっち見ててくんないかなー……」

「へ？ ああ、何？ マックは奢らねーよ？」

「言ってませんけどそんなこと！？」

由希渾身のツツコミを、孝明は華麗にスルーして、無造作にボールを放った。

すぱん、と小気味良い音をたて、シュートは決まる。

「（ちつくしよー、嫌みなヤロー……）」

今日の孝明は、どこことなくぼうっとしている。普段も抜けていると

ころがあるのだが、最近は特にそれが顕著にあらわれていた。

しかし、どこか違う場所を見ているようでも、簡単にシュートを決めてしまう。それも、由希が必死で練習している、ノータッチのシュートをだ。

「…キャプテン、お前最近おかしくね？」

「うるせーな。練習しないなら退けよ」

今日のバスケ部のメニューは、ロードワークだけだ。しかし、孝明と由希は、裏庭の隅にある古いゴールで、シュート練をしている。2人は3年生だ。夏の大会が終われば、受験のために引退である。出来るだけ長く、朝日ヶ丘第二中学校バスケ部として、バスケをしていたい――そう思っているからこそ、部活の無い日も、こうして自主練に励んでいるのだ。

「……お前こそ、集中しないなら帰れよ」

苛立ったような声音に、ようやく孝明は目を合わせた。

「えっ…ごめん」

上の空である自覚はあったのか、バツの悪そうな表情で、ゴールの下に落ちたボールを拾う。

孝明は、意地っ張りのようで、自分が悪いと思ったらきちんと謝るタイプだ。

由希は由希で、もともとそんなに怒っているわけでもないのに、小さく肩をすくめる。

「で、何？　なんかさ、この前からぼけっとしてない？　連休ときくらいからさ……」

「……じゃあ質問です。お前が：兄にメールをしたら、敬語？ タメ語？」

「は？」

ドリブルをやめ、由希は孝明に歩み寄る。

「何？ なんて？」

「………もーいいよなんでもねえようるせえよ黙れ」

「ちょおちょおちょお、待って待って、兄って、七緒さんだろ？」

何、メール出すの？ えーっ、めっずらしいこともあったもんだね！」

由希と孝明は、幼稚園からの腐れ縁である。なので、当然のように、彼の兄とも顔見知りだ。

「なんだよなんだよおー、七緒さんが熊本行って、やっぱり寂しかったのなあ！」

「……帰って来たよ。この前の連休に。こっちの高校行くんだってさ」

「はあ！？ 初耳ですけど」

「お前に言う必要はないだろうが」

「あるよ！ オレ、七緒さんと仲良しじゃん！ ってゆーか、高校行って忙しいのかなーって思ってたメールしてなかったんだけど。なんだよ、じゃあお前んち行かせろよー！」

テンションが上がる由希に対し、孝明の方はすでにぐったりしている。

「つーか、お前らメールしてたのかよ……」

「たまにだけどね！ で、お兄ちゃん大嫌いな思春期タカちゃんは、

なんでまたメールを？ 口で言えば良いのに」

「おつまえ、本当いっぺんぶん殴るぞ。……母さんに頼まれたんだよ。あいつ、寮入ったから」

「えーっ、寮？ どの？」

「もう黙れ。とにかく、文面考えろ。「たまには帰ってきてねってメールしといて」って母さんに言われた」

ぶっはー、と噴き出した由希は、その勢いで、ゴール下に置いてあるカバンに飛びついた。勝手に孝明のケータイを取り出し、メール作成画面を呼び出す。光速でキーを打ち、出来た文面を突き付ける。

「とりあえずこれじゃね？」

『お兄ちゃんへ。たまには帰って来ないと寂しいな。風邪とかひかないでね！（はあと）』

クリアボタンを押し、孝明は低い声で言った。

「……………死ねっ」

罵倒をもらともせず、もう一度文字を打ち始める由希。

「大体さあ、敬語とかタメ語とか言ってる時点で不思議だよ。お前、七緒さんには口悪いじゃんか」

「……文章、苦手なんだよー」

かなり困っているらしい友人をみて、おふざけはやめ、真面目に相談に乗ってあげることにする。

「七緒さん、いつ出て行ったの？」

「木曜」

「……………先週の！？　一週間前で！　おまつ、どんだけ悩んでたの……………！？」

試行錯誤の末、『たまには帰ってこい。風邪とかひくな。だとさ』という本文になった。

練習中は息切れすらしなかったくせに、この30分のメール作成により、孝明はぐったりとゴールに寄りかかっていた。

「これさー、命令形なのはいつものこととしてもさあ。題名でわざわざ「母さんから伝言」とか言わなくていいんじゃないの？」

「そこは譲らん。俺は別に、思っただけからな。帰ってこいとか。……………あー疲れた、送っというて」

意地っ張りだなあ、と思いつつも送信ボタンを押す……………のを、躊躇う。

「(……………じゃあせめて、文末の「だとさ」を消すか。そっちの方が、多少可愛いげがあるもんな)」

……………こうして、あのそっけないメールは送られたのである。

送信ボックスを見た孝明が、由希にヘッドロックをかけるのは、10分ほど後の話。

「怒るほどのことでもねえじゃんかー！」

「この最後の3文字がないと、俺の気持ちみたくなるだろおお！」
「題名であんだだけ主張してんだからいいじゃんかー！」

ちなみに、同時刻。

「……………あーっ！っ！」

「うおっ、どうした、ナナ」

「わあ、わあー！ 弟からメールがきたんですー！ 先輩、見て見て！」

「あっ、トランプ落ちた！」

「ぎゃっ、コーヒーこぼれた！」

「暴れるなっ！ 資料が崩れ…あーっ！っ！」

お茶部は、一時騒然となったらしい。

35、おつかいとトラブル

「にーくっ、にーくっ、ハンバーグうー。お肉と野菜を買いに行こー」

——こいつは、アホだ

七緒のパーカーのポケットの中で、キーホルダーのロウは、小さくため息をついた。

昨日のメールの件から、かなりご機嫌らしく、買い物に行くにも半分スキップで歌いながらという具合である。

——「おいっ。無駄に揺れるんじゃない！」

「あ、ごめん、ロウ。次の曲がり角、どっち？」

——「右」

おっけい、と呟いた七緒は、言われた通り右折する。

寮に入るにしては家が近い、と言われている七緒だが、住んでいたのは2駅分ほど離れた住宅街だ。学校の近隣には詳しくない。

それを知っているおっかさんが、一緒に行こうかと申し出てくれたが、断った。

ひとりでおつかいくら行けます、と、勇ましく出てきた七緒だが、厳密にはロウがいるので、ひとりではない。

「子供になってよくロウ。お手で繋いでおつかいしようよ」

——「ばか。知り合いに会うぞ」

「そんな都合良く——」

「あれ、戸塚？」

「……会っちゃった」

声の方向を見やる、と、見知らぬ男性が、こちらにのろのろと歩いてくるところだった。

怪訝な顔の七緒を見て、彼はにやにやと笑う。

「何、きょんととしてんだよお、お前」

その気だるい口調に、あっと声をあげた。

「緒方先生……！？ うそお、白衣はどうしたんですか？」

少し猫背気味の緒方先生は、いつもの白衣でなく、ポロシャツにジーンパンというラフないでたちである。

「あのねえ、戸塚クン。学校外で白衣着てたら、単なる不審者ですよーが」

「でもでも、健康サンダルじゃないんですか？」

「……スニーカーで悪いか」

「えーっ、それじゃあ、ヒゲはどこ行ったんですか？ さっきまでなかったじゃないですか」

「どこも行かねーわ！ 剃ったんだよ、学校終わってから」

「どうせなら朝剃ればいいのに。せんせ、ヒゲないと若いー」

きやいきやいとまとわりついてくる七緒を、適当にいなしながら歩く。

「おつかいか？」

「お肉屋さんにちよつとー。銀杏寮にいつも届けてくれるトコらしいんですけど、おじさんが腰をやっちゃったとかで…」

「ああ、三島精肉店な。あそこのじじいも、いい加減引退すればいいのに」

詳しいんですね、と言うと、緒方先生は薄く笑った。

「俺、この商店街の裏に住んでるから」

「そうなんだあ。遊びに行っていていいですか？」

「やだよ。お前来たら絶対うるさそうだもん」

「ナオも一緒にとか！」

「さらにうるさいわ！ ヤメテ、床が抜けるから」

ちえ、いけずー！　なんて唇を尖らせる七緒を見て、緒方先生はため息をついた。

「お前、いくつだよ……ほら、ここ。ここだよ、お肉屋サン」

立ち止った先生と、道の反対側の店を交互に見やる。確かにその看板には「三島精肉店」とかいてあった。

もしかして、というかもしれないけど、ここまで案内してくれたのだろうか。

しかし、眠そうな緒方先生を見ると、何故だかお礼を言う気になれなかった。

「……買ってきます。先生、待っていてくれますか？」

「おー待ってる待ってる。早く行って来い」

「いってきまーす」

ぼてぼてと駆けて行った七緒は、3分程すると、のろのろと戻って来た。

「3キロ近くありますよ合挽き肉が……おじさんにお饅頭もらいました」

「ガキの使いかよ。じゃあな、戸塚。お手伝い頑張れ」

手を振って歩きだした彼の腕を――七緒は空いた右手で掴む。

「……………あと、玉ねぎも買うんです。7キロくらい」

というわけで、七緒のお使いに付き合わされた緒方先生は、しかし、特に文句を言うこともなく、玉ねぎを持ってくれた。

「八百屋もぎっくり腰か？」

「いえ、おっかさんの注文ミスです」

「あいっしばく」

約30人の男どもの夕食なので、量は半端じゃない。作るよりまえの段階も大変なのだ。

「ハンバーグはカレーに次いでの人気メニューらしいんです。月一回しか出さないらしいですけど」

「……手伝った俺は、夕食に御呼ばれだよな？」

珍しく爽やかに笑った先生に、少年ははっとなった。

——それが目的かっ

めんどくさがりのくせに、何故文句を言わないのか、気になっていたのだ。

「そ、それは……おっかさんに聞かないとわかんないですけど……」

「いざとなったらお前の分くれ」

「いやですよ!」

「肉だけでいいから」

「メインじゃないですか!」

なんだかんだで楽しく話している2人。

七緒のポケットの中で揺れながら、彼らの声を子守唄に、ロウはうとうとうとしていた。

決して、でしゃばってはいけない。

それが、性転換した被害者につく、担当天使たちに課せられたルールのひとつである。担当者が上手く生活している場合は、特に手を出す理由はないのだ。

彼を起こしたのは——小さな、小さな、声だった。

——たすけて、たすけて

誰かが、どこか近くで、泣いている。それも、酷く。思わず、ロウは七緒にそれを告げようと思った。が、その一瞬前に。

「：あ？　なんか：聞こえねえか」

緒方が、ふと、顔をあげた。

七緒はきよんとしたが、すぐに彼も真剣な表情になる。

確かに、どこかで騒ぎが起きているような、ざわざわとした人々の声が聞こえた。――喧嘩、らしい。

「――行きましょう」

一瞬迷ってから、先生の袖を引っ張る。

七緒自身は、そういう類の騒ぎは苦手だ。けれど、緒方先生はこの辺りに住んでいるという。

「もしかしたら、知ってる人が巻き込まれてるかもしれないじゃないですか」

七緒の焦った声に、先生も多少真剣な顔で、頷いた。

「こわいわあ」

「警察はまだなの？」

商店街の一角、おそらく小さな袋小路となっている場所に、人だかりができていた。

野次馬の外側で囁き合う中年女性に緒方が声をかける。

「おばさん、なんかあったの」

「ああ、緒方くん。今ねえ、どうも喧嘩があったみたいなのよ」

顔見知りのようだ、緒方を見るや否や、おばちゃんは滑らかな口調で喋り出した。

「よくわからないんだけど、3対1？ 4対1だったのかしら、とにかく、片方は1人みたいだね。かと思えば、どうやら仕掛けたのは1人の方みたいなのよ。やり合っているところは見てないんだけど、多数相手に1人が善戦したらしいの。相打ちになって、どっちもそこでびてるみたい。誰かが警察呼んだみたいだから、そろそろくるんじゃないかしら」

どうやら、事態は既に収束に向かっているらしい。とりあえずほっとした七緒は、ポケットの中でロウがむずむずしていることに気付き、小声で問いかけた。

「…ロウ？ どうしたの」

「……お前には…関係ないことなんだけど」
それでもいいから言って、とせつつくと、天使は居心地悪そうに呟く。

「――俺は…天使は、ひとの心の声が聞こえる。お前とたまに成功する、以心伝心みたいのじゃなくて。」

……助けを呼ぶ声が、救いを求める声が、聞こえるんだ」

それは、すごく一方的なものだと彼は言った。多かれ少なかれ、人間は誰しもそれを発しているのだと。

「――精神的なものか肉体的なものかまでは判断がつかないが…

…ものすごい強さだった。今にも、折れてしまいそうな……それが、こっちの方向から、聞こえたんだ」

血の気が引く。拙い説明ではあったが、ロウの言葉の足りなさに慣れていて、読解力もある七緒は、彼の言わんとするところがわかってしまった。

「（もし、肉体的な助けを求めているんだったら……今の喧嘩で負傷したひとのものだったら……大変な怪我、ってこと？）」

ロウがわざわざ伝えて来るからには、よっぽどの状態なのだろう。七緒は、先生に袋を押しつけると、人だかりに突っ込んだ。

「おい、戸塚……」

驚いている緒方に、おばちゃんは思い出したように言う。

「そういえば、どっちもまだ若かったみたい。高校生、くらいかしら」

小柄、とはいっても、男子高校生だ。四苦八苦しながら人の間を進もうとするが、彼女らも伊達にわざわざ野次馬をやっていない。全く動く気はなさそうだった。

挟まれて動けなくなっている七緒の首根っこを掴み、緒方は「すいませんねー」と横柄な態度で強引に突き進んだ。

主におばちゃんで構成されている人垣を、躊躇いなくかきわけ、緒方先生に、七緒が慌てて囁く。

「せ、先生、乱暴すぎませんか」

「馬鹿。商店街のババアどもはこんなんで……うわっ」

押されたおばちゃんが、「何すんのよ」とばかりに緒方に肘鉄をいれた。

ほらな、とばかりに顔をしかめる先生に、七緒は引き攣った笑顔をさせる。

「どこもおばちゃんは強いんですね……」

ようやく野次馬の壁を抜けた2人は、同時に「うっ」と声を漏らした。

死屍累々——…とまではいかないが、5人の青年が、ぐったりと倒れ伏している。

色とりどりだ、と思った。

目に痛い服装に装飾品。そしてところどころに飛び散っている、真っ赤な血。

茶色、金色はもちろん、お前ら示し合わせたのかと言いたくなるような、赤青緑。光の三原色。

それぞれに違う髪色を持つ5人をざっと見まわして、緒方先生は目を見開いた。

「あいつ……」

知り合いですかと目線で問いかける七緒の肩を抱き、焦ったような声で囁く。

「赤髪の奴がうちの生徒だ。——警察沙汰は、やばいな……」

小さく舌打ちをする。心底面倒くさそうな——心底心配したよう

な表情で。

「戸塚」

「はい」

緒方は、それを口にするのを迷ったようだった。

彼の躊躇いを感じ取ったのか、七緒は薄く、妖艶に微笑んで見せる。

「おれは、何をすればいいですか」

協力してほしい、と、その言葉を言わせずに。

当たり前のように指示を仰ぐ七緒に、驚いて、それから、にやりと口角を上げた。

36、証拠隠滅

サイレンの音とともに、パトカーがやってきた。

車を止め、降りてきた警官は、辺りを見回す。喧嘩が起きている、との通報を受けたのだが、どこにも騒ぎが見えない。

誤報なのではと疑いつつも、通りがかった中年の女性たちに声をかけた。

「すみません、ここいらで喧嘩があったという通報を受けたんですが。そんな騒ぎはありましたか？」

おばちゃん達は、きょとんとしたのち、思い出したように言った。

「ああ、さっきのあれかしら」

「若い人が何人かでねえ。酔っ払いだったのかしら」

「ちよっと騒いでいたみたいだけど、すぐいなくなったわねえ」

「はあ……」

警官は困ったように辺りを見回し、独り言のように呟く。

「どこか壊れたりしてないか、聞き込みした方が良いかな……」

礼を言って立ち去ろうとしたが、おばちゃんの1人に腕を掴まれ、仕方なく振り向いた。

「そんなことより、ちよっとおまわりさん、聞いてくれる？ 最近この辺り落書きが酷いのよお」

「え、ちよっ……」

「そうそう、こっちこっち！ あとねえ、ポイ捨てが多くてねえ…」

ついには「ちよっこつちのお店行きましようか」なんてはしゃぎだすおばちゃん3人に、警官の青年は顔をひきつらせて首を振る。

「あの、自分、他にも仕事がありますので…」

「いいじゃない、少し話を聞いてってよ」

迫力に負けて引きずられそうになった青年は、慌てて手を振り払った。

「ご協力ありがとうございました！ では！」

素晴らしい脚力を見せる青年の後姿に、おばちゃんたちは顔を見合わせる。

「何もあんなに急がなくてもねえ」

多少不服そうな彼女らを見て、物陰に隠れていた七緒は、警官を気の毒に思った。彼は仕事をしに来ただけなのだ。

「（今のは逃げるよ……途中からおばちゃんたち本気だったもん）」

あの後、何故だか商店街の人々に顔が利くらしい緒方先生は、人だかりの真ん中に出ると、いつもと同じ声音でこう言った。

「うちの生徒が迷惑かけました。しかし、俺に免じて許してもらえ

ないでしょうか」

驚いたことに、あっさりと人々は協力体制にはいった。

野次馬たちは散り、口裏を合わせ、やってくるであろう警官を追い払ってくれると言い、ちょうど喧嘩のあった場所に一番近い店は、気絶した青年たちを一時的に匿おうと申し出た。

当事者たち以外に負傷者が出なかったこと、特に破損したものもなかったこと。そのふたつも、彼らの乗りの良さの理由の一端ではあるが、緒方の頼みだから、というのが多くを占めているのだろう。

「……センス、あなたこの商店街の何ですか……」

「人気者」

不敵な笑みを浮かべる先生の背を、さっさと彼らを運べとばかりに押した。

「あの、ありがとうございました」

七緒が出て行ってぺこりと頭を下げると、おばちゃんたちはカラカラと笑う。

「いいのよお」

「緒方くんの教え子さんなんだってえ？ 断れないわあ」

「でも、もうあんな騒ぎ起こしちゃだめよ」

「ごめんなさい……」

しよぼくれる七緒を見て、おばちゃんたちは慌てて宥め始めた。

「いいのいいの！ たまにはこういう刺激がなきゃ」

「もうっ、長谷川さんったら！」

「ごめんなさいね、七緒くんのせいじゃないものね」

3人がかりであやされて、なんだかとても納得のいかない七緒だった。

「おう、戸塚。サツは行ったか？」

ぽてぽてと戻ってきた七緒に、緒方先生は手を挙げる。

何故か納得いかない顔の七緒は、手に持っていたものを先生に見せた。

「おばちゃんたちに：飴とかチョコとかもらったんですけど…」

ぶは、と噴き出す。子供扱いされたと思ったらしい少年は、八つ当たりで緒方を小突いた。

「お前さ、親戚のおじさんおばさんに人気あったんじゃないか？」

「え？ はあ：弟よりおれのが構われてた記憶はありますけど」

やっぱりなと言いたげな顔で、ぐりぐりと七緒の頭を撫でる。

「戸塚は年配ウケする性格なんだな。良い子だ、お前と俺が組んだら、商店街制圧出来るぜ？」

「しませんよっ！ もう、それで、これからどうするんですか」

転がされた、5人の青年たちを見下ろす。

とりあえず警察はやり過ぎたし、路上に落ちた血も乾く前に水で流したので、あとは彼らをどうするかだ。

「赤いのはこのまま銀杏寮まで運ぶつもりだけど……他の奴らはどうすつかね。どこかに捨てるか？」

「……教師としてどうなんですか、ソレ……」

「ばか、うちの生徒じゃなきゃ知ったこっちゃねーよ。いまでもココに迷惑かけるわけにはいかないし……」

それもそうなのだ。彼らを寝かせているのは、魚屋の裏口辺りである。いつまでもここににいるわけにはいかないし、ここで彼らが目覚めて、また騒ぎだしたら店主に申し訳が立たない。早くどうするか決めなくては。

「ていうか、そんなに大怪我してるわけでもないから、もうすぐ起きちゃうぜ」

5人の状態は、決して命に別状があったりしたわけではなかった。鳩尾に酷い色の痣ができていた者や、軽い脳震盪を起こしている者はいた。が、ものすごい怪我というわけではない。

じゃあ、ロウがあんなにも感じていたのは、誰の助けだったのだろう。

——「もう、聞こえないんだ。本当に一瞬だったから……」

ロウ自身も困惑しているようだが、今ココでそれ以上詳しい話は聞いているられない。

緒方先生と2人でうんうん唸っていたら、店主のおじさんが入り口から顔をだした。

「おう、緒方。軽トラ貸してやるから、荷台にそいつら乗っけてけ」
「え？ いいの、田中さん」

驚いたような先生の表情がかなり子供っぽくて、七緒は何故だか見とれてしまった。

田中さんは、ニヒルに笑うだけだった。

そんなわけで、怪我人5人を荷台に積み、緒方先生の運転で、学校に向かっている。

荷台の不良たちを気にしながらも、七緒は先生に問いかけた。

「赤い髪のひとは一旦寮につれて行くんですよね。他の4人は？」

「通り道の公園に置いてく。もう着くから下ろすの手伝えよ」

「……………はあい」

なんだか妙なことに巻き込まれている気がしてきた。それは緒方先生も同じのようで、盛大なため息をついた。

「もおお、めんどくせええ…すっげえめんどくせえ…戸塚とぼったり会ったのが運のツキだったな」

「おれのせいみたいく言わないで下さいよお！」

車を止めると、赤い髪以外の青年を引きずり下ろす。

意外に力があるらしい、緒方先生は、俵のように青年を運んでいた。一方七緒は、青年のわきに手を入れて、ずるずると引きずっている。別に悪意があつてではなく、身長的に七緒は彼を引きずる形になつてしまうのだ。

えっちらおっちら、たどたどしく進む七緒を見て、緒方はまた、ひ

とつため息をついた。

可哀そうに引きずられていた緑髪の青年の足を持ってやると、七緒はほっとした顔をする。

「先生、1人で運んじゃうんだもん、びっくりした。普通2人でやるでしょ」

「1人でやった方が早いと思ったんだよ。ほら、後ろ、段差気をつけな」

4人を砂場に横たえて、2人は同時に息をついた。

しかし、割と乱暴に運ばれたにも関わらず、4人は一向に目を覚まさない。その様子を見て、七緒は少し不安になった。

「さ、行くぞ」

腰を伸ばしながら車へ戻る緒方先生に、七緒は言った。

「おれ：誰か1人が目を覚めますまで、ここにいます」

先生は、あからさまに「はあ？」という顔をした。そして口に出した。

「何言ってるの、オマエ」

「だって、4人全員まだ目を覚ましてないんですよ。心配じゃないですか」

何度か口をぱくぱくした後、緒方は盛大に、今日何度目になるかわからないため息をつく。

「ダメって言っても聞かないだろうから、勝手にしろよ。ただし、

単なる通りすがりのフリをしるよ？ 間違っても、車でここまで運んできたとか言うな」

「わかってますよ、それくらい。あ、おっかさんに、おれの部屋のベッドの横に救急箱があるって言って下さい」

「…わかった。あと、喧嘩売られても買うなよ」

「……おれが喧嘩を買える程の男に見えます？」

見えないから心配なんだよ、と言うと、緒方先生は七緒の頭を撫でた。

「銀杏寮にあいつを置いてきたら、すぐ田中さんちに車返してくる。したら、この公園に寄るから、一緒に寮まで行こう。いいな？」

「はい。待ってます」

ほにやりと笑う少年を見て、こいつの危機管理能力は大丈夫なのだろうかと思う緒方だった。

「――ロウでしょ」

軽トラックが視界から消えると、七緒はそう呟いた。

傍らに、いつの間にか少年になったロウが立っている。天使は、特に悪びれた風もなく言った。

「よくわかったな」

「だって、あんなに動かしたのに目を覚まさないの、おかしいもの」

以前、孝明を眠らせたように、ロウが彼らを眠らせ続けているんじゃないかと、七緒は思ったのだ。そしてそれは当たっていた。

「だって、荷台で目を覚まされても厄介だろう？」

「まあ、それもそうなんだけどさ……いいの？　そんなに魔法使って」

どうやら自分が心配されているらしいことに気がついたロウは、ぶはっと噴き出した。

「いいんだよ、俺は七緒の補佐だから。お前のためなら何でもできるよ。……って言っても、あんまり大したことは天使の性質上出来ないんだけど」

「そうなの？　疲れたりしない？」

「これくらいでは疲れないよ」

そうなんだあ、と、感心したような七緒の様子に良い気分になったロウは続けた。

「そうだな、お前を大金持ちに、とかは出来ないけど、日常の、ほんのちよびつとを、都合のいいようにしたりすることは出来る。例えば今。起きて欲しくないから、少しだけ眠ってる時間を長くしたり」

「天使ってすごいんだねえ。大抵のこと出来ちゃうんだ」

七緒が言うのと、少しだけ、ロウの表情が曇る。

「それでもないさ。天使……だから」

その先は続けようとせず、曖昧に笑うと、ロウは見えなくなった。

——「さあ、1人だけ起こそう。全員起こすと危ない気もするか

らな」

どうやらストラップに戻ったらしい。変身するときは、一言断ってからにしてもらいたいものだと思っただと七緒は思った。

しかし、抗議する間もなく、死んだように横たわっていたうちの1人が、もぞもぞと動き出した。

心の準備が！　と思いつつも、青年を覗き込む。

ゆっくりと、目が開かれた。

37、目覚めた不良

「う…」

起き上がろうとして、青年は顔をしかめた。

このひとに関して言えば、青年と言うよりは少年に近い。どうやらロウは、一番小柄な子を選んで起こしたようだ。しかし、髪色は一番派手な、青色に銀のメッシュだ。遠慮勝ちに声をかける。

「あの…大丈夫…ですか？」

ようやく七緒の存在に気がついたらしい。少年は目を見開くと、痛みも忘れて素早く身体を起こした。

「なっ、お前、誰…!!？」

「ひゃっ、あぶな…っ！」

勢いが良すぎて、貧血を起こしたようだ。ぐらりとかしいだ身体を、慌てて抱きとめる。

「いきなり動いたら危ないですよ」

「…何、ここ。あんた誰…あの野郎は？」

体中の痛みに気付いたのか、少年は特に抵抗もせず、七緒の胸にぐったりと凭れ続けた。

「ええと…ここは、駅からちょっと入ったところ、小さい公園です。」

あなたたちは、ここに倒れてました」

棒読みにはなっていないかと不安なりながら、精一杯「僕は通りすがりです」という顔をして見せる。

「……公園……!？」

きよろきよろと辺りを見回し、倒れ伏す仲間たちに気付く。
ぎろ、と至近距離で睨まれて、七緒はびくりと肩を震わせた。

「お前……お前、なんかしたのか」

「してませんよ。人が倒れてるから、驚いて……」

これ以上この話をしているとボロが出そうだ、と思った七緒は、ゆっくりと青髪の少年から身体を離す。

「ちょっと待てよ、聞きたいことが……」

「ハンカチ濡らしてきますから、大人しくしてて下さい」

少年の顔は、鼻血が乾いてこびりつき、大変グロテスクなことになっていたので。

さっきまではそれどころじゃなかったので放って置いたが、面と向かって話すとなると、気になる。

「（良かった、いつもはハンカチなんて持ち歩かないけど……）」

たまたま、今日はいつもより暑かったので、タオル生地の手拭きを持って出る気になったのだ。

小さい公園なので、水道はすぐに見つかった。淡い青色のそれを流水に浸け、軽く絞る、

小走りで戻ると、青髪の少年は、同じ体勢で七緒を眺めていた。

「痛かったら言って下さい」

少年の頬に手を添えて、出来るだけ優しく血を拭きとる。一瞬、彼は身を引いたが、そのまま固まった。

「……オレ、商店街にいたはずなんだけど」

「おれがあなたを見つけたのは、この場所ですけど？　…喧嘩でも、したんですか」

固い声でだが、ひょうひょうと問いかけてみる。少年の眉間に、盛大に皺が寄った。

「……喧嘩を売られたんだ。やるしかねえだろうが」

えっ、と声をあげそうになって、慌てて、くしゃみのフリでごまかした。

——喧嘩を仕掛けたのは……あのひとの方なの？

てっきり、4人に絡まれたあの赤髪が、正当防衛をしたのだと思っていた。

「（うわあ、なんか、このひとたちに悪いことした気がするなあ…まあ、喧嘩を買う方も買う方か）」

素知らぬ顔で作業を続けるが、内心ドキドキしっぱなしである。無理もない。今までの人生で、こんなにあからさまな「不良」と接点はなかったのだ。

「（うわーん、ピアスいっぱいいてる！ ダメだダメだ、外見で人を判断しては…でも怖いってばー！ 喧嘩は売られても買っちゃいけないよ！ うう、余計なコト言わないようにしなきゃ）」

手が震えそうなのを抑えつつ、ちらりと少年の目をみやる。

まだこちらを凝視していたので、慌てて目を逸らした。

こんなに至近距離なんだから、そこまでガン見しなくたっていいだろうに。

しかし、少年は七緒の心情には気付くこともなく、目を瞬かせて、言った。

「……その辺にコンタクト落ちてねえか？」

「え？」

「ないんだ、両目とも……」

もう場所のことは聞くのを諦めたらしい、唐突にそんなことを言われ、きょとんとした七緒は――すぐに青ざめた。

コンタクトだったら、喧嘩の現場に落ちている可能性が高い。っていうか、そうだろう。しかし、あの場所は、

――水で流した…ッ！！

ところどころに落ちていた血を流すため、あの場所はホースを使って流してしまったのだ。

今更戻って探してみても、コンタクトが見つかる可能性は無に等しい。

変に思われないうちに、一応辺りを探すフリをしてみせた。

「……ないみたいですけど…」

「まじかよ…一万もしたのに…」

うわあああごめんなさいごめんなさいと心の中で絶叫する。
瞬間、少年の方が大きく揺れた。

「……ッ」

「あっ、ごめん！　ここ、怪我だったんだ…」

慌てて、ハンカチを離す。左頬骨あたりが、擦り傷になっているようだ。

「ごめんなさい、気をつけるね」

七緒がそういうと、少年はふと、何故大人しく顔を拭われていたんだろうと思ったようだ。バツの悪そうな表情で、目を伏せる。

「……もういい。放っておいてくれ」

明らかに草食系な七緒には、あまり強く出る気になれないらしい。口調は乱暴だが、軽く肩を押すくらいで、あまり抵抗らしい抵抗はしない。

「そんなわけにいかないよ」

——だって、コンタクト流したのわたしだしっ！　このままじゃ良心が痛む！

もとはと言えば喧嘩していた彼らが悪いのだろうが、ロウは何も言わないでおいた。七緒は、どっちにしてもお人好しだ。

お人好し、という点については、出会って5分のこの少年も、痛い

ほど感じていた。

「消毒液とかあればいいんだけど…」

「チッ……舐めとけば治るっつーの」

「え……っ。それはさすがに…」

口ごもる七緒を見て、少年ははっとした。

「馬鹿っ、違うぞ！ お前に舐めろっつってんじゃねーよ！」

「あっ、だよ。びっくりした」

「……ったく」

ため息をついた瞬間、ようやく、少年は自分が無防備に寄りかかっていたことに気がつく。

「っ、近^{ちけ}え！」

「わっ」

思わず七緒を突き飛ばすと、あまりにも簡単に彼は転がった。

少年の胸に罪悪感がよぎったが、砂場だったので、七緒に大したダメージはない。

砂を払いながら立ち上がる七緒を、少年は見上げた。

その瞳に不安を見てとった七緒は、ハンカチを振ってみせる。

「一回すすいできます。あなたはもう大丈夫みたいですけど、他の人も少し血が滲んでるので」

「……別に、そこまでしてくれなくても」

あんた関係ないだろう、と言われ、曖昧に笑う。彼が知らないだけで、関係はあるのだ。

「おれがしたいからするんです」

そう言って駆けて行く七緒の背中を、困惑を隠そうともせず見つめる少年。

再度濡らされたハンカチを受け取ると、言いにくそうな顔で七緒を見上げた。

「……おい、」

「はい？ ……あっ」

声をかけられて振り返った七緒は、遠くからの呼び声に表情を輝かせた。

「おー…い、戸塚あ」

緒方先生が迎えに来たのだ。立ち上がると、笑顔で少年に言う。

「ごめんなさい、おれもう行かなきゃ。他の人も、もうすぐ目を覚ますと思いますよ」

さよなら、というと、先生の元へ走り出した。後ろから、小さく「ちよっ、待てよ」という声が聞こえたが、寮に運んだ怪我人のことも気になる。

背中に視線を感じながらも、七緒は入り口まで駆けて行った。

「あいつら、起きたのか？」

心配そうな先生の口調に、不思議と笑顔が浮かぶ。

「ええ。1人だけ起きました。…大丈夫でしたよ?」

歩きながらじっと見つめられて、首を傾げると、ふいに、緒方先生の手が顔の方に伸びてきた。ぎよっとして身をすくめる。

「……砂ついてるけど? ていいうか何びびってんの」

どうやら、髪についた砂をはらってくれたらしい。七緒は赤面すると、先生の腕を押しやった。

「これは、自分で転がっただけです。とにかく、早く寮に戻りましょうよ。おっかさん居たでしょ?」

「米といでた。つーかお前馬鹿だろ。田中さんちに買った物全部置きっぱなしだったからな」

ほら持て、と米を押しつけられて、七緒は顔をしかめた。

「あー、車に積んどけばよかったのに…重い…」

「馬鹿、俺はもっと重い玉ねぎ持ってるんだからな。曲がり角で交代しろよ」

「えー」

「えーじゃないっての。ったく、誰のせいだと…」

2人はぶうぶう言いながら、銀杏寮へ向かうのだった。

「ただいまー！」

からからから、と戸を開けると、直哉と戸野橋があっという間に駆けてきた。

「ナナ！」

「喧嘩に巻き込まれたって!？」

「巻き込まれてないよ!？」 緒方先生、どんな説明したんですか？」
「それなりに普通の説明したけど」

どうやら、気絶したままの青年に氣をとられ、直哉たちには「喧嘩」と「戸塚」のワードしか心に残っていなかったらしい。

「2人とも、陸部は？」

「今日はコーチいないから自主練になったんだよ。岩平は真面目にやってるけど……で、帰ってきたらちよっとした騒ぎになってるし」

戸野橋の話を聞きながら、抱きついている直哉をそのまま引きずって、食堂に赴く。

ちゃぶ台は壁際にたてられ、おっかさんと葵、雪弥が、横たわる青年を覗き込んでいた。

葵と雪弥が、七緒に気付く。

「おかえり、ナナ。お疲れ」

「おつかりー。ナナちゃん」

「アオさああん、喧嘩現場、超怖かった! 血とか!」

ぽよん、と葵の腹に抱きつく七緒を見て、雪弥は目を細めた。

「あれえ、オレは無視なのかな……」

「ゆーきゃん先輩はいじめるから嫌です。アオさんは柔らかくて気持ち良いから好きです」

「…うん、褒め言葉と受け取ることにするけどさあ」

今度は葵が遠い目をしたが、雪弥はにやにやと笑う。

葵に抱きつく七緒に、直哉がくつついており、直哉をいい加減に引きはがそうとしているらしい戸野橋が、彼の服を引っ張っている。まるで、「大きなカブ」のようだ。

周囲が和みかけたその時、おっかさんが「しっ！」と鋭く声をあげた。

「……テツ？ 大丈夫か、テツ」

どうやら、七緒が帰って来たことで、ロウが魔法を解いたらしい。

「（ていうか、このひとまで眠らせてたのか、ロウ…）」

しかし、おっかさんが妙に心配そうだ。不思議に思っただ直哉を振り向くと、「ああ」という顔をされた。

「あいつも、銀杏の奴なんだよ。一応」

「え…？」

入寮から2週間近く経っているのに、全く見たことがないなんて――。

七緒がさらに追及しようとしたとき、青年が、小さく身動ぎした。

「う…ん……？」

目を開いて、それから、青年は、ぱっと飛び起きた。痛みに顔を歪

めるところまで、青髪の少年と全く同じ反応である。

「な、んで……ここ、寮か？　どうしてここにいるんだ？」

訳がわからない、というふうな青年に、いつの間にかおっかさんの隣にいた緒方先生が、簡潔に説明した。

「俺と戸塚が運んできた。感謝しろ」

緒方を見た瞬間、青年はかなり嫌な顔をし、七緒の方はちらりと一瞥しただけだった。

「さいたらことすな！」

迫力のある怒鳴り声に、びっくり、と肩を揺らす、七緒含め3人の1年生たち。雪弥と葵も一瞬驚いたようだったが、すぐにそれぞれ、目を三角にした。

一方、緒方先生はさすがに冷静である。

「商店街で喧嘩なんてやってんじゃねーよ馬鹿。どんだけのひとに迷惑かけてんだよ。その上、お前を助けるために奔走した俺らにその態度か？　ガキじゃねんだから礼くらい言えるようになりやがれ」

……今のうそ。かなりムツと来ているようである。

「そがあなこと頼んで……！」

なおも言い返そうとした青年を制したのは、おっかさだった。

「……テツう。何回言ったらわかると？」

子供たちは、一瞬ののちに顔を見合わせる。

自然と、5人は緒方先生を中心に、身を寄せ合った。

「人に心配かけといて、謝りのひとつもなかとほどがんことだ。助けてもらうて、「頼んどらん」て？ わいがなんば言いよつとか。ふうけんなよ」

あくまでも、その口調は静かだ。しかし、普段の完璧な標準語でなくなっていることから、彼が怒っているのがわかる。

「…静かすぎて怖い」

雪弥の消え入るような呟きに、全員が小さく頷く。

同じくたじろいだ青年は、しかし、おっかさんを睨み続けた。

「うずろーしいわ、あんた」

七緒には、はっきりとした意味はわからなかったが、良い意味ではないことは確かだった。

空気が震える、感覚がした。

「せからしかっ！ そがんふうだけん、喧嘩なんてすつとやろうがあっ」

だん、と、おっかさんの拳が畳を殴る。

傍観する6人も、怒鳴りつけられた青年も、全員が、青ざめていた。

——おっ
かさん、
怒る。

37、目覚めた不良（後書き）

方言については詳しい訳ではないので、間違っていたらご指摘下さい。

ふうけんなよ ↓ ふざけんなよ

うずろーしいわ ↓ うっとおしいよ

せからしか ↓ しゃらくさい

38、相談と階段

ノックの音に返事をする。すぐに後悔した。

「ああ怖かった超怖かった」

どやどやと部屋に入って来た人々を見て、驚くラファエル。人数もそうだが、上級生やら理科教師やらが混ざっていることに困惑した。

「は？ ……何、大人数で」

「あー、すまん、シユタイネル。ちよっとうるさいけど」

葵にそう言われると、それ以上つつこむことが出来ない。ぱくぱくと口を開け閉めして、ルームメイトと5人の客人が居場所を作るのを眺めていた。

「座っていい？」

七緒がベッドに寄って来て首を傾げた。言いかえす気力もなかったので、大人しく本を閉じ、場所を空ける。

年長者たちに床を譲るため、戸野橋と直哉は上段に上がった。高校生男子が2人、二段ベッドの上段に座るなんて狂気の沙汰だ。ぎしぎしと軋む音が、下段の2人にちよつとした恐怖を降らせる。せめて戸野橋でなく、七緒が上がるべきだった。

「超たわんでるけど。大丈夫かなあ、これ」

「……お前ら暴れんじゃねーぞ」

下段組の言葉に、上段2人は顔を見合わせる。

「暴れねーよ。それよりシユタイネル、聞いて」

「テツが帰ってきて、おっかさんが怒った」

緑色の瞳を思いきり細め、ラファエルは椅子に座る葵に、説明を求めた。

「葵さん、何があったんですか」

「ああ、4階だからさすがに聞こえないよな。テツがさ、帰って来たんだけど……早速商店街で喧嘩したらしくってさ。居合わせた緒方先生とナナが、なんとか連れ帰ってきてくれたわけ。で、反省の色が見えないテツに、おっかさんがお怒り中なんだ」

「オレらは怖くて逃げてきた」

呆れた顔で、ため息をつくラファエル。

「なんで懲りないんですか、あいつ。前も同学年の奴と喧嘩してたし」

「あゝ、そっか、シユタイネルってテツと仲良くないよな」

思い出したように言う直哉。戸野橋も頷いて、ラファエルは眉間にしわを寄せた。

「あいつと仲の良い奴なんていんの？」

「オレオレ。テツとは仲良いぜえ」

緒方先生にもたれて、本棚を眺めていた雪弥が手を挙げる。しかし、速攻で斬られた。

「あんたが一方的にまとわりついてるだけだろう」

「超刺さったよ。ラファエルお前、なんでオレに対してそんな冷たいかね！ 敬語はどこにいった！？」

騒ぎたてる2年生を、金髪の一年生は冷ややかな表情で見つめた。

「気易く名前呼ぶな。初対面の同性をナンパするような奴に払う敬意はない」

「……お前、そんなことしたんか」

「ちょっとおがちゃん、その目やめてくれませんか？」

「ゆーきゃん先輩はラファエルくんみたいな子がタイプなんですねぇ」

七緒ののんきな反応に、噴き出したのは葵と緒方だった。一方で、困惑するのは雪弥とラファエルである。

「…ナナさあ、意味わかってる？」

我慢出来ずに、口をだす直哉。上段から逆さまに覗きこむ。きよんとした七緒。

「意味って何さ」

「…意味って、意味は意味だよ…」

「意味わかんないけど！？」

まあまあ、と声をあげたのは、やはり葵だ。

「それはまあ置いてさ。脱線もいいとこだ。つまり、これからどうするかってことだよ」

「どうするって、何を」

「とりあえず俺は、テツの髪を染め直させるつもり。とにかく、あいつが喧嘩すると、おっかさんが怒るだろ。俺たち、とぼっちりで恐怖じゃん」

ああ、そういう話し合いか、と七緒は納得する。彼の髪は悪目立ちし過ぎるし、多分絡まれやすい。

とりあえず軽い理由を挙げているが、葵はきつと、純粹にあの青年が心配なのだろうと分かる。

納得した少年たちが、次々に発言する。

「オレ、ピアスの数減らしたらいいと思うー。ゆうきゃん先輩より多いんだもん」

「俺は：うーん、あの、いかにもな服装を変えたらいいんじゃないかな」

「あのひでえ目つきが駄目なんだろ」

「シュタイネル、お前は可愛い顔して言うコト酷いよな。つか、おっかさんにばれなきゃいいんじゃないねー？」

「解決になってねえだろ、そりゃ」

ついには緒方先生も混ざり、わらわらと好き勝手な意見が飛び交う。ここに本人がいたら、絶対怒鳴っているだろう。

しかし、「テツ」のことをほとんど知らない七緒は、黙って見ているしかない。

———そ、疎外感：

これだから転入生は、とため息をつく。

「（……でもなあ、寮に入って、もう10日も経ってるのに……どうして一度もあったことないのかな）」

ずっと気になっていた。例えば雪弥は、寮内で断トツで外泊が多い。部屋にこもりっきりのラファエルのような人もいるし、部活が忙しくていつも夕飯は皆と一緒にでない人もいる。七緒が入寮した日は、バスケ部は合宿中でいなかった。

しかし、そうは言ってもたったの28人だ。10日も暮らせば、全員の顔はなんとなく覚えられる。一度も会ったことがないのは、おかしいのだ。

「（そういや、さっきアオさんが「帰って来た」って言ってた……どこかに旅行でもしてたのかしら）」

そんなことを考えながら、ふと時計を見やる。

「……あっ……」

「どうした？」

唐突に声をあげた七緒を、全員が振り返る。

彼の声は、泣きそうだった。

「おれ……そろそろ夕飯作りに降りないと……」

「このね。オレの運の無さよ」

七緒の隣を、ぶつぶつ言いながら歩くのは、雪弥だった。

下が今どんな状態かもわかんないのに1人で行けって言うんですかーみんな薄情だようわーん！ と七緒が騒いだので、その場にした全員が、じゃんけんをしたのだ。そして、付き添いに選ばれた敗者が、彼なのである。

「ゆーきゃん先輩、もうちょっと早く歩いて下さいよ」

亀のような速度の雪弥を、七緒は困り顔で引っ張る。もうこんな人置いて行きたいが、1階でまだおっかさんが怒ってたら怖いので、引きずってでも一緒に行くつもりだ。

「付き合っただけでんだから、先輩に合わせなさいヨ」

「もうっ。先輩の分のハンバーグ、小さくしますよ！」

「……なっまいきー！ 七緒くんは、いつからそんなに偉くなったのかね！」

そういうが早いか、雪弥の手が伸びてきた。咄嗟に目をつむって、気付いたときにはもう遅かった。

「ちょっと！ 返して下さいよっ」

「やーだー。ナナちゃんがオレに生意気言うから、やーだー」

眼鏡を取り上げられた七緒は、ぼやける視界に戸惑いながらも、雪弥の腕を乱暴に掴む。

しかし、視界が安定しない七緒と、細身ながらも年上の雪弥では、勝敗はわかりきっている。

「いじめ！ これいじめですよ！」

「先輩を敬わないナナが悪いー」

「もおおおお！」

手を伸ばすが、元々の身長で負けているうえ、一段下にいるのだ。

「ほぐれ、取れるもんなら取ってみろーい」

「悪役！ ゆーきゃん先輩悪役！ ……ってゆか、もうほんとに返して下さいよ」

そろそろ本当に時間がない。七緒は真面目な声をだす。
しかし、雪弥は呑気に眼鏡をかけてみたりしていた。

「うわっ、度おキツっ！ お前どんなけ目え悪いの」

「両目ともに0・1です……もう、せんぱ……っあ！」

無理矢理むしりにとってやろうと身を乗り出した七緒が、お約束通り足を滑らせる。

「わっ、ナナ——！！！」

七緒以上に驚いたのは雪弥である。そして、雪弥以上に驚いたのは

――

「うおわっ！！！？」

「きゃうっ！」

どしん、という音と振動が響き、慌てて雪弥は階段を駆け降りる。
七緒は8段ほど転げ落ちたらしい。

「大丈夫かっ？ ナナ」

「いてて…あれ、なんか割と大丈夫だ」

多少腕やら脚を打ったものの、予想していたような痛みが訪れないことに、きよんとする七緒。

雪弥は安心して、いつものにやにや顔を浮かべた。

「そりゃ、いいクッションがあって良かったな」

クッション？ と首を傾げた七緒は、振り向いて視線を下にやり――固まる。

お尻の下には、未だに驚きが抜けきらない表情の、赤髪不良さんが、倒れていた。

――――お約束すぎるッ！！

39、叱るor怒る

「うわわわわっ」

自分が痛くない理由に気付いた七緒は慌てふためいて叫んだ。

「ごっ、ごめんなさい！ わた：おれっ、わざとあなたの上に乗ったんでなくっ、不可抗力だったんです！ 眼鏡なくって、うっかり、つるっと足を滑らせて……」

「~~~~っ、いいから早^{はよ}お退けっ！」

よっぽどパニックっていたのか、七緒は青年の腹に尻もちをついたままだった。怒鳴られて、転がるように彼から降りる。

「ぎやははははっ、もーお前ら、何してんのオ!？」

雪弥の大爆笑を聞いて、被害者2人は目を吊り上げた。

「われのせいじゃろうがっ！」

「先輩のせいじゃないですか！」

同時に叫んで、ハツとなる。雪弥の笑いは増すばかりだ。

七緒の視線を避けるかのように、青年は立ち上がる。そしてその勢いで、雪弥がかけていた眼鏡を、乱暴にひったくった。

「あっ、てめ」

「後輩いじりも大概にせんと、本気で嫌われるぞ」

呆れた、というより起こっている口調で、青年は噛みつく。どうやら雪弥と七緒のやり取りが聞こえていたらしい。振り返って、いまだに座り込んで七緒に眼鏡を差し出した。

「ん。ちゃんとしとけ」

「あ、はい……」

七緒が眼鏡を受け取るか受け取らないかのうちに、青年は身を翻した。何も言う間もなく、赤が視界から消える。ぽかん、とした七緒を見て、雪弥は苦笑した。

「あいつ、あんな見た目だし、すっげー短気だけど、恩は返さなきゃすまないらしいよ」

「え……？」

「だってほら、テツをここまで運んだの、おがちゃんとナナだろ。一応感謝してんじゃね」

「ああ……そう、なんですか」

途端に、彼の外見に怯えてた自分が、情けなく思えた。

——まあ、怖いもんは怖いんだけどさ

「……ていうか、じゃあゆーきゃん先輩より全然良い人じゃないですか」

「どういうこと!?! ……まあ、良かったじゃん。あいつが上がって来てるってことは、もう説教は終わったってことだし。おっかさんも鎮火してんじゃね」

そうですね、と同意した。
数十秒後、それは間違いだったと思い知る。

ズダダズダダダ。

どこのマシンガンぶちかましてるんですかと言いたくなる音をたてながら、おっかさんは玉ねぎをみじん切りにしていた。

「あ、ナナちゃん。フライパン用意してくれる？　もうみじん切り終わるから」

振り向いた顔は、般若かと思いきや無表情。正直、般若の方がマシだ。

ウワァ、と呟いた雪弥は、後輩の「助けて下さい」と雄弁に語る視線から、逃げる。

「……じゃ、確かに送り届けたからオレ帰る」

「ゆっ、ちょおっ……！」

置いて行かないでえええと聞こえてくる気がしないでもないが、雪弥は颯爽と台所から走り去る。

あんな空気の場合にいるなんて、まっぴらごめんだ。
七緒に連れ戻されないように、3階まで駆けあがる。

「おっかさんコエー……」

思わず、1人で呟いた。

手元も見ずに、無表情で包丁を光速で動かす様は、暗いところで見たらトラウマになると断言出来る。

階下にいる七緒に合掌して、部屋に戻ろうと4階への階段に足をかけた――が、すぐに下ろす。

「(3階…か)」

廊下をそのまま、突き進む。一番端の部屋――305、とプレートのかかったドアを、豪快にノックした。

不機嫌な顔でドアを開けた赤髪は、雪弥の顔を見て、ドアノブを引く。

ドアが閉まり切る前に、雪弥がそれを止めた。笑顔で、首を傾げる。

「……おいおい、先輩に対してソレはねーんじゃねーの」

じょわーっ、じょわっ、じゅおうわああっ

換気扇の回る音にも負けない勢いで、おっかさんが玉ねぎを炒めている。

隣で、付け合わせの野菜を切りながら、七緒は遠慮勝ちに口を開いた。

「……あの、おっかさん、」

「何」

遮るような問いに、手を止める七緒。

さすがに、声が固くなっていたことに気付いたのか、おっかさんはぎこちない笑みを浮かべて見せた。

「ごめん。八つ当たりだな。テツを助けてくれて、ありがとうなあ、ナナ」

「：おれは、何もしてないですよ。緒方先生がいなきゃ、何も……それより：おれ、なんであのひとに会ったことないんですか？」

多少畏縮しつつも、七緒は問いかける。おっかさんは一瞬狼狽したようだったが、すぐに苦笑した。

「実家にね、ちょっと用事があって戻ってたんだ。その用事ってのは、俺からは言えないんだけど」

聞けば、ちょうどゴールデンウィークに入った日から、ここを出ていたらしい。七緒とは入れ違いになった形だ。

「そうなんですかー……で、どうしておっかさんは、あんなに怒ったんですか？」

ただでさえぎこちなかった表情が、固まる。

何故、と問いたげな瞳に見つめられ、七緒は俯いた。

「……前に、おっかさん、ゆうきゃん先輩を怒ってたじゃないですか」

雪弥が、外泊届を出し忘れていたという事件だ。

0時近くに玄関をくぐった彼を、おっかさんは恐ろしい笑顔で出迎えていた。もちろん、その後たっぷりお説教だったようだ。

七緒は偶然、直哉と共に夜更ししていた日だったので、岩平からの「おっかさん、怒る！」のメールを受取り、こっそりと見物に降りて行ったのだ。悪趣味だと怒らないでやって欲しい。七緒含め、お怒りのおっかさんを初めて見る1年生たちは、こぞって見物に行っていた。

日頃ノリの悪いラファエルまで覗きに行ったくらいだ。……彼は、どちらかというところ、正座させられている雪弥が見たかったのかもしれないが。

あの日も、確かに標準語が抜け落ちていた。けれど。

「あの時は……あの時は、怒ってるんじゃないで、叱ってるように見えました。余裕があるっていうか。」

でも今日は、怒ってました、よね。切羽詰まってるみたいな焦ってる感じだった」

必死、と言っても良いくらいに思えた。だから、どうしてそこまで怒るのか、知りたくなったのだ。じゅわわ、玉ねぎのやける音と、換気扇の音だけが、空間を支配する。

じっと見つめあい続け、先に揺れたのは、おっかさんの瞳だった。

「……ナナちゃんは、案外鋭いなあ……」

火を止めて、きちんと向き合う。

おっかさんらしいなあ、と七緒は微笑んだ。

「気になっただけです。言にくいなら、良いんですよ？」

「言う言う。もう言わないと気持ち悪い。……テツさあ、退学寸前なんだよねー」

七緒の笑顔が、固まる。

今、さらっとすごいこと言いませんでしたか。

「……ちよい、たんま。そんな重い話と思いませんでしたよ……」

がくりと膝をつく七緒に、おっかさんは笑った。

「一応これ、銀杏の子には言っているから、ナナにもいつか言うことだったんだけどね」

「そうなんですか……」

「ちょっと前に大きめの問題起こしちゃって、次なんかやったら退学って言われてるんだ。本人もそれをわかってるはずなんだけどさ……」

あれ、おっかさん目が三角になってきてませんか。
たらりと汗が頬を伝う。

「どうしてああいう……態度なのかなあ……」

「あのう、おっかさん」

「退学なっても別に構わんみたいなさあ……」

「おっかさん！！ 怖い怖い、戻ってきてえええ」

七緒に泣きつかれて、ようやく自分がブラックモードになっていたことに気付いたようだ。

頭を冷やすためにも、料理を再開する。

「あ、玉ねぎちょうど冷めたわ。ナナちゃん、材料全部ボウルにぶちこんで」

黙々と指示された作業を始める七緒。

おっかさんは、今度はゆっくりと喋り出した。時折、深呼吸をおり混ぜているのが、ちよつと怖いけれど。

「だからさ、今回、緒方さんとナナには本当に感謝してるんだ。バレなくて良かった……っていうのもアレだけど、ホント、大事になら

なくて良かった」

商店街では相当大事でしたけど、と心の中で返す。何せ、周りを巻き込みまくっての証拠隠滅作業だ。

「テツはさ、なんていうか……俺にちよつと似てんだよね。ほら、銀杏で唯一、西日本出身てのもちよつとあるし……。だから、怒る時も超本気になるっていうか……」

「へえー……………は？」

納得しかけて、違和感。

——似てる？ 誰が？ 誰に？

——「おっかさんが、あのテツって奴に」

ロウの律儀な返答に、七緒は思わず声をあげた。

「どこがー！？」

背が高い、ってどこしか、被ってませんよ！

閑話

今日は美味しいハンバーグ…のはずなのに。

「……………」

「……………」

なんだろう、この雰囲気は。

七緒と、隣に座る戸野橋は、顔を見合わせた。

この妙な空気の中心は、あの赤髪である。雪弥に無理矢理連れて来られたらしい彼は、怒ったような顔で、野菜をほおぼっている。

なんとなく、彼に対して、どんな態度をとればいいのか、みんなわからないらしい。

おっかさんがお怒りになったことはすでに周知の事実で、それ以上説教しようと思う先輩はいない。

かといって、心配しているそぶりを見せると、本人は怒るだろうというのも、なんとなく予想できた。

さらに、彼に声をかけにくくさせているのは、彼が10日間、寮にいなかったことだ。

その理由は、おっかさん以外知らされていないようで、そこからも「なんかヤバイことあったんじゃ…」なんて予想できてしまって、

聞きにくいのだ。

「難儀だなあ…戸塚、おかわり」

そう言ったのは、七緒の右隣を陣取る緒方先生だ。

茶碗を受け取る七緒を見て、由良は目を細めた。

「つか、なんで先生いんの？　なんで食ってんの？」

「あんだけ尽力したんだからこのぐらい良いだろ。戸野橋い、お前冷てえな」

理不尽な悪口を言われる由良に、七緒は苦笑してみせた。

「おう、さんきゅ。冷血戸野橋と違って、戸塚は優しいなあ」

「このオッサン、ひとんちで偉そうな…」

「……もうおかわりナシですよ。まだバスケットとテニスと右代くんが帰って来てないんですから」

そっぽを向く七緒に、由良はあれっと思う。

いつもなら、先生の言葉にツツコミか、かぶせてボケるか、するはずなのに。

七緒が立ちあがったその時、玄関の引き戸が開く音がした。

「テツーーっ!!」

叫びながら食堂に飛び込んできたのは、3年生の若松^{わかまつ}彰人^{あきと}だ。

くりんとした瞳に、ころころ変わる表情。子供っぽい顔立ちの割に、寮内では赤城やおっかさんに次ぐ、背高のっぽである。

彼はお目当ての人物の姿を見つけるやいなや、満面の笑顔で――ヘッドロックをかけに行く。

「お前え、帰って来たならメールくらいしろやー!」

「箸、箸! まっさん、俺今箸持ってんじゃけえヤメロ!」

嬉しそうな彰人に、ぶすっとしていたはずの青年が、初めて表情を崩した。

「こら、お前ら。食事中なんだから、埃たてるんじゃないよ」

素早く注意する葵だが、その表情は、どこかほっとしているように見えた。

「あ、ゴメン葵。とゆうか、みんなゴメン。で、テツはいつ帰って来たん？」

「夕方に強制送還されて来たんすよお」

にやにや顔で横から口を出すのは、言うまでもなく雪弥だ。彼は青年の隣に座り、特に構うでもなく、普段より静かにしていたのだが、彰人の登場によって、テンションがあがってきたらしい。

「強制送還？　なんで？」

「喧嘩して」

「っ、てめー、チクるな！！」

ぎよつとした青年が雪弥の膝を蹴ろうとして、彰人に止められる。

「……虎哲^{こてつ}。喧嘩したのか」

真摯な問いかけに、青年は蚊の鳴くような声で「……ちいとだけじゃ」と言った。

怯えたような表情が、妙に七緒の印象に残った。

「喧嘩に、ちっとも何もあるかよ……怪我は？」

「かすり傷とタンコブくらいっすよ。まっさんも知ってるでしょ、テツが超合金で出来てるの」

「出来てねえよ。お前一回黙れよ」

ものすごい顔で睨まれているのに、雪弥はビクともしない。

彰人は少し息をついて、それから怖い顔を作ってみせた。が、雪弥を睨む青年に比べたら、子犬のようなもんだった。

「気をつけろよ、怪我だけは。てゆうか、喧嘩するなら口でやれ。前にも言ったろう？ 周りに心配かけるなって——」

お説教し始めた彰人に、「まっさん、まっさん」と雪弥が笑いかける。

「こいつ、さっきおっかさんにたっぷり説教されてたから、優しくしてあげて」

「え、おっかさんに！？ ……………そりゃあ、お疲れさんだなあ」

途端に、彰人が労わるような態度になったことから、どれだけお怒りモードのおっかさんが恐れられているか、わかる。

ちなみにそのご本人が壁一枚隔てた台所にいるので、声をひそめた方がいいような気もした。

「(…………ていうか、テツさん、普通に喋るひとなんだな…ちよっと怖いけど。彰人先輩とは、仲がいいんだろーか)」

先程の、頑なな態度に比べて、彰人が来てからの雰囲気は、目に見えて柔らかくなっている。

「ね、戸野橋くん…あの辺ってどういう…？」

小声でたずねると、すぐに察した戸野橋は、肩をすくめた。

「あんまし知らないんだけど、テツが素直に言うコト聞くの、アオさんと彰人先輩くらいだぜ」

「へえー…」

——アオさんはともかく、彰人先輩はなんでだろう

失礼な話だが、七緒は素でそう思った。

葵の場合は、銀杏寮では満場一致の「頼れる兄さん」だ。管理人のおっかさんと比べても、勝るとも劣らない。

しかし、彰人は、3年生の割に落ち着きがないというか、意気込んで料理に挑戦したの良いものの失敗したうえ後片づけは親に丸投げしちゃう小学生、というイメージなのだ。

「（ナオをそのまま3年にした感じ……優しいけど、頼れはしないよなあ）」

さらに言えば、彼は生粋のバスケ少年だ。この学校にも、スポーツ推薦で入ってきている。

そんな彰人と、見るからに不良の青年は、全く接点がないように思えた。

「はー、食った食った」

「先生、本当にがつつり食べましたね…ひとの分まで」

あの後、多少雰囲気の和らいだ食卓は、部活組の帰宅もあって、いつものように騒がしく終わった。

ほとんどの子供たちがそれぞれの部屋に戻ったが、七緒に加え、陸部1年3人組が食堂に残っている。

満足げな緒方先生を、4人揃って呆れた顔で見つめた。

「つか、なんで緒方先生がいたわけ？ 極々自然に座ってらしたけども」

騒いでいた時にいなかった岩平は、食事の間中、不思議そうにしていたのだ。

「戸塚のおつかいを手伝ったから」

「うん、まあ：手伝ってもらったから、おっかさんに頼んでみた。ら、あっさりオッケーだった」

「それ絶対、おっかさんの弱みとか握ってるよね、先生」

「教えてたんだっけ」

「教えてたよ」

「おじさん、いつから倫葉学園（りんはがく）にいの？」

「忘れた」

「ていうかもう帰れば？」

「さよなら、せんせー」

「お前らなんでそんなに冷たいの！！？」

いいよおじさん帰るよ！ と拗ね出す先生に、戸野橋と直哉は爆笑する。

「あ、戸塚。あいつに言っとけ。明日朝、ちゃんと職員室来いよって」

帰り支度（といっても、彼は手ぶらだが）をしながらそう言われ、七緒はきょとんとした。

「あいつってテツ、さん？ なんで？」

「だって1週間以上登校出来なかったんだから、とりあえず報告は来てもらわないと」

「あー……」

「ナナ、言いにくいならオレから言っておこうかあ？」

そう申し出たのは岩平で、今度は緒方先生が首を傾げる番だった。

「オレ、テツと部屋隣だもん。言っとくよー」

「絶対来いって念押しとけー。じゃ、俺帰る」

「ばいばーい、おじさん」

「え、ナナ行くの」

緒方先生に続いて、食堂を出て行こうとする七緒に気付き、直哉が声をあげる。

「え？ うん、見送り」

「いいよー、せんせえにそんなのいらないよー！ ゲームしようぜえ」

「…お前、絶対単位やらねえからな…」

「うおっ、まだいた！」

そういえば、転校初日から、直哉とこの先生のやり取りはこんな感じだったなあと思って、七緒はくすくすと笑った。
心地良いなあ、と呟いた。

40、難しいひと

「えっ？」

えっ、って言うしかないよこれは、と七緒は思った。

「テツ……さん？」

「…なんじゃ」

1年3組。朝の騒がしい教室で、思いがけぬ人と顔を合わせた。赤い髪が、明らかに浮いている。

——えっ？ テツさんって……え？ 同級生！？

餌を待つ鯉のように、ぱくぱくと口を開けたり閉じたりを繰り返す七緒に、虎哲は盛大な舌打ちをした。彼の、中に何か入っているんだかわからないスクールバッグが、七緒の隣の席に置かれる。

「え、え！？ うそ、隣……」

しかも、ずっと空いていた隣の席は、どうやら彼だったらしい。

「……お前、その席かよ」

睨まれて、びくりと肩をすくめる。

「（い、や…だめだわ、同い年ならなおさら、仲良くしなくっちゃ。しっかりし、なんでこのひと、いちいち睨むかなあ！ 気にしたら負けだー！）」

そう自分に言い聞かせたところで、栄人が教室に入ってきた。

「はよー」

「ハチ、おれの隣ってテツさんだったんだ！？」

思わず、窓際からドアまで通る声量で、問いかける。

教室に入ってきたとたんに、そんなことを聞かれた栄人は、当然きよんとした。

「は？ テツ？ ……えーと、ナナの隣は水城だよ」

「テツさん、みずきっていうの？」

「……水城 みずき 虎哲 こてつ」

そういえば、転校初日に「隣は水城って奴だよ」的なことも言われたし、銀杏寮でも、自分と同じクラスの寮生がいると聞かされていた…はずだ。すっかり忘れていたけれど。

「はあーっ、虎哲でテツかあ……同じクラスとは思わなかった…」

葵や彰人に対しては敬意が見え隠れしていたが、雪弥には随分尊大な態度だった。それに、なんとなく、年上特有の威圧感を感じていたのだ。

しかし、よく考えてみれば、ラファエルや直哉を始め、1年生も「テツ」と呼んでいたのだから、彼が1年生であることもわかったはずだ。

「（先入観怖いなあ）」

感心したような七緒に、虎哲は居心地悪そうに眉をひそめた。栄人は席につくと、不思議そうに問いかける。

「ナナと水城は顔見知りなの？」

「あ、うん。銀杏で…寮で一緒なの。ね、テツさん」

精一杯の笑顔で同意を求めるが、華麗にスルーされ、頬がひきつった。

——え、ちょお、無視ですか

虎哲の態度が、七緒の、普段は隠れている負けず嫌い精神をくすぐった。

「……虎哲さん？ テツくん？ こてっちゃん？」

「……何の真似じゃ」

「返事がないから」

にっこりと笑う。

このひとは、不良で、喧嘩っ早くて、口の悪い威圧感のあるひとだけれど、同じ年の子供なのだ。

「なんて呼ぼうか？ みずきちゃん？ あ、おれのことナナって呼んで」

「……喧嘩売っとなのか？」

「きよとん？」

「……自分できよとんって言うなや」

「ナイスツツコミ、テツくん」

おいおいおい、と栄人は戸惑う。何、この微妙な雰囲気。

「（水城も寮の奴なんだ……ていうか、なんでナナはあんな挑発的な態度なの）」

そして、何故、短気で有名なクラスメイトが、怒らないのか。突っ込みづらいので、とりあえず放っておくことにした。

「じゃあ、テツくんて呼ぶよ」

「勝手にせえ」

「うん。テツくん、職員室ちゃんで行った？」

「……行った」

「今日さあ、多分帰ったら黒染め用の絵の具が用意してあると思うから、染め直してね」

「いや、絵の具と違うじゃろ！ 染め直さんし」

「アオさんが染め直させるって言ってたよ。逆らえないでしょう？」

うふふ、と笑う七緒が、どこことなくサドっぽい。

——ナナ、ちょっとテンション違うなあ……

寮ではいつもあんな風なのだろうか、と思いながら（実際はそんなことないのだが）、背後の会話にに耳をすませる栄人。

虎哲の方は、完全に対応に困っているようで、しかめっ面になっていた。

「……染め直す理由がわからん。校則は守っちやる。……髪に関しては」

不服そうな虎哲の言葉に、苦笑する。髪に關しての校則は、ほぼ無いといっても良いのだから、赤だろうがピンクだろうが、注意はされないのだ。

「絡まれやすいじゃん、目立つと。どうして赤なの？」

「なしてお前に言わんとあかんがか！」

がた、と椅子をひく音がしたので、慌てて振り返ると、仁王立ちした虎哲と、座ったまま背筋を伸ばす七緒が睨みあっていた。

一瞬怯んだように見えた七緒だったが、すぐに虎哲の視線を受けて立つ。

「怒るのやめてよね。忘れないで、おれはあなたと喧嘩するつもりないから。あなただって、喧嘩して良い立場じゃないでしょ」

叱りつけるような口調のあと――

「……っていうか、なんで赤なのーって聞いただけじゃん……」

子供のように頬を膨らませた。

俯いた彼が、微妙に涙目なことに気付いてしまった栄人は、仕方なしに間に入る。

「ナナ、今のはお前が意地悪な口調だったよ。水城も座りなよ」

七緒の様子と、栄人の穏やかな口調に毒気を抜かれた虎哲は、ため息をついた。

「なんだってええじやろうが。ひとの頭のことなんて」

「理由くらい聞いたっていいじゃない」

うっとおしそうに言う虎哲。が、七緒はめげない。
負けず嫌いかと聞かれれば、そうではないはずなのに。やけに突っかかる七緒を不思議に思っ、栄人が問いかけた。

「ナナ、なんか今日意地悪くない？」

「意地悪いって何！ 悪くないよ！ ―――…しいていえば、」

昨日、年上だと思って敬語を使ってたのが悔しくて。

思ってもみない理由に、栄人と虎哲は哑然とした。

「みんなもさ、教えてくれたって良いのに……誰も何も言わないし！
すごく恥ずかしいじゃん！」

「……っ、そりゃ、お前が勝手に勘違いしただけじゃろ！ 俺のせいにすな」

「やー、よくわかんないけど……水城に賛成だわ」

「ハチさん！？ まさかのアウェイ！？ やだー、そこはおれの味方してよ！」

「どっちにしてもめんどくさいわあ。そういえば、水城が来るの久しぶりだよな。どこか行ってたの」

話題を変えようとした栄人だが、どうやら地雷を踏んだようだった。目を細めた虎哲は、すっと立ち上がったかと思うと、なんの迷いもなく教室から出て行った。

たっぷり数秒、茫然としたのち、かすれた声を漏らしたのは、七緒の方だった。

「…え！？ 何、さ、サボり…？」

「流れるような動きだったな……カバン持ってっちゃったぞ」

「…………え、え、うそお……」

おっかさんの「退学寸前」の言葉が思い浮かび、慌ててドアの方に駆け寄る。

廊下に顔を突き出してはみたが、もう赤髪はどこにも見当たらない。

「ええー！！ 本当に行っちゃったあ！ うそお、おれのせい！？ どっどっどっ、どうしょ……！」

「お、落ち着け。あのひと、前からよくいなくなってたから。この学校、割と出席に関しては緩いし」

それを放っておいてるのもどうなの、と思ったが、ようやく落ち着く七緒。

ぽかんとした表情で、2人は顔を見合わせる。

「……正直、水城が立ち上がった時、超びびったよ俺……」

「おれもだよ！ ていうか、まじで行っちゃったの……！？」

「何が起こったのかわかんなかったわ。あー、俺、変なこと聞いたかな」

がしがしと頭を掻く栄人に、首を振って見せる。

当然疑問に思うことを聞いたままで、栄人は悪いことをしていない。何も言わずに出て行った虎哲が、子供なのだ。

「ハチは悪くないと思うよ。実家に帰ってたんだって。理由は知らないけど。だからおれ、昨日初めて会ったのよ」

「はあー。で、先輩だと思ってたと」

だって背え高いし威圧感半端ないし！ 目一杯主張して、大きなため息をつく。

多分、今のは自分が意地を張ったのが悪い。
でも、だからって、出て行くことはないと思うのだ。

「難しいひとだ……」

七緒が呟いたとき、場違いな明るさで、圭介が教室に入ってきた。

「おっはー！　って、暗い！　ナナハチさん、暗いぞよ？」

「うるせえ奴きた」

「でも、このぐらいのテンションのが、今はほっとする」

急にありがたがられて、きよんとする圭介だった。

結局、4時間目が終わっても、虎哲が戻ってくることはなかった。

「……で、掃除当番は7班。はいHR終わり。解散！」

解散、と生徒たちが復唱すると、緒方先生は気だるげに教室を出て行く。

この、1年3組独特の挨拶にも、最近ようやく慣れてきた。

「（解散！　って……ホームレス中学生じゃないんだから。でも、緒方先生らしいっちゃらしいなあ）」

7班である七緒は、立てつけの悪い掃除用具ロッカーを開けながら、ひっそりと笑った。

「うわっ、思い出し笑いしてる。思い出し笑いってえろいんだぜえ」

楽しそうに言う圭介を軽く叩いて、ちりとりを押しつける。彼は掃除当番ではないが、午後から部活があるので、暇つぶしで教室に残っているのだ。

掃除好きらしい栄人が、黙々と黒板を消しているので、構ってもらえそうなこっちに來たのだろう。

「お昼ご飯食べなくてもいいの？」

「おう。2時からだから、まだいい」

「半ドンの日には部活って嫌じゃない？」

「やだよだ！ オレなんて補欠でもねえのにさー」

たわいもない話をしながら、ゴミを掃いていると、米子独特の、語尾を伸ばす声が聞こえてきた。

「ねーえ？　なんか下、騒いでない？」

「え、何々」

彼女の視線を追って窓辺に寄る2人。指された方向を見やる。

「本当だ。なんかあったのかな」

好奇心をくすぐられているらしい圭介の横で、七緒は眉根を寄せていた。

「あ、ナナくん、もしかして見えてない？　なんかねえ、校門あたりで人が集まってるみたいなんだよお」

「ありがと、ヨネちゃん。何かあったのかなあ」

そこまではわかんないけど、と言う米子の隣で、圭介が窓から大き

く身を乗り出したまま、言った。

「なんか、他校生がいる…制服違う。あと、髪がすげえ派手」
「えー、明石くん目え良いね」

感心する米子と照れる圭介を眺めながら、七緒は既視感を感じていた。

——わたし、最近、髪の派手なひとに会った気が

「なにいろ」

「え？」

ひきつった顔で問いかけられ、圭介は一瞬戸惑ったようだったが、すぐになんのことか思い当たったようで、答えた。

「青っぽいのと、緑」

あ、そのひとたち、十中八九 知ってます。

41、青と緑のお礼参り

「お前さーあ、指導室来れるなら教室来いよ」

サボりに生活指導室を使うって何、と緒方はため息をついた。

目の前のソファにぐてりと寝転がっているのは、朝のHR前から教室にいなかった、水城虎哲である。

東棟4階の一番端にひっそりとある、生活指導室。職員室近くにもうひとつ同じ教室があるので、滅多に本来の目的で使われることはなく、全体的に埃っぽい。

この赤い髪の生徒は、この場所の常連だった。

「戸塚と中村が「おれたちのせいなんですーうえーん」って言うたけど？　ちなみに「うえーん」もマジで言ってたから」

「……隣の席の、銀杏におった奴が気に食わん」

「戸塚だろ？　名前覚えてやれよ。つか、それくらいで丸一日ふけるとかねえわ。どんなけ大人げないんだ」

「説教しよんなら帰る」

「おう、帰れ帰れ」

しっし、と、猫でも追い払うかのような手振りをされて、虎哲はしぶしぶと立ち上がった。

その背中が、やけに寂しそうに見えて、思わず引き止める。

「……水城。なあ、教室に居づらいのかもしれないけどよ、」

「じゃっかあしい！」

「寂しいからって、人に当たるなよ。お前は、短気すぎる」

眉根を寄せる教師を、虎哲は思いきり睨む。

思いきり睨んで、それから同じように接してくる教師は、この担任の中年オヤジだけなのだ。

「説教は、昨日のンで聞き飽きとる。それに俺は、」

寂しくなんか無い、と自分に言い聞かせるように言った。

「天の邪鬼め」

「黙っちゃれんのか、あんた……」

空気が悪いと思ったのか、ふと先生が窓を開ける。

風と一緒に入って来た、人が集まったときにきこえる「ざわざわ」の音に、足を止めた。

もう一度振り向けば、緒方先生が窓から身を乗り出している。

「……あれ？　おい、あれって」

血の気が引くって、こういうことだろうか、と虎哲は思った。

「だから！　何年何組の誰に！　用があるのかって聞いてるんだよ？」

「知らねえ！　髪の毛の赤い奴だっつってんだろ、おっさん。そう何人もいるかよ、赤い髪の毛の奴なんて！」

「だあかあらあ！　それだけでは校内に入らせられないって言うてるんだって！」

何度目になるかわからないやり取りを横目に、柳井は欠伸をした。

「(めんどくさいナア、もう。早く帰りたい)」

しかし、守衛さんと友人の沖田の怒鳴り合いは、終わりそうにない。明らかに悪いのは沖田である。外見の特徴だけしか知らないのに、その人に用があると言いはっているんだから。

「(待ち伏せとかさあ……もうちょっとあるデシヨ、他に手段が)」

にしてもココの守衛さん、案外頑張るなあ、普通ならもっと引け腰なのになあ、と思いながら、校門に寄りかかる。

既に、周りには野次馬が出来始め、興味深げだったり恐ろしげだったりする視線をこちらに投げかけていた。

好奇の目で見られることには慣れている。しかし、いつまで続くのだろうかという苛立ちが、じわじわと内臓を浸食し始める。

「(ああもう……宗助の野郎……なんでオレを巻き込むかな……)」

誰かれ構わず殴ってやりたい、という破壊衝動が首をもたげ始め、これはヤバいなあと焦る。

さすがに、他校で暴れたらマズイということくらいわかっているが、わかっていてもやっちゃうのが、この青年の悪いところである。

自覚はしているので、未だに諦めようとしないう友人を、つま先でつついてみた。

「なー、沖田ア。もう帰っちゃってんじやナイの、あいつ。ガツコ
ー来てるかもわかんないのにさあ」

「入れる！ 勝手に探すから！」

「そういうわけにはいかん！」

——ワア、無視しかとかよ

ぎゅっと拳を握った瞬間。

視界の端に、こちらへ真っ直ぐ駆けて来る男子生徒が映った。
なけなしの理性で、拳を開き、友人の頭を軽くはたく。

「いてえ！ 何すん、」

「もしかして、アレ？」

指差した先の少年は、まだ少ししか距離が縮まっていなかった。足が遅いらしい。

沖田の目が、ぎゅうっと細まる。ただでさえ鋭いと言われている瞳なのに、目がよくない彼は、そうする癖がついているのだ。損な癖だ、と柳井は思っているが、指摘してやったことはない。

「ちよっ……あのう……彼……」

走りながら何か言っているらしいが、よく聞き取れない。

「ねえ、違うの？ そうなの？」

「良く見えない」

そう言った途端、沖田は駆けだした。

守衛さんも柳井も、周りの野次馬たちも。唐突すぎてぎょつとする。

「……えっ、えっ！？」

自分の方に向かって来ている、と気付いたようだ。男子生徒は、反射的に足を止める。

しかし、既に沖田は彼の目の前にいた。勢い良く伸びた手が、少年の胸倉を掴む。

「あゝあ……」

柳井は思わずため息をついた。

振り返った沖田は、友人の柳井から見れば最高の、野次馬から見れば極悪な、笑顔だった。

「こいつだ！」

一方、こいつ呼ばわりされた少年は、30メートル離れた場所からもわかる程、青い顔をしていた。

「赤い髪の子と違ったの」

守衛さんの厳しい声に、あわあわと七緒が頭を下げる。

「おれも知り合いなんです。騒いじゃってごめんなさい、もうこんな訪ね方させませんから！　ねっ？」

合わせてよね！　という表情で振り向かれ、柳井は肩をすくめ、会釈くらいの角度に身体を折り曲げてみせた。

沖田はと言えば、「もういいから出せよ！」と守衛さんに文句を言っている。

3人は、下校中の生徒の邪魔になるからと、守衛さん専用の極々小さな小屋の中に押し込まれていた。

後ろの不良2人組にヒヤヒヤしながらも、七緒は一生懸命守衛さんを説得して、解放してもらった。

「いいかい、次からは何年何組の誰に、どういう用事で会いに行くのか、言わなきゃいけないよ」

「うる、」

「はい、さーせんっしたあー」

懲りずに口応えしようとする友人の足を踏み、柳井は歩き出す。

「ほんとにごめんなさい」

「友達？」

「あー、顔見知りです。大丈夫なんで……」

「本当に？」

「（まあ、ウソではない……）」

柳井は、背後の会話を聞きながら、今日何度目かになるため息をついた。

守衛のおじさんが、あの少年を心配するのも無理はないのだ。見た感じ、地味な草食系だし、自分たちのような人間と付き合う子には見えない。

「（宗助も、何を考えてるのかね……）」

「なあ、早く行こうぜ」

「あ、えっと、じゃあさよなら」

沖田に急かされ、七緒は守衛さんに頭を下げた。

「ねえ、あの……何か用なの？ テツくんなら、いませんよ」

もしかしてお礼参りってやつだろうか、だったら水城が見つかる前に、なんとか自分がフォローをしないと。

そう思って、圭介に箒を押しつけ出てきてしまったのだが、考えが

足りなかった。

「やっぱり、あいつと関係あるんだ」

青髪の少年がにやりと笑ったので、はっとなって自分のおでこを叩く。

——うわちゃー！ そうだっけ、通りすがりで押し切ったんだっけ！ あーもうばかばか、なんで公園にいたんだとか問い詰められる！

「ねえ、」

ずい、と詰め寄られて、既に軽いパニックだった七緒は、思わずキョロキョロと辺りを見回した。

その様子に何故かムツとしたらしい、青髪の少年は、七緒のネクタイを軽く掴む。

「いじめてるわけじゃねんだから、キョドんなよ」

いやいや、その体勢は明らかにイジメです、と隣から聞こえてきた気もしないが、沖田は続けた。

「お前、名前は？」

「知りませんっ！ ……………へ？ おれ？」

てっきり虎哲のことを聞かれると思っていたので、「知りません」で押し通そうとしていた七緒は、きょとんとした。

「おれの、名前？」

「そーだっつってんだろ。名前わかんなきや、呼べないじゃん」

呼ぶ機会がこれからあんの！？　と思っただ、この状態で口に出せるほどツツコミ魂はない。

ロウがいてくれたなら、名前を言っても良いか相談するのだが、学校にいる間は彼はいない。

「と、戸塚。戸塚、七緒」

「とつか、な。俺、沖田^{おきた} 宗助^{そうすけ}。こっちの緑は柳井^{やない} 明德^{あきのり}な」

「はあ……」

なんで自己紹介されてるのかわからずに、困惑する七緒。

「……ねえ、宗助、こいつすごくキョドってるけど……ほんとに恩人なの？」

柳井と紹介された緑髪が、沖田に問いかけるのを聞いて、顔に熱が集まるのを感じる。

「お、お、おんじん……！？」

「だって、俺達が倒れた後も容赦なく殴ってくる赤い奴に「赤男（仮名）くん、もうやめてやれよ！」とか言っただ、お前になんかしらの借りがある赤男（仮名）は「……チツ、お前が言うなら仕方ねえ」とか言っただ、そんでお前はサツに見つかんないように俺達を公園までどうにか運んで、介抱してくれてたんだろ？」

そんな奴を恩人と言わずに誰を恩人と言うんだ、という顔の沖田を見て、七緒はぱっくりと口を開けた。

——っ、いやいやいや！　なんかすっごいストーリー出来てます

けど!？

ツッコミどころが多すぎて、フリーズする。

まず、赤男こと虎哲は、彼らが倒れた後も容赦なく殴ってはいない。野次馬のおぼちゃんに聞いた限りでは、4人のうち誰かと相打ちになったはずだ。

それに、どこから虎哲が七緒に「なんらかの借りがある」なんて部分が出てきたのだろうか。不思議すぎる。

「(どうにかして運んでって、そこは超アバウトなのね! 話が大きくなってるとていうより、物語になっちゃってんじゃないか……っというか、それをお仲間さん達に話したわけ!?)」

ようやく頭が回るようになってきた七緒が、どうにか誤解を解こうと口を開きかけたとき――

「何しとんじゃワレエ!」

鋭い怒声が、飛んできた。誰のものかわかった瞬間、七緒は1人、泣きそうになった。

――ああ、話がややこしくなるよう

42、負けず嫌い

どうしてこんな状況になっているのかなあ。
心底、そう思った。

「やっぱりまずはアレじゃね」

沖田が指差したのは、レーシングゲームの並びだった。
そして返事も聞かず、さっさと駆けて行く。柳井もとろとろとそれ
に続き、残された七緒と虎哲は、顔を見合わせた。

「何しとんじゃワレエ！」

ものすごい剣幕で駆け付けた彼は、七緒がやられそうだと思ったら
しい。胸倉を掴まれてはいたので、当然の勘違いだ。
意外にも、先日喧嘩した虎哲に対し、冷静なのは沖田の方だった。
逆に、さっきまで飄々としていた柳井は、猫のように彼を威嚇して
いる。

それを制しながら、言い聞かせる声音で沖田は言った。

「いじめてねーからな、別に」

「そんな手えは」

「何？ 手？」

訝しげな顔をしていることから、どうやら沖田に自覚はないらしい。
相手の胸倉掴んで話すのが標準装備なのか。

「あ、の、テツくん。おれ、今んとこ乱暴はされてないよ。胸倉掴まれてるだけで」

ここで騒ぎを起こしたらマズイ、と七緒が間に入った。

「だから怒らないで」

「おう、物分かり良いな、お前」

沖田がにやりと——本人は「にこり」のつもりだとわかったのは、柳井だけだった——笑った。

少しビクビクしながらも、害意はないらしいことは感じ取って、七緒が問う。

「えと、それで……何しに來たの？ 何か用？」

青い髪の少年は、自称「爽やかな笑顔」のまま、答えた。

「お礼参り」

まあまあここじゃなんだから、と半ば無理矢理連れて來られたのが、このゲームセンターなのである。

「テ、テツくん、おれたちリンチ受けたりしないよねえ……？」

「……お前が止めとらんかったら、さっさと逃げられたんに」

道中、七緒は何故だか沖田に肩を組まれ、反対側はどうやら虎哲の隣が嫌だったらしい柳井に歩かれ、連行されている気分だった。

しかし、どうにか（多分力づくで）しようとした虎哲を「喧嘩はだめなんだからね、わかってんの!？」と視線で制したのも、七緒だ。七緒に対し「借り」があると思っっているらしい虎哲は、しぶしぶながらもついてきたのだ。

「だって……あなたにもう喧嘩とかさせられないじゃない。それにさ、ゲーセンなら危ないことはないだろうし」

——アホじゃろ！

怒りともどかしさと焦りで疲労を感じながら、虎哲はさりげなく辺りを見まわした。

右を見ても左を見ても、カップルやら女子高生なんかの姿はなく、代わりにはいかにもガラの悪そうな方々が、わがもの顔でゲーム機を占領しているのだ。

どうやらこのゲームセンターは、ひととき「不良」の集まりやすい場所らしい。よく見りゃ店員もそんな感じである。

店内での騒動も、可能性ゼロというわけではない。むしろ可能性は高い。

「（こりゃあちいとヤバイ状況じゃなあ。見たところ、他の2人はおらんようじゃが）」

昨日喧嘩を吹っ掛けたのは、確か4人組だったはずだ。ちょっと自暴自棄になっていたな、と今更ながら自覚する。4人相手の喧嘩なんて、もうしたくない。普通の時になったら絶対逃げていた。というか、喧嘩なんて仕掛けない。

しかも今は、七緒がいる。足手まといを抱えながら、昨日のテンションも無しに、戦える訳がない。

当の足手まといは、物珍しそうにゲーム機器を眺めていた。

知らぬが仏だ、と黙ったまま、彼と共に一段と騒がしいスペースに寄って行く。

「マリカー。やったことある？」

問いかけた沖田は、眼鏡を取り出して拭いていた。まだ新しいコンタクトは手に入れていないようだ。

素直に首を横に振っている七緒の横で、虎哲は顔をしかめた。

「なしてゲームなんかせんといかんのじゃ」

「勝負しようぜ、勝負。赤いのはそっちの端、戸塚クンはココな。

柳井は俺の右い。あ、ちょっち両替言ってくるわ」

「おい、話聞かんかい」

イライラが目に見えるようだ。七緒は慌てて虎哲の制服を掴んだ。

「テツくん、わかった。おれわかったよ」

「あ？」

「沖田くんたちは「お礼参り」に来たんじゃ？ でも喧嘩じゃあなたに負けることは分かってるから、ゲームで勝負つけようとしてるんだよ！」

虎哲はあからさまに「お前アホじゃろ」という顔をした。

七緒だって、そんなバカなと思っている。

「（でも今、わたしの使命は、このひとに問題を起こさせないことだ。そのためには、険悪なムードにさせちゃいけない）」

お礼参りと公言した割に、沖田には敵意が全く見られないし、柳井も不満げにはいるものの自分から吹っ掛けるつもりはなさそう

だ。

だったら問題は虎哲である。気難しいこの人を納得させることはできないが、バカらしさで脱力してくれれば良いと思ったのだ。

そして七緒が予想した通り、虎哲は深いため息をつく、しぶしぶイスに座った。ほっとして、その隣につく。

「何ヒソヒソしてんだよ。ハイ」

戻って来た沖田に、何かを差し出されて、反射的に受け取る七緒。掌に落とされたのは、銀色の硬貨だった。

「1プレイ100円だから」

「……えっ！？ いいよいいよ、悪いよ」

「ダメだ。誘ったのはこっちだからな。それに戸塚くん、カバン持ってたねーだろ」

そうなのだ。慌てて飛び出してきた七緒は、スクールバッグを教室に置いたままだった。どうせ帰るのは敷地内の寮だからいいけれど、思っていた。

「うっせーな、黙ってもらえよ」

渡された100円玉をひったくられ、無理矢理ゲーム機に押し込まられてしまい、その問答は終わった。

「あつ、画面動いた……え？ こ、これ、どうなんの」

「その、対戦プレイってところ」

設定を終え、足元をいじくっている七緒を眺めている虎哲に、沖田は思い出したように言った。

「あ、あんたは自分で払えよな。誘ってないし」

——はっ？

思わず口がぱかりと開いた。

「（なん…え、なんちゅうた？ 誘ってないて……え、じゃあつまりこいつらは、）」

考えをまとめる前に、自分たちの状況も忘れてウキウキしてしまった七緒が、ぱっと虎哲を振り返った。

「テツくん、はやく。あなたのエントリー待ってるみたいだよ」

「え、ああ、おう……」

咄嗟に硬貨を入れて、ゲームを起動させる。適当にキャラクターを選んだら、お馴染みの赤い配管工になった。ちなみに七緒はキノピオ、沖田はピーチ姫、そして柳井はルイージだった。なんで兄弟キヤラを選ぶ、という視線は、無視した。

3、2…と画面上にカウントダウンが出て、慌ててアクセルとブレーキに足を置く。

スタート、の一瞬あとに、隣の席から悲鳴が聞こえた。

「えええええっ、何、何なにに…！？ 進まないんですけども！」

「えっ、まじ、故障？」

沖田が顔をしかめたのが視界の端に映ったが、虎哲は左手でハンドルを操りながら、七緒の頭を軽くはたいた。

「アホ！ そっちゃんあブレーキじゃ！」

「えっ、そうなの？ こっちが、アクセル——うおわっ!？」

どうやら踏み込み過ぎたらしい、ものすごいスピードで画面の中の風景が流れたかと思うと、あっという間にカーブに突っ込んだ。

「ぎゃー何今のハンドル震えた！」

「ええから早く進まんかい」

「ぎゃー何っ、なにかぶつかって来たんですけど!？」

「声がでか……っ！ おまつ」

「あーわかってきた、アイテムを取って……落とすのね？ 違う？」

「だあっ、俺んトコ放るなや！ 同じチームってわかつちよるん？」

「え、これチームとか……あ、事故った！」

いつの間にか2人の声が熱くなっていることに気付いた沖田は、猫のように笑った。その瞬間、ゴールテープを切る。

「ゆうしょー！」

「にいー」

やる気のない声で柳井が乗っかって来たので、期待を込めて、数秒後にゴールした虎哲を見つめる。

やっぱりというかなんというか、彼は「さんいー」とは言ってくれなかった。

大分遅れて、七緒がゴールした。

「び、びり……」

ぐたりとハンドルにもたれかかった七緒を見て、ちよつとばかり可哀そうになる。初めてやるなら仕方ない結果だ。

「じゃあ次、あれやろうぜアレ。ストラックアウトお」
「どんなの？」

七緒が食いついてきたので、沖田は嬉しそうにゲームを説明しだした。

その後ろ姿を見ながら、虎哲は今更ながら「ペースを乱されとるなあ」と気がついた。

元々勝負事には熱くなってしまう性質だし、実を言えばこういうゲームも嫌いじゃない。こちらに越してきてから、随分とご無沙汰だったけれど。

カバンを担いで顔をあげると、同じく2人を追おうとしていた柳井と目が合った。

「――楽しいか？」

なんでそんなことを聞いたのか、自分でもわからなかった。多分、彼の青い片割れが、あんまりにも楽しそうだったからだだろう。

「楽しい」

「ふん、そうは見えんが」

意外な答えに驚いて「眠そうな顔しやがって」と悪態をついてみる。しかし柳井は、先程までの不満げな態度はどこへやら、口角をあげて、言った。

「勝つのが、楽しい」

喧嘩でも、ゲームでも。

そう言葉が続いたような気がして、挑発的な声音だったような気もして、虎哲は目を細めた。

そして、気がつく。柳井の余裕は、今の勝利のためだ、と。

沖田はどうだか知らないが、この派手な緑頭は、確実に自分と勝負をつけたがっている。例えそれが単なるゲームでも、負けは負けだ。

「（一勝一敗、ちゅうことか。生意気な）」

虎哲の瞳もまた――ギラギラと輝いた。

「テツくん、次はあれだって……」

運悪く振り向いてしまった七緒は、口をつぐんだ。うっかり、赤髪さんの凶悪な顔を目撃してしまったのだ。

彼の隣（と言っているほど近くではないが）を歩く柳井も、似たような雰囲気醸し出している。

「そうか、不良って負けず嫌いなんだなあ」

「え、何の話」

しみじみ思ってしまう自分が、なんだかズレているような気もするが。

きよんとする沖田に、どこことなく親近感を感じつつ、苦笑気味に囁いた。

とりあえず、お互い 連れのスイッチが入ったようです。

43、オレイマイリの誤解

「戦力外通告……ってやつだね……」

沖田の手が、慰めてくれようと肩に置かれたが、かける言葉が見つからないらしく、彼は黙ったままだった。

——泣いても良いですか

レーシングゲームに始まり、シューティングゲームいくつか、格闘ゲーム色々。

その全てで、七緒は虎哲の足を引っ張った。

「戸塚クンがいると勝負になんねえんだけど」

柳井の率直な言葉に、虎哲は「正直すぎじゃ!」と突っ込み、沖田は「言葉選べ!」と蹴りを入れ、そして当の本人は「…じゃあココで見てるよ」と言ったのだった。

「(2人とも全くフォローになってないことに気付いてなかったなあ……本当に泣いて良いか)」

「仕方ない奴らだ。熱くなりやがてよう」

ふん、と鼻を鳴らしたのは、七緒に付き合ってベンチに座っている
沖田だ。

仕方ない奴らは、離れた場所でホッケーをやっている。

「沖田くん、良いんだよ。おれに付き合わなくて」

「それはだめ。今日何のためにあんたの学校に行ったのかわかんなくなる」

ん？ と七緒は首を傾げた。

「……お礼参り……なんでしょ？」

「おう。だから、戸塚クンを放っておくわけにいかん。柳井も何考えてんだか」

「……んん？」

何かすれ違っている気がして、更に首を傾げる。

「沖田くんたちが用あるのって……テツくんでしょ？」

今度は、沖田が首を傾げる番だった。

「なんで？ 戸塚クンだぞ？」

「えええっ、おれ、なんかしたッ!？」

お礼参りの標的はまさかの自分だったのか、と慌てる。自慢じゃないが、姉弟喧嘩もろくにやってこなかったのだ、パンチ一発で沈む自信がある。

一方、七緒が怯える理由がわからない沖田も、会話がズレていることに気がついた。

「だって……お前、助けてくれたじゃん」

「えええっ!？　じゃ、なんでお礼参り……あっ」

唐突に、自分たちの行き違いを理解した。

沖田の思う「お礼参り」は、どうやら七緒の思うそれとは大きく異なっているらしい。

呆れると同時に、酷く安堵した。

「沖田くん。あのね、お礼参りっていうのはね」

彼が使ったその言葉は、本来、願い事が叶ったときに参拝することを指す。

しかし、俗語的な意味では、刑を終えて出所したやくざなどが、告発者などに仕返しをすることである。

「だからね、おれたち、負けた仕返しをしに来たんだと思ってたよ」

説明を終える頃には、沖田の耳は真っ赤だった。

「……お礼参りって……お礼のかっこいい言い方だと思ってた……」

「すぐく堂々と「お礼参り」って言っていたものね」

「言うなって……」

撃沈している沖田が可愛くみえて、七緒はくすりと笑った。

聞けば、彼も柳井も同い年だというし、言葉や所作は多少乱暴なもの、それ以外はクラスメイトと話すのと変わらない感覚だ。

「（本当にひとは、見かけによらない）」

「笑うんじゃねえよ」

「ふふふ、ごめん」

拗ねたような沖田だったが、謝りながらも笑い続ける七緒に、毒気を抜かれる。

「……昨日は、手当てしてくれてありがとう」

七緒は七緒で、少し照れながら頭を下げる沖田が、好きになった。

「どういたしまして。あと、テツくんが喧嘩ふっかけて、ごめんなさい」

「なんでお前が謝るんだよ」

「代わりにね。テツくんは多分謝らないし……え？」

どうしたの、と七緒は問いかけた。

沖田の表情が、あからさまにムツとしているものに変わったせいだ。何が気に食わないのか黙り込む沖田を見て、七緒は話題を変えた。

「そういえば、どうして学校がわかったの？」

「……赤い髪の奴なんてそうそういないだろ」

「あっ、そうか……」

髪色で学校を辿られたとあっては、いよいよ染め直しが求められるなあ、と七緒は目を細めた。

あの髪は、インパクトが強すぎるものの、見慣れてきたら嫌いではないのだ。

しかし、インパクトじゃ沖田と柳井も負けていない。

「でも、沖田くんたちも珍しいよね。どうしてその色にしたの？」

沖田は眼鏡を外しながら、遠くを見た。一生懸命思い出している顔だ。

「え、確か俺が誘って……どうせなら派手な色にしようぜって」

「一緒に染めたんだ。仲良いんだねえ」

にっこりと笑う七緒に、「あの頃は友達が柳井しかいなかったから」とは言えなかった。言いたくなかった。

「……それなのに、もっと派手な奴いるし」

じろりと、クレインゲームに本気になっている赤髪を睨む。

確かに、と七緒が言ったので、思わず口を尖らせた。

「いいじゃん、学校違うし、似合ってるんだから。沖田くんは渋い寒色が合うよ、多分」

苦笑しつつそう続けると、沖田の表情が輝きだしたので、驚く。なにか、ツボを押したらしい。

「似合う？ 青」

「似合ってるよ？」

「か……かっこいいか？」

「かっこいいよ」

「そうか！」

花火が弾けるように、頬を染めて笑う（このとき初めて七緒は、この口の曲げ方が沖田の「笑顔」なのだ気がついた）沖田が、子犬に見えた。

「ふふふ、可愛い」

嬉しそうだっただ顔が、途端に渋くなる。

どうやら彼にとって「可愛い」は誉め言葉ではないらしい。

「なんだよ、なめてんのか」

「えっ、舐めてないよ。そうだ、舐めなかったけど、怪我は大丈夫なの？」

「そっちの舐めるじゃねーし！ ……平気。怪我は得意」

自慢気な沖田の「得意」を、頭の中で「馴れている」に変換する。それはそれでどうなんだろう、とも思ったが、今にも腰に手を当てそうな勢いの沖田が、あんまりにも可愛くて、

「可愛いなあ」

思わず手を伸ばして、彼自慢の青髪を撫でた。ぎ、と音をたてて、沖田の体が固まる。

彼は何故かベンチに座らず、その手前でヤンキー座りをしていたので、七緒の手はものすごく自然に沖田を撫で続けることができた。鋭い三泊眼が、驚きと戸惑いに見開かれていることには気付かず、

「ちょっとしつとりしてんのは、ワックスかなあ」と思う。

左の頬に貼ってあるバンドエイドに触れると、びくりと沖田が震えた。慌てて、手を離す。

「――あっ、ごめん！ 今、すごく夢中だった。痛かった？ ごめんね」

「い、や、別に……つか、撫でるなしっ！」

「今更っ！ 嫌ならそう言ってくれば良いのに」

無理矢理撫でたりしませんよ、と呟く七緒を見て、沖田は困った。

「（嫌、ではなかったんだけど……言うタイミングが……）」

「ごめんね、なんか友達がスキニシップ多い子ばかりだからさ」

七緒は七緒で、ほとんど初対面の同い年にやることではなかったな、と反省して、眉を下げた。

慌てて、沖田は首を振る。

「別にいい！　つーか撫でて！　いや、撫でてってのもおかしいか。

つーかあんまり謝らないで！　俺、あんたにお礼しにきたのに、謝らせてばっか！」

当初の目的からズレるところだった、と沖田は立ち上がる。

「何が欲しい？　取るから言え」

一番近いクレイニングゲームに寄って行って、七緒を振り返った。

あれだけゲーム代も奢っておいてもらって、更に何かもらうのは悪いなあと思いつつ、沖田が引きそうにないということはわかったのだ、七緒はウサギのぬいぐるみを指差した。

「え？　まじでこれ？」

「うん。難しい？」

「……難しいとかじゃなくて……まあいいや」

男子高校生の選ぶ物かよ！　と心の中で叫んでから、ゲームに向き合う。

ちょうど、ひっかける部分が上に出ていたので、2回目でぬいぐる

みは落ちた。

「ふれぜんとふおーゆー」

「さんきゅう！」

ひらがな英語に笑いあつて、七緒はぬいぐるみを抱きしめた。思つてたよりも大きくて、ロウが変身したものより一回り小さいくらいだった。

「ありがとう、すごいね！　すぐ取れたね」

きらっきらの瞳を向けられて、思わず頭を掻く。褒められることに慣れていないのだ。

まあな、と胸を張ろうとした時――

「おい、沖田！　これ、どっちが凄い？」

柳井の声に振り向くと、先程までクレイゲームで勝負していたらしい虎哲と共に、それぞれ獲物を抱えて立っていた。

柳井は手のひらサイズのマスコットを両手からこぼれる程。

虎哲は、沖田の取ったウサギの倍近い、パンダの人形を。

「うわーっ！　すごい！　えええ、いくら使ったの！？」

七緒が2人の元に駆けて行く。

「600円でどこまでとれるか。こんなでかいの一個より、たくさんあった方がいいよな？」

「何言うトンじゃ。そがあなたんまいもんあつたって仕方なからう。でかいのがいいに決まっちゃる」

「どっちにしてもすごいよー！　わああ、びっくりだよ、ホント！

っていうか、2人とも仲良くなったんだね！ 良かった！」

「仲良くないし」

「仲良うなんてなっとらん」

きやつきやと騒ぐ七緒と、少し不服そうな、でも誇らしげな柳井と虎哲を見て、沖田は大変苦々しい気持になったそうなの。

「だぁーっっ、ウサギ返せ！」

「えっ？ な、なんでえ？？」

44、良い不良と泣き虫

「いやあ、最後の太鼓の達人だけは、戸塚クンが一番だったな」

「つーか俺と赤いのが引き分けなんて納得いかん」

「あー！！ 戸塚クンのメアド聞き忘れた！ どうしよう」

今日は特に天気が良いので、6時を過ぎているというのに、まだ辺りは明るかった。

もう少し遊ぼうよ、という沖田に、虎哲は「夕飯に遅れる」と首を振ったのだ。聞けば、彼らは学生寮に住んでいるらしい。

「ああ、俺は聞いたよ。ホレ」

柳井の広げてみせた手のひらには、沖田お目当てのメーアドレスが、丸っこい文字で書かれていた。

「教えてくんないつつたら、「今持っていない」って言われてー、じゃあってペン渡したら、手のひらに書くんだもん。ちょっとびっくりしたわ」

「……お前いつの間に！！ どのタイミングで！？」

本気で驚いている友人に、勝ち誇った笑みを向ける。

「だからお前ナンパとかも上手くないんだよ。チャンスを逃すから」

「うっせえ死ねモテ男！ なんでこんな緑頭がモテるのかさっぱり……。まあ、そんなのはいいや。アド見せろよ」

「え、戸塚クンに許可とってないから……」

「フザケンナ！」

本当は、七緒の方から「沖田くんにも教えておいてくれる？ 良かったらでいいんだけど」と言われたのだが、面白いのもうしばらく黙っておこうと思う柳井だった。

にっこりと仁王立ちする銀杏寮管理人に、一も二もなく、七緒は頭を下げた。

「ごめんなさいっ！ 連絡入れるの忘れてました！」

「よし、わかってればいいよ」

てっきり自分が叱られるものだと思っていた虎哲は、ぽかんと2人を眺めている。

寮の玄関に入った途端、待っていましたとばかりにおっかさんがやってきたのだ。

「言い出したことにはきちんと責任を持つこと。俺もさ、もうナナが手伝ってくれるつもりで動いてるから」

遅くなる日は、おっかさんに連絡を入れることになっていたのだ。

それは、家事手伝いを申し出たときに、決めたことだった。

働き手が2人か1人では、大分動き方が違ってくる。連絡無しに遅くなれば、おっかさんが困るのはわかっていた。なのに、すっかりそれが頭から抜け落ちていたのだ。学校に戻って、カバンを手にしたところで、ようやく思い出して血の気が引いた。

結局、寮に戻ったのは7時過ぎだった。

「無理に手伝わなくたっていいんだよ。でもね、やるって宣言したなら、きちんと決めたことは守って欲しい」

いつもの、優しい口調に戻ったおっかさんに、七緒は首を横に振る。

「ごめんなさい、今度から必ず連絡します。やらせてください」

少ない会話で状況を理解した虎哲は、七緒を庇うように、一歩前に出た。

「こいつは悪くなあで。俺が連れ出したんじゃ。荷物みな、持ってんかった」

おっかさんが何か言う前に、七緒は靴を脱いで、もう一度頭を下げると、ぱたぱたと階段を上がっていった。

数秒間の沈黙の後、同時に顔を上げてしまい、目があった2人は大変気まずい思いをした。

「……あいつ、家事手伝っとるん？」

しぶしぶ口を開いたのは、虎哲である。あいつ、と言いながら階段を見たので、おっかさんは頷いた。

「ああ。自分からね、言ってくれた。いい子だろ」

何故かちよつと自慢気な管理人を、虎哲は睨む。

「あがなふうに叱ることなかる」

「けじめはつけて欲しいって言ったただだよ」

「あいつ多分、落ち込むぞ」

一瞬、頷きかけて、おっかさんは目を細めた。

「珍しいね。お前が誰かを庇うの」

「……今回なあ、わしが悪い」

自分が、あの連中に絡まなければ、彼らは学校に訪ねてくることなどなかった。

今回は、沖田が虎哲に興味がなく、柳井が自重の利く聡い奴だったからこそ、こんなに丸くおさまっているのだ。

本当の意味でお礼参りをされていたら、と背中が寒くなる。こんな形で、他人に迷惑をかけると思わなかった。

「……わし、もう よう喧嘩せん。自分からあ、売らん」
「おっ」

呟いた言葉に、おっかさんが嬉しそうな声をだしたので、しまったと思った。

骨ばった、けれど綺麗な手がのびてきて、容赦なく髪をくしゃくしゃにする。

「やめえや！」

「聞いたけえな！ お前、もう問題起こすなよ！ ナナのためにも！」

1年生の友達が出来たなあ、良かったなあ、と勝手に喜んでいたら、力が入り過ぎたようで、虎哲が結構切羽詰まった声で「いてえよ！」と言った。

「あんた、なんでそがぁに加減を知らんのん！　ていうか、あいつのためじゃねえ」

賢治は、不機嫌そうに言う虎哲から手を離して、階段を振り返った。管理人とはいっても、10歳くらいしか年は離れていないので、お兄さん役みたいなものである。しかし、それを職としているからには、締めるところは締めなければならない。

「（もう何年もやってるのに、ああいう子を叱るのは慣れないなあ……）」

例えば雪弥や直哉のようなタイプなら、ふてくされながらも反省して、それでお終い。後腐れはない。

けれど、七緒のような真面目な生徒を叱ると、その後が気まずいのだ。彼のようなタイプは、気に病みやすい。

「雪弥たちが真面目じゃないつつってんじゃないけどさ……わかるだろ？」

ため息をつくおっかさんに、虎哲は頷く。

そして、こんな弱音を吐かれるのは珍しいな、と思った。

「じゃあ、ナナ呼んできて。405号室だから」

「はあ？」

「ついでに他の子たちも呼んできて。ちょっと遅くなったけど、飯出来たから」

なんで自分が、と言いたげな虎哲を制し、ピッと階段を指す。

「行ってやって。俺は立場上、出来ない。あの子叱るの初めてだか

ら、責任感強い子だから。それにまだ、ナオもないんだ」

要領を得ない言葉だけれど、何を言われてるのかわかった虎哲は、一瞬だけ迷ったが、仕方ないとばかりにため息をつくとうやく靴を脱いだ。

「……管理人なんてガラじゃねんだよ、あんた」

呆れたように言うと、おっかさんは「知ってる」と苦笑した。

「あとさ、ひとつ聞いていい？」

「なんじゃ」

「そのぬいぐるみ、何」

「あのなあ」

部屋に戻った七緒の視界に飛び込んできたのは、少年のロウの姿だった。

「オレはなんだっけ？」

唐突な問いに、後ろ手にドアを閉めながら、首を傾げる。

「ロウは……天使……？」

「そう、で、お前の補佐。サポート役。オレが何言いたいかわかる？」

ロウの、貼りつけたような笑顔に、七緒は身をすくめた。

彼がお怒りの理由はなんとなくわかったが、言い訳くらいさせて欲しい。

「だって、ロウ、いなかった……」

「お前の全部はわかんないよ。プライベートってのも必要らしいからな」

遮るように言い募られて、七緒は黙るほかない。

「でもなあ、呼ばれればわかるんだよ、どこにいるかくらい。それで、お前が困ってるなら、飛んでゆくんだよ。でさ、中途半端に、お前が怯えてるとか、困ってるとか、そういうのはなんとなくわかるんだよな」

「ご、めん」

「途中からそういうのはなくなったから、大丈夫なんだろうとは思ったけどさあ」

長い長いため息をつかれ、多分これがお説教終わりの合図かな、と思う。

なんだかごちゃごちゃ言っているが、ロウはどうやら、心配してくれていたらしい。

「ありがとう、ごめんね、ロウ」

「いいんだ、けど。サポートの存在、忘れるなよ」

「うん、忘れてなんかない、」

けど、と小声で言って、七緒は困ったように笑った。

——ごめんね、わたし、助けてもらうのが、怖い。

昨日、ロウが沖田たちを眠らせていたとき。凄い、と同時に、少しだけ怖いとも思った。

「（助けられることに慣れたら、わたし、どうなるんだろ）」

そう思いつつも、今日はさすがにちよつとビビったなあ、と目を閉じた。

「寝んの？」

「寝ないよ。もうすぐご飯だもの、着替えて……ん？」

サイレントモードにしていたケータイが、ちかちかと光っているのに気付き、手を伸ばす。

「……うわ、ハチと圭介から着信とメールが」

「あっそう。じゃーオレ寝るから」

ロウはぐぐつと伸びをすると、次の瞬間、ケータイにウサギのストラップがついていた。

——「ケータイは、携帯しろよ」

念を押すように言われ、はいはいと頷く。何も考えず、着信履歴の一番上にあった圭介に電話をかけ——『ナナあ！ もーお前何してんの！？ いきなり飛び出してったと思ったら、全然戻ってこないし！ 荷物とかどうした？ 教室戻った？ つーかあいっすら知り合いなの？』——繋がった途端、堰を切ったようにケータイから聞きなれた声が溢れ、少しの間茫然とした。

そういえば、ろくに説明もせず、慌てて教室を飛び出していったっけ。

『つてゆーかバカでしょ！ ケータイも持たずに！ 電話かけたらお前の机の上で光ってるし！ 携帯しないと意味ないんだよ！？』

それ、数秒前にロウに言われました……と顔を引き攣らせながらも、詳しいことは月曜に話すと言い包め、通話を切った。

次にかけて栄人にも、同じように（圭介よりは落ち着いていたが）ケータイ携帯についての説教を受け、大丈夫なんだな強請られてたりしないよなと10回くらい念を押されて、七緒は死んだ魚のような目でため息をついた。

——「そんな顔するなよ、愛されてんだから」

「いやいや、愛とか言われても。心配してくれるのは嬉しいんだけど、なんか今日……」

怒られてばかりだ、と呟いた。じわり、と視界が歪むのを感じて、俯く。

——「……えっ、おい、なな……」

お、とロウが続けようとしたとき、ノックが鳴って、返事を待たないままドアが開かれた。

「おい、飯……」

暗い部屋で、うずくまる七緒に、虎哲は当然驚く。

振り向いて、それが虎哲だとわかった瞬間、七緒はびええと泣き出した。

「もおおおお、みんなっ、そんなに怒らなくていいじゃあぁあん！

悪いとはっ、お、思ってる、けどっ、」

小さな子供のように泣く七緒に狼狽して、立ち尽くす。

「わ、たし、だって、びっくり、したしっ！ こ、わくて。やくそくっ、わすれたの、すごくっ、わるいと、おもっ……！」

声をかけることが出来ないまま、虎哲は「こいつ、一応怖かったんだなあ」とぼんやり思った。

最終的には仲良くなっていたけれど、沖田たちには悪いが、あの訪ねて来方は勘違いされても仕方のないものだ。

びええ が びええ になった頃、直哉が帰ってきて、ようやく七緒は泣きやんだのだった。

閑話

ぴいぴい泣く七緒を見て、固まった彼のルームメイト。虎哲は条件反射のように首を横に振った。

「わ、わしじゃない」

「わかってるよ、だってテツ、すごい顔だもん……」

とりあえず、とばかりに部屋の電気を付ける。

「ナナ、どうしたの。また悲しい本でも読んだの？」

七緒の涙腺が緩いことを知っている直哉は、驚きながらも冷静だ。カバンを置くと、七緒に近づいて、その背中をさすってやる。

しかし、昨日初めて会った虎哲が、それを知るはずもなく。未だに戸惑って、立ち尽くしていた。

直哉は、七緒が泣いている理由を言おうとしないので、虎哲を振り返ったが、彼は役にたちそうもなかった。

「ね、どうしたんだよ。泣くなよお、ナナー」

なだめすかして、ようやく少し体を起こさせると、手探りで、眼鏡をとる。濡れたそれを服で拭いてやりながら、もう一度尋ねた。

「なんで泣いてるの？」

「な、んでも、ない、から」

だから、放っておけと、言うのか。
うづくまって涙を流してゐるくせに。

ムカついた直哉は「うそつき」と言うと、七緒の首根っこを掴み、無理矢理顔をあげさせた。

「なんでもなくて泣くわけじゃないじゃん。黙ってたってわかんねえよ」

泣き顔を見られたくないのか、イヤイヤと抗う七緒。それを押さえつけて、「泣くなよ!」と怒鳴る直哉。

まるで小さな子供のように、どちらも遠慮のない動きだった。

「お、い。もう、放っておきゃあ」

直哉があんまり乱暴なので、思わずそういうと、苛立ちの矛先がぐるんところらを向いた。

「ていうかテツは何してんの! こっち来てよ」

行って何かの役に立てるのか、と思いつつも、直哉の隣に立つ。

「もう、立っててどうすんの」

「どうすりゃあええん!」

「しゃがめって!」

ほとんど怒鳴り合いのようになりながらも、虎哲は不思議と、直哉との会話に不快は感じなかった。

言われた通りにしゃがみ、まだしくしくいっている七緒を眺める。

「…ほんで?」

「で、って言われても……」

直哉も特に良い策があったわけでもないらしく、意味もなくあたりを見渡した。

「理由知ってんの？」

そう問われ、虎哲は一瞬頷きかけた。が。

「（知つとるっちゃ、知つとる。多分、約束を守れなかったこと、で）」

彼は、叱られたことに泣いているんじゃない。きっと、自分が情けなくて泣いているのだ。

憶測の域を出ないけれど、妙な確信があって、だから、勝手に言うてしまうのは憚られた。

「…知らん」

ふい、と目を逸らしたのが悪かった。

「うそつき！ 知ってんだろ、その反応っ。あーテツがうそついたー！ オレにうそついたー！！」

目を三角にした直哉が、不満を隠そうともせず、がなる。耳元があがあと騒がれて、虎哲も黙ってはいない。

「うるっさいんじゃワリヤア！」

「うわっ、巻き舌！ まーきーじーたー！」

もはや悪口でもなんでもない単語を、嫌みったらしく言う直哉。聞き流せばいいとわかっていて、でもそうはできなかった。手を伸ばして、直哉の頬をぐにりと引っ張る。

「巻き舌の何が悪い！」

「いひゃい！ こ、のやろっ」

両手を伸ばされ、両頬被抓られた。ので、虎哲も遠慮なく右手を参加させる。

「おひゃえはいふほおへっはいはんひゃよ！ ほほの、やふらひんな、」

「はひいっへんほかははんへーよ！ ひほほひほひらはいへいふもいふも、」

「ふ、たりとも、」

割って入った声に、虎哲と直哉は振り返って、ようやく七緒の存在を思い出した。

目元を真っ赤にして、眉を八の字にして、2人の腕に手を伸ばしてきた。

「け、喧嘩だめだよ、なにしてんの」

慌てたような声音。2人は一瞬だけきょとんとして、それから、思い出したようにお互いから手を離れた。

「なに、いまの。なんで、けんか」

「いや、喧嘩してないよ、ナナ、」

だいじょうぶだよ、と言い募ろうとして、直哉はルームメイトの表情の変化に気がつく。

「――なんで、笑ってんの？」

虎哲も気がついたようで、怪訝な顔で七緒を見つめる。

くすぐすと声をたて始めた七緒は、一度だけ大きく息をつくど、ぐいっと顔をあげた。

「あー、なんか、馬鹿らしくなるってこういうことだね！」

いっそすがすがしいまでに馬鹿らしいと言われ、ぼかんとした。

「ごめんねえ、涙腺緩くて。今さ、テツくんと遊んでさ、うっかり夕飯の準備に間に合わなくて。それで、ちょっと情けなくなっちゃって落ち込んだの」

あっさりと理由を明かす七緒に驚く虎哲。自分なら、絶対言わないだろうと思って、それから　そうかと思いつた。

「（直哉が、さっき聞いたけえか。なんでって。そがあなん、答えなくたってええんに）」

自分を心配してくれてのことだから、ときっと彼は思っているのだ。律義な奴、と呆れた。

そのとき、ふと向けられた穏やかな笑みに、虎哲の心臓が跳ねる。先ほどの直哉とのじゃれ合いが頭を横切って、ぶわりと赤面した。

――仲が良いんだ、良かったあ

そう言われている気がして、勝手に安心されている気がして、っていうか100%そうだろうとわかって。居た堪れない、と立ち上がる。

「夕飯、来いって」

かろうじてそれだけ言って、足早に彼らの部屋から出た。

「なんだよお、テツの奴」

「ありがとうね、ごめんね。おれたちも着替えて降りよう？」

「いいけど。なんでナナが謝るんだよー。あ、目えこするなって」

背中で彼らの会話を聞きながら、虎哲は馬鹿らしくなって、1人で小さく笑った。

———本当、馬鹿らしい

ずっとずっと、受け入れられていないと思っていた。特に、直哉のように中等部からの持ちあがり組からは。けれど、気づけばそんなことなく、彼らを拒んでいたのは自分だと思い当った。

「（あいつもそうじゃ、馬鹿らしゅうなった）」

滑稽な自分たちのやり取りが、ではない。1人で空回っている自分が。

よくよく思い返せば、周りは自分を離すまいとしてくれていたのだ。うっとおしい管理人は自分に不利になるようなことをするなど、いつもだるそうな担任は周りを見ると、それぞれ激しく、やんわりと、怒ってくれた。

おかえりと抱きついてきたり、無駄にちよっかいを出してきたり、遠慮なく本気でぶつかってきたり、何も聞かずにいてくれたり。喧嘩はだめだよ、と何度も訴えてきた七緒の瞳を思い出す。ほとんど初対面の彼でさえ、自分を守ろうとした。自分を傷つける人間もいれば、馬鹿みたいに守ってくれるひともいて。

――わしの周りゃあ、馬鹿ばかりじゃ

気づけて良かったなあと、密やかに笑った。

45、テスト前一波乱

「おはよう。テツくん、ネクタイは？」

階段から降りてきた虎哲とちょうど目が合ったので、七緒は疑問の声をあげた。

「は？」

「いや、は？　って言われても……」

感情のこもらない声で「は？」なんていわれると、やっぱり身体がすくむ。

けれど、もう違うと分かっているので、七緒は虎哲を見上げ続けた。彼の、素っ気ない、というか多少乱暴な相槌は単なる方言だし、冷たく聞こえる声音も、寝起きで頭がはつきりしないからだ。

「ネクタイ。忘れてるよ」

ようやく、虎哲は「ああ」という顔をして、襟元に手を置いた。

「あれは好かん」

「……え、だからつけないの？　自由すぎる！」

そういえば土曜も、昨日もつけていなかったと思います。

ぶはっと噴き出すと、虎哲が困った顔で笑った。――笑った。

「……、なに」

黙り込む七緒を怪訝に思ったのか、虎哲はまた、難しい表情に戻る。

ああ笑ってくれた彰人先輩に対してみたくじゃないけれど笑ってくれた嬉しいなあ、と思いながらも、それを口にすれば彼が怒ることは目に見えていたので、黙ったまま首を横に振った。

「気色悪いわ、にやにやしよって」

「朝っぱらからひどい！ あ、そういや彰人さんがさ、すごくそわそわしていたよ」

その名前を出すと、すでに不貞腐れ気味だった虎哲が、更にぶすと顔をしかめた。

「いいじゃん、染め直さなくて済んだんだから」

一昨日、日曜日。

雪弥の「じゃあ、髪、染め直そうか」という一言から始まり、朝食時から「染め直せ」「染め直さん」の問答が始まった。

「人の勝手じゃろうが！」

「いいえー、それで迷惑かかったりしそうだから言ってるんですー」

「まあな、それ攻撃色だもんな。怒った王蟲の色だし」

「はい、光流さん黙ってー。ていうかそもそも、なんで赤なの？」

雪弥だけならまだしも、光流や智までも話に加わりだしたので、虎哲は押され気味だ。

あまりにフェアじゃないからか、葵を初めとした三年生たちは黙っているけれど、その態度からどちらに賛成なのかはすぐにわかる。

「ちよお、さーせん。ワンピース始まるんで」

「ちよっと静かにしてもらえます？」

某アニメ好きの戸野橋と七緒によって、一旦その場は収まり、虎哲は朝食をかきこむと、逃げるが勝ちとばかりに外出した。

「あーあ。逃がしちゃった」

「ゆーきやん先輩頼れない」

「ちがくね？ 今のはトノとナナのせいじゃねえ！？」

そんなこんなで日曜日は終わったのだが、昨晚はそうはいかなかった。

「お前だって髪茶色じゃろ！」

「茶色だよ。どっかの誰かさんと違って王蟲の攻撃色じゃないし」

「ほんなら青色にせえ！ 赤が攻撃色って言うんならお前は青色にせえー！」

青色は青色で目立つけどなあ、と沖田を思い浮かべて、そういえばメール返信していなかった、と部屋に戻った七緒だが――

「だいたいなんで赤なのかって話だよね」

「ていうかちよっとロン毛気味なのはなんなの？ 前髪目に入んない？」

「もう戻せば？ めんどくせえよ」

「出たよ健太くんのめんどくせえが。でもこれアレだよな、確かに長引くとめんどくさくね？」

「別に俺はいいと思うけどねえ。周りがこんだけ言うなら変えたほうがいいんじゃないかな」

未だに問答が続けられていて——しかも2年生が増えていて——
——ため息をついた。

「まだ折れてないって、すごいね。だっておれ今、ラファエルくん
ところも寄って来たんだよ」

あれだけ上級生に囲まれているくせに、虎哲は迷惑そうな顔をする
だけだった。どうやらずっと傍観していたらしい戸野橋の隣に、座
る。

「なー。もう折れてもいいくらいなのになあ」

「何か思い入れでもあるのかな、赤いのに」

「いやー、そんなタイプか？ 執着心なさそう」

「もう今日は逃げられないもんねえ、どうするのかな」

「完全に見物体勢だな、お前ら」

呆れたような声で岩平もやってきて、七緒の隣に座布団を敷いた。
が、その上に背後から駆けてきた直哉が滑り込む。

「あ、てめえ」

オレがとった座布団だぞ、と——座布団は全部で7枚で、他は上
級生が使用中だ——岩平が唇を尖らせると、直哉はからから笑っ
て座布団を自分の下から引っ張り出した。

何がしたかったのかと眉をしかめて、そういえば彼は端っこに座る
のが嫌いだったかと思ひ当る。戸野橋と七緒の間は、彼らがだらしな
く凭れあっていただけから、来たばかりの自分が座ろうとする場所を取
ったのだ。

直哉は、部活中とはともかく、その他では必ず誰かと一緒に居たがる。

同じクラスでもある岩平は、それを誰より知っていた。

「（この寂しがりめ）」

「めんごー。な、イワはどっちが折れると思う？」

「ん？ ああ、オレはねえ、結局あのままだと思うよ」

なんで？ という視線を3人から受けながら、岩平は笑った。

視界の端に、彰人が立ちあがるのが映ったのが見えたから、というのは、理由にならないようで、なってしまうのだ。

どうやらずっと様子を窺っていた3年生は、あまりに虎哲が不憫になったのか、声をあげた。

「みんなあ、もうやめたげて！ テツのこれは、これは……っ！」

彰人の言葉に、みんな目を見開く——虎哲の制止の声が、空しく響いた。

「桜木花道に憧れて染めてるだけなんだよ……！」

「……その顔やめえや。雪弥みたくなるぞ」

気付かないうちににやついていたのか、虎哲に睨まれる。しかし、「某マンガの主人公に憧れて髪を染めている」なんてことがわかってしまうと、いかつい赤髪も微笑ましい。

虎哲は、暴露されたことで結果的に助かったのだが、寮生全員から暖かい視線を投げかけられるようになってしまったので、彰人に対

して腹をたてていた。

「彰人さん、今日すっごくソワソワしてたよ。朝練で早く出ちゃったけど……許してあげればいいのに」

彰人に悪気がなかったことは明白で、けれど虎哲は不機嫌そうに目を逸らしたただだった。

「まあ、アレはちょっと恥ずかしいか。でも彰人さんには教えてたんだね。……あ、今朝ご飯パンだよ」

さっきから自分ばかり喋ってるな、と思いつつ、虎哲と並んで食堂に入って――げ、と顔をひきつらせた。

トーストにジャムをべったり塗りながら振り返ったのは、雪弥だった。その顔が、いつもと同じように歪む。

「はよー。ところでテツは、リーゼントか坊主に興味はないの？」

「わーテツくんUターンしないで朝ご飯食べて！ ゆーきゃん先輩も黙って食べて！」

虎哲は難しいひとである。そして雪弥は、面倒なひとだった。

そのまま登校しようとしていた虎哲を、ちょうど玄関にいたおっかさんが止めてくれたので、ありがたいことに3人で食卓を囲むことになった。

彰人のように朝練で既にない者もいれば、ギリギリまで寝ている者もいる。そのせいで、朝食をとる時間は本当にまばらだ。

「なんでお前は喧嘩ばっか売ってくるんじゃ！」

「喧嘩売ってなんてないしー。まっさんの情報から推測しただけだしー」

「あの、おれを挟んで言い合いすんのやめてくれませんか…」

のんびり組を心待ちにしていたせいも、ちらりと廊下を見た七緒は、綺麗な緑色とかちあった。

ふい、と視線を避けられた瞬間、残り一口分を手を持ったまま、立ち上がる。

「え、なに」

雪弥と虎哲から訝しげに見つめられながらも、見えなくなった茶髪を追う。

「――ラファエルくん！ 朝ご飯！」

下駄箱前で、ようやく彼の腕を掴むと、その細さに一瞬怯んだ。ラファエルは気まずそうな、困惑したような顔で七緒を見上げる。

「いらないうって」

「力出ないよ、ちょっとだけでも食べなうて」

そう言いながら、左手に持ったままのトーストの存在を思い出し、ラファエルは特に甘いものが苦手というわけでもなかったなど、それを差し出す。

「じゃ、この一口だけ食べて。マーマレード大丈夫でしょ、ホラあーん」

七緒の好きな瞳が、明らかに「余計なお世話」と言っているが、気付かないフリをする。七緒が引かないのをわかってか、ラファエルはしぶしぶ口を開けた。

こうなることがわかっていたから、いつも鉢合わない時間を狙って寮を出ていたのに。

ラファエルの考えていることが手に取るようにわかって、七緒は苦笑した。

「……今日はさ、彰人さんからお願ひされて、テツくんと一緒に教室行くから。だからちよつといつもより遅めなの」

「なにそれ彰人さんカホゴにも程がある」

どん引いてるラファエルに、いつてらっしゃいと手を振った。

「なんであんなにご飯食べたがらないんでしょうね……」

放課後、お茶部にて。葵と2人だけのときに、七緒はため息とともに呟いた。

葵はコーヒーを受け取りながら、うーんと唸る。

「ほんと、なんでなんだろうなあ。一応さ、何回か聞いたんだよ。でも答えてくれなかった」

「アオさんでも？」

七緒の驚いたような口調に、葵は苦笑いした。

自分が、面倒見の良い方だとは自覚している。相談を受けることは苦じゃないし、頼られることも、必要とされてる気がして嫌いではない。初等部の頃から学級委員なんか選ばれていたし、昨年度は寮長も務めた。周りも、そんな自分を「頼りがいのあるひと」として見るようになった。最高学年になってからはなおさらだ。

——それでもやっぱり、相性ってあるよ

相談を受ければ、自分は全力で相手に向き合うだろう。そうしてきたし、これからもそのつもりだ。

けれど、ラファエルは決して103号室を訪れない。

悩みを無理矢理聞き出すことはしたくない。というか、してはいけないと葵は線を引いている。そのため彼は、いつも受け身型なのだ。相談にはのるよ、でもおせっかいはしない。もちろん頼られる立場として、問題が起きないか気は張っているけれど、というスタンスでいる。

「ていうか、シュタイネルも料理してみればいいんじゃないかな。そしたらありがたみがわかるだろ」

「あー、今度誘ってみようかなあ……でもラファエルくん、あんまり夕方、銀杏にいないじゃないですか」

「あいつ一応、スポ推だからな。部活忙しいんだと思う」

えっと七緒が驚く。ラファエルがスポーツ推薦で入ってきたなんて、初耳だ。

何部か聞こうとした時、理科室のドアが開く音がして、間もなく準備室のドアも開かれた。

「ただいまーっ！ 葵さん、葵さん、今ね課題提出ついでにね、職員室からチェスもらってきた！ ルールわかんねえけど」

「なんで職員室にチェスがあるんだろうとか思わないんですか、北原先輩……」

嬉しそうな北原の後ろから、栄人が顔を覗かせる。彼は日誌を届けに職員室に行っていたのだ。

「なんかすげえ前から置いてあったらしよ。芦川がくれた」
「それ多分、邪魔になったからだよ……あの先生、お茶部を物置にしようとしてないか」

一番最後に入って来たのは木下で、後ろ手にドアを閉めると、いつもの席についた。

「うわ、よっしーいつからいたの」

「音楽室あたりから。お前が中村に「チェスのルール知ってる？」って聞いてるあたりから後ろにいた」

「声かけろよ！」

とたんに狭く騒がしくなった部室。暗黙の了解のうちに、寮の話題はこれで打ち切りだ。
チェスと言えば、と葵が声をあげる。

「落合、今日来るって。あいつなら知ってるかも、ルール」

出てきた名前に、1年生2人はきょとんと、2年生2人は「おお」と目を見開いた。

「久しぶりだ、落合さん来るの。じゃあ戸塚、戸棚の奥のクッキーだしてくれる？」

「あのひと甘党だもんなあ、柿ピーとか出しても食わないもん。…あ、落合さんは3年の部員な」

ナナハチコンビが揃って首を傾げているのを見て、北原が嬉しそうに説明する。先輩風を吹かせられるのが新鮮らしい。

「特進クラスだからちょっと忙しくって、たまにしか来ないんだよ。テスト前なのに来るなんて超珍しいわあ」

「7時間目終わったらだけどな」

「あ、そっか。特進で大変っすね」

特進クラス特有の時間割に「うへ」と顔を歪める北原。七緒に同意を求めようと振り返って――ぽかんと口を開けている後輩と目が合った。

「……なに、どうした戸塚」

「……今、なんて？」

七緒の掠れた声に、栄人があつと声をあげた。

「ナナ、もしかして日程表見てない？ 今日でテスト1週間前だよ」

担任が放任主義なので、1年3組の生徒は自らイベントの予定を確かめる癖が出来ていた。緒方はわざわざ「テスト1週間前だぞー」なんて声かけはしないと、初日にそう宣言していた。しかし、転校してきた七緒は、それを知らない。

「ええー！ー！！ うそでしょ、まだ全然勉強した覚え無いんだけど！」

愕然とする七緒を不思議そうに見てから、木下はそういえば、と言った。

「戸塚って、転校生なんだっけ」

「そうですよ！ まだ2週間経ってませんよ！ あーもう信じられない……」

全然授業に追いついてないのに、と嘆く七緒を、教えてやるからと栄人が撫でる。上級生たちも、気の毒そうに―――若干面白そうに―――慰めた。

「ていうか、葵さんとかに寮で教えてもらえば」

栄人もいつのまにか、葵を名前で呼ぶようになっていた。

名案、とばかりに、きらきらの目を作って先輩を振り返る七緒。

「アオさーん！」

「いいけど……俺が受験生だって知ってる？」

「アオさん大好き！」

仕方ないなあという雰囲気を出しつつも了承する葵に、助かった、と七緒は抱きついた。

そのとき、がらりと理科室の開く音がして、4人は顔を見合わせる。

「落合さんだ！」

決めつけて、準備室の入り口に向かう北原。その動きを眺めながら、葵と木下は「7時間目が終わるには早いのに」と首を傾げていた。

「おっちあっいさ―――なんだよ、おがちゃんだ」

北原の予想に反して、ドアの向こうに立っていたのは緒方先生だった。

落胆を隠そうともしない北原をやんわりと退かし、先生は七緒と葵に視線を向ける。

「シュタイネルが倒れた。寮に運ばれたよ」

葵は元寮長だし戸塚は確かあいつと仲良かったから一応、と続けられた言葉に、銀杏の2人はしばらく声が出なかった。

46、ハヤシは甘い

「大したことはないみたいだけど。外でロードワーク中で、銀杏のが近かったらしい。それに今日、おばあちゃん先生が出張でいないからなあ」

淡々と説明する緒方先生。思考が追いつかない七緒は、緒方先生もおばあちゃん先生のことおばあちゃん先生って呼ぶんだ、とぼんやり考えていた。

妙な空気の中で一番に立ち直ったのは、やはり彼だった。

「行ってくれるか、ナナ」

葵の声は、いつも優しい。

「状態、メールしてよ」

いくら「大したことはない」なんて言われても心配なもののは心配だ。特に七緒は、このまま部活を続けても、ずっと上の空だろう。だったら、先輩からの頼みとして、帰ってもらった方がいい。

「え、あ、アオさんは……」

「おおごと大事にすると、あいつ嫌がるよ」

確かに、と思った七緒は、カバンをひつつかんで、栄人たちを見た。

「すいません、ちょっと見てきます。ハチ、また明日ね」

「おー」

「お大事にー？」

名指しされた当人は無言で手を振り返し、友人を見送る。

理科室のドアの閉まる音がして、ようやく栄人は息をついた。

「どした」

木下に声をかけられ、なんでもないと首を横に振ってみせる。

「（ちょっと、怯んだだけなんだ）」

とても当たり前のことだった。友人に、自分の知らない世界があるということ。

例えば自分は、クラスでの七緒、お茶部での七緒は知っている。けれど、銀杏寮での彼は、知らない。

当たり前のことを唐突に思い知らされて、少し裏切られたような、寂しいような気分になった。

「――えっ。病院!？」

カバンを落とす勢いで驚く七緒を、慌てて宥める陸上部3人。

「すまん、言い方間違えたな」

「疲労と、軽いエイヨーシツチョー? が原因らしくて」

「栄養失調くらい頭ん中で変換してくれ、ナオ。ナナ、そんな顔するなって。心配性のおっかさんが、ムリヤリ点滴打たせに行っただけだから」

「そ、なの……」

一気に脱力した七緒は、靴も脱がないまま、廊下に寝転がった。

「びっくりしたあー、ていうか栄養失調とかふざけんな！ 泣くよ！？」

顔を手で覆って、本当に泣いてしまいそうな七緒。3人は顔を見合わせた。

おっかさんの反応に、そっくりだった。

「ま、本当に今ヤバイのは――」

声が聞こえ、振り返る。七緒も寝転がったまま、ムリヤリ首をひねった。

階段の上には、雪弥と、同じく2年生の花岡大輔はなおかだいすけだった。

彼も陸上部なので、ラファエルが運び込まれたという時、銀杏寮にいたのだろう。

「良平さんだよなあ。部長だからって部活戻ってったけど、帰ってきたら落ち込むぜ」

「柔道部のロードワークって、アカさん発案なんだろう？ そこもまたイタいわあ」

どうやら、わけがわかってないのは七緒だけらしく、直哉たちは心配そうに顔を見合わせている。

「え、あの…なんで赤城先輩が」

5人全員が、七緒を見て「あっ」という顔をした。彼が、他の1年

生よりもひと月遅れて入ってきたということを、すっかり忘れていたのだ。

「あー…シュタイネル、あいつ、柔道部なんだよ。知らなかった？」
ぽかんとする七緒のカバンから、メールの着信を知らせる可愛らしい音が響いた。

カララ。玄関の引き戸の開く微かな音に、七緒は顔を上げた。

「戸野橋くん、行ってきたよ。多分ラファエルくんだよ」

隣で、ベリベリとレタスを剥いている戸野橋を見やる。が、ラファエルのルームメイトは、首を横に振った。

「いや、すぐこっち来るだろ。それに、」

ドタドタと駆ける音。

「もうナオが行ってるし」

おかえりー、という声のはっきり聞こえ、七緒と戸野橋、そして食堂で直哉を見送った岩平は苦笑した。

すぐに食堂に入ってきたのはおっかさんで、3人を見ると安心したように笑った。

「ごめんな、大丈夫だった？」

1時間前に、先に夕飯の支度をしておいて欲しい、といった内容のメールがおっかさんから来たのだ。おっかさんたちの行った病院が、予想以上に混んでいたらしい。

「もう出来ますよ。あのおれ、勝手にハヤシにしたんですけど…」

今日のメインは生姜焼きの予定だったのだが、七緒は作り方を知らなかったので、適当にハヤシライスにしたのだ。

不安そうな七緒の頭を、いいよいいと撫でるおっかさん。

「なに、由良たちも手伝ってくれてんの」

食器を並べる岩平と、サラダを作っているらしい戸野橋を見て、珍しいなあと感心する。

撫でられまいとおっかさんの手を避けながら、岩平は言った。

「だってナナ1人じゃ不安だろお」

「あ、ひどい！ でも確かに1人は無理です」

むしろ、七緒が入って来るまで、ほとんど1人で家事を回していたおっかさんがすごいのだ。

観念した岩平がおっかさんに撫でられている時、直哉とラファエルが連れだって食堂に入ってきた。

「なんだ、救急車乗れば良かったのに！」

「乗らねーよ！」

「でもおっかさんのバイク乗ったんだろ。ずりい」

「じゃあお前乗ってみろ……」

直哉のすごいところはこういうところだなあと、子供たちはそれぞれ

に思った。

ラファエルはきつと、そのまま自分の部屋に行ってしまうだろうと思っていたのだ。ラファエル自身さえ、そのつもりでいたのに、騒がしく出迎えに出てきた直哉の勢いに、つられてしまった。

煮込んでいるハヤシの様子を見て、七緒は火を止める。ちょうど戸野橋も最後のレタスを剥き終わったようだったので、一緒に台所から食堂へ顔を突き出した。

「おかえり、ラファエルくん」

「おかーり。どうだったー」

小さい「ただいま」と返すと、ラファエルは気まずそうに俯く。

「……今日は元々、調子悪かったんだ」

歯切れの悪い口調に、けれど七緒は突っ込まず頷いた。

「そっか。そういう日はさあ、無理して部活出ちゃダメだって。ていうか柔道部なんて初耳だよ、おれ」

怒られないことにほっとしたのか、ラファエルは緊張を解いて顔をあげる。

「だって言っていないし」

「ナナ、こいつすげーんだぜ、柔道部初のスポ推なんだって！」

「えっ、……っと、それってすごいのか？」

これだから文化系は、という表情になる直哉。

「これだから文化系は！」

「言うの!？」

「うち、まだそんなに柔道部強くねーんだよ。陸部とかバスケットニスとか……その辺ばっかなわけ、スポーツ推薦の枠は」

「……えーと、つまり？」

「柔道部にも力入れるぞってことだろ？　で、その軸にシュタイネルが選ばれたっていうわけだよ」

「ようやく理解して、わーすごいんだ、とはしゃぐ七緒に、ラファエルは困った顔になる。」

「そんな、大したもんじゃねーよ。単なるお試してみたいなもんだろ」

それに柔道部に推薦枠ができたのは、と口ごもる。その辺りの話は、七緒もなんとなく知っていた。

「（赤城先輩のワンマンチームだとかなんとか……あのひとが大会で良いとこまで行ったから、枠が出来たのかな？）」

とにかく、ラファエルが食堂にいるうちに夕飯にしておくと、七緒は手早くサラダの盛り付けを始める。

「そーいや、ナオは何も手伝ってないの？」

「ん……まあそれはいいじゃん」

「こいつ、さっき皮むきしてて指切ったから」

「……皮むき用のやつあるよ？」

「おっかさん、その皮むき用のやつでやって怪我したんだよ」

「危なっかしいからテレビ見ててって言ったの」

おっかさんもシュタイネルも、その顔やめてくんない！　と騒ぐ直哉の声が聞こえてきたので、七緒はひとりでこっさり笑った。

「えー、ハヤシい？　つか、いつも思ってたんだけどさ、ハヤシとカレーんときって、飯とルーとサラダのみじゃね？」

「漬物もありますよ」

食卓につくなり文句を垂れる藤枝に、七緒はぴしゃりと言った。

「俺、ハヤシ嫌いなんだよね。甘いから」

「ほらよ、どろソース。文句言うなよキノコ」

ナナが口尖がらしてるぞ、との葵の忠告に、大人しくソースを受け取る藤枝。

「で、シュタイネル。どうだったの」

一応メールで七緒の報告は聞いたのだが、本人から言わせたいと思って、葵は向かい側に座るラファエルを見た。

緑色の瞳を一瞬泳がせた後、素直に結果を報告する。

「疲労と軽い栄養失調、でした。点滴打ったから、もう平気です」

「明日部活は」

「ない、ですけど」

「じゃ、ちゃんと休みな。あと、今週いっぱい部活休むこと」

葵が命令口調なのは珍しく、食卓を囲む全員の視線が集まった。怯んで反論しようとしたラファエルを制したのは、彼の隣に座っていた大輔だった。

「良平さんもそう言うよ。あのひと心配性だし」

それに、スポーツをするなら体調管理くらいきちんとしろよ。そういう彼も、陸上部のスポーツ推薦で入って来た口である。

「あと、アカさんに謝っとけよお」

茶化すように雪弥も言った。

ラファエルは、不本意だと描いてある顔で頷いた。

そして、先程直哉たちに怒られなかったのは、後で先輩に窘められることを予想してだったのだろうか、と気がついた。

「（縦社会、めんど……）」

久しぶりに食堂でとる夕飯だが、全く味が感じられない。

少なめに盛ってもらったはずなのに、見降ろした皿の中身は減っていなかった。胸の奥が、もやもやする。

——あ、やばい、吐きそう

「ね。じゃあさあラファエルくん。化学、教えてくんない？」

唐突な七緒の声に顔をあげると、右隣にいた直哉も食い気味に「オレも!」と言った。

「今週部活休むんでしょ。で、テスト前って部活休みだよね」

「3日前からどこも休みだもんな! オレ、化学全然できない。ま
ずアレがだめ」

「アレってなんだよ」

「ナオ、こそあど言葉多過ぎ」

「あの……英語の足し算みたいなやつ」

「化学式？」

「そうそれ。まず、どの英語が何かって時点で無理」

「いやいや、それは覚えるしかねえよ」

「Oはわかる。酸素。」

「基本すぎて威張れません、そのくらい」

「おれねっ、Sわかるよ。ソルト」

「それ塩！ 塩、っていうか、なんとかナトリウムはNaとかじゃね」

「え、じゃあSって何……」

すっかり教えてもらうつもりでいる405号室の2人と、2人に突っ込む他の1年生たち。

彼らが好き勝手喋り始めると同時に、上級生たちもそれぞれ話し始めた。いつもの、賑やかな食卓だ。

「——Sは硫黄、だろ……」

胸の奥の吐き気は、いつの間にか薄れていた。

47、仲良くなりたい

「ごめん、ラファエルくん、もう一回いまのどこ……」

「シュタイネルってさ、教えるの下手だろ？」

ざっくりと言い放つ直哉。次の瞬間、さくり、刺さった音がした。

「いってええええ！ ちょっとお前え！ シャーペン！ シャーペン刺さってますけどお！」

「刺してんだよ」

ちよっとお前黙ってろむしろ死ね、と可愛らしい顔で言われて、さすがの直哉も机に突っ伏した。

当のラファエルは何事もなかったかのように、七緒の問題集を覗きこむ。

「どこだよ」

「あのね、ここの4番……」

ああそれは、とラファエルが説明してくれる。しかし、七緒がわかるのは、「ラファエルが説明してくれている」という一点のみだ。七緒の上にハテナが浮かんでるのが見えたのか、ラファエルはゆっくりと噛み砕くように言った。

「原子の数は変わらないんだから、右と左の係数を合わせればいいだけだろ？」

だからそれはどうやって、と思ったが、もうすでにその説明（だと思われる）を3度はさせているので、曖昧に頷く。

「（この小さい数字と前の数字がよくわかんないんだよね……）」

じゃあまた聞けばいいじゃん、とロウが呆れたように言ってきたが、それが出来たら苦勞しない。

——だって今のも合わせて、4回は説明してもらってるんだもん！

それだけ聞いて全く理解していないのは、七緒の理解力がよっぽどなのか、ラファエルの講義力がよっぽどなのか、である。

ロウは、鼻眉目があるにしろ、後者だと思った。

なにしろ説明が早いのだ。問題文のあと、何足とびかですぐに答えを言われてしまう。そこに至るまでの過程が早すぎて、なにがなんだかさっぱりなのだ。

直哉の言うことにも一理ある、が、教えてもらっている立場で言えることではない。

「つかトノは？」

「ていうか、化学なら戸野橋の方が俺より得意だと思うんだけど……あいつは英語のがヤバいっつって、303号室行っつて。岩平も一緒に」

303号室、すなわち光流と智の部屋だ。彼らは揃って2組、つまり英語クラスに在籍しているので、すくなくともホームステイが出来るくらいには英語が得意である。

それでもって光流は世話焼きなので、ルームメイトを巻き込んで後輩に勉強を教えるのだらう。智は智で、それがまんざらでもないのだ。

ちなみにこの3人は、夕飯の終わったちゃぶ台の上で化学の教科書とノートを広げていた。少し離れた他のちゃぶ台では、3年生も勉強しているので、基本的に声は抑えめだ。

「あ、俺も英語ヤバイ。つつか全体的にヤバイ」

「ナオ、英語ならおれも少しは教えてあげられるから、まずこっちやろうよ」

「はい。ていうか、赤点さえとらなければ俺はいいー」

どうせ大学、付属に行くし。そう言って七緒に凭れかかる直哉の足を、机の下で蹴るラファエル。

「馬鹿か。上にかかるにしたって、ある程度成績は必要だろ。赤点ギリとか、危ない」

「まじかよ。あーもう、じゃあちよつと休憩する！ ランニングしてくる！」

完全に煮詰まったらしい直哉は、誰にも止められないうちに食堂を飛び出して行った。

「行っちゃった。ちよつとおれらも休む？」

物分かりの悪い生徒に教える傍ら、ラファエルは漢字練習をしていた。彼もいい加減手が限界だったのか、あっさり頷く。

「何か飲む？ 麦茶入れるけど」

腰を伸ばしながらそう問いかけると、ラファエルは逡巡した後、首を横に振った。

「あ、ナナあ、オレにもついでに」
「俺も」

別の机にいた藤枝と晴登が、目敏く台所に向かう七緒に気付き、手をあげる。

「ウェイターじゃないんだから……それくらい自分で動いて下さいよ」

七緒が顔をしかめたのを見て、けれど慌てずに、藤枝は向かいに座る晴登をつついた。
晴登が、じいっと七緒を見上げる。

「……………」
「……………」

数秒の沈黙の後――

「わかりましたよおっ、持ってくればいいんでしょハイハイ！」

七緒は赤面して、足早に台所へ入って行った。その背中を眺めてから、藤枝は悪い顔で友人を見やる。

「あいつ、クロに弱いよなあ」

晴登は肩をすくめた。

「や……前に小動物みたいだって言われたけど」
「それは同感だが、それでもオレなら頼みごととか絶対聞かん」

「だろうな」

わかっててやってるのかあのひとたち、と目を細めて、ラファエルはため息をつく。

まだここへ来て二週間と少しなのに、七緒は既に銀杏に溶け込んだ。それに比べて自分は、と思う。

「(つくづく集団生活とか向いてねえや、俺)」

「シュタイネル、」

唐突に声が上から降ってきて、身体にぴんと力を入れる。振り向いて見上げると、寮の管理人だった。

「ナナいる？」

「もう——あ、来た」

ほらよっ、とばかりに3年生組に麦茶を渡す七緒は、何故かコップをふたつ持っていた。

「落とすよ？」

思わず、心配そうに口をだすおっかさんを見て、ぺろりと舌を出す。

「だって、キノコ先輩がおれをパシるんです」

「おいこら七緒、なんでオレだけ名指し？ クロは!？」

「何か用でしたか？」

藤枝のキャンキャン吠える声は堂々とスルーして、七緒はおっかさんに向きなおる。

その際にさりげなくラファエルの前にコップを置いた。

頼んでいないのに、と言おうとしたラファエルは、けれどおっかさんの声に、思いとどまる。

「あのさ、俺、どうしても明日、外せない用事があった。また夕飯頼める？」

おっかさんのすまなそうな顔を見て、頷く七緒。

「もちろん。簡単なのしか作れませんけど」

「おっけおっけ。ごめんな？ テスト前なのに」

「大丈夫ですよ、2人でやればすぐ終わります。―――ね？ ラファエルくん」

いきなり話を振られたラファエルは、素っ頓狂な声をあげた。

「はっ？ ……え、何」

「手伝ってくれるでしょ？」

当たり前のように言われて、ぽかんとする。そんなラファエルに追い討ちをかけるように、七緒は続けた。

「おれが頼まれるのを目の前で見て断るなんて、そんなに意地悪じゃないでしょう？ 明日から部活ないし、ていうかラファエルくん、実質テスト終わるまで部活は無しでしょ。赤城さんに止められてるもんね」

七緒が晴登になんとか弱いように、ラファエルも柔道部主将の名を出されると弱い。

駄目押しで、ラファエルくんはテストそんなに切羽詰まってないみたいだし、と笑いかける。

「……お前、本当は腹黒いだろ」
「何があ？」

明らかに確信犯な七緒を軽く小突くと、聞こえるか聞こえないかギリギリの声で、「言っとくけど器用ではないから」と言った。

——「どうすんの？」

風呂からあがった七緒を迎えたのは、真っ暗な部屋と、黒いウサギのぬいぐるみだった。直哉は入れ違いに風呂場へ向かったようなので、しばらく帰ってこないだろう。

ぬいぐるみと向き合って会話することに慣れてきちゃったなあと思いつつ、バスタオルを椅子にかける。

「どうすんのって……ラファエルくんのこと？ どうもしないよ」

どうにかできるほどの器が、あればいいんだけどねえ。と、七緒は口元だけで笑った。

夕飯作りにラファエルを誘ったのは、単にちょうど彼がその場にいたからであり、葵がちらりと「あいつにも作らせてみたら」なんて言っていたことを思い出したからであり、そして、もう少し仲良くなれるかなと思ったからでもある。

「何かしら一緒にやれば、ラファエルくんもわたしを友達だと思ってくれるかなって。勉強頼んだのもそれだし」

だって今のままじゃあまりにも自分の片思いだ、と思う。

甲斐甲斐しく食事を届けたり、しつこく話しかけたり。

——「なんだよ、惚れてんのか」

「あはは、一目惚れだよ」

冗談にあっさりと頷いた七緒に驚き——しかしすぐに、恋愛の意味合いではないのだな、とわかった。

「綺麗な瞳よね」

外見かよ、とロウが言うと、当たり前でしょ一目惚れて大体そうじゃん、と七緒は悪びれもせず言う。

「……あとさ、わたし、割と料理好きだから、食べてもらえないのって寂しい」

単なるワガママですよ、と笑う七緒。

「おっかさんもそう思ってるよ。おれ以上に思ってるよ。でも、おっかさんは管理人だから、なんか遠慮してる気がする」

どこかで線引きをしなければならない、と。きっと彼は、あからさまな問題児である虎哲よりも、ラファエルに対しての距離を測りかねている。

「だからってわけじゃないけど、友達なら言えるじゃん。心配なんだよーとか、理由聞いたりとか」

自分はまだそれ程の存在ではないから、そうになりたい。

——「どっちにしろお前、物好きだよ」

呆れたようなロウには言わなかったけれど。

——ラファエルくとロウって、どことなく似てるんだよねあ

それも仲良くなりたい理由のひとつかなあ、と思った。

48、献立

「どうしたの？」

茜が振り向きなりそう言ったので、七緒はハッと現実引き戻された。

見れば、栄人も訝しげにこちらを見ている。

「授業終わったよ」

慌てて辺りを見渡すと、確かにクラスメイトたちは立ち歩いたり、教室移動の準備を始めていた。

「あ、ああ……」

「ボーっとしてたな」

ちよっと考え事、と答えて、カバンに筆箱と教科書をつっ込む。栄人と茜はすでに準備済みで、動こうとしない七緒を不思議に思っていたようだ。

「なんか朝からずーっとそんな感じじゃないか？」

「うーん、そうかも……」

「何々、どしたの」

ひよこりと会話に入ってきたのは、秋穂だった。

「移動しないと遅れるよ」

なかなか席から離れない、茜を急かしにきたらしい。

「なんかねえ、ナナくんが悩んでるんだって」

「え、恋わずらい？」

「残念だけど色っぽい話じゃないよ。夕飯の献立だよ」

3人が3人とも、「はあ？」という顔をした。

自分が作れそうな料理、と考えて、最初に浮かんだのはカレーだった。それをメインに献立を考えていたのだが、添えるのはサラダしか思いつかない。

「（ハヤシ作ったときは、それでキノコ先輩から文句言われたからなあ：他にも何か付けたいんだよね）」

心配されても困るので、素直に聞いてみる。

「カレーがメインの夕飯ってさ、サラダの他に何出したらいい？」

「何、夕飯作るの？ お前寮だろ？」

「えっ、ナナくん寮生なんだ。かつくいー」

秋穂が身を乗り出す。自分が寮生だというと、大体みんなこんな反応だ。

「そだよー。今日はね、管理人さんが用事あるから、夕飯頼まれたの」

そんなことがあるんだあ、と感心する3人に、何が良いかな、ともう一度聞いてみる。

「あー、料理系はねえ、うちらじゃ答えらんないよね」

秋穂が苦笑して、茜も頷く。栄人も肩をすくめた。成り行きで4人で視聴覚室に向かいながら、わいわいと言い合う。

「サラダだけで充分じゃないの？」

「食べ盛りの男子たちには物足りないんだって。ね、ハチなら何が食べたい？」

「やあ、俺あんまり食う方じゃないし……」

人選を間違えたな、と栄人に言われ、確かに、と頷いた。圭介ならまた違ったかしらとも一瞬思ったが、彼が「肉食いたい！」と言うのがあっさり想像出来てしまって、それはそれで人選ミスか、と自己完結する。

「圭介なら「とにかく肉」とか言いそうだよなあ」

栄人が、ふと思い立ったようにそんなことを言ったので、思わず噴き出した。

ヒントでも探しているのか七緒はきよろきよろと辺りを見回した。その視線がついに背後に回ったとき、彼は手を軽く挙げて、言った。

「優子ちゃん、おはよー」

栄人たちが振り向けば、自分たちより十何歩か遅れて歩く、優子の姿があった。

後ろ歩きで歩調を緩めて、彼女が追い付いてくるのを待つ七緒。優子は、はっとしたように顔をあげて、七緒だと確認すると、小さく返事をした。

「おはよう」

「いやいや優子ちゃん、突っ込んでいいんだよ。だってもう6限だもの」

秋穂がからりと笑いかけると、優子は安心したように4人と並ぶ。

「ね、カレーとサラダの他に何が食べたいと思う？」

「馬鹿、唐突すぎるだろ」

「あのね、夕飯の献立の話なのよ」

唐突に、けれど真剣に自分たちにした問いと同じものを優子にする七緒を小突く。隣にいた茜が苦笑しながらも補足する。その間ずっと、優子は困ったような顔で黙っていた。

「（武本、こういうの苦手そうだな）」

どうしたらいいのかな、という表情で、でもあからさまにそれは出せずに、苦笑に近い顔になっている。

七緒だって、彼女のこういう性格は多少なりとわかっているはずだ。なのにどうして、自分たちが要る前で話しかけたのだろう。

七緒も栄人自身も、どちらかというところ控えめで、仲の良い相手にははじけることができるけれど、他はちよつと……というタイプだ。

優子のその傾向は2人よりももっと強い。多分。

責める気持ちではなくて、ただ単に、いつも気遣い屋の七緒にしては無神経だな、と不思議に思った。

考え込んでいるうちにも会話は進んでいたようで、少しの沈黙の後、優子は遠慮勝ちに言った。

「カレー、サラダ……ときたら、あとはスープくらいしか……」

思いつかないけどなあ、ともごもごいう彼女を、4人は見つめる。
七緒が嬉しそうに声をあげた。

「スープかあ！ 全っ然思いつかなかった。でもおれ、あんまし難
しいの作れないんだけど」

「コンソメスープとかでいいんじゃない……？ あれなら具とかそ
んなに考えなくても」

「でもそれじゃあっさりしすぎかな？」

「え……何人くらいいるの」

「28人くらい」

「それなら玉ねぎとベーコン入れるくらいしか出来ないよ。……そ
れ以上って大変じゃない？」

「……大変だ。そっか、作業時間考えてなかった」

大変なのは嫌だなあ、嫌になると料理嫌いになってしまうよ、なん
て、2人が割と盛り上がるものだから、栄人は少し疎外感を感じた。
茜と秋穂は顔を見合わせて「コンソメスープってアレよね？ おこ
げで美味しい的な」「いやそこまでのインスタントじゃないでしょ、
なんか……コンソメ入れるんじゃない？」とあやふやな知識を披露
しあってる。

そうこうしてるうちに、すでに騒がしい視聴覚室に着き、空いてい
る席を探す。

真ん中の方の席が空いていたので、座って——気がついた。

七緒をまだ話が続いているらしい優子は、無意識に七緒に促された
席に着いていた。栄人、七緒、優子の並びだ。

——ああ、そっか

花の香りが香るように、うつすら、唐突に思いだした。

今まで、視聴覚室を使うときは、4席でひとつの机なのを気にしてか、彼女はぽつんと後ろの方で座っていた。他にも、ひとつの机を広々と使う奴はいたので、あまり目立たなかったけれど。

じいっと、隣の友人を見つめる。

計算か、天然かは知らない。しかし、真正面から一緒に座ろうと言えば、彼女が躊躇うことは分かり切っていた。だから、いかにも成り行きで、という形で、同じ机に座ったのだろう。

たとえば、ビデオが流され始めて、お喋りなんてしなくても、隣に誰もいないのは、寂しい。

「ハチ」

七緒の声に顔をあげると、いつのまにか回ってきていたらしいプリントを差し出された。

慌てて受け取り、隣の机に回す栄人を見て、七緒はくすくす笑う。ちようどその時明かりが落とされて、大半の生徒が前を向くか、ガツツリ眠る体勢に入るかしたので、彼は小声で囁いた。

「いつもと逆だねえ」

教室では栄人から七緒へプリントを回すので、そのことだろう。頷いたが、なんだか違和感が残った。

「（……あ、今、氣遣われた？）」

自分が優子とばかり話している間、ヒマにさせてしまったと思っているのだ。

この瞬間、なんとなく、七緒の行動は、相手を氣遣うことが基盤になってしまってるんだなあ、と思った。

優子と栄人では、栄人の方が身内だから氣を使わずにいるが、その

フォローも忘れない。小さな声で囁いて笑ってみせるだけのそれは、けれど確かに栄人の微妙にくすぶるような気持ちを和らげた。

「……ナナもよく、手紙回すとボケっとしてるよな」

栄人は、同じくらいの声で返すと、一度だけぐりと友人の頭を撫で、だらしなく机にもたれかかった。

「というわけで、カレーとサラダとコンソメスープを作ろうと思います」

「……はあ」

ラファエルは手を洗いながら、ため息か返事か微妙な声をだした。

「おれね、4組迎えに行こうかなって思ったんだけど、」

「ぜってーヤメロよ、そういうの」

「……って言うと思って、行かなかったの！」

唇を尖らせて、ぽいぽいと使う野菜を取り出す七緒。ごろごろ転がるジャガイモを受け止めて、ラファエルは不思議に思っていたことを口にだした。

「なんか今日、人いなくね」

部活がある日ならまだしも、テスト三日前になると、基本的に部活は休みだ。なのに、銀杏寮には、妙に人気がない。

「ああ、なんかねえ、みんな図書室に詰めてるみたいよ」

部活動をしている者が多いせいか、普段は勉強をする暇がない。だからテスト前になると、部活単位で図書室につめかけるのだ。多く生徒が集まるので、わからないところもすぐに人に聞ける。寮でもそれはあるが、大抵それぞれの部の方で集まるらしい。

「靴があったから、キノコ先輩とテツくんはいるんじゃない？」

「……微妙……」

「聞かなかったことにします。よしっ、じゃあ野菜を切りましょう」

包丁使える？ と聞くと、ラファエルは一瞬の間をおいて、頷いた。

——今の間……不安なんだが！

「じゃあハイ、これ」

どう言うべきか迷った後、七緒は皮むき器を差し出したのだった。

「ラファエルくんは大丈夫なの、テスト勉強？」

包丁でにんじんの皮を剥きながら、今更ながら尋ねる。ラファエルも今更だと思ったのか、目を細めた。

「全然大丈夫じゃねーよ。化学と英語以外はほとんど手えつけてねーし」

「え、世界史とかやんなきゃやばくない」

「やばいんだよ」

「ごめんねえ、無理に誘って」

「それこそお前、今更だろ」

昨日はあんなに強気だった癖に、とばかりに睨まれて、七緒はしょぼんと俯く。

「だってー。ラファエルくん、誘わなきゃ話してくれないから」

拗ねたように見せながらも、きちんと七緒の手が動き続けていることに気付いたのか、ラファエルは慌てて自分の作業に戻る。

自然と隣が無口になるので、七緒が1人で喋り続けた。

「3組と4組ってテスト範囲一緒だよねえ。したらさ、明日も一緒に勉強しようよ。ていうかアオさんに数学教わりにいこ。約束したんだ、見てもらう。でも悪いかなあ、アオさん受験生だもんね。受験かあ、中学のとき全然勉強しなかった割に辛かったなー。なんでだろうね、受験生って立場がもうしんどいよね。2年後また受験生とか信じらんない。そういや、された？ 来年の選択授業の話。テスト終わったら一覧配られるらしいね。2学期にはもう決まっちゃうとかびっくりだよな。あとクラス分け？ あれ、おれよくわかんないんだけどさ、1組は特進で2組は英語でしょ？ 3組が文系4組が理系、で、5・6組ってなんなの？ 今はあれだよな、持ち上がり組が5・6でしょ。2年になったらどうなるんだろ――」

「なあ」

息継ぎの瞬間、ラファエルの少し高い声が、刺すようにそれを遮った。

「もういいよ、無理に喋るのやめろよ。俺に言いたいことあるんじゃないの」

ぱっと隣を見やると、彼は手が動いていないのに、頑なに下を向い

たままだった。

——あ、もしかして、わたし怖がらせた？

きちんと食事をとらないから倒れたりするのだと、勝手な行動をするなど、叱ると思われているのだ。

もちろん、そう思っではいるけれど、思うだけだ。

「（だってわたしは、怒れる程ラファエルくんを知らない）」

知ろうとしても、彼に撥ねつけられる。このまま撥ねつけられ続けたら、折れてしまうのは自分だ。他の寮生のように、ラファエルとの距離を認めてしまうのが、嫌だった。

だから仲良くなりたいと思って一緒にいるんだけどなあ、と思うものの、そう言ってもラファエルは信じないだろう。

「……うん、じゃあさ」

苦し紛れに、けれどそれを悟られないように。

七緒が口を開くと、ラファエルはほんのすこし身体を強張らせた。

「アドレスを……ね……」

ばわ、と何故だか赤面してしまって、七緒は俯いた。入れ替わりに、ラファエルが顔をあげる。

「……は？」

「前に……断られたから……」

今自分は、男の子にアドレス交換してよと本気で言ってるんだな、

と思うと、更に顔が熱くなった。
一回断られたのにしつこいとか思われてないかな思われてるんだろうな。

「……あああーっ、やめよう、今の忘れよう！ ハイっさっさと野菜切ろうね！」

たたみかけるような七緒の声を聞いて——ラファエルは、ちょっと困った顔で、けれどおかしそうに、笑った。

「いいよ、教えるよアドレスくらい」

思いがけない言葉に、七緒は一瞬、何を言われたかわからなかった。じわじわと、嬉しさが込み上げてくる。

「でも俺、あんまりメールとかしないぞ」

「おれも、あんまりメールしない方だから、大丈夫。ってゆか、基本的には直で済むよね、隣の部屋なんだし」

「じゃあなんで」

知りたがってるんだよ、と呆れ顔をされても、七緒のテンションは高いままだ。

「や、だって、1年でおれだけ知らないなんて、寂しいじゃない」

入寮日に、成り行きで新入生同士でアドレス交換が行われたらしく、七緒以外はみんなラファエルの携帯番号を知っていたのだ。それを知ったとき七緒は、かなりのショックを受けた。

「断られたし、完全嫌われてんだなって」

「別に……面倒だったからだよ。お前メールとか多そうだし」

弟からのメールではしゃいでいた姿を見てラファエルはそう思っていたのだが、七緒はきよんとする。

「えー、そんなイメージかな？ 全然少ないよ、友達にびっくりされるくらい」

もともと母さんが機械音痴なので、七緒が小さい頃から触っていたものと言えばゲームくらいだ。ケータイは中学二年の誕生日プレゼントだった。別に必要性は感じなかったが、持ったら持ったで便利だった。

「夏休みとかラファエルくん家に帰る？ したら、そんなときとか電話するよ」

にんじんを切り終え、ジャガイモを受け取ろうとした七緒は、ラファエルの微妙な表情に気がついた。

「おまえ、は、家に帰らないの？」

「えっ」

顔が引きつるのがわかる。

七緒としては帰りたいが、ロウから説明された記憶のなんやかやがあるので、夏はずっとここにしようと思っていたのだ。

しかし、それを口に出すことは出来ない。

「わ、かんない。ちょっとは帰るかもだけど……そんなにずっとは帰らないと思う」

「俺もだ」

短く、必要以上のことを一切乗せない声で、ラファエルは言った――次の瞬間、

「いっ！」

かしゅん、と皮むき器を取りおとして、手を押さえる。

「え、ええっ！？ 切ったの！？」

見せなさいと言うと、思いのほか素直に手が差し出された。左手の親指の付け根に、赤い線が浮かび上がった、と思ったら、予想以上の血が流れ出した。

「ちよっ、鼻血の勢いで血い出てる！」

ぎょっとしたのは本人も同じのようで、血を見た途端、顔から血の気が引いていく。

「……あ、洗えばいいの、か」

「待って、落ち着いて、大丈夫、ええと、傷の下のとこ押さえてて。今救急箱とってくるから」

いいね、と言い置くと、全速力で階段を駆け上がる。血が特別怖いというわけでもないけれど、目の前で負傷されたとなると、走っているせいではなく、心拍数が上がるのを感じる。

――にしても、

「（ナオにしろラファエルくんにしろ）」

——なぜ皮むき器で怪我をするかね！

夕飯作りは、思った以上に前途多難だった。

49、初めての共同作業

ぼちゃん、ぼちゃん。

左手に大きめの絆創膏を貼ったラファエルは、やりにくそうに野菜を鍋に入れている。

結局今までに彼がやったことと言えば、玉ねぎの皮むきだけだ。大量のにんじんを切り終えた七緒は今、戸棚を一生懸命に漁っている。

「やっちゃったなあ……ルールが3箱しかない」

「充分じゃないのか」

七緒が箱を無言で差し出す。指された箇所には「四人分」と書いてあった。

「……」

「単純計算で7箱はないと。余分をみて、あと6箱くらい買って来なきゃ」

そうは言っても、と七緒はラファエルを見やる。ラファエルも、困ったように七緒を見た。

「ラファエルくんさ、ここら辺、わかる？」

寮に入ってる以上、実家は離れた場所だろうし、彼の場合、部活がない日は必ず寮に真っ直ぐ帰ってきていた。

思った通り、ラファエルは首を横に振る。

「いや、全然知らない。つか、入学してから、敷地内から出たことない」

「本当に!？」

予想以上の引きこもりっぷりに驚く七緒。ラファエルは言い訳のように「行きたいとことかないし」と付け足した。

七緒がラファエルを残して台所を離れるなんてできっこないし、ラファエルが買い物に行くことも出来ない。

地図でも書いてやればいいのだろうが、七緒自身、この辺りには詳しくないのだ。先日もロウに道をおしえてもらってようやく、商店街に出られたくらいだ。

「商店街まで割と入り組んでるんだよね……おれもまだ覚えてないの」

「……人通りのある方に行けば、着くよな? 最悪、人に聞けばいいし」

行くしかない、と潔く言ったラファエルに、おっかさから「何か足りなかったら」と預かっていたお金を渡す。

「(ロウ、ついて行ってあげられない?)」

——「バカ、俺はお前の補佐だぞ」

呆れたような声に、彼がそれ以上干渉しようとしていないのがわかる。

玄関までついていきながら、「知らない人にはついて行かないで」「ケータイは持った?」なんて言っていると、いきなり、階段の上

から呆れた声がした。

「お前はシュタイネルの母ちゃんか？」

振り向くと、いつものジャージでなく、お出かけ用の服を着た、藤枝がいた。

「にしたって過保護すぎ」

「だって心配で」

「うぜえ」

「ラファエルくん酷い！」

ひゃひゃひゃ、と笑いながら降りてくると、3年生は無造作に自分の靴を取り出した。

彼のズボンの後ろポケットに財布を見つけて、七緒はどこにいくのかと問いかけた。

「本屋だよ、本屋。あとゲーム屋」

「商店街の方ですよね？　じゃあついでにおつかいお願いできませんか？」

「えっ、何オマエ先輩をパシリに」

「ありがとうございます！」

「まだ何も言っただろ！」

掛け合いを見せる2人を眺めながら、ラファエルはどちらが折れるかと考えて、一度履いた靴を脱いだ。

「お前さ、よく3年をパシれるよな」

「別にパシってないじゃん！ ついでに頼んだだけじゃん」

結局折れたのは藤枝で、ぶつぶつ言いながらもラファエルからお金を受けとると、さっさと寮を後にした。

「2年だったらしいよー。でもさあ、3年って総じて1年に甘い気、しない？」

肩をすくめて、なんでもないことのように言う七緒。甘え上手な彼は、学年の差を当たり前のように利用しているらしい。

「お前本当腹黒いよな」

「え、なんでよ」

顔をしかめる七緒は放っておいて、台所に戻る。

「……さて……ええと、じゃあ、ラファエルくん」

じっとラファエルを見つめる。左手に絆創膏を貼っている彼に、何をしてもらえるか考えているのだ。

「んん、レタスむいてくれる？ あと、ゆで卵作って」

「ゆで卵どうやんの？」

さすがに、ジャガイモを剥いて切ったの作業中に手元から目は離せないで、口頭で指示する。

「お鍋に水いれて」

鍋が水道に突き出されるのをちらりと確認する。ガシャ、と鍋をコ

ンロに置く音を聞くと、七緒は続けた。

「したら、お塩ちよつといれて、6つずつ卵茹でて」

「普通に入ればいいの？」

「うん、入れたらね、火いつけて、菜箸で卵をくるくる回してちよ
うだい」

「……了解」

塩、塩、という呟きが聞こえたので、顔は上げないまま、調味料の
入った戸棚を教える。

無事に茹で始めたようなので、今度は玉ねぎを手にとって、ベリベ
リ皮を剥く。

「4分くらい茹でたら、お湯捨てないで、またやって。あ、ゆで卵
出来たら、氷水に入れて？」

「なんで？」

七緒は手を止めて、顔をあげた。

母さんがそうやっていたのを真似しているだけなので、改めて行動
の意図を聞かれると困ってしまう。

「えっと……なんでだろ。多分、冷ますのと……殻を剥きやすくす
るため？」

「ふーん。ボウルで良いんだよな」

納得していない顔ではあるが、ラファエルは氷水を用意し始めた。

「そうそう」

ようやく作業らしくなってきた頃、

「なにしてるん？」

唐突な声に、2人はぴよこんと飛び上がって、振り向いた。
怪訝そうな顔で食堂からこちらを覗きこんでいるのは虎哲だ。

「見たらわかるだろ、夕飯作ってんだよ」

素っ気なく言うラファエルの負傷した手、切りかけの大量の野菜、
がちやがちやとした台所のあり様を見て、虎哲は目を細めた。

「……ああ、ほうか。そいじゃあ、わしゃあ部屋に戻る……」

「あっ、テツくん！」

七緒がぱっと目を見開いたのを見て、ラファエルは嫌な予感がした。
虎哲も同じのようで、一步後ずさる。
が、七緒が包丁を持ったまま、空いた片手で腕を掴んだので、逃げ
られなくなった。

「手伝ってー！」

「わかったけえ危ない、包丁包丁！」

……というわけで、虎哲を入れた3人が、台所に並ぶ。

「……狭い」

「わしに文句言うなや、引き入れたなあナナじゃろ」

「無駄にガタイがいいんだよ、あんた」

「無駄たあなんじゃ」

「ちよっと2人ともお黙り、テツくんは料理ってする？ あ、レト
ルトはなしで」

仲が良いとは言えない2人のやり取りをぶったぎって、七緒は問いかけた。

虎哲は少し考えて、「必要じゃったらする」と答えた。

「去年はようしよったんじゃ。カレーくらいなら普通に……」
「本当？ 助かる！ じゃ、お肉切って軽く炒めて」

玉ねぎを適当に剥きながら、虎哲の様子を少し観察する。
予想以上に手際よく肉を切り出したのに安心して、自分も切る作業に入った。

「ああ良かった、おれもテツくんも同じくらいのレベルじゃんか」
「これくらい普通じゃろ」

「いや、案外出来ないみたいだもん」

ね、ラファエルくん、と笑いかける仕草は、ムカつく程に悪意がない。

黙ったままレタスを乱暴に野菜室から取り出す。
サラダ用の深い木皿を準備して、そろそろ卵の方を、と七緒を振り返っ――

「――っ、七緒？」

ラファエルの驚いたような声に、虎哲も顔をあげる。

七緒がぼろぼろ泣いているのが見えて、一瞬ぎよつとしたが、すぐに原因に思い当たった。

「玉ねぎ」

「え？ ……あ」

ラファエルも理由に気がついて、はあと息をつく。

「おい、戸塚！ 顔ぐしょぐしょだよ」

茹で上がった卵を氷水に移動させながら指摘すると、七緒は泣きながら笑った。

「もう、おれ玉ねぎめちゃうちゃ涙でるの」

「ひでえ顔」

「じゃあラファエルくんやってみなよ！ 目えつむってても100パー泣くから！」

「……玉ねぎの涙でる成分で……確か鼻から入るんじゃないか？」
「え、ウソ。そうなの？」

じゃあ今まで目をつむって頑張っていたおれの努力は、と七緒が嘆き、ラファエルはくすくすと笑った。

「馬鹿じゃねえの」

「かわいく笑いながら低い声でそゆこと言うのやめてくれる！」

「か、わいく笑ってねーし！」

「ええ、そこ！？」

きゃいきゃいと喋る2人の手は、すっかり止まっている。

注意した方がいいのかしばらく迷っていた虎哲は、まあいいかと1人作業を続けた。

50、カレーは辛い

「なあ、あとちょっとで他也帰ってくんじゃね？」

光流は、たしたしとテーブルを叩いた。

その隣で大輔と智がちまちまとラッキョウをつまんでいる。
買い出しを頼んだ藤枝が帰って来ないため、カレーが完成しないのだ。

「サトさん、大輔先輩、みんなの分残しておいて下さいね」

注意する七緒の声がピリピリしていたので、2人とも黙って頷く。
そこへ、ラファエルがサラダを運んできた。

「仕方がないし、サラダとスープだけでも先にだそうぜって、テツが」
「……まあ、そうだねえ。仕方がないものね」

七緒はため息をつくど、少し冷めたスープを温め直しているらしい
虎哲のもとに行く。

「テツくん、ありがとね」

「んー。人選を間違えたな」

ふふ、と苦笑してみせる顔がいつもより優しかったので、七緒は嬉しくなった。

ガララ、と玄関の開く音がする。

ただーいまー、という独特なイントネーションを耳にした瞬間、七緒とラファエルは駆け出した。

「キノコさん！」

「おっせえっすよ！」

帰ってきた途端に、一年生2人から囁みつかれ、藤枝は一瞬、ぽかんとした。

そして、悪びれたふうもなく、「めんご！」と袋を差し出す。

「や、本屋で立ち読み始めたら、思いのほか時間経ってさ」

「もー！ 素直にお礼言えないじゃないですか！」

「いいから戸塚、さっさとやろうぜ」

先輩を置いて、バタバタと台所に戻る。

「ラファエルくん、箱開けて」

「ぜんぶ？」

「ぜんぶっ」

ラファエルが箱を開けルーを出し、それを七緒が受け取って割りながら、ふたつある鍋へと落とす。

スープを注いでいた虎哲は、じっとその様子を見つめていた。

「あっ、テツくん！ あっち戻るときに、あと10分で出来ますって言うておいてー」

「ん」

わかった、と歩き出してから振り返ると、隣同士でそれぞれ鍋をかき混ぜる背中が見えた。

七緒が中火でいいよというと、頷いたラファエルが火力を強める。それから、急がずにゆっくりねと念をおされて、わかってるよと唇を尖らせた。

「（……子供は、すぐ仲良くなりよんなあ）」

自分も子供のくせに、虎哲はそう思ったのだった。

「こんなもんだね、ラファエルくん、お皿持っておいで」

カレーの匂いに達成感を感じていたラファエルは、七緒の言葉に「えっ」と目を見開いた。

「手伝ってくれたから、一番によそってあげる」

にこにこ笑顔で言われ、まさか要らないとは言えないラファエル。

「……ん。じゃあ、ちょっとでいいから」

皿を受け取った七緒は、少し残念そうな顔をしたが、いつものように少なめにご飯をよそった。そして、その横にカレーをいれる。

「はい、どうぞ。もう食べちゃっていいからね」

頷いて、食堂に戻ろうとしたとき、ひょこりと食堂側から智が顔を出したので、思わず後ずさりした。

「出来たの?」

智の問いかけに七緒が答えた瞬間、食堂が騒がしくなる。そして、一気に台所の人口密度が増えた。

「あつ、ちょっと!! みんなちゃんと並んでくださいよ、光流さん割り込まないッ」

七緒が慌てて、皿を受け取ってご飯をつけては、自然と隣に立った虎哲にそれを回す。虎哲が乱暴にルーを乗せて、寮生たちに渡していく。

「あつ、ねえテツ、もうちょっと入れて!」

「うっさいわ。後ろ詰まっとるんじゃけえ、さっさと退けって」

ケチー、と大輔が舌をだして去ってゆく。半分も列を消化しないうちに、玄関から「ただいまー!」と騒がしい声が聞こえてきて、全員が「あつ」という顔になった。

「他の奴ら帰ってきたぜ!」

「うわー、食堂狭くなる!」

わいわい言いだした2年生たちを眺めながら、ラファエルは台所の隅に座って、ぱくぱくとカレーを口に運ぶ。

場所が空かないうちに他が戻ってくると、ほとんどの寮生が食堂に集まっているような状態になって、とてもむさくるしいのだ。

もう既に、「えっ、まだ飯始めてねーの!?!」「腹減ったー」「おい、もっと詰めるよ!」なんて声が聞こえ始めている。

早く部屋に戻ろう、とカレーをかきこんでいると、忙しいはずの七緒が振り返った。

「おいしい?」

「……普通！」

辺りの騒がしさに負けないよう、少し大きな声で、いつもと同じ答えを返す。

本当に少ない量だったから、急いでいたラファエルは、あつという間にたいらげてしまった。

「ごちそうさま」

空けた器を流しに置くラファエルを見ながら、七緒は嬉しそうに笑った。

「テツくんも、ありがとうね」

「お前が礼を言うことじゃなかろうに」

「でもおれが頼まれたことだから、ほんとなら1人で、」

「あいつたあ違うじやろう、お前は。仕事じゃ、ない」

虎哲の言う「あいつ」は、おっかさんのことなのだろう。ぶっきらぼうな言い方だが、どうやら「同じ寮生の立場なんだから、もっと他の奴に頼っていいのに」という意味らしい。

「テツくんは、優しいひとだなあ」

しみじみとそう言うと、あからさまに嫌そうな顔で睨まれた。そんな顔をされたって、もうちつとも怖くない。

「なんだかお兄ちゃんみたい」

怯まず重ねて言う、一泊置いて、何故か言った方である七緒が赤面した。

「……おい」

「なんか言ってみたらちよつと恥ずかしかった！」

「ちよつとー、お前らいちゃついてないで早くしてくんない！」

ばたばたと地団駄を踏んで、藤枝が皿を突き出す。元はと言えばあなたが遅かったせいで、と反論しながら受け取った七緒は、つぎの瞬間危うく皿を取りおとしそうになった。

「ぎえええええつ、なんじゃこらああああ」

「^{かれ}辛えええつ！」

先に食べ始めたらしい何名かが、いきなり悲鳴をあげたのだ。

「な、なに、どうしたんですか!？」

驚く七緒たちに、智がひいひいと喉を変なふうに鳴らしながら「えっらい辛い…」と告げる。

「え、ええ？ そんなに辛いわけ……」

「……七緒」

虎哲が、七緒の肩をたたく。

彼の視線の先には、無造作に置かれたカレールの箱。真っ赤なそれには、トウガラシのマークが五分の五個、描かれている。

——超超超・激辛3倍カレー……

まだ台所にいた者たちは、一斉に藤枝を見やった。

「——キノコさんっ!!?」

「俺は辛い方が好きなんだって!」

「限度があるだろうがあ!」

3年生たちが藤枝をとりかこみ、袋叩きにする。

「いてっ、いだだっ、やめろって! 大丈夫だ、食べっから!」

「食べねーよハゲ! おまつ、光流の哀れな姿を見ろよ!」

味わう前に、口いっぱい頬張った光流は、水をがぶ飲みしながら大量の汗を流している。

隣には、げほげほ咳き込む智や、涙目で水を探す大輔の姿があった。地獄絵図だ。

「超超超・激辛3倍カレーだそうですけど……一応、中辛のルーも混じってるんですが」

「うわあ、俺でもこれはちよっとキツイ…」

七緒からカレーを受け取ったばかりの葵が、少し食べて呟く。彼は平均よりも辛いものに耐性があるが、それすら超える辛さらしい。

「頭皮が! 頭皮がサァーって! ねえこれトウガラシ入ってるよ? 赤い固形物あるもんよ!」

「見てこの汗! クーラーつけてクーラー!」

大騒ぎになった食堂に、虎哲の声が響く。

「おめーら！ 皿によそった分は完食せえよ！」

そう言った自分は、カレーの代わりに、コンソメスープをご飯にかけていた。

「あ、テツくんそれいいね。おれもそうしよう」

「お前らずりい！」

「つーかキノコまじ一回で良いから謝れよ！」

「うめえ」

「反省の色見してー！！ なんなのその態度！」

結局、ヒイヒイ言いながら全員が完食したらしいが、しばらく藤枝はおかわり権を剥奪されることとなった。

「人選間違えたね…」

「ほんとにな」

閑話

「あー終わった終わった」

「またひと月後に期末とかまじ勘弁」

食事を終えた食堂で、横になりながら喋るのは、テストを終えた2・3年生たちだ。

「睡眠をとりたい」

力のない声で呟くのは大輔で、隣に寝転ぶ健太の腹に、ぽんと手を乗つけた。

「やーめーろーよー。吐くよー」

「健ちゃんはどうだったのよう、テストー」

オカマ口調で健太にひつつくのは、彼と同室である新一だ。彼らはケンカも多いが、仲は良い。

「きーもーいー。暑いしい。つーか全滅に決まってるだろお。とりあえず現国の赤点は決定だな」

「…お前、なんで文系いったんだよ……」

「古典だけが得意だからだよ……」

ぐてりと顔を伏せる健太を、新一が引きずって部屋に戻ろうとしたときだった。

「うわっ、新一先輩が東條先輩いじめてるっ」

食堂に駆け込んできた七緒が、驚いて声をあげた。

「いじめてねーよ、こいつこのまま寝ちゃうから！」

「ていうかなんでこんなに屍が……」

死屍類類、というべき食堂の惨状に、七緒は顔をひきつらせる。

「テストが終わったのー」

比較的能天気な彰人がそう言うと、彼は納得したのか「お疲れ様でした」と苦笑した。

1年生は、2・3年よりも1日早く終わっていたのだ。

「ところで、テツくん知りませんか？」

「あっち」

晴登が台所を指差すと、礼を言ってぽてぽて駆けて行く。

「ねえテツくん、一緒に宿題やろー」

「はあ？ なんの？」

「数学の！ 覚えてないの、数学んときはいたじゃん」

「寝とった」

「堂々と言うね！ まあいいや、やろうよー。テツくんちよくちよくサボったりするから、提出物くらいしっかりやんなきゃ」

「んー」

「それ、いいよ？ いやだ？ どっち？」

台所から聞こえてくる会話に、大輔が呟いた。

「あいつすっかりテツに……懐いたよなあ」

懐いた、という表現に、全員が頷く。

まるで子犬が遊んでくれた人間に懐くように、七緒は、虎哲の姿を見ると寄って行って、なにかに理由をつけて構ってもらいたがるようになっていた。テスト中も、勉強やろうよなどと言って、直哉と共に虎哲の部屋に押しかけていたりした。

「それで、テツは案外、押しに弱いよなあ」

ふふふ、と嬉しそうに赤城が言うと、彼にもたれていた藤枝が同意した。

「そうそう。ナナ坊はアレだな、彰人タイプだな。好き好きオーラ出しまくりの」

ええ、オレそんなん出してねーよお、という彰人も、妙に笑顔だ。いや出してるだろ、と3年生たちが一斉に突っ込んだあと、また台所から声が聞こえた。

「あ、ラファエルくんも一緒にやる？」

ずっと無言だったが、虎哲と一緒に皿洗いをしていたのはラファエルだ。

彼を誘う七緒の声のあと、ぼそぼそと小さな声がした。

聞き取れはしなかったが、なんとなく内容は推測出来る。

「シュタイネルもさあ、随分ナナに懷いたよな」

「あれは餌付けだろ」

「なんにしろ、良かったよ。近頃はラファエルもちゃんと食堂で食べるしさ」

銀杏寮でラファエルを名前で呼ぶのは、今のところ七緒と赤城だけだ。けれど最近の様子を見ると、直哉辺りから名前で呼び始めるんじゃないかと赤城は思っている。そしてラファエル本人も、それを嫌がりはしないのだろう。

「別に、俺は……」

「あ、ラファエルくんトコは出てない？」

「いやっ、出てる。けど、も……」

「よし、じゃあ、三人でやろう！ 終わるまで待つてるからねえ」

予想通り、ラファエルは誘いに乗ってあげてもいいよ的な、ツンデレな返答をしたのだろう。不安げな七緒の確認に、食い気味に答えた。

三人って俺入れて三人なのかオイという虎哲に、七緒は笑う。代わりにラファエルが噛みついた。

「なんだよ、お前なんか、部屋にパンダのぬいぐるみ置いてるくせに」

「なして知っちゃるんだ！」

「名前つけて可愛がってるって言ってた。あんたと仲良い某二年生

が」

「今後一切、雪弥からの情報は信じるな！ ていうか名前つけてねーし！」

「ええ、名前つけてないの？ おれが沖田くんからもらった奴は、宗次郎って名前にしたんだけど」

「……」

「……七緒が入るとややこしくなる」

「ラファエルくんてちよいちよいひどいよね！」

なんだかんだと虎哲もラファエルも楽しそうなので、赤城と彰人は顔を見合わせた。

「あれ、お前飯のとき居た？」

唐突な、誰に向けられたのかわからない晴登の声に振り向くと、廊下に雪弥の姿があった。

赤城は首を傾げる。確か雪弥は、おっかさんに外泊届けを出してはいなかったか。

「（テスト終わったその日に外泊なんて、どんだけはしゃいでんだって言われてた気が）」

赤城の困惑が伝わったのか、顔をあげた雪弥は皮肉めいた笑みを返した。そうしてそのまま、ふいと廊下を進んで消える。

大輔が、あーあーとため息のような声をだす。

「すみません、なんかあいつ機嫌悪そう」

「みたいだなあ」

友人の代わりに謝る大輔に、いいよと手を振ってみせる晴登。赤城も笑いながら言った。

「雪弥の行くところはわかってるし」

彼は、自分の部屋に戻るわけではなく、葵を訪ねるのだろう。そうしたらきつと雪弥の機嫌は直る。

「あいつマジ金魚のフンだよな、昔から」

光流が言うと、持ち上がり組は深く頷き、高校からの外部組は苦笑した。

「中学んときからあんなに懐いだったの？」

「いや、むしろ初等部の後半からじゃなかったかな。オレ覚えてるもん、雪弥が休み時間とか上級生のところ行ってたの」

「逆になあ、あんましクラスで遊んだ覚えがないんだよなあ…」

新一の言葉に、光流は同意した。何度か同じクラスだったにも関わらず、喋るようになったのは寮に入ってから……つまり高等部からだ。それまでは、上級生と仲が良すぎて、どうにも近づきにくい奴だなあと思っていたのだ。

「ま、とにかく、葵がなんとかするだろ」

この話は終わり、とでも言うように、晴登が呟いたので、それもそうだなあと皆して頷く。

台所から聞こえる、楽しげな話し声をBGMに、それぞれうつらうつらし始めるのだった。

「……うわっ、ちょっと、ここで寝たらだめですよ、みんな!」

「ほうっっておきゃあ」

「おっかさんに怒られればいいんだ。……あ、主将、風邪をひきますよ」

「ふたりとも先輩を先輩と思ってないよね。ってカラファエルくん、赤城さんに対する優しさを他の皆にもわけてあげて!」

51、お茶のお誘い

「は、じめ、まして！」

あからさまに緊張している七緒を見て、栄人はこっそり笑ってしまった。

「ん、よろしく」

ふふ、と笑って見せたのは、もうひとりの三年生お茶部部員、落合だ。

中間テスト後、初めての部活に、半幽霊部員である彼はやってきた。綺麗な黒髪を七三にわけて、銀縁メガネをかけている落合は、いかにもガリ勉、な見た目だが、その口調はとても柔らかい。

葵のような温かさあるひとだな、と七緒は思った。

栄人はテスト前に一度会っているの、黙々とドンジャラの準備をしている。

「葵に引き入れられたんだって？ あいつお茶部大好きだからなあ」

無くしたくないんだろなあ、と落合が言った瞬間、理科準備室の戸が開いて、ご本人さまが登場した。

「あー、落合だあ。見たぜ見たぜ、成績優秀者の表。全国で20番代とかお前一回脳の検査受けた方がいいよ」

入ってくるなり、にやにやと葵が言った。

彼の言う「成績優秀者の表」とは、中間テストの結果ではなく、それを終えて燃え尽きた次の日、全校生徒が受けさせられた学力テスト――外部の試験――の結果である。定期考査の結果と違い、それらの成績優秀者がわかるような表が、張り出されるのだ。

落合は、眼鏡の奥の、もともと切れ長の瞳をさらに細めて、嫌そうな声で言う。

「やめろやー、そういうの言うの」

「英語だと9番なんだぜ」

「なんでそんながつつり覚えてんだって」

「えええ、学力テストでそんな順位なんですか？」

「さすが特進クラス……」

畏敬の眼差しを一年生から受けて、落合は「ほらなー！」と抗議する。

「こういうことになるだろうって！ やなんだってこーいうのお！」

「あーはいはいごめん。ところで落合、次はいつ校長くるのか知ってる？」

しれっと放たれた葵の言葉に、一瞬、七緒と栄人が固まる。

――え？ 何？

――校長が……来る？ どこに？

「――……お茶部（ちやぶ）に、ですか！？」

いきなり一年生2人がハモったので、落合は驚き、葵は「あっ」という顔をした。

「……え、なに、言っていないの？ この部の活動内容」

怪訝な表情の落合に、葵は肩をすくめてみせる。

「だって、あれはひと月に一回、あるかないかだろ？」

「おいしい、一応あれがメインなんじゃないの、ここ……」

だって、と言った葵は、七緒が今まで聞いたことがない、少し拗ねたような声だった。

「変に身構えて入部してくれなかったらやだし」

「それもわかるけど、ちゃんと言っとけて。いきなり来たら驚くだろ」

「あのう……何の話ですか？」

3年生同士の軽い言い合いに、遠慮勝ちに栄人が入って行く。このままだと、いっこうに話が進みそうになかったからだ。

腹を決めたのか、葵がすまなそうな顔で、言った。

「一か月に一回くらいの頻度でさ、校長がお茶部来んの。で、一緒に食べたり遊んだりしながら、校長から聞かれることに答えるの。お茶会、って呼んでるんだけど。」

もともと、校長が副校長だったときに顧問だったんだって、ここ。だから、生徒の意見を聞く場として、今もおがちゃんに引き継いで、校長自身も暇な時遊びにくるんだよ」

七緒と栄人は、顔を見合わせる。

つまり、部活で校長面談しなくてはならないということか。引き蠻った顔の後輩たちに気付いたのか、落合が慌ててフォローをいれる。

「いや、ね、校長すごく気さくなひとだから。おしゃべり好きのおじいちゃんだから」

「あ、それはわかりますけど……」

七緒は転校時に校長と喋っているの、そこに関しては心配していない。こっちから話題を見つけないでも大丈夫だろう。しかし、彼が心配しているのはそこではない。

「もしかして……校長は……クッキーを持参されたり……しますか？」

ぴしり、と音をたてて、葵と落合が固まった。

「何故それを……あつ、そっか、ナナは転校してきたときとかに会ってんのか……」

「……持ってくるんですね、その反応だと……」

ひょうひょうとうすら寒い風を感じて、七緒は自分の肩を抱きしめる。

なんのことだかわからない栄人に、葵が陰気臭い口調で説明した。

「校長、お菓子作りにハマって……何年もハマってるはずなのに一向に上達しなくて、未だに初歩のクッキーしか作れないみたいなんだけど……そのマズ……ごほんっ、あんまり出来がよろしいとは言えない自作クッキーを、わざわざ持ってきてくれるんだよ」

「はあ……」

校長のクッキーを知らない栄人には、いまいち事態の深刻性が伝わっていないようだが、もう少し経てば嫌でもわかるだろう、と放っ

ておいた。

「……で、まあ最近だとどうやってそのクッキーをご遠慮するかっていうのを考えてるんだけど」

「部員全員虫歯っていう言い訳は、何回か使ったからもう無理なんだよな……」

「……たぶんそれ聞いてたらおれ、お茶部に入りませんでしたよ」

ほの暗い3人についていけない栄人は、校長もドンジャラとかやるんだろうか、とぼんやり考えた。

「なーんで教えてくんなかったんですか？」

部活を終えた、銀杏寮への帰り道。少し抗議するように、七緒は葵に問いかけた。

「や、だって……教えたら、入部してたか？」

「たれば、は聞きたくありませんよ。なんか、寮での勧誘だって禁止なくせにおれを誘ったり、アオさんっぽくないですね。お茶部に関しては」

勧誘されたときから、それが本当に疑問だったので、七緒は首を傾げて隣の先輩を見やる。

彼は、他人のすることにはおおらかだが、自分に対しては厳しい方だ。なのに、わざわざ寮則を破るなんて。

バツの悪そうな顔で、葵は言った。

「俺と落合の代が無事に終わったとしても、その後で廃部にはした

くないんだ。一応、先輩から託されてるからさ」
「せん、ぱい」

今となつては最上級生である彼からこの言葉が出ると、奇妙な違和感を感じる。

「（母さんたちにも子供時代があつたんだって、知った時の気分）」
「ごめんなあ、言わなくて……なあ、出て行ったり、しないよな？」
ぼんやりとしていた七緒は、心配そうな声音に、慌てて顔をあげた。
窺うような表情を見て、「お茶部から」出て行かないよな、と聞か
れているのだとわかった。

「出て行きませんよ。あの、そんなに、心配しないで下さい。すつ
ごく怒ってるわけでも、困ってるわけでもありませんから」

ただ、もう一度あのクッキーと再会しなくてはならないのかと思う
と、胸やけしてくるが。

「ああ、良かった。本当に、うちの部は、失くしたくないんだ」

よっぽどお茶部に思い入れがあるのか、葵は心底ほっとした顔で、
ため息をついた。

——確かに、居心地の良い、雰囲気だけど。

「あ、そうだ、」

唐突に、葵が声をあげる。思い出したように言った。

「全然違う話なんだけど、最近、雪弥どうだ？」

「どうだ、って？」

話題の転換にもその内容にもついていけず、七緒は眉をよせた。

「えーと、何か気になることない？　ちよつと今、心配なんだ」

何かあったんですか、と聞いても、教えてくれないことは目に見えていたので、素直に首を横に振る。

「いいえ、特には。あ、でも、テスト終わってからあんまり会っていないですね」

しかし、会えばいつものようにちよつかいを出してくるし、食事を残したりもしていない。そう言うと、葵は満足げに「そうか」と頷いた。

「ナナはさ、なんか寮生の様子見る機会が多いだろ。なんか変だな、と思ったら、とりあえず話かけてみてくれない？　雪弥だけでなくても」

「えっ。アオさんみたいに話聞くとかできませんよ、おれ」

慌てて言う。自分には、葵のような、誰かを安心させる話術や、厚い人望なんてない。

葵も慌てて、「別に無理にってわけじゃなくてさ」と笑う。

「俺だって本当に話を聞くだけだし、ナナはなんか向いてそうっていうか……あれ、何が言いたいんだっけ」

自分で言っていてきょとした葵がおかしくて、七緒は小さく笑った。

「おれにできることなら、努力はしますよ。アオさん、氣い遣いだから、そのうちパンクしちゃうもの」

喋ってるうちに寮に着いて、玄関で別れる。

階段を上りながら、冗談混じりで自分が言ったことを反芻して、今更ながら「確かにそうだ」と思った。

——アオさん、しんどくは、ならないのかしら

自分以外のことを、他の人以上に背負っていて、辛くなる時はないのだろうか。

「（きつとあるんじゃないかな……ゆーきゃん先輩より、アオさんの方見てなきゃだめなんじゃないかな……）」

それはあまりにもでしゃばりだろうかとも思いつつ、おせっかいな一年生は、同じくおせっかいな三年生を支えよう、と、こっそり心に決めた。

「新聞部からさあ、今月の新聞もらってきてくんね？」

めずらしく、北原と二人つきりになった。

アオさんを支えようと勝手に決めてから2日。木曜なので部活があるのだが、いつも一緒に来る栄人が後から来るため（彼はどうやら英単語を覚えるのが苦手なようで、5回連続で英単語テスト10点満点で3点以下をとって、居残りをさせられているのだ）1人で部

室へやって来たところ、まだ北原しかいなかったのだ。

「え？ 新聞？」

コーヒーの用意をしていた七緒は、きょとんと首を傾げた。北原が何も言わずに、窓の隣の壁を指す。

そこには、「倫葉新聞5月号」と書かれた紙が貼ってあった。

「毎月、新聞部がどの部にも配ってんだけど、お茶部はちょっと特殊だから、こっちから取りに行くの。新聞部の場所、わかるか？」

「わかりますけど……」

部活見学の時の光景が甦る。あの中に、入って行けるのだろうか。

「部長に、おがちゃんの分をもらいに来た、って言えばいいから」

いってら、と、後輩をパシることがするのが楽しいのか、北原は満面の笑みで手を振って見せる。一緒にきてくれる気はなさそうだ。少しふてくされて、七緒は理科準備室を出た。

部室棟が見えてきた、と思ったら、ある一か所に目がいった。

開いた窓から、見覚えのある金髪が見えたのだ。

「（確か、茶道部、の……なかむら……まり、先輩）」

友人と同じ名字だから覚えていた。そういや、茶道部も木曜が活動日と聞いていた。

声をかけるのもおかしいか、と思ったが、じっと見ながら歩いていたら、彼女とばっちり目が合ってしまったので、寄っていく。

「こんにちは」

窓の外の男子生徒を見て、記憶を探っているのか、目を細める中村。あれこれって忘れられてるんじゃないかなろうかと七緒が思い始めた頃、ようやく彼女は「ああ」と声をあげた。

「あんたアレだ、中村って子と一緒に居た、茶道出来る子だ」

どうやら彼女も、自らと同じ名字が印象に残っていたようだ。おまけのような思い出され方だが、忘れられているよりマシかと笑う。

「はい、戸塚七緒です」

「そーいやあんた、どこの部に入っただの？」

言って通じるかしらと思いつつ、お茶部ですと言うと、中村は目を細めた。

「……ああ、落合のいる、なんか怪しいところね」

どういう印象なんだ、とつつこもうとしたが、確かにマイナーで怪しいので、七緒は苦笑するだけにとどめておいた。そしてふと、何故部長である葵の名ではなく落合なのかと怪訝に思った。

「もしかして、中村先輩は特進クラス……ですか？」

「そ、こうみえてもね。さすがに落合のレベルまではいかないけど」

落合はよっぽどすごいらしい。中村の淡々とした口調に、少し拗ねたような雰囲気が出たので、七緒は緊張を解いた。

「おれ、一昨日初めて落合さんに会ったんですけど、なんか見た目と中身がそぐわないですよね」

「そうそう、冷酷な生徒会副会長キャラっぽい見た目の癖して、とんだボケ男なんだから。言っとくけどあいつ、超ドジっ子だから覚悟しときな」

知ってます、と苦笑した。一昨日やったドンジャラで、役が揃ったのか嬉しそうに「ドンジャラー！」とパイを見せようとした落合は、勢いが強過ぎて台ごとひっくり返したのだ。

その話をするときとくすと笑った中村は、「ねえ、」と窓から身を乗り出した。

「まだうちの奴ら来てないからさあ、ちょっとお茶飲んでかね？」

52、寄り道

空気が違うなあ、と七緒はぼんやり思った。

一度は遠慮したものの、なし崩し的にお茶室に迎えられ、今は目の前で茶道部部长がお茶を点ててくれているところだ。

道具を用意する時から、中村の、軽薄といっってはなんだが、そういった雰囲気が消え去り、丁寧な動作で適度に引き締まった空気が醸し出されて、微妙に七緒は緊張していた。

「（一対一でお茶点ててもらうのって、あまりなかったものなあ……にしても、なんだろう、この状況）」

「ねえ、戸塚」

「あ、はいっ」

緊張しつつも油断していたところに、いきなり声をかけられ、びくりと背筋を正す。その様子に、中村は手を止めて笑った。

「別にとって食いやしないんだから、もうちょい楽にしろよ。大丈夫、間違えようがこぼそうが怒んないし」

「あ、はい……ごめんなさい、なんかお茶室で声かけられる時って、だいたい注意される時だったので、反射で」

「ああ、わかるわかる。先生に声かけられるとあたしも緊張するし」

ころころと笑う先輩を見て、七緒はほっとした。そして、このひとの笑い声は可愛いなあと思った。

「あんた、親戚がお茶やってるとか言ってたよね。どこのひと？」
「あ……あんまり、難しいこと覚えてなくて。裏千家、なのは覚えてますけど……祖母が、福井で小さな教室開いてるんです。あと、花道と書道を同じ場所で教えて、裏の道場で柔道と合気道と剣道を」

ぽりぽりと金平糖を食べながら答える。

「あんたのおばあさん、超すごいじゃん。つーかそれ、ひとりでおじいさんは？」

「えっと、住み込み？　かな？　の、お弟子さんが何人かいて、そのひとたちと切り盛りしてるみたいです。祖父は、大分前に亡くなったらしくて」

「そうなの。あんたのおばあさん、かっこいいね」

変に謝るわけでもなく、けろりとそう言った中村は、いつの間に準備を終えたのか、お茶を点て始めた。

何秒かの無言のあと、すっと茶筌が戻され、茶碗が前に置かれた。

「はい、どうぞ」

随分とラフな口調だが、お辞儀がとても丁寧で、七緒はほうっと見とれながらお茶を手を取った。

ずず、と七緒が一口目を飲んだのを見届けて、中村はまた喋り出した。

「じゃ、あんたは他のも習ったの？　柔道とか」

「いや、それは弟が。おれは茶道を少しと書道です。運動神経悪くって。受け身くらいなら見よう見まねでやったことありますけど、

向いてないと痛感しましたよ。っていうか運動全般向いてないんです」

「まーねえ、いかにも草食系って感じだしね」

———そうだけど、ずばっと言われるとなんかなあ……

中村先輩は、と言いかけた七緒に、彼女は「真理でいいよ」と言った。

「あんた中村って友達いるんでしょ」

「あ、はい……真理先輩、は、いつからお茶を習ってるんですか？」

「中1から。ここじゃない私立の女子校でさ、いかにもなお嬢様学校で、茶道が選択授業であるわけ。書道か、社交ダンスか、茶道を選べってんで、茶道にしたの」

「しゃ、しゃこうだんす……」

「そーなのよ、ありえないでしょ？ 体育って書類ではあるんだけど、一年通して社交ダンスだってんだから、かったるくてやってらんないし。つーか案外しんどそうだったし。書道は小学校のときやってたから、正直もうやりたくなかったし。消去法ね、消去法。その授業で予想外にハマっちゃって、先生のとこ通うようになったんだから、わかんないもんだよねー。一期一会とは違うけど、思ってもない方向に行っちゃうことってあるんだよね」

確かに、と七緒は頷く。

———予想外に性転換したりして、案外上手くやってるんだから、世の中わかんないよなあ。

最後の一口分を飲みきり、飲み口を軽くふいていると、真理が呟くように言った。

「上手く行ってると思っててもさあ、いつのまにか、どうしようもないくらい駄目なとこまできてたりさあ……本当、わかんない」

心を読まれたのかと思うタイミングだったので、がばりと顔をあげる。

が、呟きは七緒に向けたものではないようで、アイラインを引いたつり目は、窓の外を眺めていた。

「え……」

「あーごめん、ちょっと愚痴。後輩に言うことじゃねーわ」

慌てたふうでもなく、それでも少しすまなそうに、茶碗を受け取り、清め始める。そんな真理の様子を見て、七緒は、何か悩み事かしら、と戸惑いつつも、聞いて良い関係ではないので、俯く。

「(……でも今、ちょっとドキっとした。上手くやってると思ってるのは自分だけで……もしかしたら何も、上手くいってはいないのかもかもしれない)」

多分自分は、男になるということを、仕方ないと受け入れただけで、そこから一步も、進んでいないのだ。いくらか男子と話すときの緊張がなくなっただけで、それは慣れである。

「(寮に入って、クラスも男子のが多くて、そんな状態だったら慣れるに決まってる。前より声が低いのも、背が高いのも、もう慣れた。でも、それって、順応以上でも以下でもない)」

環境に、ひとは慣れてゆく。単にそれだけのことなのだ。七緒自身で努力したことと言えば、友達を作ることと一人称を変えること。

——このままで、いいとは思えない。でも、これ以上に何が出来
るっていうの。

わたしだって好きで性転換したわけじゃ、ないのに。もやもやと心
を雲が覆っていく。

「ほら、順番違っちゃったけど、出血大サービスでお菓子もあげる
！」

雰囲気は濁ってしまったのは自分のせいだと思ったのか、真理は明
るい声で言った。

「今日のお菓子は水がモチーフみたいよ」

「ああ、綺麗ですね……あっ、いいんですか？ お菓子までもらっ
ちゃって。って、食べたあとに言っても仕方ないんですけど」

いいのいいの、と真理はおばちゃんのように手を振った。

彼女いわく、干菓子は安いものを使ってるから、多少消費が早くて
も構わないのだそうだ。

「秋になって、主菓子になるとまた違うんだけどね。奮発して高い
の買うから。まあでも、あんた茶道できるんだし、たまにだったら
恵んであげる。その代わりちょっと雑用やってもらうけど」

「えー、いいんですか？ やったあ、わたっ……おれ、おまんじゅ
うとかようかん大好きなんです！ 栗ようかんの日は、絶対呼んで
下さいね！ 雑用でもなんでもやりますから！」

ほとんどの女の子がそうであるように、七緒も甘いモノが大好き
で、特にあんこ系の和菓子には目がないのだ。きらきら瞳を輝かせ

る後輩を見て、その食いつき方に少し引きつつも、真理は面白そうに笑った。

「いいよ、任せな。でも珍しい、男子って甘いモノ苦手なイメージあったんだけど」

「え、サトさんは確か甘いモノ好きでしたよね」

「サト……あ、宮崎ね。あいつが特別なんだと思ってたわ。宮崎の入部理由、お菓子食べたいから、だったし」

「さ、サトさん……」

寮の冷蔵庫に智の名前が書かれた水ようかんがよく置かれていたから、好きなのだろうなあとはいっていたが、そのために部活を決めたとは思わなかった。

帰ったそれからかおうかそつとしておくか迷っていた七緒は、茶室の戸が開く音に気付かなかった。

「……っ、ゆ、」

真理の息をのむ音に顔を上げ、その視線を辿り振り返る、と。

「――――ゆーきゃん、先輩？」

見慣れた先輩の姿に、七緒は目を丸くした。

「よー、ナナ。お前こんなとこで何してんの？」

「え、先輩こそ」

戸惑う後輩に、雪弥はにやにや笑いながら言う。

「聞いて驚け、オレもここの部員だったりして」

「えー！　そうなんですか？」

似合わない、と真顔で言うと、雪弥は笑顔のままつま先で小突いてきた。だったら、智が茶道部だという話がでたときに言っておいてくれればいいのに、と思いつつ、雪弥の足を押し退けて立ち上がる。

「えと、真理先輩、それじゃあ、おれ戻りますね。もう他のひともあるかもだし、よく考えればおつかいの途中でした」

「……ああ、そーね。じゃ」

「あ、なあ夕飯なに？」

「今日のメインは鰯の照り焼きです。ごちそうさまでしたあ」

ぺこりと頭を下げて、七緒は戸を閉めた。閉じる瞬間に見えた真理の表情を不思議に思いながら上履きを履いて廊下に出た。

「（新聞部か……岬さんがいいいなあ）」

唯一の知り合いを思い浮かべながら、本来の目的地へと足を速めた。

「戸塚のばあか！」

部室にもどったとたん、北原から怒鳴られて、七緒は悲鳴をあげて縮こまった。

「ひゃあん！　なっ、なんですか！？　なんで怒ってるんですか！？」

びくびくと先輩を上目遣いに見上げると、ぎゅうっと引き結ばれた

唇が戦慄しているのが見えた。

「何してたんだよ、40分経ってるんだけど！」

「え、あの、ちよっと寄り道したのと、新聞部の部長さんがいなくて、新聞受け取るのに時間がかかって……」

「寄り道！？ 寄り道とかしてたの！？ もー信じらんねえコイツ！」

ぎゃんぎゃんと吠えられて、木下あたりに助けを求めようと部室を見まわしたが、北原の他には誰もおらず、七緒は困惑した。

「え、もしかして、まだ誰も……？」

「そーだよ！ 幽霊部員たちは来る方が珍しいし葵さんもなんか来ねーし、よっしーはレポート終わってないとか言って来てすぐ図書室行っちゃまし中村も来ねえし！ オレ1人で超寂しかったんだけどおおお」

それで怒ってたのか、と呆れながら、寄り道したのは悪かったなあと思ったので謝る。

「ごめんなさい、1人でお留守番怖かったんですね」

「背中さするのやめろ！ 子供扱いすんじゃねー！！」

「もう大丈夫ですよ、何して遊びましょうか」

「……ジェンガやりたい」

ああもうこの先輩めんどくさいけど可愛いなあ、とにやにや笑う七緒だった。

「（めんどくさいだけのゆーきゃん先輩と大違いだわ）」

障子の向こうのドアが閉まる音を確認して、真理は顔をあげた。雪弥は「よっこいしょ」とふざけながら腰をおろす。

「あんた馬鹿じゃないの？　どうしてすぐにバレる嘘つくんだっ
ーの」

あんたを入部させた覚えはない、とキツイ口調で言われて、へらへらと雪弥は笑った。

「本当、オレにはきついなあ、中村センパイは」

とってつけたような敬称に顔をしかめて、真理はため息をつく。

「……あの子のこと知ってんの」

「銀杏の後輩だもん」

「ああ……そういやそうか、宮崎とも知り合いだったっけ」

「オレからしたらさあ、なんで真理サンとあいつが2人でここに
いるのが不思議なんだけど？」

あ、と思ったときにはすでに、彼の顔が目の前にあった。

がちや、とやかんが音をたてて倒れ、畳に湯気のでる染みが広がる。

「っ、ざけんな、掃除すんの誰だと思ってんだよっ」

口ではそういつつも、真理は慌てて雪弥に湯がかかっていないか
手を伸ばした。

——あーあ、馬鹿なひと

その手を、とる。

「ねえ真理サン。まさかもう次の恋人見つけたわけじゃないよね？

——オレまだ、納得してないよ」

貼りつけた笑みを消して、雪弥は彼女の唇に噛みついた。

53、お下がり

「うわ、戸塚、なにそれ」

クラスメイトの青木が、顔をしかめた。その反応に、圭介が「ほらなー！」と叫ぶ。

「だから言ったら！　ぜえーったい、おかしいもん、それ」

青木の視線、そして圭介の指す先には、ぶかぶかすぎてもはやワンピースに見えるTシャツを着た、七緒がいた。

そんなに変かなあ、と七緒は自らを見下ろす。隣にいた栄人も、まじまじと友人を見て、言った。

「なんかさ、アメリカの子供って感じ」

あっちのひとって、ぶかぶかでもぴちぴちでも気にせず着るよね、と言われ、七緒は苦笑いした。

「アオさんのお下がりもらったから、活用したいなと思ったんだけど」

アオさんって誰、と青木が言うと、何故か圭介が「寮の先輩なんだから」と答える。

葵さんは縦も横もでかいからなあ、と納得しかけた栄人だが、それにしても大き過ぎる。さらに、お下がりというには、新品同様の状態だった。

実家から荷物が届いた、と葵がダンボールを受け取っていたのは、
昨晚のことだ。

食べ物が入っていないかと図々しい奴ら（雪弥やら藤枝、直哉あたり）
が彼の部屋に押し掛け、蹴りだされた数分後。

なんじゃこりゃ、と悲鳴に近い大声がしたと思ったら、居間に葵が
飛び込んできた。寛いでいた七緒とおっかさん、それに童平は、葵
らしからぬ勢いに目を丸くした。

「どしたの、葵」

「おっかさん、見てよコレ！」

そう言って突き出されたのが、このビッグサイズTシャツなのだ。

「俺がまた太ってんじゃないか唐突に心配になったんだってさ！

先々週会ったばっかだっつの、そのくらいでこんなにサイズアッ
プする！？」「成長期だから」とか書いてあるけどいくら成長期や
ゆうても短期間でこんなデカなるかーっ！っ！」

何故か後半関西弁で、一息に言いたいことを言い終えたらしい葵は、
ため息をついた。

「すっげー、アメリカンサイズ。プリントが可愛い」

「本当、くまさんついてますよ」

くすくす笑う童平と七緒を軽く睨んで、八つ当たりしても仕方ない
と思ったのか、ばったりと倒れ伏す。

「あーもう、家族にどう思われてんだろう俺……さすがにショック

なんだけど。絶対着ねー……」

「アオさんて、実家どこなんですか？」

そういえば、というふうに、竜平がTシャツを眺めながら尋ねると、葵は最寄りから5つ程先の駅名を口にした。

「えっ、全然通えるじゃないっすか」

何でわざわざ寮なんかに、と一年生2人は顔を見合わせる。七緒はひとのことは言えない距離に家があるが、それは直哉にしかまだ言っていない。

「別に……本当は1人暮らししたかったんだけどそれは反対されて、先輩に勧められて入っただけ。」

……っていうかそんな話じゃなくて、なあ、お前らどっちかこのシヤツもらってくんない？」

葵ですらサイズが合わないものを、と、痩せ形の竜平と小柄な七緒は困った顔をする。

「寝巻かなんかにしてよ。はい、最初はグー、」

よっぽどそのTシャツを手放したいのか、いつもはしない先輩の強制力を使う様子に、慌てて2人は手をだした。

竜平がチョキで、七緒がグーだ。

「……どっちがもらわなきゃいけないんすかね？」

「……じゃ、勝った七緒に景品として」

さすがに仕送りを負けた方に押し付けるのは気が引けたのか、葵は

七緒にシャツを差し出した。

「えー……うわデカっ！」

手に持って広げてみると、その大きさが改めてわかる。他人事になったとたん、竜平も葵も面白そうに「着てみる着てみる」とはやしたてた。仕方ないので着てみると、丈が太腿の半ばまでであったものだから、七緒も笑ってしまった。

「んっ……これじゃもうワンピースじゃないですか」

「似合う似合う。お前くまさん好きナ！」

七緒がくまのぬいぐるみを持っていることを知っている竜平がゲラゲラと笑いながらからかう。葵もおつかさんも「幼稚園のスモックみたいだ」と笑った。

賑やかさに呼ばれたのか、風呂上がりの直哉と由良がやってきて、また笑われた。

「なにそれ！ ナナそれ体育着にしたら？」

「笑われるって！ だってこれ首回りとかすっごい開いちゃうもん」

「いっそズボン脱いだら？」

「由良くんまで意地悪言う！ アオさーん！」

「はいはい、似合ってるから大丈夫」

「……という感じで」

「で、ほんとに体育着にしちゃったの？ アホやん」

「……似合わない？」

照れくさそうに笑うと、ちょうど廊下へでるところだった集団に混じって出て行った。

「……青木の下の名前って、なんだったっけ」

「^{なつめ}棗！ 由来は親が夏目漱石のファンだから！ てゆうか、ナナ、ちゃんと食ってる？ 肩細っ、女子かよ！」

「由来まで聞いてねーよ、ってかなんで知ってんだ」

「あいつああ見えて本好きだから、話合うんじゃない？」

お見通しのような圭介の言葉にむっときて、彼の腰を蹴る。ついでのように、七緒も救出した。

「いってー！ 今の蹴りには愛がなかった！」

「あーあー、もう、こんなにしちゃって」

荒い息を整える七緒のシャツは、襟がだるんと伸びてしまっ、さらにぶかぶか感をだしていた。チャイムが鳴ったので、慌てて七緒の腕をつかんで走り出す。

「良かったなあ、今日ケンドーいなくて。さすがにこれは怒られるよ」

今日の体育の担当である小林先生は、顧問をつとめるバレー部の遠征を引率するためお休みだ。おかげで授業は校庭での自習、つまりドッジボールかケイドロである。もしくはその他鬼ごっこ系だが、だいたいいつでもそのどちらかだ。

校庭に出ると、すでに体育委員の尾賀が多数決をとっていた。

「あ、きたきた。おーい、ケイドロかドッジ、どっちがいいー？」

「はいはい、この前ドッジだったからケイドロがいいー！ ハチと

ナナもケイドロだって!」

勝手に圭介が返事をする、尾賀は「じゃケイドロに決定」と言った。

教室の席順で縦に分けられたチーム分けでは、3人の中で圭介だけが右半分だった。

「おっしゃー、ナナ捕まえよう! ちよろいから!」

「ひどくない!? ちよつと聞いたアレひどくない!?」

「赤星い、作戦たてよー!」

ばたばたと駆けて行く圭介を見送って、七緒は栄人を見上げる。

「うつわあ、やだあ。向こう、ほのちゃんがいる……」

洗はノリノリで圭介や青木と作戦をたてている。彼女に警察という役割はぴったりである。

「まあ、やる気ある奴らが頑張るだろ。俺たちは逃げるの専門」

泥棒チームもなんやかや作戦をたてているが、2人はそれに参加せず雲を眺めていた。すると、所在無さ気に優子が寄ってきた。

「あ、優子ちゃんどっち?」

「私、警察……でも、役に立てないし」

「じゃ、一緒に端っこで隠れてよう」

サッカーゴールの後ろで3人はしゃがみこむ。とたんに、何か言いたげだった彼女が、遠慮勝ちに口を開いた。

「戸塚くん、その……言いたくないことならいいんだけど……服、
どうかしたの？」

優子の問いに、2人は顔を見合わせた。

「おーい、いれていれて……って、ナナくん、そのTシャツ……」

いそいそと駆けてきた茜が、怪訝な表情で七緒を見やる。

ついに、耐えきれなくなった栄人が、笑いだした。

「ほらなー！ やっぱりおかしいんだってソレー！」

「うわああああん、うるさいうるさーい！」

「……というわけで、寝巻にします！」

「まじでそれで体育やったの！ ナナ勇者！」

ゲラゲラと一年生たちに笑われて、七緒は目を細めた。呆れた顔で見ていたラファエルは、「それで体育やったのに今日そのまま寝るのかよ」とつつこむ。

「もー、汗全然かかなかったからいいかって。ケイドロ始まって30秒で捕まったしね」

「にしても、本当でかいな」

「ラファエルくんか加賀くんが着たら、もっと大きく見えるとおもうんだけど、」

ど、と言う前に、ラファエルは「着ない」と一刀両断した。

わらわらと騒がしい食堂に不用意に入ってきた雪弥は、人数の多さにびくりと肩を揺らした。

「うおっ。お前ら何集まってるの」

見れば、ほとんどの一年生がいるではないか。正直暑苦しい。

彼ら自身、どうしてこんなに集まってしまったかわからないようで、指摘されて初めて気がついたようだ。

「なんか喋ってたらいつの間にか集まっちゃった。あ、ねえねえゆーきちゃん先輩、ラッファイがね」

「ミッフィーみたいに言うな！」

代表して声をあげた直哉を、ラファエルが赤面してはたく。それを見て全員がけらけらと笑う。何があったのか知らないが、随分と盛り上がっている。

「もー、仲良いのはわかったから、一年、明日起きれなくなるぞお」

「うわ、ゆーきちゃん先輩が先輩らしいこと言った」

「初めてじゃね？」

「っーか、まともなこと言ったのが初めてだろ」

「ラファエルくん、八つ当たりだよそれは」

いつものように毒を吐くラファエルの頭を、七緒が笑いながら撫でる。誰もが笑っているので、雪弥は、オレ上級生と思われてねえよなと思った。

「オレ寮長だから。注意とかちゃんとするから。それにこれから点呼だから部屋戻れって」

騒がしさを消すようにそう言うと、何故だか食堂は静まり返った。全員が、怪訝な顔で雪弥を見ている。

「りょうちょう……？ 誰が？」

「アオさんじゃないの」

「いや、新歓の日に引き継いでたじゃん。一応先輩が寮長だよ」

「だっていつも点呼とりにくるの、花岡先輩じゃん」

「すっかり……」

忘れてた、と一年生がハモツた。

「お前らもうちょっと先輩に対しての敬意をだね！！」

「ぎゃー逃げろ！」

クモの巣を散らすように、各々の部屋に帰っていく。

逃げ遅れたのは、七緒だけだ。

Tシャツの裾をがっちりと掴まれた七緒は、いつの間にか雪弥との間で恒例となった、メガネ没収をされた。

「……ナナって本当どんくさいよね」

「ひどい！ ていうかみんな逃げ足速過ぎるでしょ！ ねえ先輩、

おれさっき失礼なこと何も言ってませんけど」

「笑ってたからアウト」

ひどいようメガネ返して下さいよう、と情けない声を上げる後輩を、雪弥はじつと見つめた。

焦点が合わないのか、何度も瞬きを繰り返している。

「そのシャツ何？」

「あ、アオさんのお下がりです」

そういえば彼は知らなかったのか、と七緒が答えると、雪弥は顔をしかめた。

「え、もらったの？」

「もらったっていうか、押し付けられたっていうか。あつ、ゆーきやん先輩います？」

「いらねえよ、そんなでかいの。どう着ろつての」

ですよね……七緒はくたりと力を抜いた。先輩はどうせ気が済むまでメガネを返してくれないので、寝る前にいらぬ汗をかきたくなかった。

「……そういやナナ、一昨日……」

「はい？」

ふいに真剣味を帯びた声音に、七緒は顔をあげた。続く言葉を待っているのだが、一向に先輩は喋り出さない。

「なんですか、……？」

「さて、食堂のどこかにメガネを隠しました、探してごらん！」

唐突な明るい声に、ぎよつとなる。

——この人いきなり何言い出してんだ、ってか何してくれてんだ！

「え、え、ちょっと先輩どこ行くの！」

「点呼取って来る」

「ウソでしょ！？ えっ、まじで、どこに置いたんですかメガネ！」

……え、ウソ、行かないでって先輩!!」

どうやら本当に出て行ってしまった鬼畜先輩に対し、悲鳴に近い非難の声を上げながら、必死で机の下やら上を手探りする。彼は両目共に0・1以下な上、普段から注意力が欠けているので、メガネなしでの探し物はほぼ不可能である。

唯一の救いが、本当に1人きりではないことだ。がつん、と机に脛をぶつけた瞬間、諦めて天使の名を呼ぶ。

「……ロウ！　メガネどこかわかる？」

——「テレビの上。お前、いいように弄ばれ過ぎだぞ」

だってしょうがないじゃん相手は一応先輩だもんとブツブツ言いながら、探り当てたメガネをかけた。

はあ、とため息をひとつついて、それから、雪弥が何か言おうとしていたなあと思い出す。

「なんだったんだろう」

——「さあ？　あいつ、いつもあんな感じじゃないか？」

それもそうだ、と頷いて——それはそれで問題だけれど——七緒は自室へ戻った。

54、変化

「ナナあ、起きなつてば」

——ううん、いやだ、もうすこし寝かせて…

「戸塚、起きろよお…。先生めっちゃこっち見てるって」

——…えっ…この声…榊くん？　なんでここにいの？

「ナナ、ナナ…」

——あ、この声も…美代ちゃん？　美代ちゃんじゃない？　わあ
っ、久しぶり！　どうして慌ててるの？

「ナナ………奈々子っ！」

「——はいっ！」

勢いよく起き上がって、七緒はしばらく肩で息をしていた。
夢だ、と気がついて、ほっとする。

先程のシチュエーションは覚えがある。中学生のときの、数学の授業だ。居眠りをしていた奈々子は、席の近い友人たちに声をかけられていた。

眠りと現実の境目あたりで、彼らの声が薄ぼんやりと聞こえる感覚。奈々子はあの感覚が好きだった。

「（でも、確かあの時は、目を覚ましたら目の前に先生がいたんだっけ…だからこんなにドキドキしてるのかな）」

——「七緒？　大丈夫か？」

ロウの声に、黒ウサギのぬいぐるみを振り向く。
大丈夫、と頷いたものの、動悸が止まらない。

「……なんだろう、そんなに怖い夢でもなかったんだけど…すごくドキドキする…」

——「汗すごいぞ？」

「……今…3時か。まだ起きるには早いねえ」

ため息をついて、着替えるか、と立ち上がりかけ——心臓が跳ねあがった。

「（……っ、濡れてる？　寝汗…では、ない）」

七緒が青ざめたのがわかったのか、ロウが少年の姿になる。
触覚が戻って（ぬいぐるみときは五感がないらしい）、シーツの湿り気に気がついたのか、七緒を見上げる。

「まさか…お前…おね」

「するかぁ！　高校生にもなっておねしよなんてするか！」

「シーツ。直哉が起きるぞ」

「うぐ……」

とりあえず、とばかりに枕元の眼鏡を引っ掴み、ベッドから降りた。上布団をのかし、シーツを調べ直す。

「これはあれだな、多分「ムセイ」って奴だ」

あまりにロウが冷静に言うので、七緒は一瞬、なんのことかわからずにぼかんとした。

が、次の瞬間、かちりと漢字変換され、盛大に赤面する。

「むっ……え、ちょっと待って、保健の授業で…習った覚えがなくもないけど……わたしが？」

「お前以外いねーよ。まあ、男だからこういうこともあるわな」

目が慣れてきた暗闇の中で、ロウの赤い瞳がちらちらと光る。ろうそくみたいだ、と七緒は思った。そんなことを考えている余裕はないはずなのに、突然すぎて思考が停止しているのだ。

「——大丈夫か？」

困惑したようなロウの声に、慌てて顔をあげる。

彼はきつと、「性転換する」と言った時点で、こういう事態があるということも、理解されていると思っっているのだ。

——わたし自身、理解した気になってた……でも、それでも、本当に体験するのは、別だ

そう思った瞬間、鼻の奥がつうんとした——これはヤバイ。シーツを引っ張って立ち上がり、歯を食いしばるような笑顔をロウに向ける。

「洗濯機、かけてくる。ほら、ロウ、ちょっとのいて」

「あ、ああ：ついて行こうか？」

「大丈夫：服も替えるからさ、ここにいてちょうだいよ」

そのとき、直哉が寝返りをうった。2人してびくりと飛び上がり、それぞれベッドの上段を見つめる。

起きる様子がないことを確認してから、七緒はシーツをひつつかんで、部屋を出た。

「（――大丈夫、大丈夫、大丈夫）」

頭の中でその言葉を反芻しながら、階段を静かに降りる。

だってこれは、生理現象だ。女の子の月経みたいなものだ。

――だから、

「だいじょうぶ……っわ！」

小さく声に出した瞬間、階段を踏み外した。

どた、と大きな音がしたが、こんな程度の音では、部活だなんだで疲れた男子高校生は起きやしない。

「……落ち着け、大丈夫だ……」

こんなときばかり、口から出る声の低さが気になる。

大きく深呼吸をして、立ち上がった。

尻もちをつくことで多少落ち着いた七緒の脳内は、とにかく自分のこの慌てっぷりを、ロウに気付かれないようにすることでいっぱいになった。

「(だって、わたしが傷ついてることをロウが知ったら、傷つく。何にも悪くないロウが、傷つく)」

どうして自分は、もっと自分の状態を理解しなかったのだろう。もっと早くに、きちんと理解できていれば、こんなに取り乱すことはなかったのだ。

自分は、保健の教科書さえ、覗いてみようと思わなかった。

「(…みんなの下ネタをもっと聞いとけばよかったのかな……)」

ようやく1階まで辿り着いた七緒は、ふと、こんな夜中に洗濯機をかけてもいいものか、少し迷った。

1階には、食堂、^{102号室}赤城の部屋と葵の部屋と管理人室、そして、洗濯機のある浴場がある。

赤城と葵は部屋が離れているからいいとしても、風呂場の隣である管理人室には、おっかさんが寝ている。

「(…おっかさんの眠りが深い方でするように)」

祈りながら、洗濯機をスタンバイする。

湿っているズボンと下着を脱いで――着替えを持ってくるのを忘れたことに、気がついた。

「(どうしよう…今戻ってロウと顔合わせらんない…アオさんTシヤツだし、いいか。ミニワンピースみたい

な格好はきついけど、誰もみてないし)」

スースーするが、部屋に戻るよりはマシだと思った。

それほどに、天使と顔を会わせなくなかったのだ。

ごうんごうん、と洗濯機の回る音を聞きながら、七緒は放心状態だった。

今、自分がしたことを考えたら、多分、いいや絶対自分は泣く。だから、考えないことにしたのだ。

「（洗濯機、うるさいなあ。ここの洗濯機、古いからなあ。……乾燥機は新品なのになあ）」

そんな、とりとめのない思考で、頭を埋める。

下着を手洗いするときに、ついでに顔も洗ったので、先程よりは何倍も落ち着いていた。

そして、意識的に感情を置いてけぼりにした。それが一番、良い方法だと思った。

——だって、自分が傷ついてることを、忘れられる

そんなこんなで、ぼーっとしていた七緒は、着替え場のドアが開けられたことに気付かなかった。

「……ナナ？」

遠慮がちに名を呼ばれ、七緒は飛び上がった。

振り向いた少年は、やはり七緒だった。

寝苦しい、と思つて目を覚ました賢治は、妙な物音に気がついて、部屋をでた。

「（何この音……あ、洗濯機、か？）」

廊下をうろうろしてから、音の正体に気付く。

風呂場のドアを開けると、なぜか脱衣所は電気がついていなかった。洗濯機の音だけが、ごうんごうんと耳につく。

とりあえず他の者を起こさないよう、後ろ手にドアを閉め、静かに奥へ進んだ。

「（音うるせー。もう洗濯機替えたいな。予算下りるかな、まだ使えるって言われちゃうかな）」

ひよい、と覗き込むと、洗濯機の表示部分が、仄かに光っているのが見える。

そして、その明かりに、見知った横顔が照らされている。

「……ナナ？」

小声で呼び掛けると、少年は驚いたのか、可哀そうなほどに飛び上がって振り返った。

「おっ………か、さん……」

やっぱりナナだ、と思いながら、脱衣所全体の電気を点ける――そして、息をのんだ。

七緒は、Tシャツだけで、下は何も身につけていないように見えた。両手は不安げにシャツの裾を握りしめている。

何より、彼の表情が、怯えているような、泣きだしそうな、そんな

風に見えた。

一瞬で状況を理解した賢治は、明るすぎる電灯を消し、洗面台についている、いくらか小さい電気を代わりに点けた。

「シーツ汚しちゃった？」

七緒が小さく頷くのが見え、賢治は気付かれない程度のため息をつく。

銀杏寮の管理人室を務めて、今年で5年になる。その間に、こういう場面に遭遇してしまうことも何度かあった。

「（気まずいんだよね、しばらく…）」

しかし、皆のお兄さん役として、こういう場合の対応は相手を見極めなければならない。

にしたって、相手だってもう高校生だ。まさか初めてではあるまいし、ふざけた調子で軽く慰めれば、バツの悪そうだったり、恥ずかしそうだったり、多少自己嫌悪に陥った表情で、彼らはその場を切り抜けてくれた。

——しかし、今回はそうもいかない。

なにせ、相手があの七緒である。下ネタがからつきしダメで、恋愛にも疎く、青年というよりは少年と表すにふさわしい——あの七緒である。

彼がどうにか切り抜けてくれることを期待してはいけない。今回は自分が彼を切り抜かせなければならない。

「（声かけた後の反応から見て：これはかなり気にしてるぞ。全然目え合わさん）」

どう声をかけるか逡巡してから、とりあえずいつものように軽いフ

オローを入れてみることにした。

「気にすんじゃないよ、生理現象なんだから。俺は誰にも言わないから安心して——」

ぱた、と音がした。

思わず言葉を切って、まじまじと七緒を見つめる。

俯いた少年から、きらきら光を反射するものが落ちて、ぱたりぱたりと小さな音をたてていた。

洗濯機の音は相変わらずうるさいのに、滴が床で弾けるその音が、やけに耳元で聞こえる気がする。

賢治は、とある可能性に思い当って、顔を引き攣らせた。

——まさか、まさかだけど……初めて、とか？

その まさか、である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119q/>

学園物語『銀杏』

2012年1月7日01時49分発行